

私立あやかし学園——
スケバン雷獣娘と男装
の狐娘、そして教師の
ワイ

斑田猫蔵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪たちが人間と共に共存している世界を舞台にした学園ファンタジー開幕！

トリニキこと鳥塚二夫は、ひよんなことから教師として「あやかし学園」に赴任される事に。数多くの妖怪が在籍する学園の中で、スケバンな雷獣娘や男装の狐娘などと言った美少女妖怪が絡んでくるのだが――？

※本作の内容はフィクションです。学校生活の描写が現実に即していない部分もございいますがご了承願います。

カクヨムにて先行公開しています。

リンク：<https://kakuyomu.jp/works/16817330>

6
5
2
1
9
4
7
2
9
1
5
0

目次

シリーズ1：スケバン雷獣現る

トリニキ、教師になるってよ | 1

編入生は雷獣娘 | 8

不敵に笑うは男装の妖狐 | 13

男装妖狐の誕生譚 | 20

トリニキ、早速ピンチに陥る | 27

銀の雷獣と輝く得物 | 33

【速報】雷獣娘、少しデレる | 39

囁きかけるは邪悪な妖狐 | 44

世界観&妖怪の解説 | 49

ラブレターはアオハルの至り | 54

妖怪たちの恋愛事情 | 60

狐の恋と樹下の告白 | 66

スケバン雷獣 タンカを切る | 72

稲妻のごとし噂の広まり | 79

ふたご妖怪とメイドさん | 85

浮足立ちたるホームルーム | 92

日直たちは見た | 97

アオハルには部活は必須って当たり前

だよなあ(威圧) | 104

トリニキ、美少女の間に挟まれる(ド健

全) | 110

ニキとスケバンと入部届 | 118

雷光ひらめく鬼退治 | 125

闇夜に妖狐は暗躍す——雷獣編

妖狐は闇夜に暗躍す——教師編	134	対決！ 雷獣娘 v s 狐娘	211
140		雷獣は振るい妖狐は吼える	218
若狐たちの内緒話	146	決着そして二人の和解	225
雨降り雷獣しおらしく	152	シーズン2：嵐を呼ぶ？ 校外学習	
雷獣娘かく語りき	160	ツツジで繋がる朝の一幕	234
狐つままれキツネツキ	166	妖怪娘、校外学習について語る	
トリニキ、決闘ルールを知る	174	241	
のんびりとした午後的一幕	180	トリニキの朝	246
狐娘の懊悩と決意	184	トリニキ、校外学習を思う	251
理事長への決闘許可申請	191	幕間：ルーキー退魔師、修行に励む	
妖怪娘は矜持を魅せる	197	256	
始まりたるは妖怪対決	204	班分けと新たな職員	262
		ヒナゲシ引き出す生物語り	268

	雷獣娘の逢魔が時	274
	いざ校外学習へ	281
	狐娘、改めての自分語り	286
	スケバン雷獣の勘違い	291
	トリニキと米田先生、そして鳥類たち	296
302	幕間：退魔師たち、スタンバる	
	ドキドキ（意味深）散策開始！	
306	教師たちの青空会議	311
	狐娘は用心深い	316
	トリニキはかく語りき	322

	トリニキ、スケバン雷獣を心配する	326
	幕間・悪妖怪、とんでもない発見をする	
	お土産話と雀の焼鳥	331
	雷獣よろこび狐は悩む	336
	狐は推理し雷獣が聞く——焼鳥編	343
349	狐が推理し雷獣が聞く——釣札編	
354	雷獣娘、ついに動く	359
	激突！ スケバン雷獣と退魔師たち	
365		

助っ人は九尾の末裔（？）
—

370

シーズン1：スケバン雷獣現る

トリニキ、教師になるってよ

レイワ某年。オーサカを中心とするキンキ地方。この地では、いやこの国では妖怪と呼ばれる存在が人間たちと共存していた。

妖怪と言うのは妖力と呼ばれる生体エネルギーを豊富に持つ生物の総称だった。総称である為に単一の種で成り立つわけではない。多くの生物種——彼らの言う所の種族が、妖怪と呼ばれる者に該当した。動物や植物から派生して進化した妖怪たちは、いつの頃からか人間に擬態する事を覚え、人間と共に暮らす事を選択したのだ。

いずれにせよ、妖怪は人間の暮らしに大きく関与する存在となっていた。獣の機動力と人間社会の仕組みを理解するほどの知性を併せ持っているのだから。その上妖怪は基本的に長命であり、百年生きた個体ですら妖怪たちの中では若造扱いされるのが常だった。そんな彼らの影響力が大きいのは言うまでもない。

そんな訳で、妖怪たちの中にある暮らしと言うのは特段珍しいものでも何でもなかった。オフィスを覗けば人間の中に混じって様々な種族の妖怪が立ち働いている訳であるし、もちろん学校だって似たような様相を見せている。

キンキ地方某所。セトウチ気候の温暖な一角に、その学園は鎮座していた。その名も「私立あやかし学園」である。妖怪が在籍している事を前面に押し出しているかのような文言であるが、それはやはり理事長が大妖怪だから当然の事であろう。

理事長である浜野宮灰高氏が打ち出した「規律・秩序・清廉」と言う校訓はいささか堅苦しいものであるが、灰高氏が既に九世紀もの長い年月を生き抜いた鴉天狗である事を考慮すれば、まあ妥当であると思倣すきらいもあるだろう。

天狗らしい秩序を好む姿勢と新しいものを取り組むという二つの特質により、件のあやかし学園は地元の中高一貫校としての地位を確立していたのだ。

そんなあやかし学園に赴任してきた若き生物教師、トリニキこと鳥塚二夫こそが、この物語の主人公なのだ。

※

「い」があ……」

四月一日。桜の花弁が舞い散る中で、トリニキこと鳥塚二夫は赴任先の学園を仰ぎ見た。白亜の学び舎と言う言葉が二夫の脳裏にふわりと浮かんだ。あやかし学園の校舎は美しく壮麗だった。やはり私学であり、格式も実績もある学園だから尚更そう見えたのかもしれない。

そう、私学である。それも金持ちの子女——必然的に妖怪が多くなるのだが——が大

多数を占めていそうな学園だとトリニキは思った。いや違う。トリニキはこの学園の内情はうつすら知っていた。何しろ彼の父や叔父、そして二人いる兄たちはかつてこの学園に通っていたのだから。

トリニキ自身はこの学園の出身ではない。しかし親族たちの縁故があつたからこそ、この学園に生物教師として潜り込む事が出来たのだ。

淡く儚く舞い降りる桜の花びらを眺めながら、トリニキは思わず嘆息した。就職先だつた学習塾・サウスカロライナ教育センターが倒産したのが二か月前の事。折角だから研究職に潜り込もうなどと気炎を上げていたトリニキであるが、このあやかし学園で教鞭をとる事で落ち着いたのだ。理科教師と言う教員免許——しかもトリニキは理学部出身なので、学部卒と言えども実験には精通している——を保持していた事、そして親族たちのつてが決め手となつたのは言うまでもない。

※

「おはようございます、鳥塚先生」

「おはようございます……」

トリニキを出迎えたのは金髪を後ろで束ねた妖狐の女性教師だつた。米田と名乗つたその教師は、見た目だけはトリニキよりも若かつた。教育実習生か、それこそ大学生と言つても通じる程に。それでも背後で揺れる二尾が彼女の實力とある程度年齢を重

ねている事を物語っていた。

妖狐の尻尾は妖力と年齢のバロメーターである。個体差にもよるが、平均して百年ごとに一尾増えるものであるらしい。少なくとも、学校に生徒として通うような若妖怪では、二尾以上に至る者は珍しいくらいだ。

「初めての事で緊張するでしょうが、どうかあまり思いつめずにほどほどに頑張ってくださいね」

「米田先生。お気遣いのほどありがとうございます」

穏やかな笑みをたたえた米田先生と相對したトリニキの顔には、知らず知らずのうちに笑みが浮かんでいた。優しい言葉をかけて貰った喜びと言うよりも、緊張と照れを隠すための照れ笑いだった。クールビューティーとも言えそうな米田先生を前に、トリニキは男してどぎまぎしてしまったのだ。妖狐には（人間基準で）美形が多い事は知っているというのに。

「大丈夫ですよ米田先生。先生もご存じかと思いますが、僕は元々塾講師をしていますね……人間の浪人生ばかりですけれど。一応、教えるのには自信があります」

やや虚勢を張ったようなトリニキの言葉に、米田先生は真面目な表情になった。

「塾講師と教師。どちらも生徒に物事を教える職業と言うのは共通しています。ですが全く同じと言い切るのはいささか乱暴な事ではないかと私は思うのです。」

こちらのあやかし学園は、確かに教職員の数は多いですわ。それでも、担任や副担任となれば学習面のみならず生徒指導や生活面にも気を配らなければなりませんし……」すみません。諭されたトリニキは素直に謝罪した。

「そうですよね。それに今回は、副担任と言えども一年生のクラスを受け持つ事になりましたし」

「二年生と言いましてもここは中高一貫校ですから、そこはそれほど神経質にならなくて大丈夫ですよ」

初の教師生活で一年生を受け持つとは……密かにその辺りにプレッシャーを感じていたトリニキであったが、米田先生は笑みをたたえながらそのプレッシャーを払拭してくれた。

確かに。彼女の言葉を聞きながらトリニキも領いた。あやかし学園は中等部と高等部を擁する中高一貫校だ。多くの生徒は中等部で入学し、高等部まで六年間この学園で勉学に励む。高等部からの編入生は少ないし、中等部から外部の高校に進学する生徒は更にまれだという。それならば、高等部一年生も「ピカピカの一年生」とは別物と言えるだろう。

自分は中等一貫校じゃあなかったもんな……そんな事を考えていると、米田先生がまたしても真剣な表情を作り、トリニキに言い添えた。

「鳥塚先生は確か一年二組でしたよね？ 生徒の大半は中等部から持ち上がった子たちばかりですが、一名編入生がいるのです」

「ああ……そう言えばそうだったんですね」

新任の副担任と高等部からの編入生。新しい者同士の組み合わせになるんだな。それは結構珍しい事かもしれない。呑気にトリニキはそんな事を思っていた。米田さんはそんなトリニキに対して言葉が続けた。

米田先生の話によると、編入生の梅園六花は雷獣の少女なのだそうだ。元々はタルヒの公立中学に通っていたそうだが、叔父夫婦——家庭の事情にて、彼女は幼い頃から叔父に引き取られたという——の仕事の都合上、このあやかし学園に急遽編入する事と相成ったらしい。

ただまあ、保護者である叔父共々きな臭い噂がある妖物《じんぶつ》と言う事もあり、もしかしたらその辺りもこの編入騒動に関わっているのではないかと米田先生は考察していた。

梅園六花。編入生たる雷獣少女の名をトリニキは静かに反芻していた。

「しよっぱなから脅すようなことを言ってしまったってごめんなさいね。でも、前もって気になる事は伝えておいた方が良いと思ひまして」

いえいえ大丈夫です。急にしおらしい様子を見せた米田先生に対し、トリニキは微笑

んだ。

「他の子たちは基本的に素直な良い子ばかりですので……鳥塚先生も生徒たちと仲良くなつて……いえ信頼関係を構築して下さいね。」

まあその、中にはべつたり甘えてきちゃう子とかもいるのでその辺りの線引きは大切ですよ」

米田先生も色々と生徒との間で何かあったのだろうか。美人教師だからもしかしたら男子生徒に絡まれる事もあったのかもしれない。そんな事を思いながらトリニキは頷いたのだった。

編入生は雷獣娘

一年二組の担任は、今宮と名乗る狸妖怪の男性だった。教員としてのキャリアを積んだベテランであるというそうだが、見た所穏和そうな好青年に見えた。

或いはベテラン教師であるから、却つて若く見えるのかもしれないとトリニキは密かに思った。教師と言うのは生徒と触れ合う事で若さを貰える事もあるらしいのだから。

さてそんな今宮先生にカルガモよろしくつつく形で一年二組の教室にトリニキは足を踏み入れることに相成った。生徒たちは着席し、入つて来るトリニキたちにお行儀よく視線を向けていた。だからだろう、空席がやけに目立ってしまったのは。しかもその空席は教壇の端の列であり、前から数えた方が早い所に位置していたのだから。

一体誰の席だろう……トリニキは思わず思案顔になつてしまった。あの時米田先生はあれこれ教えてくれたのだが、不登校の生徒がいるという話は特にしていなかった。であれば体調不良か何かであろうか。

新学期早々体調不良と言うのも何とも言えない物であるが、そうなつても致し方ない部分もあるだろうとトリニキは思っていた。春を迎えていると言えども、むしろ春だからこそ天候は不安定であるし寒暖差も激しい時がある。大人よりも神経が繊細な生徒

たちであれば、微妙な気候の差で体調を崩す者もいてもおかしくは無かろう。

もちろん、気候の変化で大人も体調を崩す場合はある訳だし。

「せんせーい。編入生の子はまだですかあ？」

そんな事を思っている丁度その時、生徒の一人が声を上げた。誰が休んでいるのだろう。そう思い始めていた瞬間にである。ナイスタイミングとしか言いようがなかった。

そしてここで、今不在なのは編入生の梅園六花であるのだとはつきりとした。もしかなくても、生徒たちの間では誰が欠席なのか解っていたのかもしれないが。或いは、編入生だからまず教師が彼女を迎え入れ、そして生徒たちに紹介するという段取りではないかと彼らは思っていたのかもしれない。

トリニキが様子を窺うと今宮先生は困ったように眉根を寄せただけだった。

「梅園さん、だよね……彼女は通常通り登校すると親御さん、いや保護者の方から聞いていたんだけどね。ああでも、このままじゃあ彼女は初日から……」

遅刻になってしまう。今宮先生は全て言い切る事は出来なかった。教室の引き戸が乱暴に開けられ、闖入者が堂々と入り込んできたからだ。

いや、闖入者などとはとんでもない話だろう。威風堂々と入ってきたのは制服に身を包んだ一人の少女、要はあやかし学園の生徒だったのだから。もつと言えば彼女こそが一年二組への編入生、雷獣娘の梅園六花なのだろう。

今宮先生の言葉が途絶えた教室の中では、一瞬だけどよめきがほとぼしり、それも間もなく静かになってしまった。梅園六花であろう少女は、ただ教室に入つて来たただけだ。だがたつたそれだけの事での場の空気を掌握してしまったのである。

それが彼女の意図する所であつたのか、偶然の産物に過ぎないのかは定かではないが。

これが雷獣の女の子か——副担任として教室にいるトリニキもまた、梅園六花の姿に気を取られた一人だつた。雷獣は人間への関心が薄い種族であると言われている事もあり、その事がまた彼女への関心を向ける要因となつていた。

しかし、梅園六花の容貌そのものもまた、人の目を惹くのに十二分すぎた。妖怪たちが共存する社会で生きているトリニキであるから、生徒が黒髪黒目でなくても今更驚いたりはいしない。だがそれでも、所々金色や淡い水色に輝くような銀髪や明るい翠眼は余りにも特徴的だつた。勝気そうな表情と癖のあるショートカットのためにボーイッシュな印象を抱くものの、概ね端麗な面立ちの美少女と呼んでも差支えは無かつた。

そしてセーラー服越しにも解るメリハリのある体型が、彼女は女であるという事をこれでもかと主張していた。豊かな胸を重たげもなく揺らしながら歩く彼女は、しかしおのれの抱える女性性に気付いていないようだつたが。

さて梅園六花と言うと、教師を差し置いて皆の注目を浴びている事すら気にも留め

ず、空いている席に腰を下ろした。傍らに放るようにはしておかれた鞆が床に着地し、間拔けな音を立てている。

「梅園さん……だよね？」

思わず質問を投げかけたトリニキに対し、六花は目をすがめつつこちらに視線を向けた。彼女の面に広がっていたのが笑顔であると気付くまでに、多少の時間を要したが。「そうだよ先公。先公だからアタシの事だつてきちんと把握しているかと思っただけどね……ま、この後自己紹介があるんだろ？ その時にきちんと自己紹介するからさ」

六花はそれから、呆れたようにため息をついた。

「遅刻でも何でも付けて貰っても構わない。だがその……アタシだつて好き好んで遅刻した訳じゃあないんだよ。ちょっと向こうから絡んできたやつがいてな、それで遅れちゃったんだよ……」

絡まれたから登校するのが遅れてしまった。その言葉にトリニキと今宮先生は顔を見合わせた。梅園六花にまつわるきな臭い噂、という物が脳裏をよぎらなかつたと言えば嘘になってしまう。

だが着衣に乱れはないし、彼女が襲われて大変な目に遭ったという訳では無さそうだ。それにしてもどのように進めるべきなのだろう。今宮先生にそこはゆだねた方が良いのだろうか。

「梅園さんだったつけ。そんな、絡まれたって事を遅刻の免罪符にするのはどうかと思
うけれど」

少年めいた凜とした声がそう言ったのは、まさにトリニキが次の出方を窺っている丁
度その時の事だった。

不敵に笑うは男装の妖狐

思いがけぬ少年の発言に、教室の中が一瞬どよめいた。生徒たちの多くもまた、梅園六花の姿に畏敬の念を抱いていたからに他ならない。そんな彼女に対し、正面切つて疑問を投げかける気骨のある者がいるとは。

声の主は妖怪だろうな、とトリニキは呑気に思つていた。人妖共学の学園が成立している事からも解るように、基本的には妖怪たちは人間に対して友好的ではある。だがそれでも、彼らの方が上位種族である事には変わりない。トリニキはその事を知っていた。彼の生家が、悪事を働く妖怪と闘う事を生業としていたのだから。

もちろん、六花自身も黙つてはいなかった。

「誰だ！ 妖ひとの事情を知らずに免罪符だのなんだのと嘯るクソダボは！」

教室のどよめきが一瞬にして静まった。愛くるしい面立ちからは想像もつかぬような剣幕の恫喝だった。雷獣と聞いていたからその声はまさしく雷鳴のようでもあった。癖のある銀髪がふわりと浮かび、その周囲に小さな稲妻が走る所さえトリニキは見てしまったのだ。

沸点の低い子だわこれは。恐らく生徒も教師も満場一致でそのような判断を六花に

下したのであろう。何せクソダボなどと言う、カンサイ地方にて最上級の罵倒さえ使つてしまつているのだから。

「そんな、クソダボだなんてとんだご挨拶じゃないか、梅園さん」

静まりかえつた教室の中で、少年の声は朗々と響いていた。今度は何処で誰が発言しているのかははつきりと解つた。声の主は、事もあるうにその場に立ち上がつて六花を見据えていたのだから。

少年とも少女ともつかぬ声の主は、概ね男子生徒のように見えた。と言つても今どき珍しい学ランを身に着けていたからそう思つただけではあるけれど。もつとも、学ランやズボンだから男子生徒と決めるのは早計であらうが。

「初めまして梅園さん。僕は宮坂京子つて言うんだ。残念ながら女として産まれちゃつただけだね。それはそうと、僕の事は気軽に宮坂君とか宮坂さんつて呼んでもらつたら嬉しいな」

学ラン姿の生徒——実は女子生徒だつた宮坂京子は、胸に左手を添えつつ自己紹介を行つていた。

あの子女の子だつたんだ。宮坂京子が男装女子であると判明したトリニキは、若い頃に読んだ短編小説を思い出ししていた。あれはたしか、宝石を持つ貴族の少女が、男装して少年兵士になつていた話だ。そこまで思い出してトリニキはかぶりを振つた。

あの話は宮坂京子とは無関係だ。それに何より、子供に明るく語って聞かせられるようなエンディングを迎えた訳ではない。むしろいつそ、残酷なエンディングではなかったか、と。

そのように思案を巡らせていたためか、教室内で湧いた黄色い声——今回は女子たちの歓声であるとはつきりと判った——が遠くから聞こえる声のように思えてならなかった。

宮坂京子はなおも起立した状態で、芝居がかった様子で言葉を続けた。

「ただ、このクラスの風紀委員として、編入生である梅園さんに注意したくてね」

「宮坂さん、委員決めは自己紹介の後に行う予定なんだけどなあ。風紀委員だって、君意外に志望者が出るかもしれないからね」

今宮先生のツツコミは、意外にも何処かズレてすつとぼけたようなものだった。今この状況で言うのか……と、現にトリニキも脳内でツツコミを入れてしまったほどである。

「鳥塚先生もそう思われますよね？」

狸教師はジト目のトリニキに対し、事もあろうに同意を求める始末である。トリニキは曖昧に頷くのがやつとだった。

「宮坂君……ホントにカッコいいわ」

「ほんまそれだわ。男子以上にイケメンだもんねえ」

「うちら、もう宮坂君に風紀委員をやってもらっても構わないって思ってるから」

乙女たちの声をトリニキは戸惑い半分納得半分聞いていた。トリニキは男であるが、年頃の少女が漢を疎み同性である少女や女性に恋心を抱くのはよくある事だと知っていたからだ。それは彼女らが異性愛者であったとしても。

さもなければ、タカラツカがああも乙女や淑女たちの心を掴みはしないだろう。

それにしても。女子たちの声援を浴びながら、京子は言い放つ。

「梅園さん。君も中々度胸のある娘なんだねえ。何せ朝の健やかな時間帯から、流血騒ぎも厭わずに来たんだからさ。しかもそれを絡まれたの一言で片づけてしまうなんて。流石だよ梅園さん。僕にはちよつと真似できないね」

「あんたみたいになか弱いお嬢さんに、アタシの真似なんざ荷が重いだらうね」

六花の言葉はあからさまに皮肉を含んでいた。京子は笑みを絶やさないものの、それでも毛足の長い銀白の一尾がびくつと震えたのをトリニキは見た。

「てゆーかさ、流血沙汰って何だよ？ 血の臭いをプンプンさせている訳じゃああるま

いに、一体何を根拠に——」

「気付かなかつたの梅園さん。肩口に返り血がついてるよ？」

「出鱈目を。そんな所には血は飛ばなかつた——」

途中まで言いかけて、ハツとした六花は口をつぐんだ。トリニキの視る限り、京子の示した所のみならず、返り血らしい物は目立たない。

京子はここで笑みを深めた。全くもって妖狐らしい、狡猾でしかも残忍さを具えているような笑みだった。

「ふふふつ。カマをかけてみたんだよ。でも梅園さん。今ので言質が取れたね」

女狐が。短く言い捨てると、六花は淡々と言った様子で頷いた。

「宮坂京子の言うとおりでだよ。アタシをただの、遊び好きな女だと思い込んだアホが三人くらいいてな、そいつらを撃退しているうちにこんな時間になっちまったんだよ」

夕方にも二ユースになるんじゃないやねえの？ その後六花は淡々とそう言っただけだった。

※

休み時間。職員室に引き戻ったトリニキは頭を抱えてため息をついていた。このあやかし学園が五十分授業制であり、その合間に休み時間があるのが実にありがたかった。

とはいえ、この休み時間がここまで有難く感じるとはトリニキも想定外であったが。むしろ予備校では一マス九十分だったから、頻繁に休み時間が来ることに違和感を覚えないかと心配していたほどだ。

「大丈夫ですか、鳥塚先生」

トリニキの許にやってきたのは米田先生だった。彼女は確か四組の担任を行つているといふ話だった気がする。

「さつき今宮先生からお話を聞いたんですけどね、編入生の梅園さんは元気な子で……風紀委員になつた宮坂さんがとつても張り切つたそうね」

やっぱり物は言いようなんだな。そう思ったものの、今のトリニキには笑う気力さえ残されていなかった。生徒たちを甘く見ていたのだと思ひ知らされたからだ。梅園六花が教室に入つて来てから、場の空気は彼女らに掌握されたも同然だったのだ。ベテランと思しき今宮先生ですら、彼女らをなだめて誘導するのがやつとだったのだから。

「それにしても宮坂さんも、新学期早々編入生の女の子に突つかかるなんてねえ……あの子、基本的には女の子には親切なんですけれど」

そうなんですか。トリニキの言葉には疑念の色が濃く浮かんでいた。宮坂京子も曲者だとトリニキは既に感じていた。

「米田先生。宮坂京子はどんな生徒なのですか。もしよろしければ、僕に彼女の事を教えてください」

「もちろんですわ。あの子の事も、前もって伝えていた方が良かったと思つていますし

——」

額いた米田先生の顔には、何処か物憂げなものが浮かんでいるように思えてならなかった。

男装妖狐の誕生譚

男装の麗人・宮坂京子の過去を話す。そう言った米田先生がまず用意したのは、一枚のポートレートであった。普通の写真よりも倍ほどの大きさがあるそれは、クラスの集合写真だ。二年前、要は宮坂京子が中学二年の頃の写真だという。

米田先生は、中学二年から三年にかけて、宮坂京子の担任を受け持っていたらしい。中学教師が高校生の教鞭も受け持つのか……一瞬間食らったトリニキであるが、教員免許の仕組みを思い出して密かに納得していた。中学の教員免許を取得していれば、高校生も教える事が出来るのだ。

「宮坂さんはこの子ですわ」

「えっ……」

米田先生が指さす「宮坂京子」の姿に、トリニキは思わず驚きの声を上げていた。二年前の宮坂京子の姿には、今の中性的で奇妙に蠱惑的な風貌は見当たらなかったからだ。もちろん顔つきなどには十分に面差があった。

だが——写真に写る彼女はごく普通の女生徒だったのだ。きちんと女物の制服を身にまとい、はにかんだような笑みは無邪気な少女のそれである。

「驚かれるのも無理はありません」

トリニキの戸惑いを察したかのように米田さんが告げた。その声音はやはり昏かった。

「元々宮坂さんは……大人しくて物静かな女子生徒だったんです。特段自分が女性として産まれた事を疎むような事ありませんでしたし、その、男性についても……」

米田先生は途中で言葉を濁した。それから、小さく喉を動かしてから意を決してその言葉を告げた。

「宮坂さんは変わってしまったんです。中学二年の夏に降りかかったあの事件から」「事件、ですか——」

事件。米田先生の言葉にトリニキは思わず身構えた。余程の事があったのだろう。そう想像するには十二分に過ぎる物だった。

米田先生は少し逡巡していたが、それでも意を決して言葉を紡ぎ始めた。

※

妖狐、狐娘として振舞う宮坂京子であるが、実際には彼女は純血の妖狐ではなくて半妖だった。父は稲荷の眷属を務めた事もあるほどの優秀な妖狐であり、その父に人間の母が惚れこんで結婚したという事であつたらしい。母である人物は若い頃の職業もあり、お洒落や身だしなみ、そして女らしく振舞う事に心を砕くような節が強かつたとい

う。また、妖狐を夫としているためなのか、三人の子供——宮坂京子は末娘であり、一回り以上年の離れた兄が二人もいた——がいるとは思えないほどに若々しくもあった。

前述の通り、宮坂京子はむしろ内気で物静かな少女だった。しかしそれは、彼女の境遇を思えば特段おかしな事ではなかった。末っ子として二人の兄——彼らは兄と言うよりもむしろ第三、第四の保護者のように振舞っていた——に可愛がられていた事、一人娘として両親から扱われていたのだから。特に母親は、父親の容貌を受け継いだ京子を女と見做し、やはり女の子らしく育てようと腐心していたという。これは想像でも何でもなく、かつて京子が述懐していた事でもあった。元より母は女優を目指し、何より妖狐の美貌がある種の世渡りの武器になるのだ、と。

そしてその母の言や教育方針を、宮坂京子は消極的ながらも受け入れていた。と言うよりも、末っ子で温順な気質だったがために、逆らうという考えそのものが無かったのかも知れない。今はもうそうした考察は詮無い物ではあるのだけれど。

さてそんな宮坂京子であったが、事件が起きるまでは特段クラス内で問題を起こすような生徒ではなかった。同年代の生徒たちと接する事にはやや物怖じする節はあったものの、その穏やかな性格は積極的にトラブルを引き起こすようなものではもちろんない。

そうそう目立つ生徒ではないが、趣味である執筆や詩の作成に力を入れる様な生徒

だった。やや内気だったので交友関係は少なかつたものの、それでも同じく大人しい生徒たちとは打ち解けていたようでもあつた。むしろ教師に打ち解けて懐いていた節もあつた。そうした意味でも、宮坂京子は人嫌いでもないし人見知りが強いわけでもなかつた。また、自身が女性である事を疎んだりしていた訳でもなかつたのだ。

その宮坂京子に事件が降りかかつたのは、中学二年の夏休みの事だつた。部活のミーティングを終えて、学園を出て一人で帰宅しようとしていたその時に、事件は起きた。

「——宮坂さんは地元の若い男たちに攫われたのよ」

「そんな……」

これまで流暢に語っていた米田先生は、一度言葉を詰まらせてから苦々しい口調でそう言つた。トリニキは男の身ではあるものの、彼女の言葉に殴られたような衝撃を受けていた。宮坂京子の名譽のために米田先生は詳細は口にしてはいない。しかしトリニキとして子供ではないから、おおよその事は察しがついた。若い男が女性を……少女を拉致すると言つたら理由は大体定まって来る。だがそれにしても、妖怪の間でもそうした事があるなんて。

「犯人はやはり妖怪だつたんですか」

トリニキの問いに米田先生は頷いた。実行犯であつた若者は下級の鬼や白猿、そして？猿《かくえん》さえもいたそうだ。その面々を聞いてトリニキは思わず身震いをした。

全てが全てと言う訳ではないが、いずれも女を攫う事で定評のある妖怪ばかりだと悟ったためだ。無論鬼や白猿や？猿が全て、そうした犯罪行為に手を染めるわけではない。

だが——宮坂京子を彼らが拉致したというのは……トリニキが蒼ざめながら思案に暮れていると、米田先生はかすかに笑みを見せながら言葉を続けた。

幸いな事と言つていいのか、宮坂京子は拉致されたものの身体的には無事だった。着衣に乱れも無く……のちに検査を受けたのだがそこでも特に何もなかったという事であつた。

しかしながら、事件の全容を探るのは難航した。被害者である宮坂京子自身の心の傷を考慮し、踏み込んだ事を聞けなかつたという事ももちろんある。だがそれ以上に、加害者であつた妖怪たちへの取り調べが出来なかつたという事が大きかつた。

事件が露呈し宮坂京子が保護された時、マトモに意識を保つていた加害者は一人としていなかった。現場の状況からして、宮坂京子が決死の反撃を行ったのであろうと思われたが……その件は正当防衛として処理されて明るみにはならなかつた。

加害者については、今も錯乱しサナトリウムから出られない者もいれば、意識が戻らずチューブに繋がれている者もいるという。とはいえ彼らは元々からして半グレグループに出入りしていたような輩であり、今回の件も自業自得であると見做されて顧みられることは少ないのだが。

のちにその彼らに指示を出したのが、宮坂京子と同じクラスだった人間の少女であるという事が判明したのだった。大人しいのに男子たちに人気のある彼女が疎ましかった。半妖で血が穢れているという事を知らしめたかったのだ——妖狐に崇られるという妄想を抱き半ば錯乱しながら、彼女はそう述懐したのだった。

※

「——そう言う訳で、あの事件を機に宮坂さんは変わってしまったわ」

「そういう事だったんですね……」

トリニキはゆったりとした口調で呟き、米田先生から聞いた事を脳内で反芻するのがやつとだった。少なくとも、あの事件より宮坂京子がおのれの女性性を、いつそ女性である事を疎むのが何故であるのかは解ってしまった。

「鳥塚先生。宮坂さんには気を付けてくださいいね」

宮坂京子について思いを馳せていたトリニキに対し、米田先生がはつきりと告げる。トリニキの身を案じるような、宮坂京子を憐れむような、複雑な表情だった。

「宮坂さんは自分が女性である事を疎み、そしてそれ以上に男性を憎んでいるはずですよ。もちろん鳥塚先生がああの人と同じだとは申しませんし、彼女だってその事は解っているはずなのです。ですが……あの事件があつてから彼女には九尾の末裔と親交を深めているという噂もありますし……」

「お気遣いありがとうございます」

気を付けるべき生徒は雷獣娘だけではないみたいだな。トリニキはひとまずそう思うのがやっとだった。

トリニキ、早速ピンチに陥る

トリニキが業務を終えて学園を後にしたのは、夜の九時をとうに回っていた頃の事だった。通勤用の鞆の重さは出勤時とほとんど変わっていないのに、今のトリニキにはそれがずっしりと重く感じられた。トリニキはくたくたに疲れ切っていたのだ。

その疲労は、何も午後九時まで働いていたからではない。予備校の講師をやっていた時も、夜の八時や九時まで働く事はザラだった。というよりも、そんな時間帯まで予備校生が居残って自習をしたり、何となれば講義を受けていたりした事すらあったのだから。

トリニキの疲労は、むしろ精神的な物に由来していた。予備校講師として授業を教えていた経験はあれど、教師として生徒と向き合う経験は今回が初めてだった。そして――講師としての経験があったからこそ、トリニキは余計に疲れを感じてもいたのだ。講師と教師はまるきり違うのだと、その都度思い知らされるのだから。

しかも、副担任と言えども初めて受け持ったクラスに曲者が二人もいたのだから尚更だ。その二人が誰であるかは言うまでもない。スケバン編入生の梅園六花と、男装の麗人たる宮坂京子である。この二人だけは、初日と言えどもトリニキは顔も名前もはつき

りと覚えている。覚えてしまったと言った方が正しいだろうか。朝のあのやり取りはそれだけ鮮烈な物だった。

明日からどんな顔をして教壇に立てば良いのだろうか。よせばいいのにトリニキは夜道の街灯を眺めながら考えを巡らせていた。今朝の一件で、梅園六花と宮坂京子は対立してしまつたのだとトリニキはまず思つた。そりやあもちろん、対立しても後で仲直りして和解すれば問題にはならない。だが、あの二人がしおらしく和解するようには思えなかつた。スケバンである梅園六花は言うに及ばず、宮坂京子もまた中々に私の強そうな少女だったのだから。

そして——あの雷獣と妖狐の対立は、彼女らだけの問題で収まりはしないだろう。そのような予感がトリニキの胸の中にわだかまっていたのだ。両者ともに、クラスの中の影響力が大きそうな女子生徒である事はトリニキも見て取れた。

宮坂京子にある種のカリスマ性が具わっているのは明白だった。同じ教室にいた女子生徒などは、彼女の一拳手一投足を見ては嘆息し、或いは黄色い声を上げていたではないか。それに、宮坂京子自身が仲間の憧憬と敬愛の眼差しを前にしてもたじろいだりはしていないかつた。まるでその事が当たり前であると言わんばかりに。

一方の梅園六花はどうだろうか。彼女は編入してきたばかりの外様である。クラスメイト達とも初対面であるだろうし、現時点では教室の中での権力は無いはずだ。委員

決めについても、割合無難な整美委員に収まっていたし。

だが、彼女も宮坂京子と別方面でカリスマ性を持ち合わせているはずだとトリニキは踏んでいた。この娘には人の心を捉えて離さないものがある——一目見た瞬間に、そう思わしめるものをトリニキは感じてしまっていた。そうでなくとも、ふてぶてしさと紙一重の堂々とした朝の振る舞いに、大人しい生徒たちは度肝を抜かれていたのだから。「はあーっ。大人しく帰るべきか、それとも気晴らしにちよつと居酒屋でも入るべきか。迷う所だなあ……」

あ、でも流石に居酒屋はまずいな。ここは健全路線で純喫茶にしておくか。そう思いながらトリニキは歩を進めていた。

※

——この世界では、妖怪たちが人間と共存していた。もちろん彼らは人間たちに理解を示し、互いに作り上げてきた法や秩序を護りながら日々平和に暮らしている。妖怪と言う種族は、基本的に邪悪な存在でも何でもないのだ。そうでなければ、このような平和な共存は出来ないはずだから。

しかし、妖怪と言う種族が邪悪ではないからと言って、悪い妖怪が一匹もいないという事とイコールにはならない。

トリニキがつつらとそんな事を考えているのは、今まさに彼がガラの悪そうな妖怪

連中に絡まれてしまったからに他ならない。

「ちよ、ちよつとなんだね君たち……！　ぼ、僕は教師だぞー！」

畜生、何でこんな事になっちまったんだよ。本当に悲しいなあ……そんな考えを頭の中でグルグルさせながらも、トリニキは数分前の出来事を思い出していた。

純喫茶に入ろうか帰ろうか未だに迷っていたトリニキは、幼い女の子がしゃがみこんでいるのを発見したのだ。妖怪たちも暮らしている町と言えども、幼子が一人つきりであるのは不用心だ。警察に届けた方が良いのかもしれない。そう思いつつもトリニキはその子に近付いていった。

それこそが連中の罠だったのだ。女の子はまあ女の子の妖怪だったのだが、所謂メリーさんとかの亜種であるらしかった。要するに見た目だけ女の子だけど、まあそこそこ経験とかを積んでいたという事である。人形だったからか色々融通が利く(?)らしく、爪の先からホラー映画の殺人鬼よろしく刃物を生やしてトリニキを脅すという、可愛げも糞も無い事をしてかしたのだ。その間に彼女の愉快な仲間たち——絡新婦とかモヒカンカマイタチとかギャルっぽい口裂け女とかそんな連中である——に取り囲まれて今に至るといふ事だ。

情けは人の為ならずと言うが、まさか恩を仇で返すような所業をしでかすとは。全くもってあんまりな話ではないか。

「教師だなんてウツソだろお前！ だったらさ、何でこんな夜遅くまでこんな所までウロウロしていたんだよ。しかも俺らのアイドルに近付いちやつてさくもしかしてお兄さん、ロリとか？」

「ちよつとお、ワタシの悩殺ボデーにやられたからつてロリ判定するのは失礼じゃない？ 主にこのワタシに対してだけど！」

モヒカンカマイタチとメリーさん（仮）がトリニキの言葉に反応し、何やら言い合っている。和気あいあいとしたじゃれ合いと言つていいだろう——どちらも刃物をトリニキにかざして威嚇している事に目をつぶれば。

「つーかさ。センセーつて言つても所詮は人間でしょー？」

二人の妖怪のやり取りを見ていたギャル風口裂け女が、煙草を吸うのを一度やめ、紫煙をトリニキに向かつて吹きつけた。煙草の煙たさとニコチンの強さにトリニキは思わずむせてせき込んでしまった。

「人間みたいな下等生物が大きな顔をすんなよな。そう言うのマジでムカつくんだけど——！」

「あ、でも思い出したぜ。こいつ確か術者の家のボンだったんじゃないかな？」

「あー。それでワタシらを見ても怯まないのねー。ある意味面白いかも」

どうする？ この状況をどうやって切り抜けようか。トリニキは周囲に注意を配り

ながら、しかしどうにも動けずにいた。それこそスマホを使って警察を呼べば良いのだろう。だが、複数の妖怪たちに囲まれている中で、そんな事は出来そうになかった。

カマイタチも口裂け女もメリーさん（仮）も、実は下級妖怪や弱小妖怪の枠組みに収まるような、割合弱い妖怪ではある。しかし、弱小妖怪であつても人間には十分脅威になる事には変わりはない。

万事休すか。そう思っていた丁度その時、硬質な足音がこちらに向かつてくるのをトリニキの聴覚は捉えていた。恐らくは他の妖怪たちも。

「あつれえ、おにーさんたちおねーさんたちで集まってる何かやってると思つたら、うちの先生を取り囲んでいるじゃないか」

間延びした、しかしその奥にいくばくかの殺気を秘めたその声は、トリニキにとつても聞き覚えのある声だった。

銀の雷獣と輝く得物

※

路地裏の一角に、一匹の小さな獣が身を潜めていた。大きさは仔猫か仔兎ほどであろうか。やや胴長に見えるものの、そのフォルムは狐そのものである。要するに、尖った二等辺三角形の耳と、ふさふさとした尻尾を一本具えていたのだ。毛並みはギンギツネのように黒味が強く、しかしその瞳は明るい黄金色だった。

その狐らしき生物もまた、妖怪である事には変わりはない。動物である狐のミニチュアのような姿とサイズであるし、何よりその瞳には知性とある種の狡猾さが見え隠れしていたのだから。

他の者にその存在を認識されぬように用心しつつ、狐は観察を続けていた——ガラの悪い妖怪たちが一人の人間の教師を取り囲んでいる所を。そして彼らの前に現れた、銀色の雷獣の姿を。

※※

「だ、誰だテメエ！」

「そんな……君は……」

闖入者の登場に驚いたのはトリニキだけではなかった。トリニキに意識を向けていた妖怪たちもまた、トリニキ同様驚きの色を見せていたのだ。それ故にトリニキへの包囲が緩んだ。

トリニキは反射的に振り返り、闖入者を直視した。声で誰であるか察してはいた。だがそれでも……姿を現した梅園六花の姿にまたしても度肝を抜かれてしまった。

淡くぼんやりとした街灯をスポットライトのように浴びながら、梅園六花は仁王立ちしていた。日中見かけたセーラー服姿ではない。紺色の地に黄緑のラインが入った長袖長ズボンのジャージ姿である。

暗がりでありながらも梅園六花の姿ははつきりと浮き上がっていた。街灯に照らされていいるからだと思っていたが、どうやら彼女自身もぼんやりと発光しているからであるらしかった。さながら、聖人が後光を背負っているかのように。

だからこそトリニキは気付いてしまった。翠眼を光らせて微笑む雷獣娘が、右手に釘バットを携えている事に。釘バットなどという物を現物として目の当たりにしたのはこれが初めてだった。こんな事でこんなものの初体験を迎えるとはたまげたなあ、などとトリニキは思っていたのだ。

さてそうこうしているうちに、梅園六花もトリニキの存在に気付いた。トリニキと目が合った彼女の表情が一瞬だけ変貌した。獰猛な獣の笑みが剥がれ落ち、こちらを労わ

る様な、いつそ物悲しげな表情を見せたのだ。

しかしその表情はそれこそトリニキの幻想だったのかもしれない。六花はやはり笑みを深め、妖怪たちを眺めているのだから。ケダモノのごとき獯猛さと鬼神のごとき憤怒を纏わせながら。

「おいおい。名を聞く前にはまず自分から名乗るのがマナーだつて親父さんから教わらなかったのかい。ま、名乗るほど無いとだけ言っておこうかな。あんたらみたいな人間を襲つて悦に入る三下相手には、さ」

「言つたなこの野郎！」

何処までも挑発的な六花の言葉に、モヒカンイタチが怒りを露わにした。

「可愛いお嬢さんだからつてこつちが下出に出ていたら……初対面の俺らを三下扱いとは、とんだメスガキじゃあねえか。知つてるかいお嬢さん。クソ生意気なメスガキはな、オトナのオトコの分かれをせを受け入れる運命にあるんだよ！」

俺が優しく分かれをせを教えるよ！ 品性という物をことごとくかなぐり捨てたようなセリフと共に、モヒカンカマイタチが六花に向かつて躍りかかってきた。カマイタチと言うだけあつてやはり速い。トリニキの眼は、その姿をぼやけた残像として捉えるのがやつとだった。

「梅園さ……ん……？」

生徒の身を案ずるあまり思わずトリニキは声を上げた。その言葉はしかし、すぐに疑問の色が滲み始める。六花は逃れず、大げさに立ち向かう事すらなかった。強いて言うならば、釘バットを持った右腕をゆったりと振った事くらいだろうか。

だがそれで決着は着いていた。モヒカンカマイタチは短く悲鳴を上げ、弾かれたように飛ばされただけだった。余程こたえたのだろう、かろうじて人型を保っていた変化が解除され、まるきり動物のイタチの姿に戻って伸びていた。

「はんっ。分かれが何だっけ言うんだこの雑魚が。だからあんたは三下なんだよ」

六花はスニーカーの先でイタチをつついていた。イタチは意識だけはあるようで、射抜くような眼差しを向けつつ歯噛みしている。

「っていうかさ、アタシは子供の頃にカマイタチと闘りあつた事もあるんだよ。そのアタシをガチで仕留めたかったら、胸を切り裂くか首を切り落とすくらいの覚悟でかかって来な！ ま、女の胸とかケツを見て興奮するようなアホどもには無理かもしれんけどな」

「う、？でしよ……」

「あいつ強すぎるじゃん」

「どうする？ ずらかつた方がよくね？」

伸びてしまったモヒカンカマイタチを前に六花は高笑いをしているではないか。そ

の時、得物である釘バットの先が妙にきらめいている事にトリニキは気付いた。

——電流を通し、直撃せずとも触れただけで感電するようにしているのだ。その事を悟ったトリニキは人知れず戦慄していた。

ともあれまたしても、彼女は場の空気を掌握してしまったのだ。朝と異なり、圧倒的な武力と暴力を伴って。

いずれにせよ、勝負は既についている——はずだった。

六花はしかし、女王よろしく周囲を睥睨し、釘バットを揺らして言い添えた。

「どうしたんだいあんたたち！ まさか一匹がやられた位で怖気付いているじゃあないだろうな！ このアステリオスの威力を知りたいと思う、気骨のある奴はいないのかい！」

「も、もう良い。もう良いんだ梅園さん」

他の妖怪たちが六花に注意を払っている事を確認し、トリニキは声を振り絞った。その途端、六花の射抜くような視線はトリニキにのみ注がれる。柳眉が寄せられ、不愉快そうな表情だ。

「やっばし先公は先公なんだな。襲われていた相手に情けをかけるなんて」

「そうじゃないんだ梅園さん！」

トリニキはまず呼び掛け、それから意を決して言い添えた。

「もうね、今のうちに警察に連絡を入れたんだ。だからその……これ以上君が暴れたら、君も彼らと仲良く警察送りになってしまおう」

「何だと！ くそつ、勝手に気を回しやがって」

六花はもはや他の妖怪たちを相手になどしてはいなかった。不良妖怪たちは六花そのものの威力に恐れをなしているし、警察と聞いて浮足立ってもいたからだ。

それにもう既に、パトカーのサイレンがこちらに向かつて近づき始めている。先程通報したにはちと早い気もするが……トリニキはここで安堵の息を吐いたのだった。

【速報】雷獣娘、少しデレる

結局のところ、トリニキたちが逃げる暇もなく（トリニキは巻き込まただけだから逃げる必要性は特に無いのだが）警察たちはやってきてしまった。妖怪が悪さをしていったという事でももちろん妖怪の警察もいたのだが、よく見れば人間も混じっていた。

警察たちはイタチ妖怪などと言ったチンピラ妖怪たちを手際よくしょつ引き、ついでにトリニキや六花の事情聴取も行った。

初の事情聴取を受けて冷や冷やしたトリニキであったが、意外にもすぐに解放された。トリニキは本当に巻き込まただけだったし、六花もギリギリのところまで正当防衛と見做されたからだ。釘バットなんて危ない物を学生が振り回したらいけないよ。黒い二尾が特徴的な穂谷巡査部長に一言たしなめられたのだけだ。

「はあーっ。ポリ公なんざ国家権力のイヌに過ぎないって思ってたけれど、中々どうしていい仕事をしやがるじゃあないか」

「ここから梅園君。そんな事を言っちゃあ駄目じゃないか」

去り行くパトカーを眺めながらぼやく六花をトリニキは軽くたしなめた。本当はもっと教師らしく、威厳のある姿で注意したほうが良いのかもしれない。ましてや自分

は女顔で、威厳とか強そうな雰囲気からは縁遠いのだから。

それに予備校では親しみやすい生物教師として通ってきたトリニキである。スケバン生徒を前にしたからと言って、中々すぐには路線変更は出来なかつた。

それでも、六花はむつとしたような表情でトリニキの言葉に反応した。妖術を使っているのか、物騒な釘バットは見当たらない。その代わり、右手首に小さな球を連ねた数珠が巻き付いている。

「ポリ公が国家権力のイヌだつて教えてくれたのは、俺の叔父貴だよ」

叔父貴。情感を込めて放たれた六花の言葉を、トリニキは反芻していた。梅園六花が実の両親ではなく、叔父夫婦に育てられていている事はトリニキも知っていた。叔父の三國ももちろん雷獣であるのだが……中々に過激な思想と挙動の持ち主であつた事もヘッドハンティングの末に大組織の幹部職に収まっている彼であるが、元々三國は反体制派のリーダーのような男であり、カリスマ性も機動力も兼ね備えていたという。

若い頃——今も彼は妖怪的には若いのだが、まあ言葉の綾だ——などは、自家用車で敵対組織のビルに突っ込んでいったという武勇伝もとい蛮行さえあると噂されている。

して思えば、姪である六花が釘バットを振るつて敵妖怪を圧倒するのも何らおかしい話ではないように思われた。むしろ叔父よりも可愛い手段に思えるのではなからうか。

「さーて。アタシもそろそろ帰るとするよ。大体この町がどんな感じなのかつて判つた

し」

六花はそう言うのだらしない表情で欠伸をし、ついでにぐつと腕と背を伸ばした。身のこなしも身体つきもしなやかで、何のかんの言ってもまだ少女なのだ。トリニキは唐突にそう思った。

それからこの女子生徒が、急に可愛らしく思えてきたのである。

「ねえ、ちよつと——」

「何だよ」

「もう帰るのかい？」

当たり前だろ。つい先程まで釘バットで武装していたはずの雷獣娘は、さも当然だと言わんばかりに頷いた。澄ましたような表情は、何処か大人びていて寂しそうでもあった。

「チビたち——弟妹達が寝る時間だからな。あいつら、アタシの事をお姉ちゃんって慕ってくれているんだよ。叔父貴も叔母さんも仕事で遅いから、アタシがいないと寂しがるし」

「……………」

六花の弟妹達。その言葉を聞いたトリニキは迂闊だったと思っていた。彼女を引き取った叔父夫婦の間には、男児と女児が一人ずついるという。六花の言う弟妹達とはそ

の子たちの事であろう。

しかしそれにしても、叔父夫婦が仕事で遅く、六花がその子供の面倒を見ていたとは……ヤングケアラーと言う言葉が脳裏に浮かび、すうっと遠くをかすめていった。

「そっか。それじゃあ早く帰った方が良いよね。本当はお礼を言いたかったけれど……よく考えたらまた教室でも梅園さんにも会えるもんね。さつきは本当にありがとう」

「ははっ。鳥塚先生も礼儀正しい先生なんだなあ。まあ、ちよつとだけなら話に付き合っても大丈夫さ。家からはそんなに遠くないし」

何か妙に引き留めてしまったな。トリニキは少々申しわけなさを感じつつも、自販機に向かった。今回の労をねぎらうために、ささやかながらジュースでも奢ろうと思ったのだ。

本来ならば、公務員でもある教師が、生徒に対して個人的にプレゼントを贈ったりする事は不健全な事と見做されるのかもしれない。しかし、トリニキが六花に渡すのはワゴンコインで買えるジュースに過ぎず、何より彼女に助けてもらったばかりである。お堅い教師の面々も、これくらいなら目をつぶってくれるだろう。トリニキは勝手にそう思っていた。

「本当にありがとうね梅園さん……はい、どうぞ」

トリニキは六花にミックスジュースの缶を渡した。じゃあアタシはこれにするよ。

そう言ったものを購入したはずなのだが、何故か六花はその時ぼんやりとしていた。どうしたのだろうか。缶の表面に水滴が浮かぶのを眺めていると、六花は我に返ったらしく、こちらに視線を向けてくれた。

「あ、悪いな鳥塚先生。ありがとう」

そう言つてジュースの缶を受け取り、取り繕つたように六花は笑みを向けた。どうしたのか、と問うまでもなく彼女は言葉が続ける。

「いやさ、さつきから何かがこつちを見ているような気がしてね。それがちよつと気になつていたんだよ。そうだなあ……さつきまであの辺にいたんだけどな」

空いている方の手で、六花は街路樹の根元を指示した。トリニキは反射的にそちらを見やったが、六花が見つけた何かを探り出す事はかなわなかつた。

「あはは、そんなに躍起になつても見つからないよ。もう向こうは気付いたみたいで逃げちまつたんだからさ」

何故か無邪気に笑う六花を見やりつつ、トリニキもまたエナジードリンクを買うべく自販機に向き合つたのだつた。

囁きかけるは邪悪な妖狐

場所は変わって宮坂家の一室。半妖狐娘の宮坂京子は、学習机に向かつて教科書を広げていた。傍から見ればレクリエーションばかりの四月初旬に予習を行う優等生に見えるかもしれない。しかし実際の所、教科書を開けどもその内容は彼女の頭の中には入ってこなかった。

と言うのも——京子は別の事をずうっと考えていたからだ。

彼女の頭の中にあるのは、日中の教室での出来事であった。もつと直截的に言えば、梅園六花と名乗る女生徒の事を熱烈に考えていたのだ。女だてらにスケバンを気取るふてぶてしさ。生徒のみならず教師の度肝さえ抜く奇妙なカリスマ性。そして——蓮つ葉な物言いとは裏腹に忌々しいほどに女らしさを具えた肉体。それらの事を思うと、心がざわつくのを宮坂京子はしっかりと感じていた。

そのざわつきは恋心ではない。友達になりたいという好奇心や、好意的な関心ですらない。もつとどす黒く粘っこい感情——要は嫌悪と憎悪の念を雷獣娘に抱いていたのだ。

「——ご主人様」

と、一人思案に耽る京子に声が掛けられた。声の主は小さな銀色の狐である。仔猫や仔兎ほどの大ききながらも、尖った耳やふさふさした尻尾は動物のキツネと何ら変わらない形である。

その狐はベランダから入り込んできた。ベランダに面する窓の鍵は掛けられており、雨戸さえ締められているにもかかわらず。雨戸と窓をすり抜ける形で入り込んだ狐を前にしても、別段宮坂京子は驚きはしない。この狐がそんな芸当をこなせる事は知っていたからだ。何せそのような事は可能だと定義づけたのが、他ならぬ宮坂京子その人なのだから。

お帰りなさい、タマ。狐の方に顔を向けながら、宮坂京子は微笑んだ。桜色の唇が僅かに動いた程度の笑みであるが。

タマ——塩原玉緒と呼んでいるその狐は、管狐のような物だと京子は認識していた。玉藻御前の末裔であると名乗る彼は、実際の管狐ではないのかもしれない。しかし京子の事があるじと見做し、二年前から彼女に尽くしてくれる事には変わりはない。

完全に部屋に上がり込んだタマは、周囲を見渡してからすつと二本足で立ちあがった。その姿が靄に包まれ、次の瞬間には人型の青年姿へと変貌していた。玉藻御前の末裔と言う肩書は伊達ではないらしく、その背後では四本の尾が揺れている。仔狐の姿の時は巧妙に尻尾と妖気を隠しているらしかった。

基本的に大半の男を忌み嫌うようになっていた京子であるが、青年姿の塩原玉緒には嫌悪感は無かった。のっぺりとした面立ちやずんぐりとしつつも小ぢんまりとした身体つきは、京子の疎む男性性とは無縁であるように思えたのだ。男が抱く、乙女へのぎらついで脂ぎった欲望を、眼前の妖狐は全く持ち合わせていないようにすら感じさせた。もちろん玉緒自身がどう思っているのか、京子は全てを把握している訳ではない。しかし玉藻御前の末裔と言うとんでもない肩書を持ち合わせているはずなのに、彼の事は信頼できるような気がしてならなかった。或いはすでに京子は彼に魅入られているのかもしれないが。

……余談であるが、塩原玉緒の容姿はひどく平凡な面立ちである事、俗っぽい表現が許されるならばモブ顔と称される代物である事を付け加えておく。玉藻御前の末裔であるからもっとと美麗な姿なのかもしれないと諸兄姉は思うかもしれないが……そこもまた彼の抱える謎の一つと言う事だ。

「お疲れ様。何か面白い物でも見つかったかな？」

ともあれ京子は戻ってきた玉緒に問いかけた。玉緒が昼と言わず夜と言わず京子の許を離れ、周囲を見回る事のはいつもこの事だった。そして時に面白い話を教えてくれたり——京子が裡に抱える密かな願いを叶えてくれたりするの。また、彼の仕事だった。

ええ、ええ。面白い物が見つかりましたよ——もったいぶった様子で頷き、情感たつ

ぷりに玉緒は言う。薄い唇が引き延ばされ、その面に妖狐らしい笑みが広がった。

「ふふふつ、タマがそんなに興奮するなんて珍しいね」

「そりゃああそうですともご主人様。何せあのスケバン雷獣が、夜の街をぶらついていたんですからね」

「そうだったんだね……」

スケバン雷獣。その言葉に京子は反応した。無意識のうちに口許に手を当て、年相応の少女らしい反応を玉緒にだけ見せていた。図らずとも行ってしまった女の子らしい振る舞いを気にする素振りも無く、玉緒は言葉が続ける。

「ええ、あのスケベそうな身体つきの雷獣娘はですね、武器を振るって妖怪たちを懲らしめていましたよ。大方、朝やっていた事と同じ事でもやっていたんでしょね」

「そんな、梅園さんってばまたそんな事をやっていたのね。ああ、何て野蛮で厭らしい獣なのでしょうか……」

嫌になつちやうわ……そう言いながら京子は手を組み合わせ、胸元でくねくねと蠢かせていた。嫌になつちやうという言葉とは裏腹に、京子は奇妙な昂りを感じていた。現に頬は火照り、目は潤み始めている。自分もまた、先程の玉緒同様妖狐らしい笑みを浮かべているのだと確信してもいた。

そんな京子の様子を眺めながら、玉緒は更に報告を続ける。

「しかもですね、あの雷獣娘は新任の男教師とも会っておりまして。ええ、夜の街でスケベな娘が若い男教師と会っていったんですよ」

「梅園さんってばそんな事まで……何てふしだらな娘なんでしょう」

——これではつきりと梅園六花を嫌う事が出来る。宮坂京子の心中はその事実を受け止め、歓喜に沸いていた。夜の街にて妖怪たちと相争い、しかもその後で男教師と逢瀬を楽しんでいた。不純異性交遊の極致ともいえる行為をしでかした雷獣娘は、風紀委員として、そして清廉なあやかし学園の生徒として放っておける存在ではない。

そのように京子が考えを巡らせていると、玉緒が見計らったように囁きかける。彼の背後では暗い銀色の四尾が影のように揺れている。

「如何なさいますかご主人様——」

「そうね、もちろんタダでは放っておけないわ。神聖なる学園の風紀を乱す存在を、この私が見逃す訳なんて無いんですから……」

京子と玉緒は顔を合わせ、そうして笑いあっていた。彼らの面に浮かぶのは、まさしく策を弄し人を陥落させる、傾国の妖狐に相応しい笑みだったのは言うまでもない。

世界観&妖怪の解説

※こちらの世界観説明は、「私立あやかし学園」内での世界観の説明になります。他作品との世界観とは異なる部分がございますのでご了承くださいませ。

世界観：現代日本によく似ているが、妖怪たちの存在が公にされている。妖怪たちとも共存しており、文化・社会政治・科学技術等にも妖怪たちの力が関与している模様。従って会社や学校にも妖怪と人間とが入り混じっている施設も珍しくはない。とはいえ……人間向け・妖怪向けなどの施設や建物も存在している場合もある。

妖怪：妖力と呼ばれる生体エネルギーを保有する生物の総称。総称と言う言葉通り、複数の種族からなる。生物の一種とみなされ、生物学的な分類（哺乳類に分類される妖怪・鳥類に分類される妖怪……）ももちろん可能。但し、日常生活における妖怪の分類方法が生物学的な分類とは異なっている場合もあるので注意が必要。

例：人型の妖怪は獣妖怪と区別される事があるが、分類的には哺乳類に属する。

種族を問わずに知能は高く、人間との意思疎通も十二分に可能。高位の妖怪の中には会得している妖術を科学技術や文明の発展に横展開する者もいる。

人間に対する反応や対応は種族や世代、個体そのものによつてまちまち。それでも概

ね友好的く中立の者が大半を占めており、概ね人間たちの良き隣人と言う地位を確立しているともいえるだろう。

従つて妖怪Ⅱ邪悪と言える存在ではなく、人間側も妖怪だから退治すると言つた考えはない。但し、妖怪の中にも悪事を働く者は存在し、そうした妖怪たちを摘発・逮捕する組織や法規制は存在する。

通常は同種族間で結婚し仔を設けるが、異種族間での婚姻も散見される。特に人間との間に生まれた仔は半妖と呼ばれている。半妖は妖怪と人間の特徴を併せ持つのだが、どちらの特徴を色濃く反映するかは個体によつてまちまちである。

生体エネルギーたる妖力が多い個体ほど強い妖怪と見做される。妖力の多寡は生きてきた年数に概ね依存するが、遺伝や後天的な環境などの要素も散見される。妖力の少ない順に弱小妖怪、下級妖怪、中級妖怪、大妖怪……などと呼ばれる事もある。但し下級妖怪や弱小妖怪であっても、状況によつては人間に対して十二分な脅威になる可能性があるるので注意されたし。

なお、妖狐や雷獣、猫又と言つた尻尾の増える妖怪の場合、尻尾の数にて妖力の保有量を推し量る事も可能である。

【主だった種族の解説】

妖狐：所謂狐の妖怪。本来の姿はアカギツネ又はホンドリギツネとほぼ同じであるが、

尻尾の数は妖力によって増え、最終的には九尾になる。尻尾が増えるには百年かかるとも、九尾になるまでには千年かかるとも言われているが個体差が大きい。

とはいえ、若い個体で二尾、三尾になっただけでも妖力が多く優秀な個体であると見做されがちである。

人間に特に友好的な種族の一つであり、好意的であるか否かに関わらず人間との関りがかなり深い。人間の前に姿を現す時はほぼ人に近い姿（個体によっては尻尾を隠せない・隠さない場合がある）を取る事、時に人間との間に半妖の仔を設ける事からも明らかであろう。

人を惑わして精気を吸うとも言われているが……妖狐が全体的に好色な淫獣と言いつてもいい。もちろんそうした個体もいるが、それは少数派である。むしろ見た目が良いために妖狐が被害に遭っているケースも点在するとも言われていた。

妖術を操る事得意とするために物理的な戦闘を苦手とする個体が多々ある。とはいえ、多彩な妖術や知能の高さにて、妖怪社会の中でも？栄えた種族としての地位を確立している。

雷獣：その名の通り雷撃を操ったり、落雷と共に地面に降り立つとされている獣妖怪。哺乳類タイプの妖怪に分類されるもの……その容姿は多種多様であり、個体差が大きい。実際に雷獣の姿として「ハクビシンのような物」「狸やアナグマに似ている」「犬や

狼の姿」などと複数の姿が確認されている。これは雷獣の先祖が鶴である事に由来すると言われている。

同じ父母から生まれた兄弟姉妹であつても異なつた容姿の持ち主である事は珍しくない。雷獣たちの大半はその事を気にしないが、高位の雷獣や血統を護る一族の場合では、「均一な一族」を護るために近親婚を敢行する場合もままある。貴族が一族の血を護るといふ傾向は他の種族（人間含む）でも見られるが、雷獣ではその傾向が強いようである。

雷撃を操るといふ点においても、電流などと非常に縁の深い種族と言える。第六感として生体電流の探知・電流でのサーチ能力を雷獣は具えているからだ。また、聴覚や視覚も優れているのだが、電流探知能力の精度を上げるために、聴覚や視覚を一時的に遮断するシステムが脳内にあるとも言われている。これは雷獣特有のシステムであり、視覚や聴覚に頼らずとも周囲を探知する事が可能になっている。

但し、この脳内システムの構築・行使は深い思考力と引き換えに発達したとも言われている。従つて雷獣では強い個体ほど思慮深く考えるのが苦手である、という宿命的な弱点を抱えている。実際に、一定水準以上の妖力の高い雷獣は、そうでない雷獣よりも平均寿命が明らかに短く、死亡率が高いともされている。

その一方で脳内の切替機構が働かない個体も存在する。こうした個体は通常の雷獣

よりも弱いものの、思慮深く落ち着いており、むしろ先祖である鶴の特徴に近いともさ
れている。

元々は人を寄せ付けない山野で暮らしていたらしく、人間に対する関心は薄い。積極
的に人間を襲う訳ではないが、人間と関わらなくても平気だと思いう個性が多い。

種族的な気質の為か戦闘能力に特化した個体が多い。身体能力も高く、対立すれば厄
介な存在になりうる。その一方で変化術や結界術と言った妖術は苦手であるようだ。

尻尾の増えるインターバルは妖狐とほぼ同じと見做されている。

ラブレターはアオハルの至り

「アクシロヨ、アクシロヨオオオ！」

トリニキの朝は早い。同居しているセキセイインコのマリリン（オス）が早起きだからだ。そして起きた瞬間から、マリリンはこうして人語をまねて、トリニキが起床するのを待ち続ける。天然のアラームと化したインコの出来上がりだ。

ちなみにインコ類は仲間の行動を真似するという習性が本能的に備わっている。トリニキがマリリンの飼い主として認められているかは定かではないが……少なくともマリリンからは仲間判定が下っている事だけは明らかである。

「おはよう、マリリン。今日も元気だなあ」

「サツキカラオレノコト、チラチラミテタダロ」

マリリンの元気そのものの声を聴き、トリニキは顔をほころばせた。人間の声とは明らかに違う、ポイチエンを通じたかのような声音と、独特のウネウネとした動きは人を笑いにいざなう物なのだ。ましてやトリニキはインコ類が好きなのだから尚更だろう。

「マリリンってば相変わらずだなあ……」

そう言いながらもトリニキは手際よくマリリンの世話を始めた。餌や水の交換の間に

さり気なく放鳥し、マリンを部屋の中で遊ばせる。マリンは床の上をトコトコと歩き、室内に異常が無いか確認を怠らない。あまり飛ばないが、鳥類が飛び回るといふ事がある。それも偏見だったりするのだ。

(本当は餌の交換や籠の掃除を行っている時に放鳥したら危険なので、視聴者の皆様は真似をしないように！ Byトリニキ)

「さ、マリン。籠に戻ろうね」

「ヤダー！ ヤダヤダ小生ヤダー！」

全く何処でこんな言葉を覚えてしまったのだろうか……トリニキはちょっとため息をつきつつも、マリンが籠に戻るのを待った。と言ってもマリンも心得ている物で、ちよつとごねただけで数分後には鳥籠の中に納まってくれた。

もしかしたら、トリニキとの会話を楽しんでいるのかもしれない。そんな事を思いながら、トリニキは今度は自分の支度を進めたのだった。

※

教師としてのトリニキの朝も早い。朝のSHRは八時三十分から始まるが、生徒たちとしてその時間ギリギリに到着していれば良いなどと言うわけでは無い。少なくとも五分前・十分前には登校し、着席している事が求められていた。もつとも、部活の朝練がある生徒はもつと前に登校していても何一つおかしくはない。

ましてやトリニキは生徒ではなくて教師である。教室に集まる生徒たちを指導し、物を含む理科の授業を行わなければならない身分であつた。従つて相応の準備は必要なのである。

昨日は雷獣娘が遅刻していたのだが、実はトリニキも職場にやつて来るのがやや遅かつたのだと一人で反省していた。やはり予備校講師のような考えでは通用しないのだ。あの夜エナジードリンクを飲みながら、トリニキはそのように思つていた。

ちなみに今回トリニキが学園に到着したのは七時十五分ごろだつた。それでも生徒たちの声がしたので面食らつてしまった。だがすぐに運動部が朝練をしていたのだと思ひ直した。運動部が朝早くから練習を行う事は、文化部に所属していたトリニキも一応は知つている。

「それでは鳥塚先生。そろそろ僕たちも教室に向かいますようか」
「そうですね」

午前八時十五分。職員室での打ち合わせが終わり、担任を持つ教師たちはそれぞれ担任のクラスへと向かつた（もちろん、教師の中には生徒指導という名目で校門の前に立つ教師もいたのだが）主たる担任である今宮先生が、副担任で未だ教師生活に目を白黒させているであろうトリニキに声をかける形で。

さてそのようにして二人仲良く（？）教室へと向かつて行つた。ホームルームの時間

が近づいている事もあり、廊下でも生徒たちの姿を見かける。彼ら彼女らは先生、先生と言いなから挨拶を返してくれた。何とも素直で可愛らしい子供たちである。

トリニキはそのように若干心を和ませていたのだが……階段の裏手にある下駄箱の辺りで、不穩に動く影を発見してしまった。

今宮先生。トリニキが声をかけると、今宮先生は不思議そうに首を傾げた。

「ちよつと気になる物を見かけました。僕は後で向かいますのでどうぞお先に」

「う、うん……」

戸惑いながらも階段を上がっていく今宮先生を一瞥し、トリニキは早足気味に下駄箱の影へと向かつて行つた。廊下は走らないという鉄の掟は、もちろん教師にも適用されるのだ。

トリニキが抱いた違和感の正体は、一人の男子生徒だった。厳密に言えばトリニキが受け持つ一年二組に所属する、野柴珠彦と言う妖狐の少年だ。

さつきから彼はここで何をしていたのでろう……そう思いながらも、トリニキは野柴に声をかける事にした。濃いオレンジ色の尻尾は硬直したように伸びていたが、目の前に集中しているらしく、トリニキの存在に気付いていない。勘の鋭い妖狐らしからぬ振る舞いだった。

「野柴君おはよう」

「ひゃうっ！」

ゆつたりとした口調で話しかけてみたのだが、野柴は驚いて奇妙な声を上げてしまった。その声の大きさと高さは思いがけぬものであり、周囲の生徒も一瞬こちらを振り返るほどである。

一体何に驚いているんだか……トリニキはそれでも笑みを浮かべながら言い足した。

「ごめんごめん。驚かせるつもりなんて無かつたんだよ。別に取って喰う訳じゃああるまいし……と言うか妖狐の野柴君が人間の僕に驚くなんて」

「そ、そんな、先生だって急にやって来るんですから……」

口早に野柴は言うのと、そのまま立ち去ってしまった。トリニキの足許に、はがき大の紙を落としたまま。

「あんなに慌ててしまつて……一体どうしたんだか」

野柴が去つていった方を一瞥しながらも、トリニキは落とし物を拾つた。それは一通の封筒だった。会社員が使うような細長い茶封筒などではない。長さと幅の差がより少ない、所謂洋形の封筒だった。封筒は白く、いつそ青白く見える程でもあった。

これは後で野柴に届けないとな。しかしこれは一体何だろうか。ゆつくりと裏表を観察しながらトリニキは落とし物の正体を推測していた。中身を取り出してみる事は流石にしない。それは個人情報保護の観点からよろしくないからだ。

だがすぐに、トリニキは落とし物の正体が何であるか察してしまった。事もあろうにそれはラブレターだったのだ。もちろん男子が用意したものであるから、ハートマークのシールが貼りつけられているなどと言った気恥ずかしい装飾が成されている訳ではない。しかし表側には「梅園六花様へ」とかなりはつきりと記されていたし、裏側にはご丁寧に野柴珠彦と差出人（？）のフルネームまで記載されていた。

下駄箱にラブレターを仕込むとはたまげたなあ。しかしこれ、どうすればええんや？
しばしトリニキは周囲の事を忘れ、手元にあるブツをどうするべきか悩んでしまった。

妖怪たちの恋愛事情

朝のショートホームルームはサクツと終わってしまった。昨日の朝とは異なり、誰かが遅れて教室に入ってきたり、それについて別の誰かが糾弾したりするようなアクシデントは一切起きなかったためだ。

普通の人間に純血の妖怪。そして両者の血を受け継ぐ半妖。生まれも種族もてんでバラバラな生徒たちは、しかし化け狸である今宮先生と、人間であるトリニキが運営するホームルームの内容に大人しく耳を傾けていた。

その中に梅園六花や宮坂京子がいたのは言うまでもない。六花の方はトリニキと目が合うと笑顔——スケバンらしからぬ、茶目っ気たつぷりの可愛らしい笑顔だった——を向けたのだが、ただそれだけだった。

平和に物事が過ぎていったから僥倖。そう言いたかったトリニキであるが、素直にそう言い切れない状況でもあったのだ。

その要員たる白い封筒を指先で摘まみながら、トリニキは静かにため息をついた。狐である野柴少年がしたためたラブレターである。もちろんトリニキとてこれをずっと保持しておくつもりはない。と言うかショートホームルームの間に、彼を呼びつけて

返しておこうと思つていたくらいだ。だがショートホームルーム自体が滞りなく終わつてしまい、その暇をトリニキは見出す事が出来なかつたのだ。

もちろんこれは、担任である今宮先生や、他の生徒たちを責める案件ではない。トリニキの呑気さや迂闊さこそを責めるべきだろう。

「ふーむ」

脇に置いた封筒を眺めつつ、トリニキはゆつくりと息を漏らした。本業であるテストの答え合わせに着手し始めたからである。入学式・進学式は昨日終わつたばかりなのだが、高等部の生徒らは一年生から三年生まで学力テストが控えていたのだ。

僕が高校生だった時は、入学式が始まつて数日はもうちよつとまつたりしていたはずだけれど。そんな事を考えても詮無い話である。郷に入つては郷に従え。生徒らとは立場が違うと言えども、その格言をトリニキはもちろん知つているのだから。

そしてこの学力テストは、編入生である梅園六花も受けているはずだ。スケバンとして振舞い、昨晚も釘バットを振るつていた彼女の学力たるやいかなるものなのか。トリニキはほんの少し好奇心を抱いてもいた。

鳥塚先生。おのれに呼びかける声を聞き取つたトリニキは、思わず赤ペンの動きを止めた。顔を上げて周囲に視線を彷徨わせる。声の主はすぐに見つかつた。金髪の妖狐たる米田先生だった。

トリニキは少しだけ居住まいを正し、米田先生に頭を下げた。梅園六花や宮坂京子の事を教えてくれたという事もあり、トリニキは彼女に敬意を払っていたのだ。

さてその米田先生の視線は、トリニキが脇に置いた封筒に向けられていた。

「これつてもしかして……」

「うちのクラスの生徒がしたためたラブレターらしいんですよ」

米田先生が何か言い終える前に、トリニキは封筒の正体を明かしていた。早口ながらも声のトーンは落とした。慌ててはいたものの、あんまり大事にすべきではないという理性がトリニキの中できちんと働いたのである。

あらあらまあまあ。品の良いご婦人、特にマダムのような声を上げて、米田さんは片頬に手を添えていた。若々しい見た目にはそぐわない動きではあるのだが、何故だか彼女の動きはごく自然なものに見える。

「そうなのね。もう春だしちよつと浮かれちやう子もいるものね」
「良いんですか米田先生？」

米田先生は、生徒がラブレターをしたためていた事について特に強く言及する素振りは見せなかった。その事にむしろトリニキの方がうろたえたのだ。今度は声を抑えきれずに、何事かと思つた教師たちがこちらを振り向いている。

だが、それすら気にならない程だった。何せ米田先生は、宮坂京子がああなつた理由

についてトリニキに教えてくれた張本人だったのだから。

「表向きは不純異性交遊は——まあ不純同性交友でも同じですが——学園の方では取り締まっておりますわ。ですが、完全に恋愛を禁じている訳ではありません。あくまでも両者の合意があり、尚且つ節度を保った関係であるならば不健全でも何でもありませんからね」

そう言つて米田先生は、トリニキに向かつて笑みを作つた。ごく自然な笑顔の筈なのに、愁いを覆い隠すような作り笑いに見えてならなかつた。

その後トリニキと米田先生は、生徒らの、妖怪と人間と入り乱れた学園内での恋愛模様について意見交換を行った。厳密には、トリニキは自身の学生たちのあるべき恋愛観やかかつて自身が学生だった時の恋愛状況を開示し、その上で米田先生から学園内での状況を教えてもらうという物であつただけだ。

結果としてトリニキが知り得たのは、妖怪たちの恋愛も概ね人間と変わらない物であるという事だつた。要するに気になつた相手にそれとなくアプローチし、受け入れられたら交際するという、ごくごくシンプルな物である。現代の風潮に従つて生きている事が多い妖怪たちであるが、しかしだからこそなのか、こうして敢えてラブレターをしたためる者も多いのだそうだ。とはいえその辺りは、人間も大差ない所ではないか。そのようにトリニキは思つていた。と言うのも、電子書籍元年の狂騒とその顛末をトリニキ

は知っているからだ。

ヘーサー二十二年だか二十三年に、この国には電子書籍元年とやらが海の向こうからやって来ただのだ。やれ紙の書籍は絶滅するだの全てが電子化されるだの言われたのだが、それから十二年余り経った今日においても、紙の書籍は絶滅していない。もちろん電子書籍は少しづつ浸透してはいる。それでもまだ紙の書籍を愛用する者が多いのも現状だ。そもそも前職の予備校でも現職のこの学園でも、紙に印字された教科書を用い、ペーパーテストを実施しているではないか。

それはさておき米田先生の話には、当たり前だが興味深い話も一点あった。

妖怪たちの間では、異種族恋愛・異種族婚もしばしば発生するという点である。まあ考えてみれば当たり前の話だ。それこそ半妖の宮坂京子などは、妖狐と人間の異種族婚の果てに生じた存在なのだから。更に言えば、雷獣である梅園六花の叔父は、雷獣ではなく鶴を妻とし、二人の子供を設けていたではないか。

無論これらは妖怪たちの妖力のなせる業である。それでも分類学的に別種の生物同士の間健康な子が生まれ、彼らも子孫を残せる。その事をトリニキが感慨深く感じてしまうのは、やはり彼が生物学を学んだ身であるからだろう。

ともあれ今回は妖狐の少年が雷獣の少女に懸想したのだ。それ以上でも以下でもない。

「米田先生。実はこのラブレター、梅園さんにあてたものらしいんですよ」

そうだったんですね。裏返した封筒の名前を見た米田先生は、それこそ少女のような弾んだ声を上げていた。

「梅園さんつてば、とつても元気のある娘でみんなびつくりしていたつてお話でしたけれど、そんな彼女に片想いしちやつた子もいるんですね」

「ま、まあ……そういう事なんでしょうね」

米田先生の言葉に、トリニキは何故か言葉を詰まらせてしまった。梅園六花の笑顔が脳裏に浮かび、さも自分が彼女に恋をしているような錯覚を抱いたからであろう。教師たる自分が、易々と女生徒に恋をしてはならない事は解っているというのに。

だが——男として、梅園六花に惹かれる気持ちは解らなくもなかった。愛くるしい風貌だからというわけでは無い。日頃はいつそ闊達で粗暴にすら見えるかもしれない。だが、ふとした拍子に無邪気な笑みや物憂げな様子を見せるのだ。その部分そのギヤツプに野柴珠彦も魅了されてしまったのだろうか。

次の休み時間に野柴君がやってきて、ラブレターを回収すれば良いのに。トリニキは取り留めも無くそんな事を考えていたのだった。

狐の恋と樹下の告白

結局のところ、野柴珠彦は昼休みに職員室の入り口にやってきた。(職員室には現在入室できないから、生徒に呼ばれた教師は職員室の外で応対せねばならないのだ)但し彼単体ではなくて、一人の女子生徒も伴つての話であるが。もちろん梅園六花ではない。珠彦と何となく似た面立ちの、妖狐の少女だった。彼女は野柴鈴花と名乗った。高等部一年一組に属し、珠彦の従妹であるとの事。似た面立ちであるのも当然の話だった。

「先生……持つていたのに返してくれないなんて、先生がそこまでイケズだったとは思いませんでしたっす」

敬語なのか砕けているのか判然としない口調で告げ、珠彦はやや恨めしそうにトリニキを見やった。テストのタイミングにラブレターなど仕込んだりするなよな……トリニキは内心そんな事をぼやきつつも、素直に珠彦にラブレターを返却した。

「ごめんね野柴君。先生もちよつとタイミングが掴めなくて、ヤキモキさせちゃったかな」

「大丈夫っすよ。梅園さんは食堂か何処かでお昼を食べてるみたいだし、その間にもう

引き出しの中に仕込んでおこうかなと思つたつす」

野柴君。トリニキは珠彦の顔をしつかと見据えながら呼びかけた。どうしても、彼に聞いておきたい事があつたのだ。

「君は梅園さんの事が気になつてゐるんだよね。それつてどうしてかな？」

問いかけるトリニキの脳裏には、梅園六花の姿がふつと浮かんだ。スケバンであるという点を除けば、男子の目を惹くような容貌である事はトリニキも解つていた。少女ながらもメリハリのあるしつかりとした身体つきであるし、愛くるしさと繊細さを持ち合わせた美貌の持ち主でもある。

珠彦も、或いはそうした所に魅力を感じたのだろうか、とトリニキは推測していたのだ。

さて珠彦はと言うと、思案顔でしばし視線を彷徨わせ、たつぷり数秒ほど経つてから口を開いた。

「近寄りかたそうだけど、本当は優しいお嬢様なんじゃないかなつて思つたんすよ」

「……そうか。そうだったんだね」

嘆息と共にトリニキは言葉を漏らしていた。優しいお嬢様。珠彦の六花への評価に素直に驚いていたのだ。見当違いであると思つたわけでは無い。むしろ逆だ。スケバンとして突つ張つてゐる姿の裏側に、彼女の繊細さや秘められた優しさがあるのではないか。トリニキはそのように思つていたからだ。

見かけに惑わされずに、その事に気付いた珠彦は慧眼の持ち主だ。眼力もある。そのように思い始めてもいた。

「健闘を祈るよ、野柴君」

「そんな、先生にそんな事を言われるとむず痒いつす」

「それじゃ、そろそろ行こっか」

従妹であるという鈴花に促された珠彦は、未だ気恥ずかしそうな表情を浮かべつつも、そのまま教室へと戻っていった。

六花は珠彦のアプローチにどのように応じるのだろうか。トリニキとしてはそこは気になる所ではあった。ラブレターによる告白が生徒間のいざこざを引き起こしてはたまったものではない。そんな教師目線の懸念もあるにはある。

だが——ラブレターを貰った位で六花が狂犬のごとき様相を見せはしないだろう。そのような思いもまた、トリニキの中にあるにはあった。それはやはり、あの夜の六花の姿をトリニキは知っているからそう思ってしまうのかもしれない。或いは単なるトリニキの願望に過ぎないのかもしれないが。

もつとも、六花が穏便に事を進めてくれたとしても、珠彦を受け入れるか否かは別問題であろう。年長者（あくまでも精神的な意味である。妖怪である珠彦と六花の方がトリニキよりも実年齢は上なのだ）としてトリニキはそう思っていた。弟妹の面倒を見な

ければならない。そう言った時の表情を思い出せば、彼女が色恋に容易く陥落するような娘ではない事は明白だった。

——がんばれよ野柴少年。もしかしたら君にとって残念な結末になるやもしれないが

ともあれ、トリニキは珠彦を密かに応援し、変にいざこざが生じぬよう願う他なかったのだ。

※

『梅園六花様。どうしても貴女にお伝えしたい事がございます。お時間があれば放課後に中庭まで来てください』

放課後。六花は自席の引き出しに入っていた封書を携えて中庭とやらに向かっていた。差出人は野柴珠彦であるとの事。

一体アタシに何の用があるって言うんだ……差出人の顔は思い浮かんだものの、六花の心中にあるのは純粋な疑問だった。相手の顔と名前がすぐに合致するのは、六花のある種の特技でもあった。雷獣だからと言う事もあるだろうし、誰がどのような相手なのか、自分の味方になりうるか否か、見極める事が大切だと知っていたからだ。

昨日の様子を見るに、野柴はそんなに荒っぽい生徒では無さそうだ。確かに若干はしゃいだり快活そうな様子は見せていた気がする。しかしそれは普通の男子生徒の範

疇に留まつており、常識的な良い子に過ぎなかった。

果たし状の類なら何度も貰った事がある。分を弁えないアホどもにリンチされかけた事も、それこそ女である事を目当てに襲おうとした輩もいるにはいた。

だが、この封書の文言にはそうした禍々しさは無かった。筆圧が強く文字が所々歪んでいる部分はあるにはあるが。

「椿か……まあ春だもんな」

吹奏楽部の練習やら運動部員の掛け声をバックグラウンドミュージックとして歩いているうちに、六花は相手の指定した中庭に辿り着いていた。生徒らが歩く所は煉瓦が敷き詰められているが、その脇には種々の草木が植えられている。

その中でも椿の花が六花の目に留まったのだった。八重咲のピンクの花もあれば、近縁種の山茶花によく似たぼつてりとした赤味の強い花もある。

根元に丸ごと落ちた椿の花を見た時、六花は僅かに胸の痛みを感じた気がした。落ちる首になぞらえた不吉さを思つての事ではない。あのまま静かに朽ちていく事を思うと切なくなつただけだ。

折角整美委員になつたんだ。あの辺も片づけるべきだろうな。六花はそう思う事にして気を取り直したのだった。

「来てくれたんすね、梅園さん」

弾んだ声が耳朶を打つ。ラブレターにて自分を呼びつけた野柴珠彦は目の前にいた。狐色の尻尾は期待に揺れ、のみならずプロペラ回転を行っていたのだった。

「わざわざこんなものまで用意して……一体アタシに何の用だい？」

「好きです梅園さん！ 僕と……僕と付き合ってください……！」

珠彦の感情の発露に、六花は僅かに首を傾げた。これは詳しく話を聞く必要がある。ある意味絡まれるよりも七面倒な事になったのではないか。

眼前の妖狐の少年の気持ちちをガン無視して、そんな事を思い始めていたのだ。

スケバン雷獣 タンカを切る

※

未だ春の浅い昼下がり。幼い六花は遊び疲れ、縁側でこちらを見守る母の許に戻っていた。お転婆な娘をしつかと抱きとめ、その背中や尻尾を愛おしそうに撫でさする母は……他ならぬ梅園家の女当主だった。

「ねえお母さん」

「どうしたの、六花」

ふとある事を思いつき、母の腕の中で六花は声を上げた。この時の六花はまだ幼く、人間で言えばようやく四、五歳ほどの幼子だった。それでも彼女は知っていた。母の立場を。そしていずれは長女である自分が、その母の地位を受け継ぐであろう事も。

それに当たり……と言う難しい事を、幼子が考えていた訳でもない。それでも六花には母に聞きたい事があつた。

「お母さん。お母さんはどうしてお父さんを選んだの？」

あらあ……母は驚いたように目を丸く見開き、それからゆるりと微笑んだ。慈愛に満ちたその笑みは、確かに貴族の笑みと呼んでも差支えなからう。母の柔らかな手は、い

つの間にか六花の頭を優しく撫でていた。庭で咲き誇る、椿のしっとりとした香りが手の平から漂っていた。

——あの時母が何と言ったのか、それはもう思い出せないし、もう二度と母に聞く事もできない。幸せが何たるかを考えた事もないほどに幸福だった日々。過ぎ去ってしまってもう取り戻せない日々の一幕に過ぎないのだから。

今では六花の記憶の中に残るそれらは、もう六花の許には戻ってこない。幸せな日々も、当主だった母も、母が好んでいた椿の木々たちも。

※

さて現状に話を戻そう。色事に疎い六花ではあつたが、流石に眼前の妖狐が自分に片恋を抱いている事は解ってしまった。だからなのだろう、在りし日の一幕を思い出してしまったのは。

「付き合ってくれと言つても……野柴よお。お前は妖狐だろ？ だつたら妖狐の女子をカノジョにしようとかか思わないのか？ クラスにだつて妖狐の女子なら六、七人はいるだろうに」

言っている傍から、六花の脳裏にはクラスメイトとなつた妖狐の少女たちの姿が浮かんで消える。集団生活と仲間の和を好む妖狐らしい、概ね大人しくて気立ての良さそうな狐娘ばかりだった。まあ宮坂京子とかいう半妖の女狐は例外ではあるのだが。

見れば野柴とてそんなに粗暴そうな感じの狐ではない。自分よりも同族の娘らがよほど彼女には相応しいのではないか。六花はそのように思っていたのだ。

「同族の方が良いと仰るなんて……やっぱり梅園さんはお嬢様、なんですよね？」

「なっ……」

疑問と確信を織り交ぜた野柴の物言いに、六花は柳眉を寄せてたじろいだ。昨日の自己紹介でも、六花はおのれの出自については特に言及していない。せいぜい叔父夫婦とその子供らと共に暮らしていると言っただ位である。だというのに、目の前の少年は六花の出自を言い当てようとしているではないか。翠眼を大きく見開いていると、野柴は無邪気な笑みと共に言い添えた。

「梅園さん。やんごとない貴族の方たちほど、同族同士で恋愛とか結婚とかをしたって思うって昔から相場が決まってるっす。でも……俺ら庶民妖怪はね、気が合えば違う種族であつてもくつついちゃうんですよ。この学園にはそんなカップルもいるし、それこそ半妖だつて学園にはわんさかいるんすよ。うちのクラスだつたら宮坂さんがそうっすね」

野柴の言葉には一理ある。クルル、と猫のように喉を鳴らしながら六花は静かにそう思っていた。付き合うならば雷獣の男。自分と互角の力量か、それ以上の力を持つていれば言う事は無い。狐狸のような別種の妖怪はもちろんのこと、人間の男もお呼びでは

ない。六花の中にはそうした恋愛観があつた。だがそれは、ある意味母から受け継いだ思想である事には変わりはない。

翻つて叔父である三國はどうだろうか。彼は純血の雷獣であつたが、鶴の月華と結婚し、二人の子を設けていた。確かに別種同士の夫婦ではある。もつとも、鶴と雷獣は近縁種であるし、二人もその辺りは特段気にしてはいなかつたが。

しまつた、と六花は奥歯を噛み締めた。庶民妖怪であるはずの叔父の許で暮らしていたにもかかわらず、その辺りに意識を向けていなかったとは。

ともあれ、野柴を恋人にするつもりはない。それだけは伝えるつもりだつた。断つて恨まれるだとか、そう言つた考えはない。よしんば逆上して野柴が襲い掛かつて来たとしても、六花であればどうにでもなる。

「まあ雑談はこれくらいにしてだな、そろそろ本題に入ろうか」

はい……六花の言葉に野柴が短く応じる。妖狐と言うのは何ともしおらしい生き物なのだろうか。これではまるで羊のようではないか。

ため息をつきつつも、六花は言葉を紡いだ。

「野柴。あんたはアタシに恋心だか何だかを抱いていて、だからアタシをモノにしたいと思つている。違うか？」

「そんなつ、梅園さん。お嬢様を……女の子をモノにするだなんて……そんな野蛮な言

い方はないっすよ。カノジョになって欲しいって思ってるだけっす。それが早すぎたら友達でも構わないっす」

「友達にしろカノジョにしろ、逝きつく先は同じだろ？」

六花はそう言つて小首をかしげ、様子を窺つた。野柴の瞳に映る六花の姿は、果たしてどのような物なのか。そんな詮無い考えが脳裏をふつとよぎつた。

「——断る。アタシからの返答は以上だ」

「そんなっ……」

野柴はかすれた声で呟き、大きく目を見開いている。どうして……理由を探ろうとする心もとない声が、野柴の口からまろび出ていた。

このまま立ち去るのも酷という物かもしれない。仏心を抱いた六花は、僅かに表情を緩めて続けた。

「理由を知りたいかい？ 野柴。それは初めからあんたも知つてたんじゃないかい。知つてるんだろ、本当はアタシが貴族のお嬢様だつて事をな」

「……………」

首を垂れた野柴はもはや何も言わなかつた。王族に平伏する庶民のような姿を、編入生であり外様である六花に見せているのだ。

強い男で無ければ、そして何処までも付いていく、それこそおのれと共に地獄の果て

まで憑いて逝けるような相手が無ければつがいとして受け入れるつもりはない。色恋に疎い六花であるが、それこそが彼女の恋愛観だった。それだけは譲れない。

「アタシの素性はさておきだな。アタシ自身、闘いと血の纏わり憑くような暮らしに身を置いているような物なんだよ。アタシの夫、アタシのつがいになる男はな、そんなアタシに臆せず付いて行けるような奴でないとって思ってる。なあに、その間にアタシが欲しくなれば、力づくで奪つても構わない。それだけ強いって事なんだからさあ……そんなときはそいつに身を委ねてやるよ」

それだけの強さと覚悟があんたにはあるか。野柴を見下ろしながら六花は問うた。

「愛する女の道行きを何処まで付いて行く事の出来る覚悟。手に入れると決めたものは、たとえ何であれ——権力、地位、そして女だよ——手に入れるという気概と強さ。アタシが男に求めるのはそう言う事だ。」

そして野柴よ。あんたにはまだそれが無いと思ってる」

野柴は再び顔を上げていた。だが何を言えいいのか判らないと言った様子で、ただ六花の顔を仰ぎ見ているだけだった。

野柴は確かに、六花の眼鏡にかなうような少年ではなかった。だが——だからと言って粗末に扱うつもりはなかった。

「しかし……アタシに直接申し出た胆力は認めてやるよ。今のあんたを恋人にするつも

りは無い。だけど、アタシの傍にいたければ傍にいても良いんだぜ。それこそ、友達としてな」

「ありがとう……ありがとう……ごいませ梅園さん」

「何、アタシはあんたを振ったんだぞ。なのになんで平伏するんだ。良いから頭を上げな。端くれとはいえあんたも妖怪だろ。そんな、易々と頭を下げるんじゃないよ」

恋愛感情は抜きにして友達と言う関係でもやぶさかではない。好意と畏敬の念を野柴に抱かれてしまった六花であるが……まあ良い結果になったと思う事にしていた。恨んだり腹を立てたりしたのならば相応の対処があるだろう。だが野柴の様子を見ればその必要もなさそうだ。

それに、六花はまだこのあやかし学園に通学し始めてから二日しか経っていない。学園になれた生徒、それも同級生と親しくなれば、学園の内情を掴むのも早いだろう。

そのように考えを巡らせていた六花は、自分たちの一連のやり取りが、多くの生徒に見られていた事に改めて気づいたのだった。

稲妻のごとし噂の広まり

野柴珠彦の一世一代の告白劇が終わった丁度その頃。半妖で男装を嗜む狐娘の宮坂京子は、南棟にある部室で優雅にティータイムを楽しんでいる最中だった。

部室にいるのは文芸部の活動があるからに他ならない。風紀委員の活動に勤しむあまり幽霊部員になってしまった京子であるが、それでも節目の折には部活に顔を出さねばならない。彼女はそう思っていたのだ。往時のように、もはや創作への意欲が無かつたとしても。

部室の空気は二分されていた。宮坂京子を受け入れ傅く雰囲気と、彼女から距離を置き、半ば無視しながらも自分たちの活動を進める雰囲気である。ちなみに後者は文芸部の大多数である。宮坂京子の同級生のみならず先輩も存在しており、要は変貌する前の彼女を知っている面々と言う事だ。一方、仔犬のように京子の傍に侍り、まめまめしく傅こうとする女生徒たちは文芸部員ですらない。外様であるはずの彼女らは、宮坂京子目当てでここにいるのだ。美少年と言っても遜色のない美貌と、それでいて無垢な乙女を脅かすような雄の獣性を持ち合わせはしない。いつわりの美少年たる宮坂君に彼女らは心酔していたと言っても過言では無からう。

断っておくが、宮坂京子は女子たちを魅了したり操ったりしているつもりは特に無い。妖狐だからとて皆が皆そんな力を使えるわけではない。よしんば使えるとしても、京子はその能力に頼るつもりはなかった。

だからおのれの許にやってくる少女たちは、純粹に宮坂京子を慕い、心酔している者たちばかりなのだ。同年代の……或いは年下の少女たちに傳かれるようになる事が当たり前と感じるようになったのはいつの事だろうか。

別に京子は彼女らを利用するつもりはない。ただ、自分を慕って集まって来るには、彼女らを護らねばとも思っていた——獸性丸出しのオスたちや、それに文字通り尻尾を振って媚びるメスたちから。

そんな訳で、大勢の少女たちで構成されるこの部室には、独特の不思議な空気が醸成されつつあった。奇しくも文芸部が女子のみの部活であり、更には宮坂京子目当てでやって来る者たちもまた、少女たちばかりだったからだ。

「宮坂様！ た、た、大変なのだ……！」

丁度その時、一人の少女が息を弾ませながら京子の許に駆け寄ってきた。余程慌てているのか、スカートの背後では太い縞模様の尻尾がブルンブルンと揺れている。愛嬌のある、何処となくたぬき顔の少女は、実は妖怪化したアライグマだったのだ。中等部に所属しているので、宮坂京子の後輩にあたるのは言うまでもない。

「どうしたんだい」

黒々とした瞳でアライグマ少女を見つめながら、京子が静かに呼びかける。彼女の落ち着き払った様子や冷静さは、アライグマ少女の動揺ぶりのために一層際立ち、京子をより優雅に魅せていた。

それはさておき、アライグマ少女は丸い瞳をくりくりと動かし、やおら口を開いたのだ。

「あのっ！ スケバンの雷獣高校生が、妖狐の男子とくつついているのを見ちゃったのだー！」

「何だって……！」

ここで宮坂京子の表情が一変した。その姿は私以外も見ていたのだ、スケバン雷獣はとっても高飛車だったけどカッコよかったのだ……のだのだと語り続けるアライグマ少女の言葉は、もう京子は聞いていかなかった。半ば彼女を押しつけるような形で部室の窓辺に向かっていたのだ。南棟の窓は中庭に面している。しかも部室は三階に位置するから、中庭の様子ははっきりと俯瞰できるのだ。

窓辺から下界を見下ろした京子は、眼下に広がる光景を目の当たりにして思わず息のんだ。

スケバン雷獣こと梅園六花の姿を見つけ出すのは容易かった。様々な毛並みの獣妖

怪がいると言えども、輝くような銀髪は嫌でも目立つからだ。アライグマ少女の言う通り、六花の傍には一人の男性生徒が侍っている。相手が妖狐の少年である事は、ズボンの先からふんわりと伸びる尻尾を見れば明らかだ。狐色のふさふさした二尾を、彼は具えていたのだから。

そしてその少年には、宮坂京子も見覚えがあった。

「野柴君……どうして……」

窓枠に添えた右手がかすかに震える。京子の口から漏れ出たのは、意外にも弱弱しく儂げな、少女そのものの声だったのだ。裏切られた——梅園六花に寄り添いながら中庭を闊歩する野柴を見、そんな感情が何故か沸き上がって来ていた。

野柴珠彦の事は京子も良く知っていた。それどころではない。中等部でも二度ばかり同じクラスになっていたくらいなのだ。その時——まだ京子が何者も疑わぬ少女だった時は、無邪気に彼の事を友達だと思っていた。あの頃の野柴は大きな仔狐のような物だったから。活発で、遊び好きで、それでいて色恋には無縁。今でもそんな少年だったのだと京子は勝手に思っていたのだ。

瞳を動かしながら、今一度中庭を睥睨する。六花と野柴は連れ立って中庭を立ち去ろうとしていた所だった。六花の面にも野柴の面にも、晴れやかな笑顔が浮かんでいる。

野柴が六花を自分の女にしたとは思えなかった。あの雷獣娘は、生半可な事では屈服

しないはずだ。力も強いしそれ以上に意志の強そうな女だった。まだ顔を合わせて間がないものの、京子とてそれ位は看破していたのだ。

であれば結論は一つである。六花が野柴を自分の男にしたという事であろう。

「新任の鳥塚先生に飽き足らず、純真だったはずの野柴君まで誑かすとは……」

「わわわつ、宮坂様が焦ってるのだ！ これは学園のピンチなのだ」

「ラス子ちゃん。まだ宮坂君は何も言っていないのさ。ラス子ちゃんが早とちりして、明後日の方向に進んじやった事もたたくさんあつたんだからさあ、ここは落ち着いて様子を見ようよう」

泥棒猫のメス猫が。喉元までせり上がって来ていた言葉を、幸いにして京子は口にすゝる事は無かった。彼女の背後で女子生徒ら——もちろん京子を慕っている少女たちである——が、言葉を交わすのが聞こえていたからである。

何だ、君たちか。心配していたんだね……普段通りの優しげな笑みを浮かべながら、京子はアライグマとフェネック妖狐の少女の方をゆるゆると向いた。

「あの雷獣娘については君たちは何も心配しなくて良いんだよ。幸か不幸か、彼女と僕は同じくラスなんだ……ふふふつ、あの娘が何か仕出かしたなら、直々に僕が手を下す事にするよ。風紀委員としてね」

二人の少女は何か言いたげに互いに目配せをしていたが、京子に対して何か言う事は

ついで無かった。

ふたご妖怪とメイドさん

翌朝。朝の支度とマリンの世話を終えたトリニキは、あやかし学園へと歩を進めていた。昨日と異なり足取りはやや軽い。昨日も昨日で生徒らに実施したテストの採点と言う職務があるにはあった。しかし、心身の疲労はその前の日よりも少ないように感じられた。

元よりトリニキは予備校の講師として勤務していた。生徒らの手書きの答案を眺め、それを採点するという作業には慣れっこである。

それに、答案用紙の採点からも、生徒らのひととなりを俯瞰する事はうつつすらと出来た。理学の学位を取るトリニキの本文は、やはり理科の領域ではある。しかし教員免許を取るにあたり、心理学や社会学などと言った分野も学ばざるを得なかったのだ。過去に学んだカリキュラムの一部は忘れていたものもあつたのだが……この度教壇に上がるにあたり思い出した所もあつたのだ。もちろん、教育実習を行った日々の事も。

「…………おや」

さて意気揚々と歩み始めたトリニキであつたが、足許に転がつて来た物に気付いてすぐに足を止めた。濃い青色のゴムボールが、トリニキの革靴の先に向かって転がつてき

たのである。大きさは野球ボールよりやや大きいほどであるが、陽光を浴びて鈍く輝く様子からして、うんと柔らかそうなものだった。

「ぼーる！ ぼーる転がったー！」

「……あおぼー！」

「青葉お嬢様……！」

トリニキが屈みこむ前に、甲高い声と共に幼子が駆け寄って来る。その背後からは二人分の声も伴っていた。慌てて困ったような幼子の声と、落ち着き払った大人の女性の声である。

駆け寄ってきたのは獣妖怪の女の子だった。人間で言えば二、三歳ほどの幼児と言った所であろうか。保育園か幼稚園の制服を着こんでおり、背後では猫のような尻尾が一本伸びている。

彼女の背後には、同じくらいの年頃の男の子と、若い娘に変化した獣妖怪の女性が近づきつつあった。

この子のボールだったんだな。そう思いながら、トリニキは女の子が動くのを見守った。兄弟と思しき男の子と彼らを監督していた女性が傍に居るのだ。きつとこの子もボールを拾い上げて、そのまま彼らの許に戻るだろう。

しかし、そのように思っていたトリニキの意図に反し、女の子はボールを拾わなかつ

た。屈もうかどうしようかと悩んでおかしな格好のままのトリニキの顔を覗き込み、ニコニコと笑っている。

あおば！ そうしているうちに、兄弟と思しき男の子が女の子の隣に並ぶ始末である。

「ねえおじちゃん。あおばのぼーる、取っても良いですか？」

「あおばってばダメって言われてるのにボールあそびしちゃってて、おじさんごめんなさい」

屈託のない笑みで質問を投げかける女兒と、幼いながらも礼儀正しく謝る男児を前に、トリニキは引きつった笑みを浮かべて硬直していた。オジサン呼ばわりされた事が地味にショックだったのである。

そりやあもちろん、トリニキとて自分の年齢は解っている。二十代後半であり、ヤングな若者と言うには若干とうが立っているであろう事も。そして、生徒からはオッサン扱いされるであろう事も。

しかしトリニキの心は未だに二十四歳前後だったのだ。トリニキは学生ではないけれど。

「……良いよお嬢ちゃん。あとおじさんじゃなくてお兄ちゃんな。そこ間違えたら色々危ないから気を付けるんだよ」

「ありがとう！ おじ……じゃなくてお兄ちゃん！」

結局のところ、トリニキがボールを拾い上げて女の子に渡す事になった。今度はおじちゃんと言いかけたものの、きちんとお兄ちゃんって言ってくれたのだ。活発そうだけど賢い子なのかもしれない。トリニキはそんな事をぼんやりと思っていた。

と、それまでの様子を眺めていた女妖怪が近づいてくる。

「先生。青葉お嬢様と野分お坊ちやまが朝からご迷惑をおかけして申し訳ありません」「いえいえ大丈夫ですよ」

男の子の方は野分と言うのか……今や女妖怪の許にまわりつく幼い双子妖怪を見ながらトリニキは思った。彼女が双子たちの肉親ではない事はトリニキにも解っている。獣妖怪ではあるが妖気の質や雰囲気がかげ離れているし、何よりあの呼び方は母親や姉が行うようなものではない。

「それにしても、僕の事を教師だとか存じだったんですね？」

申し訳なさそうに告げた女妖怪の言葉が気になり、トリニキはついつい思った事を口にしていた。妖怪に自身が教師である事を見抜かれた事に驚いていたからだ。

人間の若者に先生と呼ばれるのはまだ解る。これまで予備校で講師を務めていたのだから。予備校講師も、まあ職業柄先生と呼ばれる事は珍しくなからう。

だが、初対面に近い妖怪から先生、と呼ばれる事には驚いてしまった。確かに、現在

トリニキは妖怪たちも相手に教鞭を取る立場ではある。しかし、実際に赴任されてからまだ二日しか経っていないのだ。

いかな妖怪たちが不思議な術を使うとしても、それにしてもこちらの身元が割れるのは早すぎる。しかも、眼前の女妖怪は、失礼を承知で言えばさほど強くない、ごく普通の一般妖怪であるようだし。

だからこそ、トリニキは驚いた訳でもあるが。

「ええ。六花お嬢様から先生の事は聞き及んでおりまして」

「そうだったん……!」

思わずカンサイ弁のような言葉がトリニキの口から漏れ出る。別段フランクな言葉を発したわけでは無い。話を聞いていたから知っていた。その事に対して「そうだったんですね」と切り返そうとトリニキは思っていた。だが彼女が「六花お嬢様」と言った事に気付き、途中で驚いて声を詰まらせただけなのだ。

「すみません先生。まだ名乗っておりませんでしたね。」

私は飯綱美咲と申します。名前の通りイツナの一族の出身ですわ。縁あって三國様の……旦那様の配下となったのですが、現在は御多忙な三國様と奥様である月華様に代わって、お子様たちの世話係を行っております。実子である野分お坊ちやまや青葉お嬢様はもちろんのこと、養女である六花お嬢様の事も」

「そう言う事だったんですね、飯綱さん」

流石に今度は上手く事情を飲み込む事が出来た。トリニキは飯綱の言葉に納得し、それと共に密かに安堵してもいた。六花や幼い弟妹達がどうしているのか少し気がかりだったからだ。

それにしても……とトリニキは思案を巡らせていた。梅園六花の家には使用妖《しようにん》がいて、しかも彼女からお嬢様と呼ばれる身分であったとは。妖怪たちが比較的群れで暮らすものが多い事、裕福な妖怪は使用妖《しようにん》やら部下やらを自宅に住ませる事はトリニキも知識としては知っている。だがこうしてその事実に向面すると、どうしても戸惑いと驚きが大きかった。

それはもしかしたら、梅園六花自身の振る舞いも影響しているのかもしれない。それこそ深窓の令嬢に振舞っていたならば、お嬢様と呼ぶものがいてもそう言う事かと納得したのかもしれないけれど。

六花お嬢様の事をお願いいたします、鳥塚先生。心の籠った声音で飯綱はトリニキに告げた。

「旦那様に似てお転婆な娘に育ってしまいました……もし鳥塚先生にご迷惑をかけるような事があれば、どうぞ教育的指導を躊躇い無く行つてくださいませ。六花お嬢様も、ゆくゆくはいつぱしの淑女として育たなければならぬのですから」

「いやいやそこまで仰らなくても大丈夫ですよ。梅園さんが、本当は心根の優しいお嬢さんであるって事は僕も解っておりますから……」

さて、申し訳ありませんがそろそろお暇させていただきますね」

梅園六花とその保護者に仕えるという飯綱とは、正直な所もう少し言葉を交わしたかった。しかしお互い時間に縛られている身である。後ろ髪をひかれるような思いを抱きつつ、トリニキは飯綱や六花の弟妹達に別れを告げて学園へと向かったのだった。

浮足立ちたるホームルーム

梅園六花の弟妹達と世話係の妖怪メイドとの出会い。朝から思いがけない出来事に直面したトリニキであったが、学園の門をくぐるとその心も幾分落ち着いていた。そして、下駄箱を見た時に昨日の事を思い出したのである。

妖狐の少年である野柴珠彦が、梅園六花にラブレターをしたためたという事を。あの後どうなったのかトリニキは知らない。生徒らの答案の採点のために職員室に缶詰め状態になっていたからだ。もちろん、その時は生徒らも職員室には立ち入り禁止になっている訳であり、物理的に生徒と教師のやり取りが出来ないようになっていたのだ。

もともと、部活動は行っていたらしく、吹奏楽部の演奏の練習や演劇部の発声練習、或いは運動部の掛け声などはトリニキにもバッチリと聞こえていた。テストの当日にも部活動を行うというのはトリニキの学生時代とは微妙に異なっていた気もする。もしかしたら、教職員に妖怪がいるので、生徒の職員室への侵入対策がばっちり出来ていただけなのかもしれないが。

それはそうと、テストの採点は中々に興味深い物であった。点数を含めた答案の記載内容で人となり解る。予備校講師時代にトリニキはそのようなポリシーを培ってい

たのだが、それでもやはり生徒らの個性が浮き彫りになったのをはつきりと感じた。

特筆すべきは、やはり梅園六花の成績であろう。流石に全教科高得点の優等生、と言うわけでは無い。百点満点中七十点台の科目もあるにはあった。しかし得意分野であろう数学は九十点台、理科に至っては一か所だけミスしたという好成绩である。理系科目の成績が良いというのは理系女子としての特徴ともいえるかもしれない。しかし一番成績の悪い科目もそれなりの点数を確保しているのだから恐れ入る。少なくとも、自身が高校生だった頃よりも賢いのではないかとトリニキは思い始めていた。

——いやはや、メイドさんを従える程のお嬢様だけじゃなくて、一定水準の学力を持つ才媛だったとは。見た目も可愛らしいから、そりやあまあ男子生徒も興味を持つよなあ……スケバンなのが玉に瑕なのかもだけど。

トリニキは頬を撫でながら、そんな風に梅園六花の事を思っていた。叔父譲りの暴れん坊だと思っていたらとんでもない。偏りがあるとはいえクラス内でも上位の学力を持つ才媛、しかも美貌と生まれの良さにさえ恵まれた存在でもある。

これが世間で言う所のハイスペック美少女なのか……でも何か違うよな……トリニキは割と自由に六花の事についてあれこれと考察を巡らせていたのだ。

と言うか飯綱と名乗ったメイドにそれとなくラブレター騒動について問い合わせれば良かったのかもしれない。今更ではあるが、そんな考えもトリニキの脳裏を通り過ぎ

ていったのである。

※

副担任と言う身分が楽な身分なのか否か、トリニキには未だに判断が着かなかつた。今日からオリエンテーリングも交えつつ授業が始まるのだが、それでも朝のホームルームには今宮先生と共に教壇に立たねばならなかつた。と言つても、教壇のど真ん中は今宮先生に譲り、トリニキは副担任らしく教室の隅っこにいるのが常なのだが。

もちろん、ぼんやりと立っているだけではなくて、生徒らの様子に目を光らせておかねばならないのだが。場合によってはトリニキであつても教師として生徒に注意をせねばならないシーンもあるだろう。幸いまだそんなシーンには至つてはいないが、今宮先生に声を掛けられ、生徒らにひとことふたこと言わねばならない状況になつた事はあるにはある。

さて今回も今宮先生に業務連絡を任せ、トリニキはもっぱら生徒らの様子に注目していた。今や講師ではなく教師なのだから、生徒らをきちんと観察せねばならない。若教師らしくトリニキはそんな風に思つていたので。

羊のように大人しい生徒らばかりである事は前日、前々日とそう変わりはない。しかし何処か浮足立っているような、そわそわしているような気配が全体から伝わってきた。

レクリエーションを兼ねた遠足は四月下旬に予定されているから、その件で生徒らが
そわそわしているとは考えづらい。

そんな中で、トリニキが特に注意を払って観察していたのは、梅園六花と野柴珠彦の
両名だった。それもこれも、野柴珠彦が梅園六花にラブレターを渡そうとした事を知っ
ているからに他ならない。きつと珠彦はラブレターを渡した後、六花に対して何がしか
の接触を図っているであろうから。

やや身構えて二人の様子を観察していたトリニキであったが、珠彦も六花も特に変化
はなかった。妙に落ち込んでいるだとか、表情が暗いと言った事は無い。珠彦が六花に
無体を働いただとか、逆に六花が珠彦に何かをしでかしたという気配は無さそうだ。強
いて言うならば、珠彦の方がやや表情が明るく、六花は少女ながらも泰然とした様子で
今宮先生の話を聞いている、と言った所であろうか。

ちなみに宮坂京子もまた真面目に話を聞いている生徒の一人であったが、六花や珠彦
に時折視線を向け、含み笑いを浮かべているように見えた。あと、前列の生徒の一人が
そわそわした様子で何度もトリニキや今宮先生に視線を向けていたのがやや印象的
だった事くらいだろうか。

「……とまあ、先生からの連絡は以上です。皆さんの方から何か連絡したい事はありま
せんか」

その間にもホームルームは肅々と進み、今宮先生はゞの言葉として生徒らに質問を投げかけていた。

生徒らはすぐに挙手して発言するなどと言う事は無かった。ただそれでも、今宮先生の言葉が湖に投げ込んだ石のような役目を果たしてはいたのだが。浮足立った生徒らの間で、さざ波のようなやり取りがにわかには浮かんたのである。

「あのさ、今宮先生に話すのが恥ずかしくなったら、先生に話しても大丈夫だから。だから何かあったら遠慮なく言つて欲しいんだ」

引つ込み思案そうな生徒らに対し、トリニキの方からも提案を促す。するとどうだろう。最前列にいた生徒が、トリニキをしつかり見据えて口を開いたのだ。彼は確か相沢と言うはずだった。六花や珠彦のように妖怪ではなく、さりとして京子のように妖怪でもない。トリニキと同じく人間の生徒だったはずだ。

「……お昼の、いいえ一時間目の休み時間とかでも良いんです。ちよつと、うちのクラスの中で気になった事があつて、それで相談したい事があるんです……」
高校生にしてはやや丁寧な口調でもって、相沢はそう言ったのだった。

日直たちは見た

結局のところ、トリニキは一時間目の終わった休み時間に相沢の相談に乗る事にした。相談事であれば早めに乗った方が良い、とトリニキ自身も思っていたからだ。

「待たせたね、相沢君」

「あ、ありがとうございます……」

トリニキの言葉に、相沢少年はたどたどしい様子で挨拶を返す。彼の隣にはごく当然のように女子生徒が控えている。確か彼女の名は愛宕《あたご》だったはず。妖狐や雷獣の生徒のように獣の特徴を具えている訳ではないが、彼女もやはり妖怪である。人間らしい姿をしているのは、人由来の天狗の娘だからに他ならない。

天狗娘の愛宕は、小麦色の肌とがっしりとした身体つきが特徴的な、何ともパワフルで活力のありそうな少女だった。顔立ち自体は年相応でそれもまた可愛らしい。

「それと、愛宕さんも来てたんだね」

「ええ、ええ。うちと相沢君は今日の日直ですからね。それにうち、宮坂君からも頼まれとるんです。乙女たちの秩序を護るためにあんじよう頑張つて欲しいってね」

オーサカ弁キョート弁ともつかぬ口調で語る愛宕について、トリニキは特にツツコミ

は入れなかった。それよりも彼女は重要な事を口にしており、その事の方に意識が向いていた。

今回の案件は、この場にはいない宮坂京子も気にかけている。そして——トリニキの読み通り、彼女には奇妙なカリスマ性があるという事だ。

もちろん個体差はあるが、天狗と言うのは概ね尊大な性質の持ち主である。学園長たる灰高のような大妖怪クラスの天狗は言うまでもなく、それこそ小天狗などの頃から、そうした気質は持ち合わせているのだ。

無論愛宕としてその特性からは逃れられぬはずだ。だが彼女の物言いは、宮坂京子に一目を置く者のそれであるように感じられた。

トリニキの脳裏に微笑む宮坂京子の姿がぼんやりと浮かび、思わず身震いしてしまっただ。

あてられたんですか……相沢は呆れたように呟いて、深々と息を吐いた。

「乙女の秩序って、愛宕さんも宮坂さんも大げさすぎるんだよ。言うて妖怪同士の事なんだから、僕も鳥塚先生も関係ないはずなんだけど」

「相沢君。そんなイケズは言うたらアカン。宮坂君かて、中等部で色々大変な思いをしたのは知つとるやろ？　そうでのうても、恋愛は人間同士・妖怪同士だけで行われるもんでも無いし……センセはどう思われます？」

「まあ何というか……君らのクラスには人間も妖怪も一緒くたになっ
ていてるからね。だからその、妖怪だからとかって除け者にして
たり差別するのはどうかって先生も思うんだ」

愛宕に誘導されて紡いだ言葉は、しかしトリニキの本心からの言葉でもあった。もちろんトリニキだって、実を言えば妖怪たちが跋扈する学園やクラスには若干へどもどしている部分はある。だけど今の自分は教師で指導者なのだ。そのようにおのれの心を鼓舞してもいた。

嬉しそうな愛宕とは対照的に、相沢は何か失望したような表情でこちらを見ている。もちろん、そんな彼へのフォロワーも忘れない。

「相沢君。君だって妖怪の女の子たちに挟まれて、心細くて不安だったよね。見ての通り、先生だって人間だから、君の気持ちは何となく解るよ。だからその……それでも日直として先生に報告してくれたのは嬉しいな」

「ありがとうございます。礼を述べた相沢は照れたような表情を見せていた。」

「今宮先生に相談しようって話もあつたんです。ですが今宮先生にはちよつと話しづらくって……」

「そのための副担任なんだよ、先生は」

トリニキのこの言葉もまた、偽らざる本心からの言葉だったのだ。

※

「それです、ね鳥塚先生。僕たちが朝教室に入ったら、こんなものが——」

「これは……」

前置きが妙に長かったものの、三人は話の本题に入り込む事となった。トリニキを呼び込んだ張本人である相沢は、(愛宕や宮坂京子に睨まれている事もあるが)きちんとリーダーシップを見せてくれた。要するに自身のスマホを展開し、写真を見せてくれたのだ。

小さな液晶画面に映ったものを見たトリニキは思わず息を呑んだ。野柴珠彦が梅園六花に懸想し、それによつて行動を起こしてしまった事はトリニキも知っていた。だがまさかこんな事になるとは……

「相沢君に愛宕さん。改めて聞くけれど、君たちは高校生だよな？」

「そ、そうだけど……」

「うちも相沢君たちと同じピチピチの高校生でつせ。まあ、妖怪は人間とは年の取り方が違いますけれど、その辺は大目に見ておくれやす」

トリニキは二人の顔と画面とを交互に見やりながら、小さくため息をついた。

「犯人……が誰なのかはさておき、まさかこんな事をしでかす人がクラスの中にいるなんて。これじゃあまるで小学生の落書きじゃあないか」

画面に映し出されていたのは、黒板に描かれていた相合傘だった。好きな男女がいるという噂が立ち上った時に、誰かがおふざけで描くアレである。ご丁寧にピンク色のチョークで描かれており、傘の上のハートマークが妙に綺麗に仕上がっている。

その相合傘の中には、さも当然のように野柴と六花の名——厳密には苗字である——が記されていたのだ。

「ま、まあこれは本人たちの、野柴や梅園さんの目には触れなかったんですけどね」

呆れて硬直するトリニキの耳に、相沢の上ずった声が入り込んだ。

「僕たちだって、何とも幼稚ないたずら描きで楽しむ奴がクラスにいるんだなって呆れかえっている所なんですよ。僕としては、二人の目に入っていない事だし、そのまま消してうやむやにしまえば良いって思っていたんです。

「ただ、宮坂さんがこの落書きを目ざとく見つけたらしくって、それで……ややこしい話になってるんですよ」

「宮坂君がこの相合傘を見つけたのはしゃあない話やんか、相沢君」

事を荒立てたくないであろう相沢に対し、愛宕はちよつと呆れた様子で言葉を紡ぐ。

「米田先生に会うために、宮坂君が早うに登校しとるのは相沢君かて知ってるでっしやろう。それに、そうでのうても野柴君と梅園さんの告白劇の顛末は、皆知ってるねんから」

「あ、やっぱり告白したんだね、野柴君は……」

告白劇の言葉にトリニキは思わず反応していた。思いがけぬ言葉に愛宕も相沢も驚いていたようだが、気にせずトリニキは続けた。

「あ、まあ先生がその事を知ってるのは……まあ先生だからだと思ってくれるかな。その事について話していたらまた長くなるかもだし。

それで、結局どうなったの？」

「それについてはうちが教えましょ。良いですか鳥塚センス……」

愛宕が話そうとした丁度その時、トリニキたちの横を二人の生徒が通り過ぎていった。その生徒は一組の男女であり、ついでに言えばトリニキの受け持つクラスの生徒だった。

「成程なあ……学園の中も結構自販機が充実してるんだな。ありがとな、野柴」

「良いっすよ梅園さん。梅園さんに褒められるとなんか気恥ずかしいっす」

噂をすれば影とはよく言った物である。トリニキたちの横を通り過ぎていったのは、梅園六花と野柴珠彦の両名だったのだから。六花は紙パックのオーレを飲みつつ教室へと歩を進め、野柴はそれに追従する形だった。非常に仲が良さそうだった。恋人同士と言う甘やかな雰囲気というよりも、姐御と舎弟と言った関係性がしっくりきそうな雰囲気ではあるが。と言うか六花の方が野柴よりも十五か二十ほど若かったとも聞かし。

「ま、あの二人はあんな感じで落ち着いたみたいですよ」
愛宕が言い終えるや否や、授業開始のベルが鳴り響いたのであった。

アオハルには部活は必須つて当たり前だよなあ（威圧）

梅園六花と野柴珠彦の告白劇がどうなったのか。トリニキは当事者である野柴珠彦から顛末を聞き出す事に成功した。

結論から言うと、野柴は六花に完膚なきまでにフラれたのだという。だが、友達として一緒にいても構わないと言われたので、休み時間などは行動を共にするという塩梅であるらしい。野柴自身もそうした関係性には大いに納得しているらしい。六花への恋心にけじめをつけ、クラスメイトとして接しているのだそうだ。

「それで、野柴君と梅園さんが一緒にいたんだね」

「そうつす。梅園さんは僕が傍にいる事を認めてくれたつす」

そう言う野柴の頬は赤く火照っていた。しかしその表情は恋心で緩んでいるのではなく、相手への畏敬の念で染まっているようにも見えた。

トリニキはそんな野柴の顔を眺めながら、ぽつりと呟く。

「何というか、君の恋路がどうなるのか先生もちよつと心配していたんだよ。先生として、一人の男としてね。だけどまあ、健全な方向に落ち着いたと知って先生も安心したよ。梅園さんも根は良い子だと思うから」

「それに彼女、まだこの学園に不慣れっすからね。だから休み時間とかに俺が案内して
るっす」

やっぱり友達同士と言うよりも姐御と舎弟みたいな関係性じゃないか。トリニキは
思わず変なため息が漏れるのをこらえる事は出来なかつた。

「野柴君。仲が良いのは大いに結構なんだけれど、くれぐれも何かあつたら先生や身近
な大人に相談するんだよ」

沸き上がった罪悪感から、トリニキは僅かに声のトーンを落として野柴に告げた。

「……梅園さんがそんな事をする娘じゃあないと先生も思いたいけれど、君がパシリ扱
いされたり、お金を巻き上げられたりしてもいけないから」

「鳥塚先生。梅園さんはそんな品のない事は絶対しないっす」

老婆心から出たトリニキの言葉を、野柴は真正面から否定した。その瞳の澄み具合と
澁みも迷いもない口調に、トリニキはほんの少し救われたような気もしていたのだ。自
分は愚かな事を口にしてしまったのかもしれない。そのような悔悟の念と共に。

「梅園さんはむしろ、俺にご褒美つて事でお小遣いをくれるっす。でも……飲み物とか
菓子パンを買うよりもいつも多いんで、ちよつと申し訳ないんすけどね」

「それはそれで問題だからね野柴君」

トリニキはここで軽くため息をついたのだった。

※

帰りのホームルームでは、今宮先生が部活動について生徒らに改めて連絡していた。あやかし学園では部活動の入部は強制ではないが、学園の意向としては入部する事を推奨しているとの事である。

また、入部のタイミングは中等部一年の一学期——要は今のこの時期がメインではあるが、基本的には随時受け付けているとの事であった。ある部活を辞めて別の部活に入る転部、複数の部活を掛け持つ兼部も、部活の顧問や部員たちと話し合ったうえで認められているという話だ。

——つまるところは、自分が高校生だった時の部活動と同じなのかな。

今宮先生の話聞きながら、トリニキはぼんやりと思った。トリニキの通っていた高校でも、部活に入っている生徒が七割ほどを占めていた。中には帰宅部員もいたが、そう言った生徒は諸々の事情を抱えているか、そうでなければアルバイトや学外での活動に力を入れていたような気もする。

ほんの少しだけ学生気分浸って部活の事をあれこれ考えていたトリニキであるが、今のトリニキはあくまでも教師である。

実はトリニキも、職員会議で部活動に関わらねばならない事は伝えられていた。部活動を楽しむ側ではなく、生徒らを監督し指導する顧問教諭としての立場である事は言う

までもない。部活動は教育課程には含まれてはいないものの、学校教育の一環である。その事を一教師であるトリニキも知っていた。

「——そんな訳で、今週は仮入部期間だから、部活に入っている皆は新入生たちの案内や説明に忙しくなるかもしれないね。どうか無理のないように活動に励んでね」

今宮先生はそこまで言うのと、向かって右端の席の生徒に一枚のプリントを手渡した。梅園さんに渡してほしい。そんな事をその生徒に言い添えてから。

「それと梅園さん。君には入部届を渡しておくからね。気に入った部活があつたら入部届を顧問の先生に出すように。もちろん、部活選びで何か気になる事があれば、僕や鳥塚先生に遠慮なく相談してね」

「うん、解ったよ」

梅園六花は受け取ったプリントを見やり、短く返事を返した。敬語を使わない砕けた物言いではあつたが、スケバンである彼女にしては随分と大人しく可愛らしい言い方だった。

或いは、そう思うトリニキの感性は既に鈍っているのかもしれないが。

※

「鳥塚センセ、やっぱりき、部活って入らないといけない奴なのかい？」

入部届を携えた六花がトリニキに問いかけたのは、放課後が始まった直後の事だつ

た。それこそトリニキも、顧問になった園芸部に顔を出すべきか否かと考えていた所だったのだ。

だが、若干迷つて所在なさそうな六花の表情を見ると、彼女を放っておく事は出来そうになかった。もう既に鳥塚先生と指名が入ってしまったているし。

「今宮先生は確かに、あやかし学園では部活動の入部を推奨するって言っていたよね。やっぱり勉強だけじゃなくて部活に励む事で趣味とか打ち込めるものも見つかるし、何よりも内申が良くなるからね」

しまった。調子よく説明を続けていたトリニキであったが、おのれの失言に気付いて口を閉ざした。部活への入部が内申に響く。こんな事は学園の教師が生徒に面と向かつて言ってしまうっていい事では無い。たとえば、生徒自身がそのような事を思っていない。

と言うか、内申云々を口にしてしまったのは、やはり予備校教師だった時の癖が抜けていないからではないか。そんな考えもトリニキの中でよぎったのである。

「鳥塚先生」

「あ、ごめんね梅園さん。内申とかそんな事は忘れて欲しいんだ」

六花に呼びかけられたトリニキは、口早に彼女に語り掛けた。

「べ、別にだね、部活に入る事は強制じゃあないんだよ。あくまでも、その……楽しいし

メリツトもあるかもしれないってだけでね。

だからね、入りたい部活が無かったり、面白いと思わないのに無理に入る必要はないって事だよ。特に梅園さんは……」

そこまで言って、トリニキは六花の全体像をさつと眺めた。六花の家庭環境は幾分複雑だし、弟妹達も幼稚園か保育園に通う程に幼い。メイドさんらしき妖怪は要るにはいたが、やはり雇われた他妖《たにん》と姉であれば幼子たちも懐き度合いは違うだろうし。

「梅園さんも忙しいだろうしさ」

「……いいや。アタシは部活に入るよ。鳥塚先生の言った事は一理あるし、アタシもアタシで出来るだけ品行方正にやっておかないといけないからね」

品行方正って……スケバンやっておきながらそんな事も考えていたのか。トリニキは思わずツツコミを入れたくなったのだが、トリニキ自身がツツコミを入れる事は叶わなかった。

未だに教室にいた一人の女子生徒が、くすくすと笑いながらこちらににじり寄ってきたからである。

男子と見まがうほどに堂々と、それでいて優美な足取りで近寄って来るのは、狐娘の宮坂京子その妖《ひと》だったのだ。

トリニキ、美少女の間に挟まれる（ド健全）

「品行方正に学生生活を送るだって。梅園さん、君がそんな事を思っていたなんて。ふふ」

「何がおかしいんだい、宮坂さん」

やや気取った様子で微笑む宮坂京子に対し、梅園六花は静かに問いかける。憤慨の念は無いが、明らかに女子生徒に対して呼びかける様な声音だった。

もちろん、京子は女子生徒である事には変わりはない。しかし、多くの女子生徒は彼女をあたかも男子生徒であるように扱う事が多かったのだ。宮坂京子がそれを望んでいるのかどうかは別問題として、だ。

トリニキもまた、そうした女子生徒たちの振る舞いが自然な物だと思い始めていた。だからこそ、他の女子たちとは異なり京子を一人の少女と見做す六花の姿に面食らってしまったのである。

無論、面食らってばかりでは教師としてはよろしくない事は解っているはずなのだが。

「いやはや失礼したね。ちよつと野暮用があつて教室に残っていたんだけど、鳥塚先生

と梅園さんが何か話し込んでいるからどうしたんだろうと思つて近づいてみたんだ。そうしたら、梅園さんが品行方正つて言っているのが聞こえて、それで思わず……」

「それも風紀委員長のお仕事つてやつなのかい。それはまたご苦労なこつた、宮坂のお嬢さん」

そう言つた六花の口許にも笑みが浮かんでいる。今度ははつきりと、京子をお嬢さんと呼んだのがトリニキの耳にも聞こえていた。京子の白い面には相変わらず密やかな笑みが浮かんではいる。だが……笑みの仮面の裏で表情を引きつらせているように思えてならなかつた。

僕としても、編入生である君が学園に馴染んでいるかどうかは気になつていたからね——ややあつてから京子の口から出てきたのは、何とも当たり障りのない言葉だつた。

「でもそれも僕の杞憂だつたみたいだけだね。編入して早々に野柴君とオトモダチになつたみたいだし、鳥塚先生とも随分打ち解けているみたいだし……」

そう言つて目を細める宮坂京子の笑みが、トリニキには何とも恐ろしかつた。嫉妬深いのは何も女子だけではない事は知っている。だがそれでも、笑みの裏に隠れる怪気の色に、トリニキは幸か不幸か気付いてしまったのだ。相手が妖狐の血を引き、尚且つ整つた容貌の少女であるから一層恐ろしげに見えたのかもしれない。

「見ての通り、アタシは鳥塚先生に部活の事について相談していたんだよ。まあ、意見は

聞いても最終的にどうするかはこのアタシが決めるんだけど」

京子の秘めた感情に気付いているのかいないのか、六花はあっけらかんとした様子でそう言った。それから純粋な光を宿す翠眼をぐるりと動かして、京子の方に視線を向けた。

「ああそうだ宮坂さん。風紀委員長様の意見も参考がてらに聞いてみようかな。あんたは何の部活に入っているんだい？　もしかして、風紀委員とやらの活動が忙しいから帰宅部とか？」

「僕は文芸部に籍を置いているんだ。一応はね」

最後の一言に首をかしげる六花を、京子はさも得意げに見下ろしていた。

「所謂幽霊部員ってやつなんだ。もちろん、部内で大切な節目の時には顔を出すようにしているよ。」

「……ただその……小説や詩歌と言うのは芸術なんだ。量産品のように、或いは公園の四阿の落書きみたいにすぐに湧き出す物じゃあない。無理に生み出そうとしても、きちんとした物は出てこないんだよ」

「……成程な。要はネタ切れでスランプを起こしたから執筆できないって事か」

「ちよ、梅園さん！　もっと言い方を考えてあげて」

ド直球の六花の言葉に、トリニキも慌てて彼女にツツコミを入れた。その通りである

事には変わりないのだろうが、もうちよつとやんわりと言えば良いのではとは思っていた。スケバンである六花にそれを求める事自体が愚かしい事かもしれないが。

「部活に入っているというステイタスと、私生活の両立を図りたいのであれば、幽霊部員と言う選択もあるからね。」

それじゃあ、僕はそろそろお暇するよ。ごきげんよう」

幽霊部員と言う第三の選択肢を提示した宮坂京子は、そのままトリニキたちに背を向けて教室を後にした。かすかな声で歌を口ずさみながら。聞き覚えのある節回しであるが、彼女の口から出るのは日本語ではなかった。ある意味京子らしいと、トリニキはしかし納得してはいいたのだが。彼女は理数系は苦手だったのだが、国語や英語はほぼ満点だったそうだから。

「鱒なんて歌いながら立ち去っていくなんて、つくづく宮坂さんは気取ってるなあ」

「あ、あれって鱒だったの?」

ぼそつと呟いた六花に、トリニキは思わず問いかけた。シューベルトの鱒ならばトリニキも知っている。遠い昔の事であるが、音楽の授業で聞いた事がある。お洒落な鱒が夏の川を泳ぐ。邦訳ではそんな歌であると教わったのだ。もつとも——そんな牧歌的な内容ではない事は大人になってから知ったのだが。

夏の川を泳ぐ鱒を観察していたら、狡猾な釣り人に鱒は釣り上げられてしまった。そ

れを見た私は一人で憤慨する——字義通りの内容と言うのはそのような物に過ぎない。しかし鱒の歌には実は寓意が込められている。無防備で無垢な乙女は、狡猾な男に用心せよ。さもなければ捕まり、血を流す事になるのだ。輝く川を泳いでいた鱒のように。

トリニキがこの寓意を知ったのは大学を出てからの事であったが、衝撃的な話だというのが率直な感想だった。と言うよりも、そんな意味が込められている歌を無邪気なキッズたちに教育の一環で教えていたとは恐れ入る。

その鱒を宮坂京子がさも楽しげに口ずさんでいる。その事実をどのように解釈すればいいのかとトリニキは思っていたのだ。宮坂京子が鱒の歌について詳しく知っているのかどうかは定かではない。だが——かつて彼女は男たちに拉致され、それがきっかけで変わってしまったという。それだけはトリニキも知っていた。

何も知らないで、曲の雰囲気だけで口ずさんでいるのであれば良いのだけれど。知った上で歌っていたとしたら、どんなに恐ろしい事だろうか……無言のまま、トリニキはそんな事を思い始めてもいた。

「どうしたのセンチ。ぼーっとしちゃって」

「あ、いや……懐かしい曲だったから、ちよつと昔の事を思い出しただけさ」

訝しげな様子で六花に問われ、トリニキは慌てて取り繕った。

「それにしても宮坂さんも、親切にアドバイスをしてくれたんだね……うん、もしかしたら気の利く彼女の事だ。梅園さんのご家庭の事とかも慮ってくれたのかもね。」

先生は教師だから表立って言う事は出来ないけれど、確かに幽霊部員と言うのも一つの選択肢ではあるよね。と言っても、入学してすぐに幽霊部員になるのはやっぱり——

「いいや鳥塚先生。アタシは入学したら幽霊部員なんかにはならないよ」

しどろもどろと言葉を紡ぐトリニキに対し、六花はすっぱりと言い放った。輝く翠眼はしっかとトリニキを見据えた上で。

「真面目に、充実した学校生活を送るようにつて叔父貴たちや春兄からアタシも言い含められているからさ。そりゃあアタシだって早く高校を出て、それで叔父貴の仕事を手伝いたいって思ってるよ。でも今は、そんな事を考えなくて良いって言ってくれてるしそれに——宮坂さんの誘導に乗るのも何か癪だったからさ」

「……」

目をすがめた六花の姿に、トリニキは言葉が出てこなかった。宮坂さんと言った六花の眼差しは鋭かった。何より、京子の言葉を誘導であるとは見抜いていたとは。

「あー、安心してくれよ鳥塚センセ。別にさ、アタシだって宮坂さんとバチボコやり合うつもりなんて無いさ。向こうは折に触れてアタシに突つかかろうとチャンスを窺って

いるみたいだけど、アタシから見たら、小鳥みたいにか弱いお嬢様に過ぎないんだからさ。しかも半妖だし。そんなのを捕まえていびり倒すなんて、それこそ道理に背く事なんじゃないのかい？」

トリニキが微妙な相槌を打っていると、六花はにわかには表情を緩め、呟くような調子で言葉を言い足した。

「それにね鳥塚センセ。それこそ野柴君なんぞは宮坂さんの事をあれこれ心配しているみたいでさ。これまでの……事件に巻き込まれる前の無邪気な女の子に戻って欲しいとあいつは思っているらしいんだ。」

気持ちは解らんでもないが、愚かしい話だよ——喪つたものを取り戻す事は出来ないし、変わってしまったものは元には戻らないんだからさ。喪つたり変わってしまった事に折り合いを付けて生きていく事は出来るけれどね」

さてと。六花はそう言うのと、勢いよく立ち上がった。椅子が後ろに引き下げられるけたたましい音が、がらんとした教室の中によく響く。

「何か色々あったけどさ、相談に乗ってくれてありがと。早速だけどアタシは部活の見学にしやれ込むよ」

制服姿だと都合が悪いから、体操着に着替える。そう言つて立ち去る六花の姿をトリニキは手を振りつつ見送つた。

六花が何処の部活に見学に行くのか、何処を本命だと思っているのか。その事を聞きそびれたのに気付いたのは、六花が教室を出た後の事だった。

ニキとスケバンと入部届

着替えると言つて教室を後にした六花を見送つたトリニキは、その足で園芸部の部室に向かった。私立の中高一貫校と言う事もあつてか、部室棟も中々に立派な物である。

トリニキの母校にも部室棟はあるにはあつた。だが簡素な造りのものに過ぎず、それこそ安アパートの集合体のような物だつたのだ。

あやかし学園のそれは、トリニキの母校である高校どころか、大学の敷地内にあつた物よりも立派でしつかりとした作りである。それこそちよつとしたデザイナーズマンションのようなやつた。

園芸部はこの中を根城にしているのか。トリニキは生唾を飲み、意を決して部室棟へと足を踏み入れた。大の大人でありつつも、少しだけ気後れしてしまつていたので。

「初めまして鳥塚先生。鳥塚先生が、今年からこの園芸部の顧問になつてくださるんですね。あ、私は堀内桜花と申します。高等部二年で、現在は園芸部の部長をしております」

「堀内さんだね。ご丁寧にありがとう。言うて僕は副顧問になるけれど……よろしくね」

部室内にいた生徒はわずか三名だった。男子生徒が一人と女子生徒が二人である。その三人の中で、最年長であろう女子生徒が、こうして園芸部を代表してトリニキに自己紹介してくれたのだった。

桜花の動きにつられ、思わず握手まで交わしてしまった。堀内桜花は見た所普通の人間とほとんど変わらないように見えた。しかし、極端に体温が低いらしく握った手の平はやけにひんやりとしていた。それから、用心深くカーディガンを着込む袖の合間から、産毛代わりに生えている緑色のものがちらりと見えたのだ。

結局のところ、桜花も純粹な人間では無くて半妖であった。母親に当たるのが桜の精であるとの事。であれば園芸部にいるのもおかしい話ではないかと、トリニキは密かに納得もした。

「鳥塚先生は、確か珍しい経歴をお持ちと言う事でしたよね。受け持つ学年は違いますが、私たちの間でも有名でして……」

「確か、鳥塚先生って元々はサラリーマンだったんだよね！」

ひっそりと微笑む桜花に続き、もう一人の女子生徒が無邪気な様子で言い放つ。妖狐であるその少女は、狐色という狐狐そのものの尻尾を左右に揺らしていた。

「厳密には予備校の講師だったんだ。まあ、お給料をもらって働いていたから、サラリーマンには違いないけれど」

でも確かに、珍しい経歴なのかもしれないね。どんぐり眼でこちらを見つめる妖狐の少女や、小ぢんまりと座る人間の男子生徒を見やりながらトリニキは呟いた。教師の多くは、大学ないし大学院を出てすぐに教師になるという事なのだから。もちろん社会人経験のある教師もいるにはいるが、全体としては少数派であるらしい。

「それに鳥塚先生の御実家は、術者を輩出なさっている家系でもありましたよね。私、そちら方面でのバイトも嗜んでおりまして、そこでもお話を聞いた事がありました」

「いやはや、術者として優秀なのは両親や兄たちですよ。僕にはそう言う才能は無かったので、塾講師として生計を立てていたのです」

そこまで言ってから、トリニキはハツとして口をつぐんだ。またしても大人の事情を子供たちに話そうとする悪癖が首をもたげた事に気付いたからだ。

この癖は予備校講師だった頃の癖でもある。当時は悪癖だとは思わなかった理由は二つある。トリニキも若かったし、相手が浪人生だったからだ。浪人生は大学進学を心に決めている者たちであり、少なくともこの学園に通う生徒らよりもオトナだった。だからむしろ、トリニキの雑談は役に立つとすら言われていたのだ。

だが、あやかし学園には小学校から上がって来たばかりの子供も在籍しているのだ。若い子は無邪気に子供の世界を楽しんでほしい。そんな風にトリニキは思い始めてもいたからこそ、大人の事情を話す事は悪癖であると思ひ始めてもいたのだ。

「先生になる前の話はさておき、僕も大学では生物を先行していたからね。植物専門では無かったけれど、園芸部の皆に役に立てたら嬉しいな」

「先生。園芸部は幽霊部員もいますし、ゆるーくまったり出来れば僕はそれで充分です」「やっぱり鳥塚先生も園芸部とか生物部出身だったんですかー?」

「ううん、先生はバトミントン部だったよ。中学にはバトミントンは無かったから、テニス部だったんだけどね」

「テニス部だったら先生もモテモテだったとか?」

「ははは、流石にそんな事は無いってば」

いつしかトリニキは園芸部員に囲まれ、取り留めも無い会話を交わしていたのだった。春の夕暮れ時と言う事もあり、和やかで牧歌的なひとときだった。

※

四人だけでの和やかな空気に終止符をもたらししたのは、やはり外からやってきた存在によるものだった。と言っても、ドア越しから聞こえる足音と、ドアをノックする音しか耳にしていないから、誰なのかは解らないが。

誰かしら。不思議そうに小首をかしげたのは部長の桜花である。

「糸山さんたち、とは違うわね。あの子たちだったらノックなんてせずに入って来るもの」

糸山さん、と言うのは園芸部に所属している幽霊部員の一人である。名前から勘の良い人は察するかもしれないが、絡新婦の少女である。他には夜雀とか蠅螂の妖怪などが幽霊部員として存在するらしい。

「はいはい、どちら様ですか」

桜花は立ち上がり、少女ながらも何処か所帯じみた声音と所作でもって部室のドアを開けた。

「あつ……」

「うそ……」

「おや……」

開いたドアの向こう側にて仁王立ちする彼女を見たトリニキたちは、思わず声を漏らした。遠路はるばる(?) 園芸部に足を運んだのは、雷獣娘の梅園六花だったのだ。着替えてくるという文言通り、学園指定の体操着を上下しつかりと着込んでいる。左手に学生鞆ともう一つ大きめの袋を抱え込み、右手には入部届を携えていた。

「高等部一年の梅園六花だ。ええと、園芸部の拠点はここで良いんだよね?」

「ええ、こちらが園芸部の部室ですわ、梅園さん」

桜花は六花の乱入に恐れおののく事は無く、むしろ笑顔で彼女を迎え入れている。それから流れるように、桜花は自分が園芸部の部長である事を六花に伝えたのだ。穏やか

そんな堀内さんに粗雑な振る舞いをしないだろうか。トリニキは少し不安になったが、それは杞憂だった。六花は堀内桜花こそが、この部室のあるじであると認識したようであつたから。

やや改まつた様子で、六花は桜花に入部届を差し出す。だが桜花は僅かに首を振り、視線をトリニキに向けた。

「梅園さんも随分と気合が入っているわね……でも私も生徒だから、貴女の入部届を受け取つてもどうにもできないの。入部届なら鳥塚先生に渡すと良いわ。今年から園芸部の副顧問になってくださったそうだから」

「あ、確かにそうだったよ堀内先輩」

六花にしてはやや丁寧な口調でそう言うと、今度はトリニキの方に向き直つた。六花は人懐っこそうな、それでいて少し申し訳なさそうな笑みを浮かべ、迷わずトリニキに入部届を差し出したのだ。

「鳥塚先生。アタシは園芸部に入部するからさ。入部届を受け取つてくれよ」

「即断即決なんだね、梅園さん」

トリニキの言葉に、六花は笑顔のまま頷いた。

「叔父貴も若い頃は貸農園で稼いで財を成したつて言うからね。それにアタシ自身、植物とかも大好きだからさ。中庭の椿も綺麗なのが色々揃つて、本当に見ごたえがあつ

たよ。

実は着替えたら真つ先に部室に来ようと思つたんだ。だけど運動部の勧誘とか、アタシ自身を追つかけるアライグマの妖怪とかがいて、そいつらを受け流したり撒いたりしている間にこんな時間になつちまって……」

「良いんだよ梅園さん。先生たちは大丈夫だから」

六花の笑みが僅かに曇つたのを見たトリニキは、ひとまず大丈夫だと彼女に言つて聞かせた。

——かくして、梅園六花は園芸部の一員と相成つたのだ。この時彼女は用意していた折り畳み式のシャベルを組み立てて部員たちを驚かせたり、堀内部長からガチ勢だという事で有望だと見做されたりしたのだが、それはまた別の話である。

雷光ひらめく鬼退治

春分を過ぎたと言えども夜は訪れる。六花が辿る帰り道は既に夜の帳が降りていた。園芸部に入部する事となり下校時刻まで長居し、更に学園を出てからはスーパーに向かつて買い出しをしていたのだから。スーパーに出向いたのは、世話係である美咲から連絡を受けたためである。気恥ずかしくて表向きには言えないが、彼女の事は昔から姉のように慕っていた。

普通の女子高校生であればどうか定かではないが、六花は特段気負ったり畏れたりする事なく夜道を進んでいた。五感の鈍い人間であれば、夜道をぶらつくのは危険な行為なのかもしれない。

しかし六花は人間ではなく雷獣である。雷に縁深い雷獣は、電流にて周囲を探知する能力を具えているのだ。文字通りの第六感である。視覚や聴覚が利かない場所であっても電流探知で周囲の状況を見聞きする事が出来るし、何となれば視覚や聴覚を遮断して電流探知に徹する事もできる。

そんな訳であるから、六花は夜道を恐れる事は無かったのである。それに暗くなったとはいえまだ夜の八時を回った程度である。言う程遅い時間でも無いのだ。

「……？」

通り道にあつた公園の脇を通り抜けようとして、六花は歩を止めた。何やら禍々しい気配を感じ取り、そして何者か——恐らくは若い娘か少女であろう——の悲鳴と哀願を耳にしたからだ。

何かよろしくない者が公園に集い、よろしくない事が起きようとしている。そう思つた時には、六花の足は公園の入り口に向けられていた。

何が彼女を突き動かしたのか？ 貴族の次期当主としての矜持か、はたまたおのれの戦闘能力の高さへの自負だったのか？ 或いは単に、知らず知らずのうちに誰かに操られていただけだったのかもしれないが。

「へへへへっ。お嬢ちゃん、可愛いなあ。ああ、その怯える顔もたまんねえな」

「いや、やめて、放して……」

「大丈夫だつてえー。一晩だけさ、俺たちの遊びに付き合つてくれれば解放してやるつて。良い子にしていたら痛い事なんぞなんも無いんだからさ。ま、その間に俺らの事に気に入ってくれたら、また遊びに来てくれても良いんだけどな」

公園の薄暗がりで繰り広げられる光景を前に、六花の瞳が野良猫のようにぐつとすばまった。

牛鬼やら狼の出来損ないのような妖怪の男たちが、一人の妖怪の少女に群がっていた

のだ。男らの数は十数人ほどか。少女の方は丸つきり子供で、もしかしくなくても六花よりも年下に見えた。ほっそりとした身体に容赦なく食い込む荒縄と、破かれて裂けたワンピースの襟元から覗く生白い肌が痛々しい。

——こいつら！

六花の心中でひらめいたのは、高純度の義憤だった。

悪逆なる輩に正義の鉄槌を。ここで六花は、我こそが雷神の遣いである雷獣であるという事を強く意識したのだ。雷神は天の裁判官として、悪に雷撃を墜とす存在である。と。

「何やつとんじや貴様らー！」

チンピラ顔負けの恫喝に、牛鬼たちの注意は少女から六花の方にシフトしてくれた。彼らはもちろん、闖入者の姿にぎよつとした様子を見せてはいる。だがすぐに、相手が女、それもセーラー服姿の少女である事に気付くや否や、弛緩したような笑みを浮かべたのだった。

「何つて、見ての通り夜遊びさ。ま、お嬢ちゃんにしてみれば悪い遊びになるのかもしれないけどね」

「おうおうお嬢ちゃん。もしかして正義のヒロイン気取りかい？ だつたらやめときなつて。俺たち強いからさ、逆らつたら痛い目に遭うのがオチだつて」

「いやさ、折角なら君も一緒に遊ぼうよ？　よく見れば顔も身体つきも良いしさ……本当は、その小娘よりも君の方がぐつとくるし」

「……………」

ふざけた事を抜かす面々を前に、六花はしばし俯いていた。無論怖がつていたわけでは無い。叔父を見習って大暴れしようと思っていた六花だったのだが、恫喝の直後に六花のなけなしの理性が訴えかけたのだ。とりあえず通報しよう、と。

もしかすると、前にトリニキを救出したときに、妖怪警察たちに凶らずも顔を合わせる事になってしまったからなのかもしれない。

そんな訳で、六花が俯いていたのは単にスマホを弄っていたからに過ぎない。

え。スマホの画面を見やった六花は僅かに驚いた。スマホは圏外であり、だからなのか電話繋がらなかったのだ。

奇妙だと思つて公園の内部を探ってみる。そこで彼女は、この公園が結界で外部と隔絶されている事を悟った。結界が貼られた理由、結界術の使い手について考えなどしない。悪事を隠蔽するために結界術を使うなどと言う事は、犯罪者であればまず考える事だから。

従つて、六花は知らず知らずのうちに閉じ込められた事になるのだ。六花自身は、戦闘能力こそ高いものの結界術の心得は無い。結界を展開する事も、展開された結界を解

除する事もできないのだ。

しかしそれでも、六花の心は恐怖に冒される事は無かった。結界の解除が出来ずとも、術者そのものを打ち倒せば結界は解除されると知っていたからだ。それに合法的に暴れられる。少女を助けるといふ大義と、野蛮な妖怪連中を相手に力を振るう事が出来るという愉悅——知らず知らずのうちに、六花の身体は歓喜に打ち震えていたのだ。

「はははっ。そうか、あんたらいかにも遊び好きだもんなあ」

スマホをしまった六花は、顔を上げるや否やそう言った。男たちの様子に注意を払いながら、荷物をそつと足許に置く。購入した食材が野菜類で良かったと思いつつながら。これが卵だとかお惣菜だったら目も当てられない事態になる訳だし。

それから手首に巻いている護符を弄る。数珠のような護符が姿を変え、釘バットが顕現した。アステリオス——雷光の名を、そして幽閉されていた牛頭の王子の名を冠するそれは、まさしく六花の得物でもある。

「良いぜ、アタシもあんたらの遊びに付き合つてやるよ——アタシの遊びに付き合いきれるかどうか、それだけが心配だけだっ！」

釘バットを構えた六花は、高笑いと共に牛鬼たちに向かつていった。きつとケダモノのような笑みを浮かべているのだろう。そのような考えがぼんやりと浮かんだ。

※

「クソっ……何て強きなんだ……」

十数分後。地面に転がされた牛鬼はそう言い捨てると、恨めしそうな視線を六花に向けたまま倒れ伏した。そしてこれが、六花が遊びで打ち負かした妖怪男の最後の一人だったのだ。

ほほほほ無傷で勝利を掴んだ六花だが、その面には既に興奮の色は無い。雷獣の性ゆえに向かってくる相手をのしている間は確かに興奮してはいたし、ある種の楽しみがあるにはあった。だが途中から、疑問と違和感が脳裏に沸き上がり、六花はそれに囚われてしまったのだ。無論それは最後の一人を平らげた所で解消されてはいない。むしろ膨れ上がっているくらいだ。

目をすがめ、公園の周囲を今再び探知する。結界はまだ解除されていなかった。

もちろん、強大な力を持つ妖怪であれば、使い手が倒されてから結界が解除されるまでにタイムラグが発生する事もあるという。しかし今回はそのケースでは無かろう。少女をかどわかし無体を働こうとした妖怪共は、下級妖怪に過ぎない六花に打ち負かされる程の力量しかなかったのだから。

こうしておびき出された事そのものが罠である。六花はそうのように考え始めていた。すなわち黒幕はまだここにいるのだ。結界術の真の使い手であり、この茶番劇の脚本家は。

「……あのう」

か細い声が六花の耳の届く。縛り上げられて転がっている少女が六花に呼びかけていたのだ。愛らしく、さも無害そうなその面には控えめな笑みが広がっている。

「助けてくれてありがとうございます。この妖《ひと》たちは全然知らない妖《ひと》なんですけれど、急に私の事を捕まえて、それで……」

こうなつたに至る境遇らしきものを、聞かれもしないのに少女は喋り出していった。六花は醒めた目でそれを眺めていた。少女らしきナニカの力を推し量っている所でもあつたし、このナニカの言葉が台本通りの台詞をなぞっているだけだと解っていたからだ。

そんな六花の考えを知つてか知らずか、少女は言葉を続けた。

「お姉さん。折角なのでこの縄を解いてください。このままだったら身動きが出来ないので」

少女は身をくねらせ、さも不自由そうな姿を六花に見せていた。最初に見た時のように、憐れだという感情はもはやなかった。少女は、いや少女に擬態したナニカこそが、六花をこの公園に閉じ込めた本人であると既に解っていたからだ。

「縄を解けだつて？ その前に公園に張つた結界を解きな」

六花の言葉に、少女の動きがぴたりと止まった。琥珀色の瞳には、驚きと関心の色が

混じっている。

「ていうかき、アタシだつて忙しいんだよ。そんなときに、テメエの都合で狐芝居に付き合わせるとはどういった見なんだよ。しかもご丁寧に可愛い女の子なんぞに化けやがつてさ」

宮坂京子の時みたいにな——ふいにそんな言葉が浮かんできたのだが、六花はそこまでは口にしなかった。

黙つて話を聞いていた少女は、身を震わせて笑つていた。その姿は未だに可憐な少女の体裁を保っているが、その表情はもはやいたいけな少女のそれではない。

「ははは、無理やり付き合わされたみたいなの言いだけど、君だつて随分とノリノリで遊びとやらに興じていたじゃあないか。そうだろう、雷獣の梅園六花さん」

やけに男性的な物言いで言い放つたかと思うと、縛り上げられていた少女の姿がゆるゆると変質していった。子供の頃に何度も見たクレイアニメのように。

数秒後、少女に擬態していたナニカはその本性を六花に晒していた。

それは六花よりも三つ四つばかり年長の、妖狐の青年だった。男性向けのチャイナ服に身を包んだその体軀はややずんぐりとしており、腰から伸びるのは銀黒色の毛並みで、しかも四本もある。

彼は難なく立ち上がると、のつぺりとした面に笑みを浮かべて六花を見つめていた。

粘着質で何となく癩に障る笑顔である。

「それにしても大したものだね。途中からとはいえ、ちやんとこれが虚構であると読み取れるなんてさ」

虚構。四尾の青年は事もなげにそう言った。既に公園には倒れ伏す妖怪連中はおらず、ただただそこには散りかけた椿の花や不自然に裂けた木の枝などが散らばっているだけなのだから。

化かされたのだと、ここで六花は悟った。

闇夜に妖狐は暗躍す——雷獣編

「僕の事を最後まで憐れな女の子だと思い込んで手を伸ばしたら、その時には妖気を吸い取って眠らせてあげようと思っていたんだけどね……梅園さん、やはり君は見所のある子みたいだね」

得意げに、そして何処かねちっこい口調で妖狐の男はそんな事をのたまった。背後で怪しく四尾をくねらせながら。

あ、でも——射抜くような六花の視線に気づくと、わざとらしく笑みを作って言い添えた。

「でも安心して。仮に君を眠らせたとしても、僕は変な事なんて何もしないからさ。ベンチの上に寝かせて、君が眠っている間は悪心を抱く輩が手出しできないようにちよつとした術をかけておこうと思つたんだ。

美しい物を穢したい、高根の花を手折つた挙句貶めて蹂躪したい。世の中にはそんな嗜好があるみたいだけど、僕にはさっぱり理解できない領域だからね」

「……そう言うあんたの考えも、アタシにやあさっぱり理解できんがな」

妖狐の男に対して、六花は思わずそんな事を口にしてしまっていた。

それは本来であれば非常に危険な行為である事は、もちろん六花とて解っている。相手がこちらに対してどのような事を仕掛けてくるのか定かではないのだから。

しかも向こうは四尾であり、あまつさえ結界術や幻惑の術を苦も無く並行して操っていた。四尾と言うのは既に下級妖怪などではない。中級妖怪クラスの強さを保持している事になる。

いずれにせよ、六花では太刀打ちできない相手なのだ。六花は二尾しかなく、しかも結界術をはじめとした妖術に対抗する術を持たないのだから。

しかしそうして状況を把握しつつも、六花の口は更に思った事を口にするばかりだった。

「あ、いやアタシにも一っだけ理解できた事はある。あんたがとんでもないド変態だって事だな。女装男子が許されるのは小学生までなんだよ。しかもあんなえげつないシチュエーションを練りやがって……この変態が」

「変態とはとんでもないご挨拶だなあ」

二度にわたり変態と呼ばれた四尾の男であるが、その面にはうつすらと笑みが残るばかりだった。のみならず、気取った様子で立てた人差し指を左右に振っている。

「梅園さん。君みたいな可愛らしいお嬢様が、そう何度も変態だなんていう物じゃあないよ。君自身の……君の裡に流れる貴種の血を、そんなしようもない言動で貶めていた

ら洒落にならないでしょ。

それに僕にも塩原玉緒って名前があるんだよ。名乗るのがちよつと遅れちゃったけれど。ふふふ、名前で気付いたかもしれないけれど、僕は玉藻御前の末裔なんだ」

「そんな——」

玉藻御前の末裔。さらりと付け足された塩原玉緒の言葉に六花は瞠目した。玉藻御前が三大悪妖怪の一角として数えられ、しかも他の二体——他の二体は酒吞童子と大嶽丸であり、どちらも鬼神である——よりも抜きんでた力を持つ大妖怪だったとも言われている。無論その事は、貴族妖怪の生まれである六花はきちんと知っていた。

だが、玉藻御前の末裔はそうやすやすとお目にかかれる存在では無いはずだ。このカンスイ地方においては、玉藻御前の末裔は存在しないとされている。それはやはり稲荷の眷属たちがカンスイでは幅を利かせているからだ。

玉藻御前の正体を見破り、討伐軍に力を貸したのは陰陽師の安倍何某である。だが、彼の先祖は稲荷の神使たる葛の葉狐だったという。要するに、玉藻御前は稲荷の遣いたる狐との鬭いに敗北した存在であるのだ。

そう言う事もあり、玉藻御前の子孫もまた、敵対者である稲荷たちを恐れ、この土地に近寄らないのも無理からぬ話だろう。それこそ、大陸なりなんなりに出た方が、彼らも正体を隠さずに悠々自適の暮らしを過ごす事もできるであろうし。

さりとして、玉緒の言葉は単なる嘘と切り捨てる事は、六花には出来なかつた。

六花を巧妙に騙した変化術。今もなお構築されている結界術。そして、背後で揺れる四尾から放出される濃密な妖気。どれを取っても普通の妖狐とは遠くかけ離れた代物だつた。

「……何が目的だ？ アタシに、何の用がある、んだ……？」

問いかける六花の声は知らず知らずのうちに上ずつて掠れていた。

罠に誘い出され、囚われの身になつた獲物なのだ。六花は今の状況をそのように解釈していた。金目当てと言うよりも六花の身体目当てなのだろう、と。

先程妖狐は無防備な女の子に手出しはしないという旨の事を口走つていた気がするが、そんな言葉ははなから信用してはいない。相手は狐芝居で騙したうえで結界に六花を閉じ込めたような手合いなのだから。

色欲の対象として目を付けられ、狙われた事も実は過去にはあつた。それとは別に、物理的な意味での捕食対象と見做されているのではないか。そのような懸念も六花の心中にはあつた。それは相手が妖狐であり、尚且つ自分が雷獣であるが故の懸念だつたのかもしれない。妖狐の中には血肉を好む残酷な個体がいるとも言われている、何より雷獣は何かと捕食されてきた過去があるからだ。

とはいえ、色欲にしろ食欲にしろ目を付けられた時点で確な事にならないのは確定し

ている。相手が自分よりも明らかに強い妖怪なのだから。

だからこそ、六花は抜け目なく塩原玉緒の表情を観察していたのだ。見る限り、塩原玉緒は穏やかな笑みをたたえて六花を見つめているだけだった。細められているその瞳には、色への高ぶりも血肉に対する渴望も特に見当たらない。変化上手・芝居上手の化け狐の事だから、それらを隠して澄ましているだけなのかもしれないが。

「そんなに怖い顔をしないで。僕は単に、君の事を下調べしていただけなんだからさ。僕のご主人様が、君の事を知りたがっているからね。まあその……今回のお芝居は、僕自身も梅園さんの力量を知りたくて、独断でやっちゃった事なんだけど。でも、梅園さんはこの町に来たばかりでしょ。ご主人様にとって安全な存在なのか、その辺は気になったし」

「何っ、お前はご主人様とやらに仕える身分なのか!」

玉緒の言葉に六花は思わず声を上げた。この得体の知れない力を保有する四尾を従えるご主人様がいらっしゃるなんて。強い驚きが、先程まで感じていた恐怖や警戒心を一瞬とはいえ押し流したのだった。

「僕のご主人様は、君の知っている妖《ひと》だと言っておくよ」

口早に玉緒が言うのを聞きながら、六花は二つの事に気が付いた。公園に巡らされていた結界が解除された事と、塩原玉緒の身体から見覚えのある妖気が漂っていた事だ。

その妖気のあるじこそが彼の言うご主人様なのだろう。

「さて、結界は解いてあげたからね。梅園さんもさつきからずつと帰りがついていたもんね。夜道や不審者に気を付けて帰るんだよ。何ならちよつとした魔除けの術をかけておいてあげようか？」

「言われなくてもアタシは帰るよ。それと術とかは余計なお世話だからな」

六花はそう言うのと、置きっぱなしにしていた鞆と荷物を引つ掴み、塩原玉緒に背を向けて公園を後にした。一度だけ振り返ると、玉緒は仔狐の姿に変化してそのまま何処かへ走り去ったのだ。

塩原玉緒から感じ取った妖気は宮坂京子のものであった。ぼんやりとした頭の中で、その考えだけがしつかりと残っていた。

妖狐は闇夜に暗躍す——教師編

さて場所は変わってハゴロモ町東部（あやかし学園はハゴロモ町の中心部、やや西寄りに位置するのだ）。

夜風の涼しさに頬を引き締めながら、トリニキは歩を進めていた。いくら遅い時間であるが、教師という業務を考えれば致し方ない話だ。ましてや、トリニキは仕事終わりに喫茶店で油を売っていたのだから。

生徒を導く重大な任務を担っている教師は、しかしだからこそ時に息抜きが必要なのだ。

さて喫茶店での一服も満喫したトリニキは、帰路に向かおうと歩き始めていた。しかし、街路樹と歩道を隔てる小さな塀に腰かける人影を見るや、ぎよつとして足を止めたのだった。

トリニキが見つけたのは一人の妖狐だった。何者なのか定かではないが、ただ者ではない事だけは判った。妖狐の青年の背後では、見事な四尾が伸びあがって揺れていたのだから。

妖狐は妖力を蓄えるごとに尻尾の数が増えていき、最終的には九尾に至るといふ。し

かし実際には、二尾でもそこその実力者と見做され、三尾以上ではもはや強者に分類されてしまう。それが人間と、闘いの場に身を置かぬ一般妖怪たちの共通認識だった。

だからこそ、四尾の青年を前にトリニキは呆気に取られてしまったのだ。

四尾とは不似合いなほどに若々しく、あどけなさすら残る件の青年は、その手に何かを乗せて、もう一方の手指でしきりに弄り回してもあそんでいた。もてあそばれている物体は丸っこく、鮮やかな緋色だった。なまじ青年の手指や顔が白いから、緋色の鮮やかさが一層際立つのだ。

「——っ！」

一体何をこねくり回しているのだろうか。もしやあれは引きずり出された何かの臓物ではなからうか？ そのような考えが膨れ上がり、トリニキの息を詰まらせた。妖狐の青年が、トリニキの姿に気付いたのは丁度その時だった。

「こんばんは、先生。一体どうされたんですか。僕の事を先程から眺めていたようですよ」

「そ、それは——」

しれっと先生と呼ばれた事は気にせず、トリニキは青年の手中にある物を指し示した。

八重樫ですよ。青年は事もなげに告げた。

「近所の公園で咲いていたやつなんですよ。あ、でも落ちていたものを拾っただけに過ぎません。なのでご安心を」

名も知らぬ四尾の青年はそう言つて、それから静かに微笑んだ。礼儀正しい態度だと思いつつ、トリニキは注意深く視線を下にスライドさせた。

確かに、彼が手にしているのは緋色の八重椿だった。青年の手の中に収まつてはいるが、椿にしてはかなり大きい。いびつな変異によつて雄しべが花弁に置き換わつたそれは、子供が複数の花を押し込んで一つの花に仕立て上げたような、何ともグロテスクな見た目である。

しかも目を惹く鮮やかな緋色である。まくれ上がった臍物に見えたのも致し方ないだろう。トリニキは自己完結気味にそう思った。

「……それにしても、ここまで見事に咲き誇つていても、結局の所は朽ちてしまふんですよ。先生も理不尽だと思いませんか？」

そんな事を言いつつも、青年は今再び手中の椿を弄っている。癒着しているはずの花弁を強引に引きちぎり、地面の上に放っているのがトリニキには見えた。

「花は散るからこそ美しいのだと、昔の人も言っているんだけどなあ……それにね、そもそも花が咲くのはあくまでも実を付けるために必要な事なんだ。多くの花は散つた後にきちんと実を付けるから、理不尽でも何でもないと僕は思うんだ。」

もつとも、今君が持つているような八重咲の花は、無理くり雄しべが花びらになるように改良されているから、話は別なんだけどね」

またしても余計な事を、しかもオツサン丸出しの感想を口にしてしまったな。花を弄ぶのをやめて耳を傾ける妖狐の青年を前に、トリニキは一人後悔していた。心の中では自分はまだ若者だと思っていたが、その感性は真なる若者とは違うのだ、と。

ところが、トリニキの心の動きとは裏腹に、妖狐の青年は興味深そうに笑うだけだった。

「興味深いお話を教えて頂いて感謝しております。いやはや、生物の先生らしいお言葉ですね」

「生物の先生って……君は僕の事を知ってるね？」

トリニキはここで、青年の名をまだ把握していない事を思い出した。こちらは知らずに相手が一方的に知っている。こうした状況はしかし、妖怪と接していると度々生じる事でもある。四尾の青年としてそう言う事なのだろう。そう思っていると、案の定青年はゆっくりと頷いた。

「僕は宮坂京子と言うお嬢様にお仕えしております、それで先生の事は知りました。あ、自己紹介が遅れましたね。僕は塩原玉緒と申します。見ての通り妖狐なのですが、玉藻御前の末裔でもあるんですよ」

「……僕は鳥塚二夫と言うんだ。鳥塚先生でも、親しみを込めてトリニキ先生でも、好きなように呼んでくれれば構わないよ」

トリニキはそう言うのと、うつすらと微笑み玉緒の方に手を差し出した。雷獣の少女と同じく、玉藻御前の末裔であるという玉緒の言葉に驚いてはいた。しかしトリニキはその驚きを押し隠し、ひとまず礼儀正しく振舞う事が出来たのだ。

もつとも、現時点では四尾の青年と雷獣の少女の衝撃的な出会いなど、トリニキは知る由も無いのだが。

「それで塩原君。一体僕に何の用があるのかな？」

問いかけるトリニキの言葉には、若干の鋭さが宿る。大人として、或いは術者の血を引く者として玉緒の事をわずかに警戒していたのだ。

「いえ、特に用はありません」

トリニキの鋭い視線を前に、玉緒は平然と言つてのけた。

「ただ……鳥塚先生がどんなお方なのか、直接確かめてみたいと思つただけに過ぎません。先生は新たにこの町にお越しになって、しかも僕のご主人様にも関わるのある方ですからね。」

ですが——善い先生のようなので安心しましたよ」

そう言うや否や、玉緒の周囲からゆるい風が沸き起こった。思わずトリニキは目をつ

ぶり、顔を庇うように腕を上げた。目をつぶる僅かな瞬間に、椿の花弁が緋色の欠片として舞い上がるのを見た気がした。

風が収まった頃には、玉緒の姿はもう無かった。彼がその場にいたあかしとして、バラバラになった八重椿の残骸が散らばっていただけである。

若狐たちの内緒話

「疲れたなあ……」

夜。入浴を終えて寝室に戻った宮坂京子は、眠りにつこうとベッドにそろりと入っていた。白い薄手のトレーナーのようなパジャマを羽織っただけの姿で、布団の中に入り込んでいた。四月初旬だから寝ていたらむしろ暑くなる時もあるくらいであるし、何より母が用意していたのがワンピースタイプのパジャマだったのが気に入らなかったのだ。昔みたいな可愛い女の子に戻ってくれるはず。母がそう思っているのが無性に腹立たしくて、だから京子はささやかな反抗としてこの姿で寝る事にしたのだ。

部屋着も京子なりに男物を用意しているつもりだ。二人もいる兄たちは妹である京子に相変わらず甘いし、兄らに頼らずとも男物の衣裳は服屋で調達する事は出来る。

それでも、何故か時には着る物に困る事がままあったのだ。服を棄てられている訳ではないが、洗濯に出されたりしてすぐには着れないと言った塩梅である。

それが母の仕業である事は京子も解っていた。女の子らしくないね。京子にそう告げるだけでは飽き足らず、そのような強硬手段まで取っているのだ。もしかしたら、そろそろ学ランでの登校する事にも何か言い出すのかもしれない。

あれこれ考えた京子は、もう本格的に寝に入ろうと思ひ始めていた。春先になると浮かれる若者が多いと言うが、神経が昂っているだけだから余計に疲れたり、憂鬱な気分になってしまふ事とてまあるのだ。

ましてや、今年は京子にとつても新しい事が多すぎた。何せ新任の副担任と編入生が同じクラスにいるのだ。どちらか片方だけならばまだ順応できるだろうが……いや、編入生だけでもお腹いっぱいだ。何せスケバンで、しかも新任教師とクラスメイトの妖狐を誑かしているんだから。純朴だった野柴珠彦は、今ではカルガモのように梅園六花にくつつくようになっていたのだ。二人は付き合っているわけでは無いというのだが、それが本当なのかどうかは判らない。

しかも、珠彦の方の付き合いの関係上、六花は自然と多くの男子と一緒にいる事もままあるようだし。

「……本当に、なんなのよ」

食いしばつた菌の間から出た言葉は、果たして何処に向けられたものなのか。京子でもそれは解らなかつた。男を惑わせながらも幸せそうな六花に向けたのか、自分を裏切つて六花になびいた珠彦に向けた物なのか。或いはフレンドリーさと馴れ馴れしさをはき違えているような鳥塚先生に向けた物なのかもしれないし、そうではなくてままならぬおのれに腹を立てていたのかも知れない。

京子の幼い心では、自分がどう思っているのかも判然としなかった。

「……もうお休みですか、ご主人様」

従者である塩原玉緒が戻ってきたのは、ちょうどその時だった。いつものように雨戸を閉めたはずの窓をすり抜けて、涼しい顔で京子のすぐ傍に彼は佇んでいた。

京子は軽く目を見開き、玉緒の姿を観察していた。だしぬけに戻ってきたという事に少し驚いてもいたし、彼の様子が普段とは違う事もすぐに気付いてしまった。か弱い少女であると思われがちな京子であるが、彼女もきちんと妖狐の血を受け継いでいる事には変わりない。

「戻ってきたのね、タマ。そろそろ私は寝ようと思っていた所だったんだけど、遅かったじゃない」

「……すみませんね、色々と僕も独自調査を行っております」

軽く毒づいてみるも、玉緒は困ったような笑みを浮かべて応じるだけだった。彼の身体にまわりつく妖気と匂いの主が誰であるか気付いた京子は、あからさまにため息をついて見せた。

「独自調査って、梅園さんに会いに行ったのね」

「気付かれてしまいましたか」

京子の問いかけに、玉緒は若干戸惑った様子を見せた。京子は目をすがめながら言葉

を重ねた。

「私だって妖狐の端くれだって事はあなたも知ってるでしょ。本当は半妖だけど……それでも鼻だって利くわ」

「……独断専横で彼女に接触したので今回は伏せておこうと思ったのですが、バレてしまつては仕方ないですね。拾った花でご主人様を誤魔化せるかと思いましたが、いやはややし訳ない」

言いながら、玉緒は懐から取り出した花をベッドサイドにそつと置いた。上品なピンク色の花びらが幾重にも重なった花である。確か椿か山茶花だったはずだ。春の初めの遠足などでよく見かける花だった事には変わりない。

それでどうだったの。上目遣い気味に玉緒をねめ上げ、京子は問いかける。

「興味深いお嬢さんだと僕は思ったかな。貴族の御令嬢と言う事もあつて、なかなかの実力者みたいだったからね……ああ、でもいじらしくて可愛い所もあつたんだよ。僕のことを怖がっていたみたいだけど、頑張つてその恐怖を押し隠した上で僕に向き合ってたんだからね」

いじらしくて可愛い。玉緒の言葉に京子は片方の眉を動かした。時代錯誤なスケバン姿の粗暴な雷獣娘を可愛いと評するだなんて……仄暗い感情が蠢くのを、京子はしっかりと感じていた。

「ご主人様。確かに彼女は僕を怖がってはいましたが、僕の方から何か手出した訳ではありませんのでご安心ください。まあ……彼女を試すつもりで少うし座興に付き合ってもらっただけですけどね」

「ただ会っただけで事ね。痛めつけたり……変な事はしなかったの」

京子が放った言葉は、思いがけぬほど鋭く、冷たい物だった。怖がらせるだけなんて手ぬるいじゃないの。粗野で下品で……それでいて美しい雷獣娘を貶めてやつても良かったのではないか。元より彼女は学園の、クラスの秩序をかき乱すような存在なのだから。

すまし顔の玉緒を見ながら、彼が六花を襲う姿を思い浮かべようとした。だがそれは上手くいかず、怯える憐れな少女の姿は、いつしかおのれ自身に置き換わっていた。

「この僕が梅園さんを痛めつけて蹂躪する。それがご主人様の望みですか」

玉緒が問いかけたのは、京子が空想をこね回すのをやめた直後の事だった。京子の視線は玉緒に注がれていたが、言葉は出てこなかった。

「そんな事は致しませんのでご安心ください。可愛い女の子をいたぶる趣味を持ち合わせていない事は、ご主人様がよくご存じなのではありませんか？ それに——貶められて落魄する梅園さんの姿を見る事が、ご主人様の望みかどうかとも解りませんし」

見透かすような玉緒の眼差しに、京子の心臓が大きくうねった。そこで京子は気付い

た。梅園六花をただただ憎んで嫌悪しているだけではないのだと。密かに彼女の事に憧れ、羨ましく思っているのだと。

その事を思い出して、見て見ぬふりをしてきた感情を目の当たりにして、京子はひどく混乱していた。梅園さんの事が嫌い。でも仲良くなりたい。自由に振舞っている姿が羨ましい。あんなふうに好き勝手しているのは許せない……様々な感情が浮かんで消えていく。

「……良いわ、梅園さんの事は私で解決するもん。タマ、まさかあなたまで誑かされるなんて」

京子は短くそう言うと、頭まで布団をかぶってそのまま目を閉じた。玉緒の視線を感じたが、彼がどんな表情を浮かべているのかは解らない。

雨降り雷獣しおらしく

木曜日は朝から雨が降っていた。四月に入ってからずっと晴天ばかりだったので、学園にやって来てから初の雨の日と言う事になる。妖怪である生徒の中には、雨が降っているという事で普段とはテンションの違う者たちも見受けられた。普段よりも言動に精彩に富むものもいれば、逆に落ち着いているものもいるという塩梅だ。

妖怪と言うのも動物の一種であるから、そうした天気の変化や本能に引きずられる所があるのだろう。トリニキは静かにそう思った。

この日トリニキは、内心そわそわしながら教壇に立っていた。別に雨が降ったからと言って心の動きに変動があつたわけでは無い。

梅園六花は病院に向かつてから登校するので遅刻する。この報せがトリニキの心をざわつかせたのだった。

一体、梅園さんの身に何があつたのだろうか。トリニキは一教師として彼女の身を案じていた。途中で登校するとはいえ、病院に寄らねばならないとは大変な事では無いか。トリニキはそのように思つてもいた。連絡を受けた今宮先生の話によると、昨晚帰宅してすぐに意識を失い昏倒したのだとの事。

ただ事ではないのは明らかだった。寝落ちならばいざ知らず、意識を失うというのは妖怪であっても余程の事である。しかも六花は病弱な生徒ではない。身体的な持病云々の話は聞いていないし、いつそ頑健な身体の持ち主である事は嫌と言う程知っていた。

だからこそ、その彼女が倒れたという話にトリニキは驚いていたのだ。と言うか今日は休まなくて大丈夫なのだろうか。そっちの方が良いのではないか。そんな事も思っ
てはいた。

もちろんと言うか、梅園六花が遅刻するという事に関し、クラスメイトらも敏感に反応していた。六花は編入生でありいわば外様ではある。しかしそれでも、短い間に生徒らの印象に残るほどの存在感を放っていた事には変わりない。

生徒たちの反応は様々だった。素直に六花の身を案じる者もいれば、夜の街で乱闘したがために病院送りになったのだろうと、口さがなく噂する者もいた。

その中において、宮坂京子は表立った反応を示さなかった。心配する素振りも見せず、さりとして六花の素行の悪さを笑うでもなく、ただただ授業に臨み、休憩時間は本を読んでもぼんやりと過ごしているだけだったのだ。

もちろん六花の不在について声高に騒ぐ生徒ばかりではないが、京子がこのような反応を見せるのもトリニキにしてみれば意外だった。

しかも仔細観察してみると、平静を装いつつも何か思案しているようにも見えた訳だし。

そんな塩梅であるから、トリニキは昨晚の出来事を忘れていたのだ。玉藻御前の未裔にして、宮坂京子の遣いであるという妖狐に出会ったという事を。

※

梅園六花が登校したのは、三時間目が始まって十五分後の事であつた。トリニキはたまたま受け持つ授業がなく、ゆえにやってきた彼女を出迎える事が出来た。

いつになく気だるげな様子で傘を畳む六花の隣には、一人の女妖怪が寄り添うように傍にいた。とはいえ、前に会った管狐のメイドではない。彼女よりも年長で、尚且つ力のある妖怪であるらしかった。黒いワンピースに淡い色のボレロを羽織つたシンプルないでたちであるが、良家のご婦人のような品の良さ^{しんぶつ}と美しさを見せていた。

鳥塚先生ですね。ともすれば六花の姉のように見えるその妖物は、トリニキをまつすぐ見つめて挨拶をした。

「申し遅れましたが、私は梅園月華^{うめどのげつか}と申します。鳥塚先生には、いつもうちの娘がお世話になつておりますわ」

「いえいえ、こちらこそ」

ご婦人は月華と名乗り、丁寧な様子で頭を下げた。ぼんやりとしていた六花の肩が僅

かに震えたのをトリニキは見てしまった。

今や六花はぼつが悪そうに視線を下に向けているではないか。月華はそんな娘の様子を一瞥し、やや真剣な様子で言い足した。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。本当は休みにしようとする主人も私も申ししていたのですが、娘が大丈夫だから学校に行くと言って聞きませんので……」

「病院の医者だつて、検査したけど何も無いって言つてたじゃないか」

黙つていた六花がここでようやく口を開いた。彼女は既に顔を上げていたが、それでも様子をうかがうような色が見え隠れしている。

「だけど六花ちゃん。丈夫なあなたが倒れるなんて……それにお医者さんは学校に通つても大丈夫だけど様子を見て休んでも構わないって仰つたんですから。みーくんだつて初めての学校で緊張したから僕たちに甘えれば良いって言つてたでしょ」

身を案じつつたしなめる月華の言葉に、六花がにやりと笑つた。

「それはそうだけど……と言うか母さん。先生の前でみーくんとかつて言つちやつたね」

「あらやだ。そうだったかしら」

六花の指摘に対し、月華はそれほど動じた様子は見せなかつた。むしろトリニキの方が少し恥ずかしくなつてしまつた程度である。

三國と言うのが六花の叔父であり、月華にとつては夫に当たる妖物である事はもちろんトリニキも把握している。それにしても、品よく美しい妻にみーくんと甘えるように呼ばれているとはリア充の極みやな……：独身であるトリニキは、この場にはいない三國の事をそのように考察していた。ほんのりと羨ましさを感じながら。

そうこうしているうちに、月華の視線が今再びトリニキに向けられる。母親としての顔を見せた月華の前に、トリニキも教師として向き合つた。

「娘はこれから六時間目まで授業を受けるつもりなのですが、体調によつては早退するかもしれないのです。その時は鳥塚先生や皆様にご迷惑をおかけするかもしれませんが……どうか娘をお願いします」

「娘さん、梅園さんの事は僕にお任せください」

しおらしく頭を下げる月華に対し、トリニキは笑みを浮かべながらはつきりとそう言った。若干声が上がってしまったのだが。

「登校なさつたのは梅園さんの意志でしょうが、これからの体調は梅園さんの意志では左右できない所があるでしょうから……ですがそれは仕方のない事ですので迷惑などんでもありません。」

実は僕は梅園さんの入つた部活の副顧問になりました、そうした意味でも梅園さんとはちよつと深く関わっております、ので……」

トリニキはそこまで言つて、慌てて口を閉ざした。気だるげな表情の六花の眼差しが、にわかに鋭くなった事に気付いたからだ。

彼女とてうら若き少女である事には変わりない。担任と部活の二つの領域で同じという程度で「深く関わっている」などとオツサンである自分が言うべきでは無かつたのだ。それこそセクハラ発言に繋がるのではないかと。

ところが月華は腹を立てる事なく、柔らかな笑みを崩さなかつた。のみならず、トリニキが部活でも六花と関わっているという事に喜んだくらいである。

※

「……ごめんね梅園さん。僕も迂闊だったよ。僕みたいなオツサンが深い関係だなんて言つたら、そりゃあ嫌だよな」

「別に、アタシは先生のその言葉なんて気にしてないよ」

月華が去つたのを見届けてから、トリニキと六花は廊下を歩き始めていた。セクハラまがいの発言を謝罪したトリニキだったが、六花の反応は素っ気ない物だった。月華同様に、その発言は気にしていないと言わんばかりである。

「アタシがムカついたのは、早退するかもしれないって事で話を進めた事さ。こちらら休んだら負けだつて思つてるのに……」

「まあまあ、休んだからつて負ける事なんて無いよ。誰だつて体調の悪い時はあるんだ

からさ」

この言葉が六花の心に届くのか。トリニキにははつきりと判らなかつた。しかし今の六花はやはり普段の彼女とは違う。スケバンめいた気の強そうな雰囲気を買張つて見せているが、やはりどこか気だるげでその挙動には精彩を欠いていたのだから。

そうまでして自身を強く見せようとする彼女の姿は何とも憐れでいじらしい物だつた。

ここからトリニキと六花は二、三度言葉を交わした。六花は担任に診断書を出してから、そのまま授業に向かうつもりであるらしい。

話を聞いたトリニキは、手先が汗でぬるんでいる事に気付き、ハンカチを取り出して手を拭いた。しまったな……取り出したハンカチを見たトリニキは思わず眉根に皺を寄せた。よれたハンカチを見たトリニキは、昨日使ったままのハンカチをポケットに入れていたのだと気付いた。洗った手を拭うのに使ったので、途方もなく汚いわけでは無い。だが生徒に見られれば不潔に思われるだろう。

「鳥塚先生！」

そんな事を思っていると、横を歩く六花がふいに声を上げた。猫の仔めいた甲高い声を上げた彼女の瞳は、強い驚きのために大きく見開かれていた。

「先生、もしかして先生もあいつに出会ったんですか……！」

「あいつ？ それは誰の事かな梅園さん」

「ええと……変態糞狐だよ。妖狐の男でさ、尻尾が四本もあつたんだ」

尻尾が四本もある妖狐の男。六花の言葉に、トリニキは心臓をぐつと握られたような感覚に陥った。トリニキはここでようやくやく思い出したのだ。昨晚自分が四尾の青年と出会い、彼に話しかけられた事に。

うつそりと微笑みながら緋色の八重樞を弄り回すその姿が、トリニキの瞼の裏に鮮明に浮き上がってきた。

「成程ね」

トリニキは一言だけ呟き、注意深く周囲を見やった。授業中のために、生徒が出歩いている事はまずない。それでもこの会話が誰かに聞かれやしないかと用心していたのだ。特に——宮坂京子に聞かれたら大変だ。

「梅園さん。授業は四時間目から出席すれば良いからさ。詳しい話を先生に教えてくれないかな？」

「もちろんだとも！」

にわかには活気づいた六花と共に、トリニキはそのまま職員室に向かったのだった。

雷獣娘かく語りき

トリニキと六花はそのまま職員室の一角にある指導スペースに向かった。変態糞狐と六花が呼ぶ存在が塩原玉緒であるとはつきりと確信を得たからである。それならばじっくりと話を聞かねばならない。トリニキは教師としての使命感に燃えていた。

だからこそ、長丁場になる事を想定して指導スペースにて話を聞く事にしたのだ。但し——トリニキと六花の対一では無いのだが。

「アタシは鳥塚先生に話を聞いてほしいと思っただけですが、どうして米田の姐さんまでいるんですか？」

「どうしても何も、先生が米田先生を呼んだんだよ」

居心地悪そうに尻をもそもぞさせる六花に対し、なだめるようにトリニキは言い放つ。塩原玉緒に出会った事と、六花がその晩倒れた事に因果関係があるのかは現時点では解らない。しかし、この話には米田先生の力添えが必要であるとトリニキは判断したのである。

米田先生はトリニキの隣で柔和な笑みを見せていたが、何処か恨めしそうな六花の表情に気付くとそっと口を開いた。

「梅園さん。鳥塚先生は貴女の事を思つて敢えて私にも話を聞いてほしいつて言つたのよ。自分は男だから、一對一だったら梅園さんには話しづらい事もあるかもしれないつてね。」

それに今回の件は、私も気になる所があるの。もちろん、逆に梅園さんたちに助言出来る所もあるかもしれないし」

「……鳥塚センセの事はアタシだつて信頼してるさ。心を開いているつていうか、悪い事はしないだろうつて意味の信頼だけだな。だから別に、鳥塚センセに話を聞いてもらうだけでも良いかなつて思つてたんだよ」

「梅園さん……」

トリニキがこぼすと、六花はにっこり笑つて言葉を紡ぐ。

「でも、その鳥塚センセが米田の姐さんと呼んだんだろ？ だったら二人に話すよ。あのく……狐男の事とかさ」

「狐男と言うか、塩原玉緒の事ですな」

油断すれば六花は糞狐だのというワードを臆面もなく口にしてしまうかもしれない。そのような懸念に囚われたトリニキは、そつと言ひ添えた。

「実を言えば、僕もその塩原玉緒に出くわしたのです。それが梅園さんと接触した前なのか後なのかは定かではありませんが……」

「塩原玉緒か。あー、確かにそんな名前だったよ鳥塚センセ。アタシ、さつきまでド忘れしちゃってたわ」

——やはり自分たちが会ったのは同じ存在だったのか。茶目つ気たつぷりに舌を出す六花を見ながらトリニキは安堵の息をついた。月華に付き添われていた時よりも元気になっているのもまたトリニキには嬉しかった。

「やはりお二人が会ったのは塩原玉緒だったのですね。鳥塚先生。私をお呼びしたのは正しい判断ですわ」

塩原玉緒。恐るべき四尾の妖狐の名を耳にした米田さんは、しかし驚いた素振りは見せていない。むしろこうなる事は解っていたと言わんばかりの態度を示していた。その姿にいつそトリニキが驚いてしまったほどである。

米田先生は優しく微笑むと、六花の方に視線を向けた。

「それでは梅園さん。話せる範囲で構いませんので話してくださいますか？ もちろん……私や鳥塚先生に言いたくない事があれば伏せてくれても大丈夫ですから」

「大丈夫だよ米田の姐さん！ あの糞狐の件で、アタシが隠さないといけない事なんて何一つないんだからさ」

※ やっぱ糞狐って言ってるじゃないか。トリニキは心の中でツツコミを入れていた。

「——それで、駆け寄ってきたチビたちが『お姉ちゃん、キツネさんのおいがするー』って言われたのを聞いたら、急に気が遠くなったんだ。野分と青葉に言われて、そこでアタシの身体にあいつがマーキングしていったって気付いちまったからさ」

梅園六花は十分ほどの時間をかけて、昨晚の出来事について説明してくれた。やはりこの子は強い子なのだ。表情を変えずに淡々と語る六花の顔を見ながら、トリニキは静かにそう思っていた。

襲撃されている女の子を見つけたというだけでも相当にショッキングな話だ。ひと暴れた後にそれが単なる幻影にすぎず、より強い妖怪が六花を捉えるために仕掛けた罠だと知ったのだからひとたまりも無かるう。驚いて失神するのも無理からぬ話だとトリニキは思った。それはやはり、トリニキもまた実際に塩原玉緒に相對していたからこそその感想でもある。向こうには敵意は無かったが、それでも生半可な妖怪ではない事はその佇まいや妖気からも明らかだった。

それにしても——こみ上げてくる烈しい感情を、トリニキは言葉にせずはいられないかった。

「梅園さんを捕まえただけでは飽き足らず、マーキングまでするなんて……」

「な、アタシがあいつの事を変態糞狐だって言う理由は解つただろ？」

トリニキの言葉に六花は即座に反応した。青白かった頬は既に紅潮しており、首筋や

額には青い血管さえ浮かんでいる。

妖怪たちの間でマーキングと言えば、おのれの妖気を対象に付着させる行為の事である。マーキングの対象は生きた妖怪や人間である事も珍しくはない。関係性は多岐に渡るものの、相手と自分とは浅からぬ関係であるという事を示すために、妖怪たちはマーキングを行う事がある。

但し——その関係性は多岐に渡る訳である。親愛、信頼、仲間の絆と言ったポジティブな意味合いの場合もあるが、一方的な束縛や隷属と言った意味合いもまた、場合によつてはありうるのだ。或いは、「お前は俺の標的だ」と言う意味を持たせる事すら可能なのだ。

信頼関係のない相手からのマーキングは、無遠慮に素肌にベタベタと触れられる行為に相通じるものがある。しかも妖気の質によつては相手を傷つけたり侵蝕したりする事さえ可能なのだから尚更性質が悪い。

「そう言う事があつたから、病院に行つたんだね」

そっだよ。トリニキの言葉に六花は頷いた。

「本当は飯綱さんに付いて行つてもらおうと思つたんだけど、母さんが、月姉がどうしても心配だから来てくれたんだよ。鳥塚センセも月姉には会つたもんな。

でもまあ……検査した結果では特におかしな事も無いってさ。アタシにべつとり

くつついていたあの狐の妖気も、なーんもアタシに悪さをしてるって訳でも無かったみたいだし」

でも気持ち悪い事には変わりないけれど。梅園六花はそう言つて、困つたように肩をすくめたのだつた。そんな彼女に声をかけようとしたトリニキであつたが、それまで黙つて話を聞いていた米田先生が急に口を開いた。それに驚いたトリニキは、話すタイミングを見失い、口をつぐむほかなかつたのだ。

「梅園さん。昨夜は大変な思いをなさつたのね。もしかしたら、今も塩原玉緒がやつてこないか。その事が頭から離れないんじゃないかしら」

無言の六花を眺めながら、米田先生は言葉を続ける。

「だけど安心して頂戴。私の読みが正しければ……塩原玉緒は貴女を傷つける事は無いはずよ」

「へえ。米田先生。そこまで解るんですかね」

まるで塩原玉緒の事そのものを知っているみたいじゃないか。六花はいつの間にか前のめりになり、そう言わんばかりの表情で翠眼を輝かせていた。

狐つままれキツネツキ

「とはいえ、アタシも塩原玉緒が何者なのかはある程度は見当が付いているんだ。やつの身体からは、宮坂京子の妖気が漂っていたからな。宮坂京子がああ姿に化けたのかどうかは解らないけれど、ともあれ彼女に縁深い存在には違いないさ」

「縁深いも何も、塩原玉緒は宮坂京子に仕えている存在なんだよ。僕は、塩原玉緒からそう聞かされたんだ」

何だつて！ トリニキの言葉に六花は驚きの声を上げた。彼女の反応は劇的な物だった。背後の二尾がぶわつと倍以上の太さに膨らみ、可憐な少女の面が、一瞬獣の顔に見えたほどである。大きく目を見開く彼女の周囲には、小さな稲妻さえ二筋三筋取り巻いていた。

「梅園さん。驚いたからって無闇に放電してはいけないわ。ましてや、貴女も病み上がりなのでしようし」

「あーはいはい。悪かったよ米田の姐さん。鳥塚先生も驚かせちゃったし」
にわかに興奮した六花を鎮めたのは、米田先生の冷静な一言だった。ただ静かにたしなめただけにも拘らず、六花はぼつの悪そうな様子で大人しくなったのだ。

その様子を見届けた米田先生は、トリニキと六花に笑みを向けた。

「あくまでも私の考察になります、塩原玉緒の正体についてお話いたしました。と言つても、梅園さんも鳥塚先生も、おおよそ察しがついているかもしれないが」

察しがついているとは、やはり塩原玉緒は宮坂京子に関連のある存在なのだろう。その間に米田さんは真顔になり、そして言葉を紡いだ。

「塩原玉緒の正体は、宮坂京子が作り出した分身だと考えられるわ。但し、普通の分身とは違つてもはや自分の意志で動き回れるようなものになつてはいるけれど」

分身。その言葉を聞くや、またしても六花が声を上げた。先程とは異なり、驚きと多少の納得の色が入り混じつたような声音だった。

「分身だったのか。それで米田の姐さんは、あいつがアタシを襲う事は無いって断言出来たんだな……ですね」

「私たちの使う分身術は、あくまでも使い手のイメージによるものですからね」

そう言うと、米田先生は思案する素振りを見せてから言い足した。

「塩原玉緒も元々は宮坂さんのイメージから生まれた存在なのよ。だから彼の行動だつて、宮坂さんの意に沿うものになる様な制約があると考えられるわ。今の彼が何処まで自由に動けるのかは解らないけれど、少なくとも女の子を襲う事は出来ないはずよ。その事は——宮坂さんが最も忌み嫌っている事だから、ね」

「米田の姐さんがそこまで言ってくれれば、本当に安心できるよ」

六花はそう言つてふつと微笑んだ。その笑みが何処かきこちなくて儚げに見えたのは気のせいでは無かろう。

「先生たちは知つてると思うけどさ、少し前に野柴君がアタシに告白してきたんだよ。その時に、アタシは『その間にアタシが欲しくなれば、力づくで奪つても構わない。そんなときはそいつに身を委ねてやる』なんて事を言つたんだよな。ああ、自分でも調子に乗つてたと思うよ。」

塩原玉緒に出会つた時に、アタシはその事を思い出したんだ。あいつはアタシより明らかに強そうだったからさ。で、そいつに好き勝手されるのかもしれないと思つたら怖くなつてさ……それが情けなかつたんだ」

「梅園さん、君はそんな事まで……」

指を組みながら項垂れる六花の前に、トリニキは思わず声を上げてしまった。流石の米田先生もこれには微笑を浮かべているではないか。

「相手が誰であれ、言葉は迂闊に放つてはならないという事よ。野柴君も優しくして良い子だし、今回の一件も大事には至らなかつたでしょうけれど……梅園さん。今の事は忘れずに覚えておいて頂戴ね」

野良猫のような眼差しで六花が頷くのを見届けてから、トリニキは抱えていた疑問を

米田先生にぶつけた。

「米田先生。塩原玉緒なる謎の妖狐が宮坂さんの分身である事は僕たちも理解できました。ですが、自分の意志で動けるとはどういう事でしょうか？ 米田先生の仰る通り、普通の分身ではありえない事だと思うのですが」

「……塩原玉緒の秘密について話す前に、少し私どもが用いる変化術・分身術について説明いたしますね。その方が解りやすいはずですから」

そのような前置きと共に、米田先生は変化術と分身術の解説を始めてくれた。

変化術は本来の姿から自身が望む姿に変化する事、分身術はあたかもそこに存在しない者が存在しているように見せ、その動きを操る術の事である。そしてその術を行使する要になるのは、使い手の意志そのものなのだそうだ。

「使い手の意志が重要と言うのは、他の術でももちろん当てはまるわ。だけど、イメージした物を形に仕立て上げるという意味では、変化術や分身術も意志の強さが依存しているのと言うまでもない事なの。」

実際問題、見た事も無い物や知らない物を分身術で作り出す事は不可能ですからね。どれだけ熟練した変化術の使い手だとしても」

そうした意味では、塩原玉緒は宮坂京子の意志が十二分に込められた分身に当たるのだと、米田先生は説明を続ける。だからこそ、塩原玉緒自身が意志を持ち、自在に動き

回るようになったのだと。だがその一方で、塩原玉緒は宮坂京子が意識して造り出した存在ではないのかもしれない。そんな事も米田先生は口にしたのだ。

「実を言えば、私自身は塩原玉緒と接触した事はまだ一度も無いんです。ですが、それでも宮坂さんから彼の話は聞かされていて、それで断片的に知っていたの。ただ少なくとも、一昨年のお秋ごろには宮坂さんも彼の存在を口にしていたかしら。悪しき者、よろしくない者から自分を護ってくれる、忠実な従者であるとね」

「それって、あの事件の後からって事ですよね、米田の姐さん」

そうよ。六花の問いに米田先生は力強く頷いた。六花の言ったあの事件は、宮坂京子が男妖怪に攫われた事件は一昨年の夏に起きたものではないか。塩原玉緒はその直後に姿を現したのか——米田先生の解説はまだ終わってはいないが、トリニキは腑に落ちたような思いだった。

あの事件と塩原玉緒の出現は無関係では無いはずだと、米田先生は断言する。

「あの事件が宮坂さんの精神に如何ほどの影響をもたらしたのか、それは今更私が語るまでもない事です。ましてや宮坂さんは、内気で大人しくて……その上感受性の強い子でしたからね。」

自分を護ってくれる存在が欲しい。自分には無い強い力を持ち、それでいて自分を裏切らず忠実な存在が傍にいてくれれば……そのように願ったとしても無理からぬ話な

のよ。たとえ無意識の願いだとしてもね」

「塩原玉緒が凡百の分身とは異なる事はよく解りましたよ、米田先生」

米田先生の説明が一段落したところで、トリニキは思わずおのれの意見を口にした。

「お話を聞く限り、分身と言うよりもむしろタルパやイマジナリーフレンドに近い存在のように思えてなりませんね、塩原玉緒と言うやつは」

タルパとイマジナリーフレンド。これらは想像力によつて生み出される架空の存在であるという。厳密には両者は異なる存在であるのだろうが、いずれにせよ作り手であるあるじの心に寄り添い、友達や仲間になってくれる事には変わりはない。

まさしく仰る通りです。米田先生もまた、トリニキの言葉にはつきりと頷いてくれた。

「最初の成り立ちとしてはそれこそイマジナリーフレンドみたいなものだったのでしようね。ですが宮坂さんも妖狐の血を引き妖力を持ち合わせております。だからこそ塩原玉緒は分身として実体化してしまつたのでしょうかね。」

そして宮坂さんの望むままに、彼女の脅威になるであろう存在を観察し、時に接触をしているのだと思われます。恐らくその辺りは、鳥塚先生と梅園さんの方が詳しいのではないかと思うのです。先程も伝えた通り、私の前には塩原玉緒は姿を現しませんからね」

「……要するに、宮坂さんがアタシらの事を目の敵にしている、それで塩原玉緒がアタシらの前に現れたって事だよな？ ああ狐は宮坂さんの思いや願いに忠実だから、さ」

その通りよ。六花の言葉に頷いた米田さんは、思いつめたような表情をいつの間にか浮かべていた。

「そうね……宮坂さんとは色々と話す機会が多いんだけど、彼女も最近は少しイライラしたり、不安があるのを隠そうとしている所なのよね。それに塩原玉緒だって、完全に宮坂さんに従っているのかどうかも解らないのよ。イマジナリーフレンドやタルパですら、状況によっては暴走する事があると聞くわ。ましてや、分身として力を宿している塩原玉緒が制御できないとなると……」

「米田の姐さん。そこまで心配しなくても大丈夫。アタシだって、やられっぱなしは性に合わないんだからさ」

深刻な表情を見せる米田先生とは対照的に、六花は何故かその面に笑みを浮かべていた。獲物を見つけた獣のような獰猛な笑みを。

「アタシの会った感触ではさ、塩原玉緒は何のかんの言いつつも宮坂さんの事はあるじとして立てていたけどな。それだったらさ、要は宮坂さんとアタシが直接ぶつかった方が話が早いと思うんだよ。」

あ、でも先生。ぶつかるって言ってもバチボコに闘う訳じゃないから安心してよ。取

りあえず話し合いから始めてみるからさ……それで駄目だったら拳で語る可能性もあるけれど」

やっぱりバチボコ闘うのも選択肢に入っているのか。意気揚々と語る六花の姿に、トリニキは若干気圧されていた。

しかしだからこそ、米田先生が何か決心したような目つきになっていた事にこの時は気付かなかつたのだ。

トリニキ、決闘ルールを知る

梅園さん。米田先生は六花を見据え、決然とした様子で呼びかけた。

「拳で語るといふスタイルは、もしかすると貴女たちにとつては避けては通れないものかもしれないわ。私としても、穏便に事が進めばと思つてはいたの。とはいえ、妖怪たるもの闘わねばならない時はあるものね。」

でも安心して頂戴。うちには、あやかし学園には決闘制度がありますから」「
「け、決闘だつて！」

素つ頓狂な声を上げたのは、もちろんトリニキである。六花は特に驚いた様子は見せていない。むしろ唇の端を上げ、満足げな笑みをうつすらと浮かべているくらいだった。

決闘つてどこぞの漫画みたいだな。と言うか決闘するんだつたら安心できないじゃないか。疑問とツツコミがトリニキの頭の中で出口を求めてグルグルと駆け巡つていた。

「鳥塚先生が驚かれるのも致し方ありませんわ。先生は確か、人間向けの学校に通われていたとお伺いしておりますし」

米田先生の言葉にトリニキは頷いた。彼女の言葉は全くもってその通りだったからだ。

それに、妖怪であると言えども梅園六花と宮坂京子はいずれも可愛らしい少女である。そんな彼女らが決闘し相争う姿は上手くイメージできなかつた。

と言うよりも、宮坂京子が積極的に闘う姿をイメージできなかつたという方が正しかった。梅園六花はまごう事なきスケバンであり、トリニキを護るために他の妖怪と相争った所を目撃した事もあるのだから。

「妖怪には妖怪の生き方があるでしょうからね。すみません、先程は取り乱してしまいました」

「大丈夫ですよ、鳥塚先生」

謝罪するトリニキに対し、米田先生は優しい気な口調で応じるだけだった。教師同士の話を知っている六花も、何故かドヤ顔で頷いていたのだが。

「確かに、妖怪同士では人間相手の時とは異なり、相争う頻度も多いかもしれません。ですが、ことあやかし学園内では、浜野宮理事長の意向もあり、決闘方式を取り入れているのです」

理事長たる浜野宮灰高は、元々は多くの天狗・妖怪らを従える一軍の将であつたという。今では学園を運営し、全盛期の頃よりも丸くなつてはいるらしい。それでも、天狗

としての気質や特性を捨て去ったわけでは無い。米田先生の説明はおよそそのような物であった。

「浜野宮理事長はやはり天狗ですからね。闘う事に勇を見出しやすいのでしよう。それに、若い妖怪が時に血の気が多く、それを健全に発散せねばならない事も、我々よりも十二分にご存じでしょうし」

だからこそ、あやかし学園には決闘制度が設けられているのだ。米田先生の解説は、ここで一度終着点を迎えたのだった。

ここまでの話を聞いたトリニキは、その視線を梅園六花に向けていた。合法的に闘える事を知った六花が、果たしてどのような反応を取るのか。それによってトリニキの指導も変わってくるのは言うまでもない。

「決闘制度か。この理事長は九百年も生きているから化石みたいなじいさんになってるかって不安だったけどさ、中々話の解るじいさんみたいじゃないか。ははは、理事長の事、ちよつとは好きになれるかもしれないな」

猫めいたいたずらっぽい笑みを浮かべていた六花は、次の瞬間には表情を引き締めて言い放った。

「宮坂京子と決闘するかどうかって事だろう？ 面白いじゃないか。むしろ願ったり叶ったりってやつだな」

「梅園さんー」

トリニキはまたも声を上げてしまった。六花は既に決闘に対して乗り気である事に、情けないが驚きが強かった。たとえそれが学園内でルール化されたものであったとしても。

うろたえるトリニキの姿を見ると、六花がふわりと微笑んだ。先程まで見せていたどうもうなえみとは違う、優しく儂げな笑みである。ある意味彼女らしい笑顔に何も言えないでいるうちに、六花は言葉紡いだ。

「鳥塚センセも聞いただろう？ 宮坂さんはアタシを何かと目の敵にしているみたいだし、アタシだつてずうつとその状況に甘んじるつもりはないってね。バチボコやるのは良くないかなつて遠慮してただけど、学園の方でお膳立てしてくれるんだつたら、それに乗るのも手だと思うんだ」

六花は一度そこで言葉を切ると、一呼吸おいてから言い足した。

「なあに、鳥塚先生は心配しなくて大丈夫さ。アタシは負ける気なんか無いし、まあ負けた時は負けた時で宮坂さんに従うつもりだからさ……宮坂さんも、アタシを打ち負かしたとしても無茶ぶりをかますような感じもしいし」

「やはり梅園さんは決闘に対しては前向きなようね」

黙つて話を聞いていた米田先生がここで口を開いた。

「梅園さん。貴女が決闘を前向きに検討する事は先生にも解っていたわ。妖怪としての道は闘いにある。保護者である三國さんからそのように育てられましたからね」

叔父であり養父である三國の名を出されると、流石に六花も気恥ずかしそうな表情を見せていた。

米田先生は気にせず言葉が続ける。

「とはいえ、決闘に関しては幾つもの制約があるの。安全性も考慮したうえで行う事は変わりないけれど、お互いの名誉をかけて行われるものですからね。」

前提条件として、両者が決闘に参加する事に合意している事が確認できないと、そもそも決闘を行う事は出来ないわ。実を言えば、この決闘制度も私がこの学園に赴任してから二度しか行われていませんし……私も、短いと言えどもかれこれ三十年はここで教鞭を取っているのですから」

三十年で短いとはたまげたなあ。さらりと告げられた米田先生の言葉に、トリニキは場違いながらもたまげてしまった。だが妖怪とはそういう物なので致し方なからう。

私の言っている事は解るわよね、梅園さん。米田先生のその言葉に、六花は短く笑って頷いていた。

「解りますとも米田の姐さん。と言うよりも、宮坂さんとしてアタシと決闘したいって思っているんじゃないんですか。米田の姐さんが、闘いの重みを知ってる事はアタシ

だつてきちんと解つてるよ。雇われ兵として働いていたつて事は叔父貴から聞かされていたからさ。

その姐さんがわざわざ決闘の事を話したつて言うのはさ、宮坂さんも決闘を強く望んでいゝつて事だろう？」

「それはこの場では断言できないわ、今はね」

今や不敵な笑みを見せる六花の問いかけを、米田先生はそれとなくかわした。

「宮坂さんにとつても重要な選択になる事だから、易々とやつてみるなんて彼女も言えないのよ。」

「だけど、場合によつてはぶつかり合わなければならぬ事もある。それは私も同じ意見なのよ」

決闘に関する話については、米田先生のその言葉で締めくくられることになった。時間の関係上、決闘の詳細なルールの説明は別の機会に持ち越され、要点だけを手短かに聞かされるだけに留まつてしまったのだが。

のんびりとした午後的一幕

「大丈夫なんすか梅園さん。昨夜倒れて、それで今朝は病院に通つてたつて話だけれど」
「だーいじようぶだよ。ほら、アタシをよく見てみな。元氣そのものじゃないか」

昼休み。六花の傍らにはクラスメイトである妖怪たちが何人かそれとなく集まっていた。一番六花の傍らにいて、氣遣わしげに声をかけてきたのはやはり野柴である。

野柴の目は恐ろしいほど澄み切っている。純粹に、素直に六花の様子を察じているであろう事は明らかだった。

確かに心配されるのは無理からぬ話でもある。實際問題、六花も午前中までは元氣がなかったのだ。頭はぼんやりしていたし、胃の腑の中にも重苦しい物がわだかまつているような、そんな気分だった。

それはやはり、塩原玉緒との遭遇による精神的ショックのためだったのだ。情けない話ではあるが。塩原玉緒は何かをしたわけでは無い。それでも、彼の妖氣が六花の身体にへばりついていると知って、氣が動転してしまったのだ。

しかし、今はそうしたショックや氣だるい氣分から既に脱出していた。鳥塚先生たちとの話し合いを経て、塩原玉緒がおのれに危害を加えないであろう事を知ったからだ。

のみならず、宮坂京子とぶつからねばならない事も確認できたわけであるし。

そんな訳で、六花の気力は普段通りに蘇っていたのである。妖怪とは精神的な部分で体調や強さが左右される事があるので、その辺りはやはりおろそかには出来ない。

ただ一つ困る事があった。持参した弁当で放課後まで足りるかどうか、である。塩原玉緒の脅威にさらされたと思いついていた六花は、朝方も食欲が落ちていたのだ。そう言う状況であつたから、美咲が持たせてくれた弁当も、普段よりもあつさりとした軽めの物だつた。

だが今は気力が五体を巡り、元氣そのものに戻っていた。もちろん食欲も戻っている。

足りなければ後で購買のパンでも買ってあてにしよう。それまでに売り切れていたらその時はその時だ。

※ 野柴や天狗少女の愛宕の様子をちらと眺めてから、六花は箸を進めたのだつた。

『第九十二条 決闘法』

本法は本学園にて認められている決闘法に関する法規である。なお、下記の法規を破つた場合処罰が下る。処罰に関しては補記を参照のこと。

一、決闘は双方の合意によってのみ許可される。

肉体的、精神的並びに金銭的な脅迫によってなされたものは無効とする。

二、決闘を希望する生徒は、担任及び副担任に相談のこと。上記二名にて決闘の正当性が認められた場合にのみ、理事長並びに第三者による審議がなされる。

(以下、六法全書の「こ」とき法規が二十六項目にわたって続いている)』

※

「決闘に関する法規、多すぎイ！」

放課後。学園内にひっそりと建てられた書庫の入ったトリニキは、思わず声を上げてしまっていた。教師からは第二図書館とも呼ばれているこの場所は、実は生徒は立ち入りを許可されていないエリアでもあった。

と言うよりも、教師の立ち入りさえも制限が掛かるような場所でもあったのだ。

「……どうされましたか？」

三十分の時間制限にて入館していたトリニキの許に、狗賓天狗の女性が近づいて来た。神谷というこの女天狗は、浜野宮理事長の秘書兼第二図書館の司書を務めていた。もつとも、教師ではない彼女の事については、トリニキも先程知ったばかりなのであるが。

「あ、ああ。すみません神谷さん」

間の抜けた声を出しつつも、トリニキは一も二もなく頭を下げた。神谷女史の地位も

さることながら、彼女自身のオーラに対してもトリニキは平伏していたのだ。

そもそも狗賓天狗は、天狗の中でも地位が低いという。それでも、鴉天狗にして大天狗と互角の力を持つ浜野宮氏の秘書の座を護っているのだ。凡百の狗賓天狗ではない事は明白な話だろう。

「実はですね、僕は決闘法について調べていたのです。校則みたいなものだろうかと思つたら、かなり事細かに法規が記されていたので、それで驚いてしまいました」

法学部出身であるならば、この法規を見ても驚かずに涼しい顔でいられるのだろうか。理学部出身のトリニキの脳裏に、そんな考えがふわりと浮かび上がった。

ややあつてから、神谷女史の片眉がピクリと動いた。

「鳥塚先生は決闘法についてお調べだったのですね」

ええ。直截的な言葉にトリニキは素直に頷いた。自分もまた、包み隠さずに直截的に話さねばならない。そう思いながら。

「もしかすると、僕が受け持っている生徒たちが決闘を行うのかもしれないのです」

狐娘の懊悩と決意

梅園六花が四時間目から授業に臨んだこの日、宮坂京子もまた本調子と言うわけでは無かった。体調自体は悪いわけでは無い。ただ今日は終日雨だったし、京子自身も考え事が頭の中を駆け巡り、心を圧迫していたのだ。

そうまでして考えているのは、梅園六花の事だった。

京子とて、もちろん六花が何故遅刻したのかは知っていた。表向きにと教師が生徒たちに伝えた情報のみならず……耳ざとい生徒らが入手した情報についても。すなわち、六花は昨晩帰宅直後（と言っても寄り道していたらしく、九時前だったそうだ。塾通いでもないのに、高校生としては十二分に遅い時間帯である、と京子は思っていた）に突如として意識を失って倒れたのだという。目を覚ました時には普段通りに振舞っていたそうだが、念のためにと病院に向かった訳である。

ちなみに京子は六花とは言葉を交わしてはいない。そりゃあもちろん挨拶や頭を下げる事くらいはしたが、何か意味のある言葉でのやり取りは行ってはいなかった。京子自身、もはや彼女に親しく話しかける事など出来なかつたし、六花もまたこちらを半ば疎んでいるであろう事は解っていた。

それにもちろん、何のかんの言いつつも六花も病み上がりなのだろう。普段通りに振舞っているように見えつつも、普段とは様子が異なっている事は京子も目ざとく気付いていた。用心深く六花が隠している倦み疲れた気配と——それと相反するような、奇妙に意欲を燃やす雰囲気。

六花が意欲を燃やす事そのものは別に警戒すべき事では無い。彼女が活力に満ち満ちた少女である事は、スケバンとして振舞っている事からも十二分に察する事が出来た。

ただ——彼女の瞳の中にある意欲の焰は、京子を見た時に燃え上がるのだ。

やはり時が来たのだ。宮坂京子はそう思っていた。

※

「……それじゃあね、宮坂さん。先生はそろそろ仕事があるから、ね」

「いえ良いんです米田先生。先生はいつだって、僕に付き合ってくれますから」

放課後。宮坂京子はゆるゆると去っていく米田先生を笑顔で見送っていた。後ろで一つに束ねられた黄金色の髪が静かに揺れるのを、京子は目を細めつつ眺めていた。米田先生が麗しい、美貌の教師である事は誰も知っている事だ。だが、その美貌は後ろ姿にもあるのだと京子は思っていた。金色の二尾も輝くような美しさを伴っており、自分の一尾など足許に及ばぬほどである。

いや——京子は知っていた。自身がどれだけ妖狐として振舞おうとしても、本質的にそれは叶わぬ事を。何せ自分は半妖なのだから。人間の母と妖狐の父。二つの異なる種族の血が混じり合つた半端者。それが宮坂京子だった。

優秀であろうと何であろうと半妖は何処まで行つても半妖に過ぎず、薄汚れた存在と見做される事もある。二年前に京子はその事を存分に思い知つた。だからこそ彼女は秩序を求め、風紀委員になつたのではないか。秩序こそが安寧であると。

その一方で、自分が何処に逝きつくのか。その事を思うと薄ら寒さを感じてしまうのだ。元々は人間とも妖狐ともつかぬ存在であつたはずが、今では女とも男ともつかぬ存在にさえなつていないか、と。あの日から女である事を疎み……だからこそ少年のように京子は振舞つている。しかし性自認まで男になつたわけでは無い。だというのに女教師たる米田先生に抱くのは恋慕の情だった。

僕は、私は一体どうすればいいの……自問しつつも、京子はそれを口にはしない。今の自分では中途半端なバケモノではない。優雅で美しい風紀委員長、乙女たちの憧れである宮坂君なのだ。その宮坂君が、たとえ傍に誰もいないと言えども、弱音を吐くのは許されない事なのだ。

それに京子は気付いていた。自分の傍らに少女たちが駆け寄つてきた事を。

「…………おやおやおや一人とも。どうしたのかな」

やってきたのは中等部の生徒、厳密に言えばアライグマ妖怪とフェネック妖狐の少女だった。どちらも慌てて駆け付けたらしい。汗と焦りの香りがこちらにも漂っていた。ラス子と呼ばれがちなアライグマ少女は顔を赤くしながらこちらを見上げている。一方でフェネックの少女は表向きは涼しい顔だった。それでも、尻尾の毛を逆立てて熱を逃しているようだが。

「宮坂様！ 報告なのだ！」

アライグマの少女は半歩前進すると、声を張り上げて京子に呼びかけたのだった。

※

「……………」主人様」

「どうしたのよタマ。あなたがこのタイミングで出てくるのは珍しいわね」

四尾の妖狐・塩原玉緒が姿を現したのはアライグマとフェネックの少女が報告を終えて立ち去った直後の事だった。もちろん学園の中であるのだが、塩原玉緒はそんな事を気にした素振りには全くもって見せていない。

ちなみに、今の玉緒は普段見せるチャイナ服姿ではなく、ワイシャツに落ち着いた色味のズボン姿である。仮に姿を見られたとしても、若手の教職員のひとりだと見過ごされそうな姿に擬態していた。

もつとも、塩原玉緒が他の誰かに見つかるようなヘマをしない事は、京子もよく知っ

ているのだが。

「どうもこうも、昨晚からご主人様は思い悩んでいる様子でしたから」

「……あなたが余計な事をするからでしょ。梅園さんや、鳥塚先生にも会つたらしいわね？」

京子の口から出たのは皮肉そのものであつたが、塩原玉緒は怯まなかつた。元より彼は京子よりも幾分大人なのだ。ついでに言えば九尾の末裔でもある。中途半端な半妖の小娘が囀つたくらいで、うろたえる様な手合いでは無い。そうした存在を他ならぬ京子が望んでいたのだから。

とはいえ、皮肉をぶつけないという欲求はそれとは別に湧き上がつて来た訳なのだが。

「余計な事とは手厳しいですなあ。ですが、僕の動きはご主人様が真になさりたい事に繋がっているのですよ。何せ僕は、ご主人様の願いや思いを知っているのですから。それこそ、ご主人様の知らない事、目をつぶっている事でさえもね」

心理学でいう所の四つの窓の事だわ。そんな事を思いつつも、京子は口をつぐんだままだった。

「そう言えば……そんな京子の姿を眺めながら、玉緒は言葉が続ける。

「なさりたい事と言えば、ご主人様は今、梅園さんと決闘なさりたいのではないですか。

丁度、あの騒がしくてにぎやかな二人組とも、決闘の話をなさつていたみたいですし」
「……あなたの力添えは要りませんからね、タマ」

「ええ。今回ばかりは僕もご主人様を見守るだけに致しますよ」

玉緒はそこまで言うのと、目を伏せて息を吐いた。その表情が妙に切なげで、京子の心をざわつかせる。

「梅園さんと正面からぶつかるのはご主人様自身の問題でしょうからね。そこに部外者である僕が立ち会つたら妙な事になるではありませんか。」

それに——正直なところ、僕も梅園さんの事は気に入っているんです。手荒な事はしたくないと思う程にね」

「やっぱりあなたも誑かされたのね」

京子は玉緒を睨みつけ、鋭く言い放った。おのれの声は、さながらチワワやポメラニアンのの甲高い啼き声のようだった。

「良いわよ玉緒。あなたは観覧席にでも紛れ込んで、私の活躍を見ていなさい。そもそも、決闘は一对一で行うのよ。忠実な部下と言えども、それを伴つて決闘に挑むなんておかしい話じゃない」

口早に京子が告げるも、玉緒は黙つて話を聞いているだけだった。それに気を良くした京子は、口許に笑みをたたえながら言葉を続ける。

「ふふふ。ねえ玉緒、私だけじゃあ非力な小娘だつて思つているでしょう。そんな事ないわよ。私は変化の術や分身術が得意だし、決闘の折に分身を出してもルール違反にはならないもの。ええ。強い分身を出す事だつて造作もないわ。三大仙でも、それこそ梅山の七怪でもね」

安心したでしょ。問いかけてみるも、塩原玉緒は何とも言えない表情で押し黙つていただけだった。

理事長への決闘許可申請

決闘制度を利用する。梅園六花と宮坂京子の兩名がそのように宣言をしたのは、朝のホームルームの後の事だった。しかも二人とも、ホームルーム後にこっそり担任や副担任に耳打ちするなどと言う可愛い手段は取らなかったのだ。

月曜だというのにやる気に満ち満ちていたのはそう言う事だったのか。休日の気分が未だ抜けきらぬトリニキは、ぼんやりとそんな事を思っていた。

決闘制度を口にした六花と京子の両目はキラキラと、いやギラギラとした輝きを伴っていた。獣の本能を、或いは妖怪としての魔性をトリニキに知らしめるかのように。

その眼のぎらつきは、二人が愛らしい風貌の少女だったからこそ一層異様さを示していた。彼女たちがあくまでも妖怪——宮坂京子は半妖であるが、種族自認は明らかに妖狐のそれなので、妖怪と見做して問題無かろう——である事を、トリニキは思い知るほかなかつた。

「決闘制度の申し込み、だね」

ため息の後に口を開いたのは今宮先生だった。彼は化け狸らしいつぶらな瞳で二人を見つめている。

「その件に関する打ち合わせは、鳥塚先生と一緒にやるつもりだけど、二人とも予定とかは大丈夫かな？」

「梅園さん……」

今宮先生の言葉を受け、トリニキは小さく呟いていた。特に六花の放課後の予定が気になったのだ。園芸部が、おおむね毎日行われている事は、副顧問であるトリニキも知っている。

しかも六花は比較的眞面目に部活に顔を出していたのだから尚更だ。

余談であるが、京子の放課後の予定についてはさほど注意を払ってはいなかった。文芸部に所属しつつも幽霊部員である彼女は、放課後は気まぐれに自由に過ごしていた事も知っていたのだ。

「今日の放課後ですね。僕は大丈夫ですよ、今宮先生に鳥塚先生」

京子の返答は予想通りの物だった。彼女は白晳の面に微笑をたたえながら言い足した。

「どの道このお話は早めに決めておきたいものですからね。ただ、梅園さんのご都合がどうなのか、そこだけが気がかりではあるのですが」

「アタシだって、今日は予定を空けるつもりだよ！」

流し目で見やる京子に対し、六花は即答した。気が昂っているのは背後で大きく揺れ

る二尾を見れば明白だ。

だがその昂りも、今宮先生やトリニキの視線に気づくとやや収まった。

「もちろん、園芸部の皆には……垣内部長には放課後までに訳を話しておくけれど。何も言わずに顔を出さないのは申し訳ないからさ」

しおらしい表情を浮かべ、六花はそう言った。編入生であるので園芸部にも入って間がない六花ではある。だが教師の目線からしても、彼女は十分園芸部に馴染んでいるらしかった。垣内部長の覚えもめでたく、六花もまた部長を敬い他の部員とも馴染もうとしていた訳だし。

トリニキはだから、律義さを見せる六花を安心させようと笑いかけた。

「大丈夫だよ梅園さん。入部して間がないけれど君が真面目にやっているのは僕たちも知っているし、決闘制度の打ち合わせとくれば、部長たちも解ってくれるだろうからね」

トリニキの言葉に、六花もまた笑顔を見せてくれたのだった。

※

その決闘が正当な物と呼べるか否か。それをどのようにして判断するのか、トリニキにはよく解らなかつた。無理からぬ話だ。トリニキとてこのあやかし学園に赴任して一週間ばかり経っただけに過ぎないのだから。決闘制度があるのだから、数日前に米田先生に教えてもらったからだつた。

それはもしかしたら今宮先生も同じ事だったのかもしれない。そうでなければ——そのまま二人の生徒と共に理事長室に直行しないだろうから。トリニキの見た規約では、まず担当が判断を下し、それから理事長や第三者機関に許諾を求めると書かれてあったではないか。但し、それを六花や京子は知らないのかもしれない。それじゃあ理事長に聞いてみようか。打ち合わせ開始五分でそう言った今宮先生に、何ら疑いの眼差しを向けてなどいないのだから。

理事長室は思いのほか質素だった。教室よりもうんと狭く、その狭い壁の両側に本棚が据えられ、その中央に執務用の机があると云ったごくごくシンプルなレイアウトだった。だがそれでも、部屋のあるじたる浜野宮理事長自身が圧倒的な存在感を放っていたために、執務室は重厚な雰囲気と覆われていた。ついでに言えば執務室の手前には理事長とは別の人物……妖物《じんぶつ》が控えていた。

その妖物《じんぶつ》ははた目にも上等そうなスーツをしれつと着こなしていた。見た目だけで言えばトリニキよりもいくらか年長の男性の姿であり、精悍かつ伶俐な風貌はイケオジと呼んでも遜色ないほどだ。彼もまた妖物であるようだが、トリニキがその事に気付けたのは妖気の為だった。完全に変化が出来るのか、元より人間に近い姿の妖怪——鬼や一部の天狗などのように、人型の妖怪も存在するのだ——なのかは定かではない。彼が高位の妖怪であろう事くらいしかトリニキには解らなかつたし、それが解れ

ば十分である気もした。

ちなみにこの妖物が何者であるかは、すぐに浜野宮理事長が教えてくれた。萩尾丸と言う名の犬神であるらしい。彼こそが第三者機関の代表であり、浜野宮理事長ともまあ色々縁故のある妖物なのだそうだ。

「……決闘の申請ですか」

今宮先生がかいつまんで説明すると、浜野宮理事長は小さな声で呟いていた。それから彼の視線は、さながら秘書のように控えている萩尾丸の方に向けられていた。

「わが校で決闘が行われたのは何年ぶりでしたっけ」

「私の記憶が正しければ、前回行われたのは十九年と二か月前の事だったかと思われま

す。比較的最近の事では無いでしょうか……私どもの尺度では」

前に決闘が行われたのは十九年前の事である。それを最近の事と言つてのけた萩尾丸の言葉に、トリニキは息を呑んだ。十九年前と言えば、トリニキはまだランドセルを背負った小学生に過ぎない。梅園六花だってまだ幼子だっただろうし、宮坂京子に至ってはまだ産まれてはいないはずだ。

「あはは、理事長も萩尾丸様も長く生きておられますから、その辺はおおらかにカウントなさるんですかねえ。ですが、鳥塚先生たちが困つておいでですよ」

おっとりとした口調ながらも今宮先生が助け舟を出してくれたのは有難かった。し

かし考えてみれば、二十年程度の歳月を短いと理事長と萩尾丸が言つてのけるのも無理からぬ事だと思つてもいた。浜野宮理事長は既に九百年も生きているという。萩尾丸の年齢は定かではないが、よもや百年や二百年生きた程度の若者では無かろう。

「それはそうとだね。私としては梅園さんが決闘を選ぶであろう事は薄々解つていたんだよね。何せ君は——三國君の姪なんだからさ」

自分がここに呼ばれた理由は解つている。そう言いたげな様子で萩尾丸は言い放つた。六花も直接言葉を発したわけでは無かったが、不敵な笑みと眼差しでもつて、その言葉を受け止めているではないか。

妖怪娘は矜持を魅せる

そうだともし、短く叫ぶように応じたのは梅園六花だった。彼女の二尾はピンと立ち上がり、小刻みにゆらゆらと揺れている。興奮し、或いは喜んでいる事はその横顔を見れば明らかだった。

よくよく六花を見てみると、感情のうねりでその二尾が動く事がままあった。尻尾の動きによる感情表現は、猫のそれと酷似している。雷獣と言う種族全体の傾向なのか、六花が猫に似た姿であるからなのかは定かではないが。

にわかには忍び笑いが漏れるのが聞こえた。トリニキはその音に驚き、自分でも大げさだと思う程に反応してしまった。笑いを漏らしたのは萩尾丸だったのだ。

「貴女の保護者である三國君の事から存じていたけれど、梅園さん、あなたも立派に育ちましたね。三國君が養女としてあなたを引き取った時は、まだほんの仔猫だったのに……」

見下ろすような萩尾丸の眼差しが、六花の身体に絡みついてるのはトリニキにも明らかだった。六花が柳眉を寄せ、不愉快そうに萩尾丸を睨みつけている。彼女とて年頃の少女だ。彼女の反応は至極当然な物であるとトリニキは思っていた。

「何だいオツサン。アタシをじろじろ眺めまわしやがって。やらしい事を考えてるんじゃないやねえだろうな」

梅園さん……！ 驚愕と恐怖に彩られた声がにわかにつながる。宮坂京子と今宮先生がほぼ同時に彼女に呼びかけたのだ。生真面目な京子はさておき、呑気な今宮先生まで声を上げるとは相当である。

ところが、萩尾丸はけろりとした表情で受け流すだけだった。六花の暴言ギリギリの言葉も、今宮先生たちの驚きの声すらも。

「やだなあ梅園さん。私が女の子などを相手に邪念を抱くだなんて思っているのかい？ 年頃の娘さんがそう言うのを気にするのはまあ自然な事なだけ……むしろ僕は鳥塚先生の方が好みなんだけど」

「とばっちりー！」

理事長や生徒の御前である事も忘れ、トリニキはつつい声声を上げてしまった。人由来の天狗は男好きの個体が多いという話はトリニキも知っている。だがそれでも戸惑ってしまう物は戸惑ってしまう物なのだ。

まあその冗談は脇に置きましよう。理事長室に流れる微妙な空気を、今宮先生の一言が払拭してくれた。

「軽く説明しました通り、梅園さんと宮坂さんの両名は互いに決闘を望んでおります。

その理由について正当性があるのかどうか。それを浜野宮理事長と萩尾丸様にご判断いただきたく思っている次第です」

「……二人が決闘するに値する理由がある。既に君たちの中ではそんな考えが組み上がっているのではないでしょうか」

今まで無言を貫いていた浜野宮理事長がここで口を開いた。

「鳥塚先生のみならず今宮先生も生徒が決闘を持ち掛けるシーンに出くわした事は少ないかと思えます。ですが、それでも決闘を行うに値しないと思ったのであれば、わざわざ私どもの前に出向く事は無かつたではありませんか。

決闘を行うべきではないと判断を下すのは、教師単体でも可能なのですから」

さて。一呼吸置いた浜野宮理事長の視線は、今は梅園六花に向けられていた。

「それでは諸君。何故君たちは決闘を望んでいるのか。それを聞かせていただきましょうか。そうですね……まずは梅園さんからどうぞ」

浜野宮理事長に促されるや否や、六花の口から小さな息が漏れた。老齡の鴉天狗を前に、彼女は堂々とした態度を崩す事は無い。むしろそれどころか、翠の瞳は燐光のごとき輝きを灯しているではないか。

「決闘を求める理由。それはこの学園生活で安寧を勝ち取るためさ」

「安寧を求めるために決闘を選ぶ。そう言いたいんですね？」

浜野宮理事長の問いかけには、いくばくかの皮肉が込められているように思ったのはトリニキの考えすぎであろうか。そして当の六花は、皮肉など意に介さないと云わんばかりに歯を見せて笑った。獰猛な獣の笑顔である。

「平和や安寧を得るためには血みどろの争いも辞さない時がある。その事は理事長や萩尾丸さんの方がご存じじゃあないのかい？」

「梅園さん……」

京子やトリニキのたじろぐ声すらも気にせず、六花は歌うように続ける。

「あ、もちろん宮坂さんをボコボコに打ちのめしたいって言ってるわけじゃないんで安心してほしいんだ。だが彼女はアタシの事が気に入らないみたいだね。それでわざわざ手下を使つて様子を窺わせたりしているんだよ」

浜野宮理事長も萩尾丸すらも、六花の主張に黙って耳を傾けるだけだった。唯一動揺の色を見せたのは宮坂京子だった。白皙の面は一層蒼ざめ、しかし興奮のためか額や首筋に蒼白い静脈が浮き上がっている。

「初めのうちはさ、単に向こうが目の敵にしていたとしても別に良いかなって思ったんだよ。だけど今は違う。そろそろケリをつけなれないと思ってるんだよ。そこで決闘制度があると知ったから、渡りに船だと思ってるくらいさ」

「梅園さん。貴女の主張はよく解りましたよ」

浜野宮理事長は静かに告げた。獣性丸出しの笑みを浮かべる六花に対し、落ち着いた様子を崩さないままに。

「萩尾丸さんではありませんが、私も貴女の養父である三國さんの事を思い出しましたよ。ええ、彼は獣の流儀を体现するような妖怪でしたからね。彼の事を敬愛する貴女ならば、その考えをそっくり継承していてもおかしくはありますまい」

そこまで言うのと、浜野宮理事長の視線は宮坂京子に向けられた。

「それでは宮坂さん。今度は貴女の意見をお聞かせ願えますか」

「は、い……」

たどたどしく返答する京子に対し、浜野宮理事長はさも優しげな笑みをを見せて言い添えた。

「実を言えば、宮坂さんが何故決闘制度を利用する事になったのか。そこそが私の知りたい所でもあるのです。私は貴女自身だけではなく、貴女の兄君たちや父上の事も存じていますからね。

それに宮坂さん。貴女自身は模範的な優等生であると、教師たちから聞き及んでおりました。ですから——」

「模範的な優等生、ですか」

理事長の言葉を半ば遮る形で京子が口を開いた。当惑してはいるものの、その声はも

う震えてなどはない。

「優等生であるならば、羊のように大人しく学園生活を送るはずだと、理事長は仰りたいのでしょうか。そもそも、私が模範的な優等生と言うのはいささか過大評価に過ぎると思いますか」

京子の物言いは流暢な物であったが、傍らで聞いているトリニキは彼女の物言いにいくばくかの違和感を抱いていた。もつとも、その違和感を考察する暇などは無かつたのだが。

「ですがそうですね……私が梅園さんとの決闘を望んだ動機は、それこそ優等生のそれになるのかもしれませんが。私が決闘を望むのは、学園の秩序を護るためなのですから」
「へえ……風紀委員の宮坂さんは、そんな事を思っていたんだな」

京子の主張に反応したのは梅園六花だった。彼女は今や両手をポケットに突っ込み、半ば目をすがめながら京子を見つめている。銀色の二尾は蛇のようにうねっていたが、やがて先端の方で山なりにカーブを描き、そこで動きを止めた。

「編入生で外様のアタシとやり合う事で学園の秩序が保たれるってか。ははっ、アタシもそれだけ影響力があるとは思わなかったよ」

「スケバンだなんて野蛮な事をしている挙句、貴女は男の人にまで色目を使っているだろう。それで影響力が無いだなんてすつとほけないで欲しいな」

「何だ。事ここに来て男の話になるのかい？ ああそうか、野柴君の事で——」

「はいはい二人とも。理事長の御前だから今ここで争うのはやめようね！」

顔を突き合わせて口論を始めようとした二人をいさめたのは、文字通り外様である萩尾丸だった。彼はわざわざ二人に呼びかける前に、手を叩いて注意を惹いたのだ。喧嘩をする猫に水をぶっかけるように。

「二人の意見は解りました。梅園さんに宮坂さん。続きは決闘制度で行うようにしましょうか」

目を丸くする二人の美少女妖怪に対し、浜野宮理事長は目を細めながら続けた。

「ええ、ええ。私はあなた方の決闘を正当な物だと認めたのですよ」

浜野宮理事長の口調は穏やかで、何処となく軽ささえ具えていた。しかしそれでも、二人の決闘を認めるという言葉には他ならなかった。

始まりたるは妖怪対決

雷獣の梅園六花と妖狐の宮坂京子。二人の妖怪少女が決闘にて相まみえる日がとうとう来てしまった。木曜日の六時間目の、ロングホームルームでの事だった。ロングホームルームに決闘を充てるのは合理的なようにも、破天荒な事のようにもトリニキには思えた。元よりトリニキは決闘などとは無縁の世界で今の今まで生きてきたから、こうしたぼんやりとした感想しか出てこなかったのだが。

実際に闘うのは六花と京子の二人であるが、他の生徒らはそれを見学する流れと相成った。それは生徒らが志願したというよりも、それもまたあやかし学園での決まりだったのだ。

あやかし学園の生徒の半数は妖怪である。それ以外は概ね半妖や人間であるわけであるが、人間であつたとしても今後は妖怪たちと深く関わる事からは逃れられない。そうした事を踏まえれば、クラスメイトが決闘する事を見学するのは意義がある——理事長などはそのように思っているらしかった。

或いはもつと単純に、生徒らを放つておいて自習させるのは教育上よろしくないという、大人の事情に基づいただけの話なのかもしれないが。決闘の間は、理事長はもちろ

んの事救護係の教諭、そして担任や副担任はこれを見届けなければならぬからだ。

そんな訳で、トリニキは今宮先生や受け持つ生徒らと共に決闘ルームに向かっていたのだ。見たまんまのセンスもへったくれもない名称とは裏腹に、決闘ルームは壮麗な、いや荘厳な雰囲気を漂わせていた。中世の闘技場をイメージしたデザインだったのだ。エリアのギリギリ外側には幾つもの紋様が刻み込まれている。結界術や防護術を展開させるための紋様なのだろうなとトリニキはぼんやりと思った。

「とうとう始まつちやうんだな……」

「ええ、ええ。二人とも闘る気満々のようですね」

トリニキの呟きを、今宮先生は即座に拾っていた。トリニキの視線は、ごく自然に決闘ルームの中央に向けられた。そこにはすでに、二人の少女が入場していたのだ。もちろん、というべきなのかどうかは悩ましい所であるが、二人とも学園指定の体操服姿である。

六花と京子の姿はここでも対照的だった。

雷獣娘の六花は半袖のシャツにハーフパンツ姿と、夏場に授業を受けるのかと言わんばかりの出で立ちであった。メリハリのある身体つきではある事はトリニキも知っていたが、女らしさを蓄えたその肢体は予想以上に筋肉が発達している。天空を駆けまわる雷獣という種族的な特徴なのだろうが、ともかく逞しく勇ましい姿である事には変わ

りない。

一方、狐娘の宮坂京子は、長袖長ズボンの体操服を着用していた。不必要に素肌を晒さぬように心を砕いているようにも見えなくもない。体操着である為か、彼女の華奢な身体の輪郭が、普段以上に露わになつていようようにトリニキには思えた。色の濃い体操服に白い肌がやけに映え、彼女に儂げな雰囲気を与えてもいた。

もつとも、六花と同じく挑むような笑みを浮かべている事には変わりないのだけだ。

「宮坂君……どうか勝つて頂戴」

「いやもう宮坂君カツコよすぎるやん。惚れてまうわ」

「それよか俺は梅園さんの方がぐつとくるなあ」

「そうそう、宮坂さんは真面目一辺倒だったからさあ」

「そんな……宮坂さんと梅園さんが決闘するなんて」

観客席に収まった生徒たちは既に興奮しており、思つた事を口に出している生徒すらいる始末だ。京子が圧倒的に支持されているかと思つていたが、あにはからんや六花の勝利や活躍を望む声もチラホラと聞こえるではないか。

——そう言えば、昔はコロッセオでの猛獣の対決や、或いは罪人の公開処刑が庶民たちの娯楽だったらしいなあ

気付けばトリニキの脳裏に、思い出さなくても良いような豆知識が浮き上がっていた。もちろんこれはどちらかの公開処刑ではない。危険だと当局が判断すれば決闘は終了するシステムになっているから、残虐な末路を生徒が目の当たりにする事は無いはずだ。

（大人だけじゃなくて学校に通っている視聴者も想定しているから、その辺は安心して大丈夫だよ。 B Y宮坂京子）

それでも生徒らが興奮しているのは致し方ないのだろう。トリニキはそんな風に思っていた。人間であれ妖怪であれ獣としての本能を持ち合わせている。闘争する姿を恐ろしく思いつつも、刺激的な物として心惹かれるのは自然の摂理なのだろう。

ましてや、今回相争うのは美しい少女二人なのだ。教師として、大人として下世話な考えである事は解っている。だが美少女が闘う姿を目の当たりにする事で、皆が（特に男子生徒が）興奮するという心理はトリニキも何となく理解できた。

そんな中でも六花も京子も泰然と微笑み、のみならず群衆に向けて手を振る事さえやってのけていた。六花は弾ける様な笑みを向けながら力強く快活に手を振っていて、京子はしっとりとした笑みを浮かべてほんのりと手を挙げていた。こんな所でも、二人は対照的だったのだ。

※

「とうとう楽しい決闘の始まりだなあ……もしかしたら、楽しい思いをするのはアタシだけかもしれないけどな」

ワーキヤー言う外野たちに背を向け、六花はにやりと笑った。見据える先にいるのはもちろん宮坂京子である。痩せぎすの身体を覆い隠すように、ジャージの体操服をきつちり着こんでいる。闘う最中に暑くなつてしょうがないだろうと思つてゐる六花とは対照的だった。

とはいえ京子は妖狐であり、しかも半妖だ。半妖だから体温も相当低いだろうし、暑さもそんなに感じないのかもしれない。六花はぼんやりとそんな事を思つていた。

「とんだご挨拶だね梅園さん。ふふつ、まるで君が初めから勝つみたいなの言ひ方じゃないか」

「勝つみたいも何も、わざわざ負ける醜態をさらすと解つた上で挑むなんて事をする間抜けが、一体何処に居るといふんだい？」

言いながら、六花はこらえきれず笑い声を立ててしまった。相変わらず徴収たる生徒たちの声は聞こえてくるが、教師からの叱責は無い。これも決闘の一部と見做してくれている事なのだろうか。

「だけどな、ひ弱なお嬢さんをいたぶる趣味はアタシだつて無いよ。だから今回はアステリオスは使わない」

「僕に対して手加減なさるおつもりで？」

笑い通しの六花であったが、それは実は京子も同じ事だった。彼女の白皙の面には、はつきりとした笑みが浮かんでいたのだから。六花みたいに声を上げて笑う事は無い。ただただ静かに、薄い唇に弧を描くだけだ。ひっそりとした、それでいて可憐な少女にはすぐわぬ禍々しい笑みだった。力を蓄え魔性を抱くという、ある意味妖狐らしい笑顔ともいえるだろう。

「梅園さん。よもやこの僕が、闘う術を持たないなんて思っているんじゃないだろうね」

言うや否や、京子が素早い動きでズボンのポケットから何かを取り出して放る。レシートよりもやや大きく太いそれは、護符の類だった。しかも六、七枚あるではないか。「梅園さんはさ、確か僕の従者である塩原玉緒を怖がっていたよね？ でもね、彼は今回の決闘に使うつもりはないから安心しなよ。規約違反になるし、何より僕は僕の力で勝りたいからね。」

「だけど——塩原玉緒がおらずとも、変化術をもってすれば僕は兵を呼び出す事が出来るんだよ」

京子はそこまで言うと、短く息を漏らしてから叫んだ。

「来たれ、ばいせんしちかい梅山七怪——！」

京子の叫びに呼応するように、まき散らされた護符が淡く輝きだした。それは徐々に膨張し人に似た形の輪郭をかたどっていき、やがて実体化した。

それはまさしく分身の術だった。しかし、現れた分身は人間ではなく妖狐ですらなかった。白猿・水牛・猪・山羊・白蛇・狼・蜈蚣むかとてんでバラバラの異形である。いずれも半獣人の様相を呈し、尚且つ鎧兜に身を固めた物々しい姿である。

「かの有名な姜子牙や二郎真君ですら仕留めるのにてこずった相手だ。もちろん本物と同じ力を持つわけでは無いけれど……梅園さんは何処まで持ちこたえてくれるかな？」
その言葉が皮切りと言わんばかりに、七種の異形が六花めがけて躍りかかってきた。

対決!
雷獣娘 v s 狐娘

「梅山七怪、だと……」

決闘が開始したのを見届けていたトリニキは、宮坂京子が繰り出した分身を見て思わず呟いた。封神演義や西遊記を耽読していた事もあるトリニキであるから、梅山七怪がいかなる妖怪なのかは知っている。

もしかしたら、生徒らの中には梅山七怪を知らぬ者もいるかもしれない。それでも一目見ただけで、梅山七怪の仰々しさ・恐ろしさは解るはずだ。何せむくつけき獣や蟲の本性をその面に露わにし、更には首から下は隆とした体軀の鎧武者なのだから。

分身術と言えども戦闘能力の高さが見え隠れしているようではなかった。

「随分と大掛かりな術ですね、これは」

隣に控える今宮先生は、相変わらず呑気な様子で会場に視線を向けるのみである。

「宮坂さんが変化術を筆頭とした妖術を得意とする事は僕も知っています。ですがそうだったとしても、彼女であれば搦め手を使うはず。あの分身たちは火力が強そうには見えませんが、その分不安定そうでもありますね」

蛇の道は蛇、そして狐狸の道は狐狸という物なのだろうか。冷静に解説する今宮先生

の姿を眺めながら、トリニキはぼんやりと思った。

「ご主人様も形振り構っていないのでしようね」

「なっ……君はっ……!」

ふいに隣——今宮先生がいる方とは反対側だ——から声が上がり、トリニキは驚いた。そして声の主の姿を網膜で捉えたがために、トリニキの驚きは深まった。

声の主は誰であろう塩原玉緒だったのだ。のつぺりとした、それでいて抜け目無さそうな面立ちは、嫌でも印象に残っている。但し、銀黒色の四尾は顕現させずに隠しており、ワイシャツにスラックスと落ち着いた衣裳ではあったが。

それでもトリニキは戸惑いうろたえた。塩原玉緒は京子の分身、それも京子の手から離れて動くタルパやイマジナリーフレンドのような存在だった。自身の意志を具え、それでいて宮坂京子の願望に従って動く。その上強大な力の持ち主と来ている。トリニキが警戒するのも無理からぬことだった。

「ああ、警戒しないでください鳥塚先生。生徒の皆様には僕の姿は見えないようにしています。それに僕はそもそもご主人様の闘いぶりを見届けて……有事の折に動くためだけにここにいますのですから」

トリニキが何か言う前に、塩原玉緒は手で何やらジェスチャーを交えながら弁明した。四尾を隠しているせいか、その物言いや言動は年相応の若者のそれにはしか見えな

い。前に会った時に感じた禍々しさや妖しさは感じられなかった。

「ええ、ええ。僕はこの度の決闘には……二人の勝敗の行方には関与しませんよ。ご主人様が僕の介入を望んでいませんし、僕自身もご主人様の問題だと思っと思っていますからね」

そこまで言うと、塩原玉緒はふう、と息を吐き乾いたであろう唇を湿らせていた。梅園六花を幻術でもって玩弄した存在とは思えぬような、妙な意味で若者らしい振る舞いだった。

「それにしても、ご主人様が力押しで乗り切ろうとなさるとは……確かに梅園さんはお強いでしょうけれど……」

塩原玉緒はそこまで言っつて、京子たちに視線を投げかけていた。物憂げな表情に見えたが、トリニキはついぞ声をかける事は無かった。

それよりも勝負の行方が、特に六花が大丈夫かどうか気がなってならなかったのだ。

※

牡牛のごとき恰幅の良い將軍の一人が、双角を振りかざしながら金色の玉を吐き出した。六花を狙って放たれたものであるが、もちろん六花は身をひねって回避した。高エネルギーを保有しているであろうそれは、一瞬であるが軌道を逸れた六花を追尾しよう

としていたようだ。しかし途中で小刻みに震え、元々の軌道をたどるしかなかった。

着地場所を探る六花の口許に笑みが浮かぶ。威力が凄まじくとも、当たらなければどうという事は無いんだよ！ 口には出さずに六花はそう思っていたのだ。

六花は雷獣であり、特に戦闘の才に長けている。稲妻よりも遅い攻撃を回避する事など訳ないのだ——攻撃の魔の手が伸びていると、解つていれば。

その六花の瞳が大きく見開かれる。着地しようとしていたおのれの胴に、しなやかな腕が巻き付いていた事に気付いたからだ。

振り仰ぐと腕の主がいた。

「チエックメイトだな、お嬢ちゃん」

六花を捉えた耳元で囁く。声はやや低く、何処となく粘着質な物を感じさせた。それはもしかしたら、声と共に感じた生臭い息のせいかもしれない。

横目で相手を確認する。やはり優男ではあるが、ねちっこそうな雰囲気を見せていた。

「呉竜《ごりゆう》に協力してもらって、私の位置をあやふやにしたんだ。いかな雷獣と言えども呉竜の暗雲には目がくらんだようだね」

絞め落としてやるよ。男の手の甲に鱗が浮かぶ。六花を抑え込まんとする腕の力は先程よりも増したようだった。だが六花は慌てなかった。

「糞蛇が、気安く女の腰に手を回しているんじゃないかねえ——!」

土星と共に、六花は雷撃を勢いよく放出した。蛇男の身体が強張るのを感じ取り、そのまま鳩尾めがけて肘鉄を喰らわせる。もちろん雷撃を伴ったままで。

胴に絡まる腕の感触が無くなったのを確認し、そのまま雷撃を鞭状に振るう。向こうが梅山七怪を繰り出すのならば、アタシのこれは雷公鞭だ。そんな事を思う六花は、そのまま雷の鞭を將軍の一人に振り下ろしていた。暗雲の残滓をそこに伴っていた將軍である。

やたらと黒光りする鎧が特徴的なその將軍は、大蜈蚣の姿を一瞬晒し、そうして脆くも消え去った。

「——蛇と蜈蚣《むかで》……これで二匹、か」

六花は唇を湿らせながら呟いた。おのれを捕えようとした蛇男と呉竜とかいう大蜈蚣の化け物がいた所には、それぞれ護符が落ちていただけだった。決闘が始まった時に、宮坂京子が護符を七枚放っていた事を、六花はこの時思い出していた。

件の護符には各々名前が書かれてあるのだが、名前を記したであろう墨は、単なる墨汁というにはやや赤褐色を帯びているようでもあった。

「宮坂さん……あんた自分の血を使ったな?」

六花は片眉を吊り上げて思わず京子に問いかけていた。護符に文字を書きつけるの

に使つたであろう墨汁には、かすかに血の臭いが混ざつていたのだ。

さて問いかけられた京子はとうとうと、何かの印を組みその場から動かぬままに頷いた。口角が僅かに上がり、あどけなくも禍々しい笑みはその面にふわりと浮かぶではないか。

「残念ながら僕はか弱いお嬢様らしいからね。普通のやり方じゃあ強い分身を出す事が出来ないんだよ。それに血液が、古来より呪物として効力を發揮するつて事は雷獣の梅園さんなら知つてるでしょ？」

三方より——残つた兵のうち、白猿と狼の二体の將軍は京子を護るべく左右に控えていたのだ——迫りくるまやかしの兵を受け流しながら、六花は無言のままだった。血液が呪物や護符として用いれば強力な効果を發揮するであろう事は、もちろん六花も知つていた。

特に雷神などは、血液や汚物でその身を汚されると一時的に神通力を失うという。雷獣は雷神とは別物であるという風説もあるにはあるが、それでも無視できない話である。特に強大な力を持ち、雷神への信仰心の篤い雷獣であればなおのこと。

理論的な話はこのままでしよう。正直なところ、梅園六花は宮坂京子の決闘への執念に一瞬とはいえ戦慄を覚えたのだ。妖術の媒体として血液が強力な力を發揮すると解つたとしても、果たしてそれを実行する者がどれほどいるだろうか。しかも京子が

使ったのは自身の血だという話だ。

猪八戒によく似た猪の將軍の振るう馬鍬をとんぼ返りで躲していた六花の瞳に、京子の姿が映り込む。印を組むその額には脂汗が滲んでいるが、それでも素肌を見せぬように体操服を上下ともきっちり着こんでいる。

体操服に隠された素肌には、血を絞り出すための傷があるのではないか。その考えが脳裏にとりつくや否や、あたかも自分が貧血になったかのような錯覚を抱いた。実際めまいめいたものを感じても何らおかしくない。將軍たち、梅山七怪の攻撃を全て回避できたわけでも無いのだから。

「雷獣が神性を抱くケダモノである事は、宮坂さんだつて知ってるだろう?」

雷撃で將軍たちを牽制しつつ、六花は京子に語り掛ける。見た目こそ梅山七怪は恐ろしいではあるが……それでも六花はおのれに勝機ありと踏んでいた。分身は術者のイメージに依存する。奇しくもそれは、梅山七怪にも当てはまっていたのだ。或いは京子は気付いていないのかもしれないが。

「良いか宮坂さん! 雷には浄化の力も宿っている! あんたの執念もそれで電気分解されるかもしれないな」

六花が叫ぶや否や、稲妻が六筋ほぼ同時に落とされた。それらがそれぞれ五体になった梅山七怪と、本体である宮坂京子を狙ったものである事は言うまでもない。

雷獣は振るい妖狐は吼える

六花の放った六筋の雷撃は、二人の戦況を残酷なまでにあぶりだした。トリニキはそう思わざるを得なかった。

梅山七怪《ばいざんしちかい》も、もう残っているのは僅かに三体のみだ。

残ったのは分身たる小猿を用心深く配置する白猿の將軍、その反対側で京子をそれとなく護衛する狼の將軍、そして恰幅がよく黄金色の飛び道具を吐き出した水牛の將軍だけだった。

更に言えば、水牛の將軍などは雷撃に耐えるのがやつとだったと言わんばかりの雰囲気を見せている訳だし。

博学ゆえに教えたがりな老妖怪たちによると、白猿の將軍・袁洪《えんこう》と狼の將軍・戴礼《たいれい》はどちらも梅山七怪の長であると伝わっているそうだ。しかも彼らは主だつて闘うのではなく、宮坂京子の護衛を主に行っていた。だからこそ、六花の猛攻を涼しい顔で持ちこたえたのではないか。そんな風にトリニキは推理していた。ちなみに將軍たちの名が判るのは、萩尾丸や気ままに巡回していた浜野宮理事長に教えてもらったからだ。

と、水牛の將軍・金大昇《きんたいしよう》がよろめきながらも歩を進めた。もちろん六花に向かっている訳だ。にじり寄る様な金大昇の動きは、しかし数歩ほどで止まってしまった。六花の手から伸びた雷撃の鞭が、金大昇を討ち取ったのである。京子が梅山七怪を繰り出したかと思えば、六花は雷公鞭《らいこうべん》で迎え撃つたという事か。呑気にトリニキが思っているうちに、六花の雷公鞭は更に二度振るわれる。

その時にはもう、白猿も狼も斃されて護符に戻っていた。

「——いやはや、梅園さんは本当にお強いんですね」

トリニキはついつい声を漏らしていた。教員として、決闘に臨む生徒のどちらかに肩入れするのは良くない事だと解っていた。それでも眼前の光景には嘆息せずにはいられなかった。六花はしかも、肌を上気させ息を弾ませてはいるものの、まだまだ余力は十分残っているように見受けられた。

「見た目だけではなく、実質的に火力も強かった梅山七怪を、ああも事もなげに全員討ち取ってしまうとは……」

呟きながら、トリニキは今度は京子に視線を向けた。彼女の顔は蒼白く、それでいて額には脂汗が滲んでいる。見開かれた瞳は驚愕に染まっていたが、それでいて何処か憑き物が落ちたような気配さえあつた。

「違いますよ鳥塚先生」

短くぴしやりと言ったのは、化け狸の今宮先生だった。のんびりおっとりした彼であるが、その顔には困ったような笑顔が浮かんでいる。

「確かに梅園さんは闘う事を得意としていますが……宮坂さんが梅山七怪などを繰り出した所で、こうなる事は僕たちも大体予想していたんです。

そもそも僕たち狐狸であつたとしても、分身を作り出し操るには相当な気力と精神力を消耗するのです。梅山七怪などと言つた強くて、それも数の多い者を操るとなるとその負荷は相当なものですよ」

それこそ二尾や三尾であつても音を上げてしまふ物だ——今宮先生の言葉に耳を傾けつつ、トリニキは京子を見やる。六花は二尾だが、京子は一尾に過ぎない。

「桃太郎の配下である三匹の獣ですとか、強力な妖怪や幻獣でも哮天犬やフェンリル一体のみを分身として繰り出してれば、或いは戦況は異なつていたかもしれません。ですがそれでも……予想以上に頑張つていると思えますよ」

「君ら狐狸妖怪の操る幻術は、電流で全てを見通す雷獣には特に相性が悪いみたいだもんねえ。宮坂さんが苦戦するも無理からぬことだよ」

いつの間にやら萩尾丸がふらりと立ち寄り、今宮先生の言葉に同意してはいないか。トリニキはそんなやり取りを聞きながら、隣に佇む塩原玉緒にふと視線を向けた。彼は真剣な表情のまま会場を食い入るように眺めていた。

よくよく考えれば、塩原玉緒もまた京子の分身の一つである。こうして彼がいるという事は、彼を顕現させるために京子が妖力やら気力やらを消費し続けているという事なのだろうか。或いは自律式の分身であるから、そっちの消費は考えなくても良いのだろうか。

いずれにせよ、無言で戦況を眺める塩原玉緒の表情は暗かった。京子が追い詰められて劣勢になっているのだ。そんな表情になるのも致し方ない事のように思えた。

そう思っていると、なんと塩原玉緒と目が合ってしまった。彼は残滓のような微笑みを見せると、唇を震わせながら呟いた。

「……いずれにせよ、ご主人様が望んだ事です。それを見届ける事こそが、僕にできる事なのです」

※

「——さーて宮坂さん。あんたの駒でありあんたの盾だった分身たちはいなくなつた。どうするんだい？」

雷撃の鞭で残つた分身を打ち破つてからおよそ一分後。六花は幾分気取つた様子で京子に尋ねた。分身を打ち破つてすぐに問いかけなかつたのは、六花もまた英気を養うためであつた。いかな馬力にも自信のある六花と言えども、何度も雷撃を繰り返して消耗してしまつたのだ。もつとも、あと少し決着をつけるだけの力ならば、数分も休まずと

も絞り出せるのだが。何せ馬力のある雷獣なのだから。

六花は臆せず、それでいて抜け目なく京子を観察していた。血走った双眸がきつく鋭くこちらを睨んでいる。まだまだ闘志は抜けきっていないようだ。だが血の気が失せた顔は唇までも蒼く、それでいて脂汗がそこに滲んでいる。消耗が烈しいのは六花の目から見れば明らかだった。

無論六花も多少は消耗している。だが京子はそれ以上に消耗しているではないか。それこそが勝負の分かれ目だと、六花は思っていた。

決闘で勝敗が決まるのは、何も相手が戦闘不能になって倒れる事のみではない。その前に相手が投降すればそこまでなのだ。

「もう大体勝負はついたとアタシは思っている。だから——」

「何を言ってるんだい、梅園さん？」

これまで無言だった京子が、六花の言葉を遮って口を開いた。少年めいたその声は妙におどろおどろしい。額から脂汗が伝うのも気にせず、京子はただただ微笑んでいた。妖怪めいた、真の妖怪たる六花さえ気圧される様な笑顔である。

「梅山七怪がああも打ち破られるとは僕も予想外だったよ。だけど、僕がここで諦めるとでもっ？」

京子の尻尾の毛がぶわりと拡がる。拡がった毛先からドロリとした妖気が放出され

るのを六花は目の当たりにした。

それとともに、京子の姿がゆっくりと変質していった。白皙の面は耳が伸びて尖り口許が裂けていき、鼻面が隆起して毛深くなつていったのだ。肌を見せぬようにと着込んでいた体操服の上に銀白色の毛並みが伸びあがり、ほっそりとした身体を獣臭漂う毛皮が覆つていったのだ。爪が湾曲し手先足先が丸まつていき、そうして変化は骨格にまで及んだらしい。

数秒と待たぬうちに、宮坂京子の姿は四足歩行の獣に変化していた。銀白色の毛並みのそれが、狐である事は言うまでもない。もつとも、その体軀がアラスカンマラミュートやカラフト犬に匹敵するサイズである事に目をつぶれば、の話であるが。

「おぎやああああ——！」

ぞろりと生え揃う獣の牙と、血のように紅い口の中を見せつけながら京子は咆哮した。その声の大きさと甲高さのために、周囲の空気が震えるような錯覚さえ六花は抱いた。狐の啼き声は何もコンコンやコヤーンなどと言った可愛い物だけではない。ギヤーツと啼く事もあるし、赤ん坊のような声で啼く妖狐もいるというではないか。

「お上品なお嬢様かなつて思つていたけれど、中々骨のある所があるじゃないか。はは、そうだよな。そうでなきゃあ決闘なんざやろうつて思わねえもんな」

京子は今や、口許や鼻腔から火焰を噴き上げている始末である。それが幻術であるの

か、フエンリルのように本当に火焰を吹き出しているのかは六花には解らない。鬼気迫る京子の姿を前に、六花の心は歓喜と期待に打ち震えていた。

「そうだとも！ やつぱりアタシらは妖怪で、獣だもんなあ。そっちがその気なら、最後まで迎え撃つてやる！」

言うや否や、六花もまたその身を獣のそれへと変貌させた。水色と金色にきらめく白銀の毛皮と、細長い二尾が特徴的な獣の姿である。狼ほどの大きさに膨れ上がっているため、猫に似た姿ながらも威厳と恐ろしさを保つ事が出来た。首周りの毛が長いので、たてがみを抱くライオンや高貴なオオヤマネコに見えるかもしれない。

雷鳴そのものの咆哮をあげる六花の許に、狐姿の宮坂京子が躍りかかって来る。

美少女妖怪の、二匹の若きケダモノの闘いはここからが正念場なのだ。

決着そして二人の和解

巨大な狐と化した宮坂京子と、これまたライオンともオオヤマネコともつかぬ獣の姿に変じた梅園六花の闘いは、純粋な肉弾戦へともつれ込んでいた。

はじめこそ両者こそ術らしい術を使つてはいた。京子は火焰を噴き出して六花が近づくのを阻み、六花もこれを牽制し防護するために雷撃をまとわねばならなかったのだから。

術の武器と鎧を互いに脱ぎ捨てた事にはいくつかの理由があつた。互いに牽制しあつたままではらちが明かず、そもそも術を行使し続けるには消耗し過ぎていたのだ。だからこそぶつかり合う事になった。

躍りかかつてきた京子が体当たりを仕掛ける。六花はこれを回避せず、前足と尻尾を使つて受け流し、右前足で京子に殴りかかった。京子の瞳が驚きに見開き、大げさなほどに後ずさる。

大げさな動きとは裏腹に、大してダメージは入っていないであろう事は六花も解つていた。これは両者の体重差によるものだ。実を言えば、六花の方がうんと軽かつたのだ。細身とはいえ人間の女性ほどの重さは京子にはあるだろう。一方、六花の本来の姿

は確かに獣であるが、その大きさは柴犬よりやや小さい程度に留まっている。体重も十キ口弱であり、人間や半妖に較べれば格段に軽い。

ともすれば五倍近い重量差が、京子と六花の間にはあつたのだ。

しかしだからと言って、自分が劣勢になるなどは六花は思っていない。もちろん、妖怪として体格差や体重差が物を言う場合もあるにはある。しかし、勝敗はそれのみで決まるほど単純なものではない。

例えば猫は、おのれの二倍の体重の犬と互角の強さを保有するという。そしてその犬は、おのれの三倍の体重を持つ人間を打ち負かす事が出来るのだ。

すなわち、猫に近い体を持つ六花では、五、六倍の体重差のある人間や半妖など敵のうちに入らない。ましてや向こうは荒ぶつているとはいえ、妖術の使用で心身ともに消耗しているのだから。

両者の取っ組み合いは、時に爪と牙をも用いた獣同士の闘いはものの数分で収束した。肩口の辺りに雷獣パンチを受けた京子は、ヒーツと悲鳴を上げ、そのまま耳を伏せてへたり込んでしまったのだ。はずみで横向きに転がってもいる。

腹を波打たせて呼吸を繰り返すうちに、その姿が変化していく。巨大な狐の姿から、普段見慣れた半妖少女の姿に戻っていたのだ。大きな傷もなく、特別頑丈な造りの運動着の上着が若干ほつれている程度である。

しかしそれでも、乱れて無造作に額や頬にかかる黒髪や、物憂げな瞳こそが彼女の心境と状況を如実に物語っていた。

獣の姿でそれを見下ろしていた六花も、術で人型に変化し直した。

「おめでとう梅園さん。僕の負けだ。君は僕に勝ったんだよ、梅園さん……」

京子は首をもたげると、たどたどしい口調で言葉を吐き出した。

そうか、アタシの勝ちなんだな？

事実確認のための六花の言葉に、京子は応じる事はなかった。言いたい事を言い切つたであろう彼女は、そのまま静かに失神していたからだ。目を伏せたその面は、思いがけぬほどあどけなく、そしてそれこそ憑き物が落ちたような、何処か満ち足りたような表情でもあった。

横たわる京子の傍に伸びる影に、何かが入り込んだ気がした。だが次の瞬間には救護班らしき面々に六花たちは包囲され、それが何だったか考える暇などは無かった。

※

決闘が終わつた直後に、宮坂京子と梅園六花はそのまま保健室へと連行された。命に別条がないように取り計らわれた決闘と言えども、京子は意識を失つてしまったのだ。保健室の教諭に看てもらうのは当然の事であろう。

ちなみに六花は特に変わった様子はないが、やはり念のために見て貰うという形と

なつたのだ。

そして宮坂京子が担架で運ばれている時には、既に塩原玉緒の姿は忽然と消えていた。もつとも、彼の存在に気付いたものは少なかつたので、騒ぎ立てる手合いはいなかつたけれど。

「……本当に、お騒がせして申し訳ありませんでした」

二人が保健室に連行されてから十分余り。トリニキは保健室に赴いていた。その数分前に京子が目を覚ましたので、来訪しても大丈夫であるとサカイ教諭から許可を頂いたところでもあつたのだ。

ベッドに身を預けていた京子は、トリニキの姿を見るなり半身を起こし、居住まいを正して謝罪したのだ。静かに、それでも凜とした気配を崩さずに告げる京子の姿は、まさに可憐な少女そのものだった。

ちなみに六花は多少の打ち身があつたという事でやはり大事には至つてないらしい。しかし身体が火照つたらしく、冷却シートを額に貼つて丸椅子に腰かけていた。もしかしたら、彼女も京子を心配していて、目が覚めるのを見届けようと思つていたのかも知れない。

「私、先生方にも梅園さんにも迷惑をかけたと思つています。今回の決闘でもご心配をおかけしたでしょうし、それよりも前だつて……」

京子はそう言つて手を組んできつく握りしめた。彼女のその横には、いつの間にもやら仔狐が一匹侍つてゐるのではないか。大きさは猫の仔ほどしかなくて、銀黒色の毛並みに覆われた一尾だった。

塩原玉緒じやんか。六花は仔狐を見るやそう言った。恐れのない、世間話でもするかのような口調で。

「宮坂さんが運ばれている時に、何かが影に入り込んだのをアタシは見たんだ。だけどそうか、あの時はあんただったのか……」

塩原玉緒と呼ばれた仔狐は何も言わなかった。だがぼつの悪そうな表情で耳を伏せ、匍匐前進のまま後ずさつて布団の奥へと消えていった。

おのれの妖力やらエネルギー的な物を、塩原玉緒は京子に分け与えたのだろ。仔狐姿の塩原玉緒を見たトリニキはそんな事を思った。通常、妖怪が別の妖怪に妖気を分け与えるのは危険な行為である。適合しない場合があるためだ。

しかし、塩原玉緒は宮坂京子の分身であり、妖気はほぼ同じなのだという。であれば妖気の消耗が烈しく昏倒した京子に妖気を分けたとしても、毒になる事はあるまい。初めからこうなる事が解つていたからこそ、塩原玉緒はあの場に堂々と姿を現していたのかも知れない。トリニキはそんな事を思つていた。

「タマの、塩原玉緒の事でも迷惑をかけてしまったわ……」

塩原玉緒。その名にはあるじである京子もまた反応した。彼が隠れた先を京子は見やっていたが、隠れた分身を探す事はすぐに諦めたようだった。トリニキにまず謝罪していた京子であるが、今回は六花に視線を向けていた。

「特に梅園さんには怖い思いをさせてしまったみたいですし……あんな事がとつても悪い事だつて、私たちは知っていたはずなのに」

「気にしなくて良いさ宮坂さん」

深刻そうな京子の言葉に対し、六花は歯を見せて笑っていた。

「あの時はアタシも少し気を張っていたからさ、家に帰って安心して、ついでに可愛いチビ共を見て、それで気が緩んだだけだよ。聞けば塩原玉緒つてやつも悪いやつじゃないって解った訳だしさ……」

「……梅園さん」

六花の言葉を聞き終えた京子が、静かに彼女の名を呼んだ。その声には何とも言えない甘みが伴っている事にトリニキは気付いてしまった。

「私、ようやく本当の願いが解つたの。本当は、梅園さんと友達になりたかっただけなんだった」

京子の声はやはり甘みを伴っていた。のみならず、暗い琥珀色の瞳も何処かトロリとしている。その眼の意味が何であるのか……アラサーであるトリニキには解つてし

まった。

六花はというと、流石にこの京子の言葉には驚いたらしく、丸い瞳を大きく見開いている。

「梅園さんには今まで辛く当たってきたかもしれないけれど……本当はね梅園さん。貴女の事が心底羨ましかったの。新しい学校で知り合いも友達もないはずなのに明るく自然体に振舞っていて、それでいて皆を魅了するものを貴女は持っていた。

それに……それに梅園さんは女の子である事にも縛られて無かったでしょ。その事が私には羨ましくてしようがなかったの……！」

先程から、京子は少女めいた口調で話しかけているではないか。トリニキも既にその事に気付いていた。少女めいたというのは間違いであろう。宮坂京子は真実少女であるのだから。普段見せている優雅で中性的な男装の麗人の姿は、京子が作り上げた虚像に過ぎない。その事を今更ながらトリニキは思い知った気がした。

宮坂さん……六花が呟いたのがトリニキの耳朶をくすぐった。

「身勝手な事だつて笑つても構わないわ。うふふ、これまでの僕の……私の言動を見た上でこんな話をされれば腹を立てても可笑しくないもの。それでも、梅園さんが良ければ私と友達になつて欲しいの」

そう言うのと、京子は何かを思い出したらしく一層笑みを深めた。

「大丈夫よ梅園さん。私は決闘に負けた身分です。だから梅園さんに服従する覚悟はできていますわ。文字通り何でも……というのは難しいけれど、それでも梅園さんの言う事は聞くから、ね」

「宮坂さん！ 決闘はそういう意味でやる物じゃあ……」

何でもするつてめちやくちや危険な言葉じゃないか……大人として世の残酷さを知っているトリニキは、京子に対して教育的指導を入れようとした。しかし、それに待ったをかけるかのように六花が口を開き、あからさまにため息をついてみせたのだ。

「全く、野柴君と言いい宮坂さんと言いい、お狐様は誰かに従うのが大好きなのか？

良いか宮坂さん。アタシは別に手下を求めてこの学園に来た訳じゃあないんだよ。そう言えばあんたはさつき、アタシの言う事を聞くなんて言つてたよな。だつたらさ……アタシなんぞにおもねつたり媚びたりするな。宮坂さんはアタシの事を敵視してはなくて、友達になりたいって事がもうはつきりしているんだ。だつたらそれで良いよ」

六花は思い出したように瞬きし、少し照れたように言い足した。

「それとき、この学園での暮らしというか、雰囲気みたいなのも教えてくれたら嬉しいかな。言うてまだアタシも編入生で詳しくないし、女子からの意見つて言うのもそろそろ欲しかったからさ」

「ありがとう梅園さん……本当に、貴女って素敵なのね……」

京子はそう言つて微笑み、六花の手をおのれの両手で包み込んだ。

トリニキはそれを見てひとまず安堵した。京子と六花が和解したその瞬間を、この目でしかと見届ける事が出来たからだ。

若干京子の瞳が熱っぽいような気もするが、相手が六花だったら大丈夫だろう。何となくそんな気がしたのだった。

シーズン2：嵐を呼ぶ？ 校外学習

ツツジで繋がる朝の一幕

「それじゃ、行つてきまーす」

スケバン雷獣・梅園六花の朝は妖並の物である。目が覚めるのは多少早いのもかもしれないが、だからと言つてその分早く登校するわけでもない。あやかし学園に編入してから既に一か月近く経つ。学園へ向かうルートは近道や裏道も含めておおよそ把握していた。それに雷獣だから、いざとなれば空を飛んで移動するという手段を取る事だつてできる訳だし。

しかしそれ以上に、六花は家族とのふれあいを心から楽しんでいた。特に——幼い弟妹である野分と青葉とのふれあいを、だ。

だからこそ、学校に向かうこの瞬間は六花にとっては少しだけ憂鬱だったのだ。可愛い弟妹達、野分と青葉にしばしの別れを告げなければならなかったためだ。今日だって、野分も青葉も名残惜しそうに姉の姿を見ているではないか。

「行つてらっしやい、おねえちゃん……」

「おねえちゃん！ 早くかえつてきてよね！」

「行つてらっしゃいませ六花お嬢様。さ、野分お坊ちやまに青葉お嬢様も、保育園に行く準備をしましょうね」

弟の野分はおずおずとした様子で、妹の青葉は元気よく六花を送り出そうとしていた。野分と青葉はこの一月で五歳になっていた。人間で言えば二、三歳ほどであるが、既に性格の差ははつきりとしたものになっている。

その二人をなだめるように撫でているのは使用妖の飯綱美咲である。野分たち兄妹とその姉である六花の面倒を見てくれる、姐やみたいな存在だった。見た感じでは六花より少し年上にしか見えないが、彼女については姉のように慕っていた事もあり、実の所六花も頭が上がらない節はあるにはある。

「サキ姉も何時もありがとー。三人とも気を付けて、なー」

今一度挨拶をすると、六花は元気よく家をあとにしたのだった。

※

通学路を辿る六花の目に映ったのは、咲き誇るヒラドツツジの花々だった。元より大ぶりの花であるのだが、色調も紫に近い濃いピンクであるから尚更目を惹く。

それにしても、今年はいつともよりも早く花をつけたのだなあ。もはや緑の葉が見えぬほどに咲いているツツジの花に六花はそんな事を思った。

ツツジの花は五月にようやく満開になると言われているが、温暖化の進むご時世では

そうでもないらしい。

六花はそれから、花の根元にある蜜の事を思い出した。もちろん朝食は登校前にきちんと済ませている。しかしそれはそれ、これはこれなのだ。

ツツジの蜜なんて実家にいた時以来だし、たまには良いかな。ふとそんな事を思い、一步、二歩とツツジの許へ六花は近付く。

「おはよう、梅園さん」

そこで声が掛けられ、六花は思わず歩を止めた。振り返った先にいるのは学ラン姿の少女だ。春の終わりという事でそろそろ暑くなり始めた時期ではあるものの、彼女は上下とも黒づくめの制服をきっちり着こみ、しかも汗をかいている気配もない。白い頬は六花の存在を認めるや、ほのかに赤味を帯び始めていた。

この少女は宮坂京子という。六花と同じクラスに属する一尾の妖狐だ。厳密には母が人間なので半妖であるが、その振る舞いや使いこなす妖術は純血の妖狐と大差ない。

「お、宮坂さんじゃないか。おはよう。奇遇だな、こんな所で会うなんて」

「奇遇も何も、ここは通学路じゃないか」

へどもどししながら口にした六花の言葉に、京子は頬を緩ませた。含みの無い笑顔である。

「お互いご近所同士だし、時間帯が合えば顔を合わせるのとはそんなにおかしな事では無

いと思うんだけどなあ……それはそうと梅園さん。ツツジの花を見てたけどどうしたの？」

「ちっちゃい時にツツジの蜜を吸った事を思い出したんだ」

六花が素直にそう言うと、京子は困ったように柳眉を寄せた。その態度は、まさしく生真面目な風紀委員らしい振る舞いだった。

「ツツジの蜜だつて？ 確かにあれは甘いつて僕も聞いた事はあるけれど……やめておいた方がよいよ。梅園さんが毒に当たっても気の毒だし、それにそんな事で炎上してしまつても大変だからさ」

「確かに、宮坂さんの言葉にも一理あるよな」

生真面目な、それでいて気づかわしげな京子の言葉に六花は素直に納得し始めていた。

「アタシは雷獣だから多少の毒なんざ怖くないけれど、流石に炎上は避けたいからね」
六花はそう言つて、照れたようにその顔に笑みを浮かべた。思っている事が顔に出してしまい、もしかしたらいびつな表情になっているのかもしれない。

アタシはさ、これでももう真面目に暮らそうと思つているんだ。直後に放つたその言葉は、世辞でも社交辞令でもなく本心からの言葉だった。元より六花は貴族の子女である。今は訳あつて本家を離れ叔父夫婦の許に身を寄せているが、いずれは正式な次期当

主として返り咲くつもりだ。それが叶わなかった場合は、叔父の組織を受け継ぐという未来もあるにはある。

いずれにせよ、六花は将来を約束された身分なのだ。しかもこの度あやかし学園に高等部から編入する事になったのも、元々通っていた中学校での素行の悪さが目立ったからに他ならない。

それらの事を踏まえ、六花は学園に馴染み、真面目に学生生活を送ろうと密かに思っていたのである。

「ともかくありがとう宮坂さん。ははは、やっぱり風紀委員だけあって、学園の外でも色々と気を配ってくれているんだな」

「そんな風に言われると恥ずかしいよ、梅園さん……」

今度は京子が照れたような表情を浮かべる番だった。風紀委員という単語を使った所に、六花は特に深い意味を持たせているわけでは無い。ただ単に事実として言及しただけだ。

だが京子はそうは思わなかったらしい。風紀委員である彼女は、かつて六花の事を学園に混乱をもたらす異分子として密かに敵視していたのだ。その事を思い出し、気恥ずかしく思っているのかもしれない。

京子が目の敵にしていた事について、六花は実の所もうほとんど気にしていなかつ

た。先日行った決闘でケリがついたと思っただけだ。学園内公認での決闘では六花が勝利を収める結果と相成ったのだ。敗北した京子は素直に負けを認め、六花への敵愾心も潔く捨て去っていた。そして今は同じクラスの友達として、こうして六花に接してくれているのだ。

本当は梅園さんと友達になりたかったのかもしれない。決闘が終わった直後に京子はそんな事を言っていたが、果たしてそれは真実だったのだ。今でも彼女は男装の麗人として振舞い、そして一定の気位の高さを周囲に保つ事は出来ている。しかし六花の前では懐っこい仔犬や甘え上手な妹のような態度が見え隠れする事があるのだ。実際京子は末っ子で兄らとは歳が離れているという事だから、妹みたいな性質というのはあながち間違いでは無いのだが。

同級生なのに弟分や妹分になってしまおうとはこれ如何に。そんな風に六花は悩んだりする事は特に無い。六花はしようもない事についてあれこれ深く考える性質では無いし、そもそも六花は長姉である。妹分や弟分の面倒を見るのは好きな性質だから、六花も六花で満更でも無いのだった。

「あー、それにしてももうすぐ連休だよなあ。と言っても、アタシらは学生だから連休は祭日だけになるんだけど」

ゆったりと歩を進めながら、六花は思った事を口にしていった。ツツジの花から連想し

ていくと、やはりどうしても連休に突き当たるのだ。

「梅園さんってば、もう連休の事を考えているんだね。でもちよつと気が早いと思うんだけど……」

「気が早いつて何でさ？ 連休の前に何かあつたつけ？」

「梅園さん。連休前には校外学習があるんだよ」

校外学習。言い含める様な京子の言葉に、六花は視線を彷徨わせ軽く思索にふける事となつたのだった。

妖怪娘、校外学習について語る

「校外学習か。そう言えば、そんな話もあったなあ」

宮坂京子の言葉に、六花はフワツとした口調で応じていた。よくよく思い出せば、そんな話が担任や副担任から行われていたような気もする。

「クラスメイト達の親睦を深めるためについて言う名目で校外学習は毎年やっているんだよ。と言っても、うちは中等部から入る生徒がほとんどだから、高等部に上がるころには見知らぬヒトばかりって事も無いんだろうけれど」

宮坂さんってこんな話し方もできるのか。口には出さぬままに六花はそんな事を思っていた。京子は風紀委員を勤めあげ、万事真面目に学校生活を送っているのだと六花は思っていた。しかし校外学習の説明については、その企画主を少し小馬鹿にしたような雰囲気か漂っていたのだ。もつとも、それは京子自身が意識した物なのかは定かではないが。

行先はキョートかナラのどちらかなのだと京子は付け足して説明してくれた。年ごとに交代になっており、今年もキョートなのだとか。

「キョートにしるナラにしるお寺とか神社とかが多いからね。そう言う所を生徒たちに

見て貰って、それで信心深くというか……お行儀良くなって欲しいって考えているんじゃないかな」

「キョートかあ。そりゃあ楽しみだな」

校外学習の行き先を知り、六花はにんまりと微笑んだ。中学校までの校外学習と言えば、近場の公園でお茶を濁すようなものだったから、思いがけず遠出するという事を知り嬉しくなったのだ。

ちなみに校外学習といったイベントはもつと早い段階に何がしかの連絡があっただろうというツツコミは申し訳ないが控えて欲しい。六花は編入生で学園そのものに馴染む事に心を砕いていたし、決闘という超絶大イベントをこなした後であるから、その事について失念していただけかもしれないのだから。

それはそうと、キョートで寺社を巡るといふ所に六花は心を惹かれていた。

「あらかじめ言っておくけれど、アタシはこう見えて信心深いんだ。まあこれは位の高い雷獣たちに共通する特徴でもあるんだけど……ともかく、アタシも叔父貴も道真公に對しては、折々の節目でのお参りは欠かさないしね」

妖怪たちの中でも神社仏閣を尊ぶ者は珍しくないが、雷獣はその中でも別格である。六花はそのように思っていた。その日暮らしの野良雷獣は別として、雷獣たちは概ね好みの雷神を信仰するのが常だった。

でも変だなあ……まだ先の校外学習の事をあれこれ考えていた六花であるが、ある事に気付いて首を傾げた。

「校外学習とかき、その手のイベントがあつたら、先生も前もつてHRとかで連絡してくれると思つてただけ……なあ宮坂さん。そんな話つてあつた？」

六花が疑問をぶつけると、京子は何故か照れたような笑みを浮かべた。頬が火照つたように赤味を増しているではないか。

「もちろん、本当は先生たちがその話もするはずだったんだ。班分けとかもあるからね。だけど先週は僕たちも決闘しちやつたでしょ。それで先生もクラスメイト達もその事を忘れちやつただけなんだ」

「あつそうか。それだつたらしやあないか」

恥じらうような京子の言葉に六花も納得の声を漏らした。後で知つたのだが、決闘するにあたつて教師たちもあれやこれやと準備を行つていたらしい。その後も、もちろん六花や京子の両名に何か体調不良や不具合が起きないか、注意深く様子を観察していたそうであるし。

そんな事ならば、校外学習の件について忘れるのも致し方なからう。六花はそのように思つていた。話を聞くに、校外学習の方は大体どんなものであるか決まっているようだし。

そんな事であるが、校外学習については今後のHRにて班分けを行ったり段取りの話が行われたりするのだろう。であればその流れに乗ればいいだけだ。京子の話を聞いた六花は、ぼんやりとそう思っていた。

そうしているうちに、二人は徐々に学園に近付いていた。壮麗な学園の姿が見えるころには、既に学園に向かう生徒たちの姿もそこそこで見受けられた。

「あ、宮坂君だ！」

「宮坂先輩、おはようございまーす」

「あれ、隣にいるのって……」

「梅園さんじゃなか。うわめっちゃ美人だし！」

京子の姿を目撃した生徒たちの中から歓声とも嘆息ともつかぬ声がチラホラと上がる。その声の中には、六花についてあれこれ語る声もあるにはあった。

「みんな、おはよう。元気そうで何よりだよ」

そんな生徒たち——学年も性別も、或いは高等部か中等部かもてんでバラバラだった——に対して、慣れた様子で京子は挨拶を返していた。

六花自身は大勢の若妖怪に囲まれても特段気後れする性質ではない。しかしそれでも、宮坂京子の堂々とした立ち振る舞いには素直に感嘆していた。初めは妙に気取っただけのお嬢様だと思っていたのだが、最近はその考えを改めている。気取った態度を

取っているように見えるが、肝の据わった一面もあるのだ、と。

ちなみに先の決闘で敗北してしまった京子であるが、しかしだからと言って彼女の評判が落ちる事も無かった。それもこれも、彼女の日頃の行いによるものなのかもしれない。

トリニキの朝

場所は変わってあやかし学園内の職員室。

生徒たちはポツポツと登校しはじめている頃合いであるが、トリニキの姿は職員室の中にあつた。しかも既に仕事前の段取りを進めている最中である。

雷獣娘・六花の朝も早い、教師の朝もちろん早い。授業を受けるだけで問題のない呑気な生徒たちと異なり、教師は授業の準備や生徒の監督を行わねばならないのだから。

だがそれでも、トリニキの業務は——あやかし学園の教員たちの負担は、他の学校の教員のそれよりも軽い物なのだという。

トリニキが副担任という立場である事からも解る通り、あやかし学園は通常の公立高校などよりも教員の数が多いのだ。普通の公立中学や公立高校であれば、あやかし学園の教師の倍近い業務が待ち構えているのかもしれない。その点ではあやかし学園は楽だった。

但し——人間以上の力と知恵を持つ妖怪たちと、同じ空間にいる事を許容できればの話であるが。

表向きは、この世界では人間と妖怪は概ね友好的に共存している事になってはいる。だがそれでも、人間向け・人間専用の施設が多い事もまた事実だった。何のかんの言いつつも、妖怪を怖れる人間は一定数存在するという事だ。逆もまたしかりなのだが。

「おはようございます、鳥塚先生」

そんなトリニキの許に声が掛けられる。声の主は米田先生だ。一見すれば二十歳前後の女子大生と言っても通じそうな若々しい姿である。だが背後で揺れる金色のふさふさした二尾が、彼女の本性を明らかにしていた。彼女は妖狐であり、既に百歳以上生きていくという。長命な妖怪の中にあつて、大人と見做される年齢でもあつた。

トリニキが挨拶を返すと、米田先生はニコリと微笑んだ。成程、生徒のみならず独身の若教師からも慕われる妖物だと、トリニキは素直に思っていた。愛想のよい美人教師となれば、思春期真っただ中の生徒であればいつい夢中になってしまふだろう。少し前までは、米田先生の傍らには宮坂京子が侍っていた。しかし、米田先生を恋慕する生徒は、何も彼女だけでは無かつたのだ。

むしろ最近では、京子が米田先生にべつたりでなくなつた分、他の生徒が米田先生を慕う姿が明らかになつたような気さえしてならない。

「先生もお元氣そうで安心しましたわ。鳥塚先生は、こちらの学園に新任なさつて間がないというのに、初めての事ばかりが立て続けにあつたようですから」

「ご心配頂きありがとうございます」

米田先生の言葉に、トリニキはひとまず礼を述べた。初めての事づくしなのは米田先生の言うとおりである。塾講師を勤めていたトリニキであるが、まずもって教師として教壇に立つのは初めての事だった。しかも副担任と言えども受け持ったクラスには編入生もいた訳であるし。

極めつけは決闘制度に教師として立ち会わねばならなかった事だろう。ルールにのっとったものと言えども、まだ子供ともいえる生徒らが闘う所を、教師として目の当たりにするのは流石に思っていなかったのだ。学園物の小説やアニメなどで決闘が行われるというのを見たり読んだりした事はあるにはある。しかし物語の出来事と実際に繰り広げられる物は全くもって違っていた。

ついでに言えば、決闘が終わった後のケア——当事者たちだけではなく、他のクラスメイトも対象となる——なども、教師たちが担わなければならない事柄だったのだ。

「やはり梅園さんと宮坂さんが決闘したというのは……正直言つて僕も驚き通しでしたよ。二人の気質上、ぶつかるのは避けられませんでしたからね。」

ですが、その後は思っていた以上に丸く収まっているみたいなので、それが不幸中の幸いかと思っております」

トリニキは目を細め、決闘後の六花たちの事を思い返した。学園内での存在意義と学

園内の秩序を護るため。そんなエゴ丸出しのぶつかり合いは、結局の所編入生である梅園六花の勝利という事で決着がついた。

その後保健室で宮坂京子は「私は梅園さんと友達になりたかった」と漏らしたのだが、それは果たして本当の事だったのだ。京子は今や、何のこだわりもなく六花に近づくようになったのだから。六花もまた、そんな京子を受け入れていた。

男装の麗人という、中性的な京子の振る舞いや姿は今まで通りではある。しかしいつの間にか、六花と京子は元々仲が良かったかのように振舞っているのだ。六花は面倒見の良い所があり、京子は意外にも甘えん坊で寂しがりやな気質の持ち主だったらしい。二人が同級生でありながら、時に姉妹のように——六花の方が姉であり、京子の方が妹のような感じだ——見えるのも、或いはそうした所にあるのかもしれない。

余談だが京子が米田先生にべったりでなくなったのも、決闘後からの事なのだそう
だ。

クラスメイトからの心証が悪くなるという事も無かったし、その部分に関してはトリニキも良かった事だと素直に思っていた。もしかしたら、妖怪たちは力関係がはつきりとしたら、それ以上は後追いしないという特性を持ち合わせているのかもしれない。便宜的に人間の姿を取るものの、妖怪の本質は獣のそれと変わらないのだから。

「初めてづくしで大変でしょうけれど、そろそろ校外学習の事も考えないといけません

よね」

「あ、本当だ……！」

校外学習。米田先生のその言葉に、トリニキも学園内で控えるイベントの事を思い出したのだった。

トリニキ、校外学習を思う

「校外学習つて、今年は確かキョートに向かうという話でしたよね」

その通りですわ。弾かれたように問いかけるトリニキに対し、米田先生はしごく落ちて着いた口調で応じた。

「昨年はナラでしたからね。我が学園では、ナラとキョートとを交互に校外学習の場とする事が、ここ数十年前から定まっています。昔はオーサカにも出向いていたようですが……」

「解りますよ米田先生」

何かが解った訳でもないのに、トリニキは訳知り顔で解ります、と言っていた。きつと善からぬ理由なのだろうと察しがついていたからだ。そしてその善からぬ事を、米田先生が口にするのは酷だろうとトリニキは勝手に思っていた。相手が自分よりも経験を積んだ、実力のある女妖狐であると知っているにもかかわらず。

「時代の流れとか、過去の生徒たちのやらかしのために、イベントが変化するって事はありますからね。米田先生。僕が高校生だった頃にも、春の校外学習はありました。それこそキョートの散策でしたね。ですが、僕が入学する数年前までは一泊二日での勉強会

だったそうです。

——人間向けの学校でも、こういう細々とした変化はあるんです」

「勉強会ですか。それも中々良さそうですね。生徒たちには不評かもしれませんが」

トリニキに見つめられながら、米田先生は微笑んでいた。

「それはそうと、このあやかし学園での校外学習とはどのような物なのでしょうか」

どのような、という点をトリニキは若干強調していた。若干心臓の鼓動が速まるのを感じながらも、矢継ぎ早に言葉を続ける。

「もしかしたら、校外学習というのも僕が知る校外学習と全くもって違う物ではないか。それが僕にしてみれば少し不安なのです。ええ、別にあやかし学園の事を悪く言うつもりはありません。ですが学校ごとに特色がある事は僕も知ってますし、あやかし学園は決闘制度などもあるみたいですから。」

まさか校外学習でキョートに向かうと言っても、ニホンカイ側の山奥に籠って、疑似的なサバイバルをさせるとか、そんな事はありませんよね？」

トリニキは緊張のあまり、かつて見たアニメの内容を口走っていた。その事に気付いたもののもう遅い。心臓が暴れ回るのに身を任せ、耳たぶまで赤く火照らせながら米田先生の言葉を待った。

米田先生はクスリと笑い、静かに首を振った。

「大丈夫ですわ鳥塚先生。校外学習ではそんな物騒な事は起きませんから。ちよつとした遠足、観光旅行のような物だと思つて頂ければ大丈夫です。それこそ、鳥塚先生が学生時代に行ったものと同じですわ」

米田先生の言葉を聞くうちに、トリニキも落ち着きを取り戻した。自分も何とも間抜けな事を聞いてしまったな。そう思つて素直に笑う事が今のトリニキには出来た。

「そうですよね、米田先生。ああ、僕つてば朝から妙な事を聞いてしまいましたよね……ですが遠足の延長と知つて少し安心しました。そうなりますと、生徒たちはやはりバスで向かうんでしょうか」

遠足や校外学習ではないが、中学一年の時にあつた自然学校ではバスで移動した気がするなあ。そんな事を思つてトリニキが尋ねると、米田先生は首を横に振つた。

生徒たちはバスで輸送するのではなく、電車等乗り継いで現地集合してもらうのだと、米田先生は教えてくれた。

「鳥塚先生の仰る通り、行きも帰りもバスを使えば確かに安全かもしれませんが。道中ではぐれる生徒もいなければ、不逞の輩に襲われる可能性も少ないでしょう。」

——もつとも、バスもバスで必ずしも安全とは言えませんがね。私どもに悪心を抱いた輩が結託してバスを狙撃すれば、全員まとめてお陀仏になつてしまう可能性も無きにしてもあらずですが」

そこまで言ってから、米田先生は事もあろうににたりと笑った。遠足中のバスがテロリストに狙撃される。トリニキのサバイバル発言を上回るほどの物騒さではないか。

だが——これがトリニキをからかうような冗談ではない事は、米田先生の来歴に思いを馳せれば明らかだ。今でこそ教師として平穩な日々を送っている米田先生であるが、元々は傭兵として働いていた実績もあるらしい。そんな彼女であるから死と隣り合わせの日々を送っていたとも言え、それこそ山道で車が狙撃され、コースアウトする車から華麗に脱出して難を逃れたという噂まであるくらいだ。そんな彼女ならば、そういった事も懸念するのはまあ自然な事なのかもしれない。

「もちろん、上層部はそこまで考えている訳ではありませんけれど。バスを使うとなりますと、その分費用が掛かりますからね。上層部の第一の懸念はそこなのです」

呆れたような表情を浮かべている米田先生であったが、彼女の主張は筋の通った物だとトリニキは思っていた。費用面であれこれと頭を悩ませるのは組織としては逃れられない事であろう。それは、私立であるあやかし学園とて同じ事だったのだ。

だがそれも考えるまでもない話だろう。中高一貫校であるあやかし学園は、普通の中学校や高校よりも生徒数が多いのだから。流石に一クラスの生徒数は公立の学校や予備校などに較べれば若干少ないが……それでも全体の生徒数はそれなりのものである。

「それに獣妖怪の生徒はバス酔いの懸念もありますからね。特に私たち妖狐や化け狸、狗竇や白狼と言ったイヌ科の獣妖怪は、胃の構造上嘔吐しやすい種族でもありますから……」

すみません鳥塚先生。朝から汚い話になってしまいました」

「いえいえ大丈夫ですよ。確かに、犬や狐は車に酔いやすいと言いますからね。ですがそうなれば、獣妖怪の皆様も大変ですよね」

イヌ科系統の獣妖怪が車に酔いやすく、しかも嘔吐しやすい。やっぱり動物と同じなんだなあ。失礼な事は承知の上でトリニキはそんな風に思っていた。犬が吐き戻しを行いやすい動物である事などは、生物学を嗜んだトリニキはもちろん知っていたのだ。

「なので私たち獣妖怪は乗り物を利用する際は本来の姿に戻って、その上でキャリアケースに入って乗車する事もあるんですよ。して思えば、管狐というのも中々合理的な姿なのかもしれませんわ」

「いやはや米田先生。管狐はキツネでは無くてイタチ系統の妖怪ですよ。野暮な事ではありますけれど」

そんな風に、トリニキと米田先生は言葉を交わし、笑いあっていたのだった。

幕間：ルーキー退魔師、修行に励む

妖怪たちがお天道様の許で学校生活や社会生活を営んでいるこの世界において、人間たちはただただひ弱な劣等種族に甘んじている訳でもない。もちろん、多くの人間たちは術を持たぬ普通の人間である。

しかし、中には妖怪に対抗する術を持ち、それを継承していく人間たちもいたのだ。彼らは術者と呼ばれ、特に妖怪たちと闘う者は退魔師と呼ばれる事もあった。

妖怪たちの多くは人間と共存し、友好的ないしは中立な存在ばかりなのだが……それでもその力を邪悪な目的に使う者も少なからず存在した。そうした連中と闘い、人間たちの安寧を護るのが退魔師の仕事である。

もちろん、悪事を働く悪妖怪に関しては、マトモな妖怪たちも組織的に摘発は行っている。それでもやはり、人間として人間の生活や安寧を護るために退魔師は存在していた。何となれば妖怪たちと手を組んで悪妖怪や悪徳退魔師を摘発する事だって珍しくはない。

異種族入り混じる世界においては、そうした自衛手段こそが社会の秩序と安寧を護るための要になっていたのだろう。

※

キョート某所。ハンシン地区某所にあるあやかし学園からはいくらか離れたその場で、二人の若き退魔師が訓練に励んでいた。

退魔師の卵である二人組の若い男女は、自身を取り囲む異形たちと間合いを取っていた。送り犬に下級の鬼、化け狐に化け狸……五、六匹ほどいる妖怪たちは、いずれも異なった種族ではある。しかし彼らには共通点があった。退魔師たちに敵意を露わにしているという事だ。

土煙が舞う。シベリアンハスキーもかくやという巨軀を誇る送り犬が、女退魔師めがけて跳躍していたのだ。

「ググ……グフツ！」

退魔師の喉か腹か……いずれにせよ咬みつこうと躍りかかった送り犬の攻撃は、女退魔師に届く事は無かった。その喉から漏れるのは、ただただ戸惑ったような啼き声のみだ。

送り犬は身をひねって着地しようとして——横ざまに倒れた。狼めいた尖った鼻面と、太い後足の付け根には錘の付いた紐が巻き付いている。女退魔師の相棒が、隙を見て放ったものだった。大型のそのベグレリは、もちろん妖怪の動きを一時的とはいえ封じるための効力が具わっている。

その様子を見ていた女退魔師は、決然とした様子で送り犬ににじり寄る。その手にあるのは木製の剣だった。幾分装飾過多なきらいはあるが、対妖怪武器としての実用性は十分すぎるほどだった。何せこの木剣は桃の枝を削って作った物なのだ。加えて華美とも言えるほどの装飾は、使い手の力を増幅する効果を具えた代物でもあるのだから。

女退魔師は、躊躇い無く木剣を送り犬の頭部に振り下ろした。

※

「——賀茂君に倉持君。訓練お疲れ様」

二人の若き退魔師が一息ついたところで、彼らの師がゆるゆると姿を現した。

大陸風の衣裳を着こなした、一見すると十八、九ほどの少女にしか見えない妖物は、ゆっくりと二人の退魔師とその周囲を眺めていた。賀茂君と倉持君と呼ばれた二人は静かに呼吸を整えており、その周囲には護符が散らばっているのみだった。妖怪の死骸が飛び散っているとか、そう言ったスプラッタな情景が広がっているわけではない。何せ二人は実際に妖怪と闘っていたわけでは無いのだから。

彼らはいくまでも、師匠が作り出した分身の妖怪と闘っていただけに過ぎない。初心者退魔師の訓練ではよくある事である。本物の妖怪を使うよりも双方危険にさらされるリスクは少ないし、何より本物を殺傷するわけでは無いので、気軽(?)に戦闘訓練を積む事も出来るからだ。

もちろん、ある程度訓練を積んだら実際に妖怪たちと立ち向かう事にもなる訳であるが。

呼吸が整った二人は、師匠の方に視線を向けた。それを見て——師匠は背後に控える金色の二尾を嬉しそうに震わせた。彼女は人間では無くて二尾の妖狐だったのだ。

彼女の名は宮坂いちかという。稲荷の眷属を兄に持つ彼女であったが、彼女自身は妖怪絡みのトラブルを解決する便利屋にて生計を立てていた。妖狐の中でも特に人間に對して友好的な所もあり、今ではこうして退魔師の卵を手ずから教育する事もあったのだ。

この宮坂いちかには、実は半妖の姪がいる訳なのだが、それはまたおいおい明らかになる事なのでここでは割愛しておこう。

なお、見た目が少女めいてはいるものの、既にその年齢は二百歳を超えていた。妖怪としても一人前であるし、文字通り人知を超えた知識を蓄えていると、人間たちには思われているようだった。

宮坂先生。凜とした弟子の声に、いちかは頬を緩ませた。

「賀茂君。君は中々良い線を言っていたと思うよ。送り犬をぶつ叩く時だつて全くもつて躊躇っていないかったもんね。ああいう心意気が、殺しても構わないって思いながら武器を振るう事が、我々妖怪と立ち向かう時には必要なんだよ。残念ながら、人間は非力

な生き物だからね」

「ありがとうございます、宮坂先生」

悪妖怪と立ち向かう時には殺すつもりで臨め。物騒極まりない文言であったが、賀茂は怯まずむしろ頬を紅潮させて頷いただけだった。そう言う意味でも、彼女は妖怪と闘う面において素養があるのかもしれない。

ちなみにであるが、退魔師が悪妖怪を捕縛するにあたって殺傷してしまつたとしても、それは正当防衛という事で片づけられるため安心してほしい。そもそも妖怪は頑健な肉体と身を護る術を具えているので、人間が殺意をもつて襲い掛かつたとしても、致命傷を負う確率は割と低かつたりもする。

そう言つた意味でも、退魔師は思いつきり闘う意欲を養わねばならないのだ。

そうしている間にも、いちかの視線は倉持の方にスライドする。少し物憂げな、心配そうな表情だった。

「倉持君も……途中までは良かったわ。だけど化け狐が女の子に変化した所で躊躇っちゃつたでしょ？ それで狐火をマトモに喰らってしまった訳だし……本当の悪妖怪だったら死んでいたわよ？」

「……………はい」

やや蒼ざめた表情で視線を落とし、蚊の鳴くような声で倉持は返事をした。

いちかの指摘通り、少女の姿に変化した化け狐の分身を前に、倉持は攻撃を戸惑ってしまったのだ。

「妖怪の中には、思いのままに姿を変える者がいる事は二人ともご存じでしょう。だからね、姿で惑わされたりしてはいけないの。狡猾で邪悪な考えを持つ妖怪は、相手の良心につけこんで場を切り抜ける術を持ち合わせてもいるんですから」

一人前の妖怪ながらも少女めいた風貌のいちかのこの言葉には説得力が伴っていた。もつとも、彼女が少女のように見えるのは、他人を惑わせ籠絡させるための変化ではなく、童顔であるからに過ぎないのだが。

そのいちかは遠くを探るように視線を走らせてから、静かに言葉が続ける。

「それにしても、二人とも少し力んでいるようにも感じられたわ。やっぱり、あの逃亡事件が気になるのかしら」

賀茂と倉持は顔を見合わせ、それからいちかの方を向いて小さく頷いた。

白銀の毛皮を持つ獣妖怪。その姿が二人の脳裏には浮かんでいたのだ。

班分けと新たな職員

四時間目。トリニキは授業を教える立場として一年二組の教壇に立っていた。行っていた授業は物理基礎である。

ちなみに教員免許というのは、理科ならば理科、社会ならば社会といった塩梅に免許を取得する仕組みになっている。生物学を専攻しているトリニキが、物理基礎の授業が出来るのもそのためである。

そもそも生物学は生物の知識や暗記だけで成り立つものではない。分野によって程度は異なれど、化学や物理学の知識も必要となる。トリニキはだから、物理学の知識も多少は心得ていた。学生時代に成績が良かったか、と言われると別問題であるが。

「……そんな訳で、今日の授業はここまでだね。まだまだ物理基礎の中では比較的簡単な所だけれど、見くびって怠けていたら赤点は逃れられないゾ。ちなみに先生はそれで赤点を取った事もあります」

おどけた様子で最後の言葉を付け加えたトリニキであったが、生徒らの反応は芳しい物では無かった。漫才師的な表現をすれば滑ったのだ。或いは、新任教師の不真面目な過去に引いているような雰囲気さえ漂っていた。

やはりその辺りも、前職の予備校と違うのだな。トリニキは引きつった笑みの裏でそんな事をふと思った。予備校ではこういうトリニキのネタが大いにウケたのだ。予備校生は進学に向けて心身をすり減らしているから、若い講師のギャグめいた言動が癒しになるのだろう。

しかし今トリニキが向かっているのは、そんな予備校生たちよりも若い面々である。種族を問わず素直に教師を慕い、トリニキに教師としての威厳を求めている生徒とていくらいだ。そんな所でこうしたギャグは悪手なのかもしれない。

「鳥塚先生。本当に今日の授業はここまでなんですか？」

生真面目な生徒の一人から質問が飛んできた。心配そうな彼女の顔をしっかりと見つめ、トリニキは微笑んで頷いた。

「大丈夫。というか早めに終わらせようと思って今日は段取りしたからさ。あはは、なんとって先生は副担任と言えどもこのクラスを受け持っているんだからね。そう言う所も融通が利くというか……」

生徒らが動揺せぬようにと、トリニキは先手を打ってこれから行う事を告げた。

「先生もうっかり忘れかけていたんだけど、もうすぐ校外学習があるでしょ。この前のLHRで班分けとか諸注意とかをやる予定だったんだけど……色々あつて出来なかったから、今回班分けだけでもやろうと思つてね」

それで良いでしょ？ 気軽な様子でトリニキが言うと、ようやくここで生徒らも納得してくれたのだった。

実際には梅園六花と宮坂京子の両名がバチボコに決闘したために、先週のLHRは潰れてしまった訳である。トリニキは氣を使つてその事をぼやかしはしたが……六花も京子も少し居心地の悪そうな表情を見せていた。

「とりあえず、男子と女子とそれぞれ四つの班に……合計八つの班を作つてくれるかな。まあ大体五人くらいだね」

班分けを命じるトリニキの言葉に、生徒たちがにわかには沸き立った。校外学習の班については、男子は男子で固まり女子は女子で固まる物であると、前もって今宮先生や米田先生から聞かされていた。妖怪たちも入り混じっている学園であるから、男女別などどこかわらずに男女混合で班を作るのではないか。校外学習の話聞いた時、トリニキは勝手にそんな事を思つてもいた。

そんな風に思つたのは、妖怪たちの中には同性だろうが異性だろうが気にせずカップル的な意味でくつつこうとする個体が人間よりも多いと感じたからだのだが、その辺は思春期の人間の心理を鑑みた所なのだろう。

中々決まらないようだったら、先生の方で出席順で決めるからね。忘れずに釘をさすのも教師の務めというものであろう。トリニキは物理基礎のテキストを閉じると、うご

めき始めた生徒らの様子を教壇から静かに見守り始めた。

編入生である梅園六花も十分に学園に馴染んでいる事であるし、もはや妙な事は起こるまい。そんな確信めいた思いが、トリニキの中にはあつたのだ。

※

昼休み。食事を終えたトリニキが空になった弁当箱を運んでいると、廊下で職員の一に出くわした。パツと見大学生くらいに見える若者であり、人畜無害そうなのつペリとした面とややずんぐりとした体軀、そして黒っぽい四尾が特徴的な青年である。

「鳥塚先生、こんにちは」

「ああ。こんにちは、塩原君」

懐っこい様子で挨拶をしてきたので、トリニキも特にこだわらずに挨拶を返した。トリニキがその名を呼んだとおり、目の前にいるのは塩原玉緒そのものであつた。宮坂京子が無意識のうちに作り出した分身である彼は、先週の決闘があつてからというものあやかし学園の職員として働き始めていた。

あの決闘——六花と京子の決闘の折に姿を見せていた塩原玉緒は、浜野宮理事長や萩尾丸にもその存在を知られてしまったらしい。老齡な天狗たちはもちろん彼の正体を知り、その上で彼をあやかし学園にて働くように命じたらしかった。実在する(?) 妖怪ではないにしろ宮坂京子の分身という事で素性も知れている(?) し、何より四尾で

強大な力を保持している。利用価値があるなどと、老天狗たちは冷静に判断を下してしまつたのだ。

そしてそれに塩原玉緒も逆らわずにいた訳であるから、現在の状況が成り立っている訳でもあるし。

元より塩原玉緒は宮坂京子の思念や願望を色濃く反映した存在でもある。従つて彼女が敵わないと思つた相手には、塩原玉緒も反抗できないらしかった。

トリニキ自身は、新たに学園に仲間入りした不思議な職員を仲間としてすでに認めていた。妖怪たちが集まる学園で教鞭を取っているからか、何とか順応性が高まつたような気もしないでもない。

「塩原君もお疲れ様。特に変わった事は無かつたみたいだね」

「ええ、お陰様で」

トリニキの言葉に、塩原玉緒は静かに微笑んでいた。それを見たトリニキは、そのまま思つた事を彼にぶつけていた。

「何も無い平和が一番だもんね……時に塩原君。もうすぐ校外学習だけど、君はどうするのかな？」

「こつそり憑いて行きますね。あ、でも先生方には僕の存在はもう明るみになつていたんでしたっけ」

トリニキの問いにこれまた即答し、その上で塩原玉緒は僅かに微笑んだ。彼が憑いて行くと言ったのはトリニキにも想定済みだった。元より彼は、宮坂京子を護るために顕現した存在でもあるのだから。今となっては、護る対象は宮坂京子だけでは無いのだからうけれど。

塩原玉緒は少し真剣な表情になって、トリニキの方を見つめていた。

「それにこのところ、何とも胸騒ぎがしますからね……妖怪の勘が働くというやつなのでしょね。僕の思い過ぎしならば良いのですが」

あ、やっぱり彼も年相応（？）の考えの妖怪なのだ。不謹慎かもしれないが、トリニキは塩原玉緒の顔を見てそんな事を思っていたのだった。

ヒナゲシ引き出す生物語り

放課後。梅園六花は園芸部の部員や副顧問と共に畑の一つに出向いていた。

私立の中高一貫校という事もあり、あやかし学園はとかく広大な敷地を有していた。それは畑などの園芸スペースも例外ではない。

この度行うのは草引きだった。例によってサツマイモだのナスだのを植える訳なのだ、その間に茂った雑草たちをどうにかせねばならない。

ざっと視線を走らせただけでも、果たして雑草たちの姿は目についた。猫草のようにツンツンした葉を茂らせているイネ科の植物や、ロゼッタ状にへばりつく丸い葉の植物たちが思い思いに点在し、生を謳歌していた。もつとも、その植物たちを六花たち園芸部員は容赦なく引き抜くつもりなのだ。

そんな風に意気込んでいた六花の目を引いたのは、しかし引き抜くべき雑草たちではなかった。畑の周囲を眺めていた彼女の視線は、いつしかポピーの花に吸い寄せられていた。

道路脇などを見れば頼まれもせず花を咲かせて種をまき散らすポピーも、考えてみれば雑草の一種になるだろう。しかし、針金でも入っているかのようにしやんと茎をの

ぼし、やや紅がかつた濃いオレンジの花弁を開いて誇らしげに咲く様に、六花はしばし見とれていた。

……いや、ヒラドツツジみたいに今年もポピーが咲くのはちと早いと思つたんだ。それで、ついつい見ていただけだ。六花は心の中で言い訳をして、しかしポピーがぬつと咲く所へと近づいていた。見れば大きくしゃんと伸びているのは一株だけであり、隣の数株は小さく貧弱だった。茎の丈も半分ほどしかなく、花びらの大きさに至つては三分の一ほどではないか。

ポピーなどは春の終わりに咲く花としてよく見かけていたはずであるが、いざまじまじと眺めてみると何かと不思議な所がある。

「……ナガミヒナゲシに興味があるのかな、梅園さん」

隣で落ち着いた大人の声がして、六花はハツとした。見れば鳥塚先生がさも当然のように隣に立っているではないか。口許には猫のような笑みが浮かんでいたが、六花を見つめる眼差しは大人のそれであり——教師のそれでもあつた。

「種が詰まっている身の部分が細長いから、長い身のヒナゲシって事で、ナガミヒナゲシって名がついているんだよ。まあ……先生も生物をやつていたからそんな事を知つていただけで、そんな風に長々と『あ、ナガミヒナゲシだ！』って言うシーンがあるかどうかは解らないけどね」

鳥塚先生はそう言って微笑んだ。彼は来年で三十路を迎えるという。所謂アラサーだ。しかしこうして六花たちに話しかけたり笑ったりする姿は年齢以上に若々しく思えた。もつとも、六花は純血の雷獣で鳥塚先生は生粋の人間である。種族が違うから歳の取り方も違うし、そもそも日本人は若々しく見えるのだと何かで聞いた覚えもあった。

「べ、別にアタシは花が気になっただけで……」

言いながら、六花は気まずさを感じて視線を彷徨させた。それから、気まずさを感じているという事に痺れるような苛立ちを感じてもいた。別にサボっている訳でもないし。いや……アタシが考え事をしている所にトリニキ先生が割り込んできたから、縄張りを侵されたような気分になっただけじゃないか。

ああ、何だかんだ言いつつもアタシも動物と同じだな。そう思う事で六花は落ち着きを取り戻した。ちなみに痺れる感覚を抱いていたが、実際に少し放電していたらしかった。その辺りは気を付けないと、後で月華たちに叱られてしまう。

梅園さん……？ 鳥塚先生は、先程とは違う声音で呼びかけていた。少し戸惑ったよ
うな、申し訳なさそうな声音だった。

「良いんだよ梅園さん。今は授業じゃなくて部活なんだからさ。そんなに気を張らずに、のんびりまったり活動してもらったら良いんじゃないかって先生は思ってるくらい

だしね。

それにそもそも、梅園さんは園芸部の活動も頑張つてると先生は思うよ」

「褒めて貰つてありがと」

鳥塚先生の言葉に、六花は素っ気なく返答しただけだった。その言葉に深い意味は無いのだろうが、正面から頑張つていると言われると何ともむず痒い物があった。特に鳥塚先生が愚直な教師だから、尚更であろう。

「ナガミヒナゲシ……」

アタシはポピーって呼んでるんだけど。六花が言うと、鳥塚先生は茶目つ気たつぷりな表情で訂正した。

「ああ、ポピーだね。確かにその方が呼びやすいよね。どっちにしろ雑草のわりに目立つ花だから、気になっちゃう子もいるよね」

君だつてそうでしょ？ 鳥塚先生が声をかけたのは、いつの間にか彼の傍にいた妖狐の少女である。中等部の生徒で、当然のように妖狐の半妖である宮坂京子の事を慕っていたはずだ。と言つても、あの決闘の後からは六花にも言葉を交わすようになってくれた。決闘によつて学園での地位を得るといふ目的は、真に果たされたのだ。

ともあれ、妖狐の少女は尻尾を振り振り頷いていた。鳥塚先生に急に話題を振られたというのに驚いた素振りは特に無い。

「はい。私はどちらかというところ、花よりも実や種で遊んでいた口なんです。枯れて乾いた実を潰して、中の種を取り出して遊んでました。砂粒みたいなのがさーつと入って、ちっちゃい頃はそれが何か面白くて……」

「確かに。アタシもそんな風に取り出して種をまき散らしたりしてたなあ」

「ポピーはたくさんあちこちに生えてるもんね。そうやって遊びたくなるのも解る気がするなあ」

そんな風に話していると、妖狐の少女がふいに思案顔を浮かべて首を傾げた。

「でも一つ不思議な事があるんです。ポピーの花や実は大きいのか小さいのかがあるのに、種の大きさは同じなんですよね。私、あれが子供のころから気になってたんです」

「ああ確かに。あれは不思議だよなあ」

この子も色々な物をよく観察しているのだろうか。そう思いつつ六花も頷いた。

ところが、鳥塚先生は微笑ましげにそれを見ているが、驚いたりするそぶりは見せない。そこはやはり彼が大人だという証拠のように思えた。実際には、六花や妖狐の少女よりも実年齢的には年下であるはずなのに。

良い質問だね。どこぞの博学なコメンテーターばりの台詞が、鳥塚先生の口から滑り出たのだ。

「株の大きさ、親の植物の大きさがまるきり違うのに、子供である種の大きさが同じなのは、どうしてかって事だよね。それはね、トリの卵がほとんど同じなのと似たような理由なんだ。よく考えてごらん。確かにスーパーとかで売ってる卵には大きさのばらつきはあるけれど、さりとて二倍、三倍も大きさが違うって事は無いだろう……」

質問を発端に、鳥塚先生の解説が始まった。もしかしたら生物の授業でもこの話は聞かせてくれるのかもしれない。六花はそんな風に思った。

かくして、春の終わりの放課後は平和に過ぎていったのだ。

雷獣娘の逢魔が時

部活のひとつときは思いのほか短かった。これは物理的な時間の長短ではなく六花の感覚的な物ではあるが。何せ園芸部は完全下校時刻の十五分前まで活動していたのだ。文化部であれば完全下校時刻前に部活が終わり、生徒が解散する事も珍しくはない。

その事を思えば、六花たち園芸部はこの日、結構頑張つて活動を行ったともいえる。

とはいえ、六花自身はそこまで時間が経っているという実感に乏しかった。だからこそ、鳥塚先生の「もう終わろうか」という一言を、実に名残惜しい気持ちで耳にする事と相成つたのだ。

「さて皆。夏至に向けて日が長くなつてはいるけれど、くれぐれも用心して帰るように、ね。妖怪警察の皆さんも頑張つて治安維持に取り組んでらっしゃるけれど、それでも悪いやつはそこここに潜んでいるんだ。妖怪にしろ、人間にしろ、ね」

気付けば鳥塚先生は、生徒一人一人——もちろんその中には六花もいた——の顔を眺めながら、気を付けて帰るようにと注意事項を口にしていったのだ。鳥塚先生は教師なのだ、今ほど教師らしい表情は見た事がないな、と、六花は思ってしまった。

その鳥塚先生は、やにわに茶目つ気のある笑みを浮かべて言葉を続けた。

「とは言うものの、僕も実は偉そうなことは言えないんだよね。学校帰りに妖怪たちに絡まれて、ちよつと危ない目に遭いそうになったからさ……」

そこまで言つて鳥塚先生は朗らかに笑つた。鳥塚先生が妖怪に絡まれて、危険な目に遭ひかけた。その時の事を六花は知つている。偶然その場に居合わせたからだ。その時の詳しい事まで鳥塚先生は話すのだろうか。そんな風に思つた六花であるが、鳥塚先生は突つ込んだところまでは話さないつもりらしい。それどころか、六花とは視線を合わせようともしない。

恐らくは、六花のヤンチャぶりを話さないでおこうという鳥塚先生なりの配慮なのかもしれない。六花も薄々その事は解つていた。解つた上でこう思つていたので——先生つてば水臭いな、と。

「センセ、その話なら私も知つてるよー」

そんな事を思つてみると、女子生徒の一人が声を上げた。絡新婦の糸山さんだつたはずだ。クラスは異なるが、六花と同じく高等部一年なのだそうだ。実は彼女は幽霊部員であり、園芸部に顔を出す頻度は少なかった。その彼女がこの度嬉々として活動に励んだのは、草引きのどきくきに紛れて虫たちを捕獲できるからなのかもしれない。その場で食べる訳でなくとも、やはり虫を捕獲したくなる本能が蜘蛛妖怪にはあるのだから。

「たまたま通りかかった梅園さんが、センスを助けたんでしょ？　噂じゃあカマイタチをフルスイングでぶっ飛ばしたとかって聞いたんだけど」

「糸山さん。流石にそれは大げさですよ。でも地方欄にちつきく掲載されてたのをお父さんと見たよ」

たちまちにして話の流れは鳥塚先生から六花の活躍に流れていった。

その話に耳を傾ける六花の心境は複雑な物だった。嬉しさよりも気恥ずかしさの方がはるかに勝っていた。それはもしかすると、あの時穂谷とかいう妖怪警察の妖狐に、「君の勇敢さは賞賛すべきだけど、さりとて無闇に事を起こさないように」と注意された事が棘として心の奥に残っていたからなのかもしれない。

「……鳥塚先生ってば、女の子にばかり心配しているんじゃないですか」

「そんな事はないよ。先生は教師だから、皆が楽しく安全に学校生活を送れるようになって思ってるよ。男子とか女子とかも関係ないし、もちろん種族もね。先生も人間だって言うのは君も知ってるだろう？」

気が付けば、鳥塚先生は拗ねた様子の男子生徒と言葉を交わしていた。人間だったら人間だったで、そう言うややこしい一面があるのか。六花は半ば他人事のようにそのやり取りを眺めていた。

六花自身は純血の雷獣だったから、人間の男同士のやり取りを他人事と思うのは致し

方ない話なのだろう。

※

「こんばんは。誰かと思えば梅園さんではないですか」

夜。六花は家に真つすぐ帰ったわけでは無かった。鳥塚先生の言う悪いやつがいなか、自主的に巡回をしていたのだ。

そして巡回をしている最中に、一人の妖怪に見つかって声を掛けられたのだ。

声の主は塩原玉緒だった。彼の出で立ちは初めて会った時とほとんど同じだ。大陸の妖狐である事を示すかのように男性向けのチャイナドレスを身にまとい、背後では銀黒色の四尾が揺れている。のっぺりとした面には、人の好きそうな柔らかな笑みが浮かんでいた。

初めて会った時と違うのは、玉緒の見せる笑顔であろうか。最初に見た時はひどく不気味な物に見えたのだが、今見せている笑みにはそうした禍々しさや毒気は特に無い。

もしかしたら、玉緒の笑み自体はあの時も今も同じものであり、六花の彼に対する認識こそが笑みの解釈を変えていただけなのかもしれない。

ともあれ、塩原玉緒は俗に言う悪いやつではない。宮坂京子のイメージナリーフレンドだかタルパだか、要は彼女の考えや願望的なものが投影された分身のような物だ。塩原玉緒は自分の意志を具え、宮坂京子から離れて自由に動けるのだが、しかしその出自の

ために宮坂京子の考えや思想を色濃く受け継いでいた。

だから彼は危険な存在ではなかった。宮坂京子は悪辣な考えを持ち合わせていないし、そもそも決闘を経て六花と友達になったではないか。その事を玉緒が知っているのも言うまでもない。

「それにしても、暗くなっているのに出歩くなんて危ないですよ？　いつかみたいに妙な事を企む妖怪に化かされたり惑わされるやも知れませんか」

優しげな様子を作ってそんな事を言う玉緒に対し、六花は思わず吹き出していった。

「ははっ、まさかあんたがそれを言うなんて……傑作だな」

妙な事を企む妖怪に化かされる。これもまた六花が実際に体験した出来事の一つである。他ならぬ塩原玉緒に六花は化かされた事があったのだ。あの時彼はご丁寧にも妖怪の少女が襲撃される幻影を六花に見せておびき出し、一時的とはいえ公園の中に閉じ込めて押しとどめたのだ。

さて塩原玉緒はというと、六花の言葉を前にただただへどもどするだけだった。あの時の胡乱で怪しげな雰囲気は欠片もない。それはそうかもしれないけれど、さりとして僕も君の事を心配しているんだ……その眩きは、全くもって実直な男らしい発言であった。

或いはこうした態度こそが、塩原玉緒の素なのかもしれない。宮坂京子の案外人懐つ

こい姿を思い浮かべながら、六花はそんな風に考察するのだった。

それはそうと。ともあれからかつてばかりでも良くない気がしたので、六花は話題を交える事にした。

「塩原さんは今日もパトロールをやってるんだな。わざわざアタシに声をかけたって事はさ」

ええ。六花の問いに玉緒は臆せず頷いた。

「それが浜野宮理事長から賜った僕の仕事ですからね。それに安心してこの町で過ごすというのは、ご主人様の願いでもあります。僕が断る理由などあるでしょうか」

六花と京子が決闘を敢行してから、幾つかの事が変化した。六花の学園での立ち位置や、京子との関連性もその一つである。だが塩原玉緒の存在に関する事についても変化があったのだ。

それまでは一部の妖怪しか知らなかった玉緒の存在が、割と明るみになったのである。理事長である浜野宮灰高は、その上で彼に学園と近隣の町内の治安維持の任務を与えていた。分身であれ何であれ、塩原玉緒は四尾の中級妖怪である。その辺の悪妖怪にいらみを利かせるにはうってつけの存在であると浜野宮理事長も判断したのかもしれない。

そして実際に、玉緒もその仕事を請け負っているのだ。その辺りを考えてみても、根

が真面目な事は伺えた。

「それはそうと、本当にこのところ物騒ですからね。くれぐれもお気を付けて」
「はいはい。アタシだって無闇に暴れないようにしているからさ」

六花はそう言つて踵を返し、本当に帰宅しようと思つたのだつた。振り返らずとも、塩原玉緒が心配そうな眼差しをこちらに向けているのを感じていたからだ。

いざ校外学習へ

いよいよ校外学習の日がやってきた。編入生である梅園六花にはもちろん初めてのイベントになる訳であるが、特段緊張するなどと言う事はない。行先はキョート。全校生徒が対象。こういう情報だけを眺めれば大掛かりな感じはするが、つまるところ規模の大きい遠足である。そのように六花は考えていたのだ。

ついでに言えば、六花は校外学習を楽しみにさえしていた。それは多分、行き先がキョートだったからなのかもしれない。叔父である三國を倣って道真公を信仰する六花であるが、他の神社仏閣にも興味があった。それはもしかしたら、獣でありながら神性を持つと自負する雷獣の性なのかもしれない。

そんな訳で、六花は意気揚々と駅へと歩を進めていた。右手で先程購入したコーヒート牛乳のパックを握り、空いている左手でほぼ空の通学鞆を提げながら。

(このシーンはドラマ上での演出です。犬猫などの動物にコーヒータを与えるとお腹を壊す事もあることすから真似しないようにするんだゾ。あと、犬猫は牛乳を飲むとお腹を壊す事もあるから注意だゾ：byトリニキ)

糖分補給だとはかりにストローに口を付けたまさにその時、六花の正面に強い風が吹

きつけてきた。一瞬だけ目を細めた六花であるが、その後は涼しい顔で風を受けながら歩き続けた。雷獣には瞼の内側に透明な瞬膜があり、いざという時はそれで眼を護る事が出来るのだ。

元より雷獣は気軽に宙を舞い自由奔放に天空を遊ぶ事に特化した妖怪である。地上で吹きすさぶ突風などに怯むような事はまずない。

そう言えば、通学途中に強風にあおられる様子を歌ったPVか何か、動画サイトでアップされていたよな。輝く銀髪を風に遊ばせながら、六花はそんな事を思ってもいた。もつとも、動画に出てきていた少女と異なり、強風で意気消沈する事はまず無いのだ。

むしろ、こんな時に飛んでみたら気分爽快だろうな。そんな事さえ六花は思っていたのだ。

とはいえ実際には、青空の向こうに雲が流れていくのを眺めながら、文字通り地に足を付けて歩くだけだったのだけど。空を飛ぶ妖怪は確かに一定数存在している。それでも、交通網や住居などは地上で活動する者たちに向けて作られている方が圧倒的に多いのだ。それもこれも、空を飛ばずに地上で活動する存在の方が、空を飛ぶ者よりも多いからなのかもしれない。

六花もそうした現状に従い、歩きで地上を走る電車へと向かっていったのだ。

※

校外学習は概ね現地集合だった。教員たちは各自で電車などを使ってキョートに向かっている訳だし、全員が集まっているかどうかの点呼も、最終的には集合場所であるキョートの入り口で行う運びである。

とはいえ、生徒たちは途中で班ごとに集まり、そこから一緒にキョートに向かうようにと言いつけられている。あくまでも校外学習は学校行事であり、自由奔放な旅行では無いのだ。

そんな訳で、六花たちの班も途中で集まってキョートに向かう事が既に決まっていた。とはいえ、班のメンバーが全員集まる集合場所はこの最寄り駅ではない。乗り換え地点であるイクタ神宮駅が集合場所だった。六花はあやかし学園から徒歩で通学できるが、中には電車をういて通学している生徒もいるのだ。

ともあれ六花は最寄り駅である学園広場に到着した。切符を買い、改札は通らずに職員がいるかどうかを確認する。余裕をもって駅に向かったつもりだったが、既に構内はヒトであふれかえっていた。所謂通勤ラッシュの時間に重なっていたのかもしれない。

「梅園さん、こっちだよこっち」

班員の一人はすぐに見つかった。ヒトの多さに少し面食らっていた六花であったが、おのれに呼びかける声はすぐに聞き取る事が出来たのだ。

六花はすぐにそちらに向かった。行きの切符は既に購入しているし、声の主と声の方角は把握済みだ。

班員である宮坂京子は、駅構内の隅にすつと立っていた。彼女は六花に対して屈託のない様子で手招きしているが、六花は京子の姿に軽く驚き、ちよつとだけ反応が遅れてしまった。

日頃より学ラン姿である彼女であるが、今日は何故か学ラン姿ではなかったのだ。さりとてセーラー服——むしろ六花がセーラー服姿であるが——を着込んでいる訳でもない。相変わらず下は黒のスラックスであるが、上は学ランの上着ではなくてグレーのカーデイガンを着込んでいるだけである。カーデイガンもその下に着こんでいるブラウスも、ボタンのあわせからして女物だった。

今の京子はズボン姿ではあるものの、一応は女子生徒として通じるであろう出で立ちだったのだ。六花はだから驚いたのだ。宮坂京子は言動のみならず、服装までも男子生徒に擬態していると思っていたからだ。

そんな風に六花が驚いていると、京子はかすかに首をかしげて六花を見やった。

「どうしたの梅園さん。ちよつとぼんやりしてるけど。校外学習だから、やつぱり緊張してるのかな？」

いいや、違うよ。京子の問いに六花は即答した。緊張しているの、と問いかけた京子

こそ緊張しているのだ。その事に六花は目ざとく気付いていた。

現に京子は、尻尾を伸ばして腰に巻き付けるようにしているではないか。

狐娘、改めての自分語り

「女性専用車両に乗るのに、学ラン姿だったらマズいと思ってね」

ブラウスに女物のカーデイガンを羽織った姿について、京子はそんな風に説明してくれた。

彼女が女性専用車両を使おうと思った事については、ごく自然な事だろうと六花も思っていた。京子はかつて男妖怪に攫われ、危険な目に遭いかけたという。学園内では堂々とした態度を見せてはいるが、それでも男性教師（トリニキ含む）や男子生徒（野柴珠彦含む）達には用心深く距離を取っている部分が見え隠れしている。

学園内で毎日のように顔を合わせている教師や男子生徒に対してですらそのような態度なのだ。電車で出くわす見知らぬ男たちを警戒するのは無理からぬ事だろうと六花は思っていた。

「ふふ、実際に僕はやらかしちゃった事があるんだ。まだ中等部の頃の事だけどね。ほら、学ラン姿だったら僕は男の子に見えてしまうから……」

言葉尻を濁らせて京子は力なく微笑む。そんな京子の姿に六花は視線を走らせていた。

京子の自己申告通り、彼女は中性的な風貌の持ち主だった。ほっそりとした身体つきは線の細い男子生徒と言っても通用しそうだし、凛とした顔立ちは髪形も相まって少年のようにも少女のようにも見えた。

ちなみに六花も短髪で中性的な顔立ちなのだが、肉付きの良いグラマーな身体つきゆえに性別を間違えられる事はまずなかった。

「女装男子の気持ち少し解った気がするよ。なんてね」

京子はそう言つて、狐らしく笑つた。と言つても陰惨で蠱惑的な笑みではなく、あけすけで茶目つ氣溢れる笑顔なのだが。

世間では妖狐と言えば妖艶で淫蕩な存在であると思う者も少なからずいるらしい。六花はそう言うのは偏見だと思つていた。用心深い仲間への情は篤い。或いは無邪氣で純朴な氣質の持ち主。六花の妖狐に対する評価というのはおよそこのような物だった。

「本当に、男の人が女の人の姿になって、女の人らしく振舞わないといけない気分なんだ……不思議な話だけど」

「女らしく振舞うも何も、宮坂さんは初めから女だろうか？」

「ちよ、ちよつと梅園さん……」

隣にいる女子生徒（人間）の焦つたような声に、六花は自分が失言してしまつたのだ

と気付いた。思つた事をすぐに、半ば衝動的に言葉や行動に移してしまふ癖が六花にはあつたのだ。雷獣という種族の気質なのかもしれないと六花は思つていた。保護者である月華や、教育係の春嵐などには、もつと落ち着くべきだと小言を言われる事はあつただけだ。

京子は静かな口調でその女子生徒の名を呼び、何でもない事だと首を振つていた。その顔には確かに笑みが浮かんでいた。

「そうだね。確かに梅園さんの言うとおりだよ。僕は確かに肉体的には女だよ。だけど、時々どつちなのか判らなくなる時があつてね。まあその……肉体的な部分じゃあなくて意識的な部分の話だけだ」

自分の意識が女なのか男なのか判らなくなるのだ。京子の主張はかいつまんで言えばそう言う事だった。その話を、六花は半ば興味深く感じながら耳を傾けていた。

もちろん、六花とて肉体的性別と精神的性別が真逆になるヒトや、どつちともつかないと思つているヒトがいる事は知つていた。しかし、六花自身は心身ともに女だと思つて生きている。過去も現在も、そして未来もきつとそうなのだろう。

そんな事を思つていると、京子が六花を見つめ返している事に気付いた。暗い琥珀色の中央にある瞳孔は、針のように細くすぼまつていた。

おのれの肉体の輪郭をなぞる視線を感じていると、京子はやおら口を開いた。

「梅園さんはどうなのかな？　女の子として生まれた事に、疑問とか思う所は——」

「そんなのは無いよ」

向こうが言い切る前に、六花は自分の意見を口にしていった。京子はハツとしたように目を見開き、女子生徒は何故か呆れたような表情を浮かべていた。

「アタシはアタシだもん。雷獣の女で、梅園六花として生きているんだ。今までも、これからもな」

「そうだったんだね。梅園さんって確かに雷獣だもんね」

六花が雷獣である。この事に言及したのが京子だったのか女子生徒だったのか、一瞬判らなくなってしまう。雷獣は短慮で脳筋。そう言われたのではないかという考えに取り憑かれてしまったのかもしれない。確かに人間や妖狐に較べれば、雷獣は単純に物事を捉えがちな個体は多いのだが。

「雷獣って……そりゃあ確かにお狐様や人間様から見れば、雷獣なんて脳筋ばかりに見えるかもしれないけどさ」

六花は落ち着き払って言い返したつもりだったが、その語尾は若干荒々しくなってしまう。雷獣、特に強大な力を持つ雷獣は単純な思考回路の持ち主である。六花はもちろんその事を知っていた。雷獣の特徴であり、尚且つ弱点でもあるその事を。

京子は驚いたように目を丸くし、隣の女子生徒と顔を見合わせた。六花に視線を戻し

た時には、何故か少し申し訳なきような表情が浮かんでいるではないか。

「ごめんね梅園さん。ええと、違うんだ。雷獣がどうか、そう言う事じゃあなくてね……いや、何て言うのかな。梅園さんは純血の雷獣、純血の妖怪でしょ。だけど僕は半妖で、やっぱり初めからどっちつかずだからさ……」

何処かたどたどしい口調で告げる京子の言葉に、六花はそう言う事かと鈍いながらも納得し始めていた。彼女の父母は妖狐と人間であり、その間に生まれた京子はもちろん半妖だった。概ね妖狐として振舞っているが、母から受け継いだという人間の特徴も彼女は多分に持ち合わせていた。何せ本来の姿からして、狐の姿ではなくて人間の姿なのだから。

或いはもしかしたら、半妖だからこそ京子は色々悩むのかもしれない。窓の景色を眺め始めた京子の姿を見ながら、六花は静かにそう思っていた。

そうしたやり取りを重ねる間に電車は駅から駅へと進んでいく。それにつれて、校外学習に向かうメンバーも集まりつつあったのだ。

スケバン雷獣の勘違い

六花たちの班はイクタ神宮駅までに全員合流し（これはまあ他の班の面々も同じ事なのだろうが）、電車を乗り継いでキョート府内のカラスマ駅までたどり着いた。ここでの道中については特筆すべき事は特には無い。電車での旅は何事もなく和やかな物であったと言えるだろう。

後は駅を出てすぐのカラスマ公園に向かうのみである。ぞろぞろと固まって歩く中、一行の中で六花と京子がいつしか先頭を進む形になっていた。別に彼女たちが妖怪であるから歩くのが早いとかそう言うわけでは無い。グループの中で京子が班長を務めていたからなのかもしれない。六花は別段班長とかそう言った立場ではなかったが、他の生徒たちからは京子とほぼ同格の存在だと見做されていた。

「キョートなんて久しぶりだけど、やっぱり賑わってるねえ……」

周囲にさっと視線を走らせた六花の口からはそんな言葉がぼつりと漏れた。往来は行きかうヒトビトでごった返していた。人間は言うに及ばず、様々な種族の妖怪、そして魔族やモンスターと呼ばれるような国外出身の面々も見受けられる。

彼らの目的地もさまざまであるようだった。クタツとしたスーツ姿でゆったりと歩

くサラリーマンやはつらつとした様子で歩く学生などと言った、通勤通学に向かおうとする者たちも目立った。だがその中に、明らかに観光客だろうと思しき面々も見受けられたのだ。バウバウ言いながら肉球でパンフレットを掴む犬頭の獣人たちは、何処からどう見ても国外の観光客だった。彼らも日本出身の犬獣人と同じく立ち耳で尖った鼻面の持ち主なのだが、やはり欧米出身らしく毛並みも顔立ちも欧米風だった。

さて六花たちに話を戻そう。六花の眩き自体は単なる独り言であったのだが、その眩きは固まって歩く女子生徒たちの耳にきちんと届いていたのだ。

「梅園さんってキョート久しぶりなんだー」

「ほらさ、中学はうちらと違ったから。公立中学の校外学習なんて近場の公園での遠足だったってお兄ちゃんも言ってたし」

「というか梅園さんってキョート出身じゃなかったっけ？ そんなイメージがあっただけだ」

「え、そう？ キョートじゃなくてナラ出身かと思ってたんだけど」

「アタシはオーサカ出身だよ。ま、ちっちゃい時に三國の叔父貴に引き取られてからはタルヒで育ったんだけど」

ナラ出身ではないか。そんな類推に対して思わず六花は口を挟んだ。オーサカの実家で過ごしていたのは産まれてからほんの十年ほどの事である。だからオーサカ出身

であるという事に対して、実はそんなに執着はないはずだ。だというのに、別の府県の出身ではないかと言われると、ついついムキになってしまうのだ。

（十年って言うのは、人間で言えば三〜五年くらいって思ってたよな！ アタシは妖怪だから、歳の取り方も違うんだ！：by 六花）

「そっか。梅園さんってオーサカの出身だったんだね」

ずっと黙って話を聞いていた京子が、ここでようやく口を開いた。編入した当初は多くの女子を侍らせて悦に入る女狐かと思っていたのだが、案外他人の噂話には無関心な節があるらしい。というよりも、ああだこうだと話す所に首を突っ込まない用心深さの裏返しなのかもしれないが。

「でも確かに、言われてみればオーサカ出身の気質は梅園さんにはあるよね。人懐っこいし、義理堅い所もあるしさ」

「はは……そんな感じなのかな……」

京子の言葉に、六花は愛想笑いでもって応じた。彼女の物言いには皮肉や含みは無かったのだが、むしろ純粋な調子で言われたので気圧されたように感じたのだった。

※

「なあ皆。何かアタシたち、めっちゃ見られてるような気がするんだけど」

駅から徒歩五分程度のカラスマ公園へと進みながら、六花は気になっていた事を口に

した。先程からずっと見られているような感覚がまとわりついてきたのだ。しかも一人二人などではなくて複数である。

集合場所付近という事で学園の生徒や教員と思しき者も見受けられたが、視線の主は見知らぬ連中ばかりのようでもあった。

六花の眩きに、京子や他の女子生徒たちはすぐに反応した。

「そりゃそうだってば。梅園さんって美人さんなんだから！ サラリーマンのオッサンとか地元の中学生とかもついつい見とれちゃってたんだよお」

そんな風に言ったのは猫又の少女である。二尾がくねくねと動き、獣の瞳には羨ましそうながらが宿っていた。

あー成程。それでアタシを見てたんだな……六花は猫又少女の言葉に、安堵の言葉と息を漏らしていた。

「てつきり叔父貴、いや叔父さんの事を知っているヒトたちがアタシの事を見てるのになって思ってたんだよ。叔父さんも結構ヤンチャ、じゃなくて活動が派手だから、キョートでも知ってるヒトもたくさんいるだろうしさ」

割合大真面目に放った六花の言葉に、女子生徒たちがどつと笑い始めた。梅園さんつて意外と天然なんだね〜笑い声交じりの彼女らの言葉には、親しみを感じたというニユアンスもふんだんに含まれていた。

やはりここでも京子はしばらく聞き手に回っていたらしい。彼女が口を開いたのは、六花と目が合った後の事だったのだ。

「確かに僕も、梅園さんは綺麗な妖《ひと》だと思うよ。でもちよつと自分の立ち振る舞いとかお洒落にはあんまり興味ないみた……？」

「どうした宮坂さん」

言葉を中断した京子に対し、六花は首をかしげて様子をうかがう。話しかけていた事を途中で打ち切るとは彼女らしからぬ行為だったからだ。しかも視線は六花や他の生徒たちから離れている。

あ、ごめん。ややあつてから、六花に視線を戻して京子は短く詫びた。

「今さつき、コンビニに米田先生が入ったのが見えたから……」

「そうだったんだ。米田先生も、もうこっちに到着しているんだな」

話している最中に米田先生を発見した。京子のその発言にもまた、六花は特に注意を払わなかった。米田先生も教員としてこちらに出向いているのはおかしな事では無いし、そもそも京子は彼女に恋心を抱いている。意中の相手を目撃し、それこそ見とれてしまったのだろう。

そんな風に思っていたから、京子が思案顔である事もそれほど気にも留めなかったのである。

トリニキと米田先生、そして鳥類たち

さて梅園六花の一行が固まってわちゃわちゃとカラスマ公園に向かっている訳であるが、そのカラスマ公園内に既にトリニキの姿があった。教師たるトリニキは、既に生徒らよりも早くこのカラスマ公園に到着してもいたのだ。今更言うまでもないが、教師と生徒では立場も重みも違うのだ。

もつとも、トリニキの場合は若干早く到着し過ぎたきらいもあるのだが。久しぶりにキョートに向向くという事で、余裕を持って出発したつもりなのだが、いささか余裕を持ち過ぎた。

だから……というわけでは無いが、道中のコンビニで購入したチキンカツサンドをカラスマ公園の一角でぱくつく事となつたのだ。普段よりも遅い朝食である。とはいえトリニキ的には致し方ない事だと割り切っていた。遠出と愛鳥マリンの面倒を見る事。それを両立するために朝食を犠牲にした。ただそれだけの話である。

とはいえ、教師がベンチで食事を摂るのはお行儀が悪いと思う手合いがいるのだらう。ケヤキの枝には黒い鴉が羽を休め、トリニキを見ながら何やら啼いているではないか。

ちなみにこの鴉はただの鴉ではない。鴉天狗である浜野宮理事長の配下の鴉であるらしい。生徒らや教師に万が一の事があってはならぬとばかりに、浜野宮理事長が放っていたのだろう。或いは逆に、学園の者たちを監視するために。後者だとしたらいかにも天狗らしい考えと言えよう。天狗は妖怪たちの中でも特に社会性が強いのだから。

「せんせー。鴉たちが僕たちを見張ってますよう」

「その先生はチキンカツサンドを食べてるけれど、それは大丈夫なのかい？」

「チキンはニワトリでしょ。自分、スズメなんで。何となれば僕だって鶏肉を食べる事もありませんけどね」

トリニキの傍らにいたのは鳥妖怪の少年だった。中等部一年生という事で、雀妖怪であるという事を差し引いても全体的に幼さが漂っていた。普段は高等部の生徒らを受け持つトリニキだから、余計に彼の幼さに注目してしまうのかもしれない。妖怪だから相手の実年齢は定かではないけれど。

それはさておき、トリニキがさりと放ったチキンカツ発言を、雀妖怪の少年は見事にスルーしたようだった。だが冷静に考えれば彼の反応は特におかしなものではない。

鳥妖怪に鶏肉料理を食べている所を見せて反応を窺う。これは哺乳類種族の……というよりも人類がよく行くジョークというか悪ふざけの類である。鳥妖怪たちには「何食べてんですか！」と言ってもらったり、或いは彼らが鶏肉の料理を食べている所をか

らかったりするというしようもない遊びである。

とはいえ、鶏肉を食べている所を見てシヨックを受けるのはあくまでも鶏やそれに近い種族の者たちに過ぎない事はトリニキも解っている。雀妖怪の少年であれば「そう……（無関心）」と言った態度でも何らおかしくはない。スズメはスズメ目であり、ニワトリはキジ目なのだ。鳥類という括りに収まってはいるが、系統分類的にも大きくかけ離れた種族である。

それこそ哺乳類で言えば、キツネにウサギが食べられる所を見せて、さあシヨックを受けたかと詰め寄るような物でもあるのだ。

「ははは、ごめんね。先生もちよつとぼーつとしていたのかもしれないね。今朝ごほんの最中だからさあ……」

馴れ馴れしく話し続けた事に気付いたトリニキは、表情を引き締めつつ言葉を続ける。

「ともかく食事は抜かないようにきつちり摂る事が大切だつて先生も再確認したところさ。それにね、この鴉たちは危ないやつじゃあないから大丈夫。見た感じ、浜野宮理事長の遣いの鴉たちみたいだしね」

そう言いながら、トリニキは雀妖怪の少年や彼の周りにいる同じ班の面々の様子を窺った。雀が鴉を恐れるのはごく自然な事である。（時には雀などの小鳥が集団で鴉を

追い回す事もあるけれど）それは妖怪であつても同じ事だろう。

ましてや向こうは鴉天狗の遣いなのだ。であれば用心深そうな雀妖怪の少年はよりいっそう怖がつたり警戒したりするのではないか。そんな風にトリニキは考えていた。

ところが、雀少年の顔に浮かんだのは納得の色だった。

「浜野宮理事長の鴉だったんですねー。だったら大丈夫かな。センス、実は僕の家族つて、浜野宮理事長の家族が運営する会社で代々働いているんで」

「そうだったんだー！」

「カアツ！」

雀少年の言葉に、トリニキは頓狂な声を上げてしまった。そんなに騒ぐな、とばかりに枝に留まっていた鴉にも注意される始末である。

改めて雀少年の姿をトリニキはまじまじと見やった。家族が代々働いているという事は、何世代も妖怪として続く家系の生まれなのかもしれない。しかも雀妖怪が鴉天狗の許で勤務しているのだから、中々優秀な家柄なのかもしれないな、とトリニキは思つてもいた。

「それにしてもセンス。僕つてば先生の事を振り回しちやいましたかね。勝手に怖がつて勝手に用心してただけだったから……浜野宮理事長の遣いの鴉だったら、お父さんとかお父さんのお父さんたちの仕事仲間みたいな物なのに」

別に良いんじゃないの？ トリニキはそう言おうとしていた。だがそれ以上に、雀少年の言い回しの独特さに心を惹かれていた。祖父の事をお父さんのお父さんと表現するのが何とも可愛らしい。トリニキの周りにいた人間たちはそんな言い方はしなかったが、いかにも彼らしい言い方だと思っていた。

「いいえ。いつだって用心する事に越した事はありませんわ。妖生《じんせい》はいつ、何が起こるか解りませんからね」

凜とした、聞き覚えのある声がトリニキたちに投げかけられた。雀少年がピヤツ、と小鳥らしい声を上げて声の主の方を見やる。

声の主は米田先生だった。校外学習の引率者らしい出で立ちであるのだが、何故か新聞を手に使っていた。雀少年がびっくりしたのも無理からぬ話だろう。米田先生は妖狐であり、明らかに鳥類の捕食者なのだから。

そうしているうちにも、雀少年は仲間と共にトリニキや米田先生から離れた所へと立ち去ってしまった。樹上の鴉は逃げずに下界の様子を窺っている。

「鳥塚先生はもう到着なさっていたんですね」

「ええ、まあ……」

ゆつたりとした所作で新聞を畳む米田先生に対し、トリニキは曖昧な口調で応じるのがやっとだった。しかもその視線は相変わらず新聞に向けられている。新聞の名前か

らして地方紙だった。無論スポーツ紙などではない。

「米田先生は新聞を買われたんですか？」

「ええ。少し気になる事件について記事に乗っておいりましたので。万が一という事もありませんので、読んでおこうと思った次第です」

気になる事件。米田先生のその言葉に、トリニキは思わず居住まいを正した。キョー卜地方の出来事を記しているその新聞の小見出しに、「悪妖怪 逃亡中」という不穏すぎるワードを発見したからである。

幕間：退魔師たち、スタンバる

悪妖怪。それはこの世界では悪人とはほぼ同じ意味の言葉である。悪人は悪事を働く人間であるが、悪妖怪は悪事を働く妖怪という事だ。種族は異なれど、法や道理にもとる悪事に手を染めている事には変わりはない。

人間の犯罪者同様、妖怪たちが行う悪事も千差万別だ。保護者や年長者の叱責で終わるような他愛のない物もあれば、種族を問わずに震え上がるような悪事まであるのだ。

重篤な犯罪、凶悪な犯罪の場合を行った悪妖怪は、やはり追跡され、捕縛され、法の下に裁かれる運命にあった。妖怪警察や退魔師などが、こうした悪妖怪たちを取り締まってくれるのだ。だからこそ、人妖入り乱れるこの社会で、弱い妖怪や人間、更には両者の血を引く半妖が平和に暮らせると言っても良いだろう。

この度、キョートには悪妖怪の集団が跋扈しているという報せが密かに入っていた。銀色の鶴女を頭に、様々な種族（その中には人間もいた）が入り乱れた血の気の多い犯罪グループである。

既に車上荒らしや空き巣などと言った被害も報告されている。のみならず、押し込み強盗めいた事を行ってもいるのだとか。

現時点では被害は金品のみであるが、相手は家人がいても盗みを働き恐喝まで行う手合いなのだ。深刻な被害が出るのは目に見えていた。

だからこそ、キョートの妖怪警察、並びに退魔師たちは集結し、この悪妖怪の捕縛をすべく準備を進めていたのだ。

※

退魔師たちが集まる詰所の一角。二十代前半の新米退魔師の二人組が、何となく並んでベンチに腰かけていた。一方は何処となくお坊ちやまめいた雰囲気を漂わせる青年であり、他方は大人しそうであるが芯の強そうな女性である。

二人は、青年が手にしている新聞に視線を落としていた。市内とその周辺にて販売している地方紙である。そこには、指名手配中の鶴女の事が記されていた。女性がこの新聞を購入し、記事に目を通していたのだ。

新聞と女性の顔を見ていた青年が、視線を上げて口を開いた。

「なあ賀茂さん。俺たちはこの鶴女を追っているけどさ、何でキョート以外の場所では報道されていないんだ？ こんな半グレ集団みたいな犯罪者連中が捕まらないとなれば、地方紙だけでちんまりと報道されるって不自然な気がするんだけど」

それはね……賀茂と呼ばれた女性は、新聞を折りたたみつつ言葉を紡いだ。

「師匠の宮坂さんや先輩たちの話によるとね、彼女たちは呪われてしまっていて、それで

キョートから抜け出す事が出来ないんですって」

「呪われていてキョートから出れない？ それってどういう事？」

賀茂の説明に、青年は不思議そうに首を傾げた。確かにこの世界には妖怪たちがすぐ傍にいて（現に詰所には妖狐や狗竇天狗の妖怪警察や退魔師も控えている）、従って科学では未だ説明されていない謎エネルギーなどもナチュラルに存在している。もちろん呪いだとか、霊的なパワーによるあれこれも存在してはいる。

だがここで呪いが出てくるとは、流石の青年も思ってはいなかった。しかも呪いのせいでキョートから出られないとはどういうことなのか。

なんだかんだで陰陽師の子孫だった賀茂とは異なり、青年はこっち方面の業界には疎かった。だから戸惑うのも致し方ない事……なのかもしれない。

その事は賀茂も解っていた。だから領きながら言葉を続けたのだ。

「ほら、あいつらって空き巣とか車上荒らしとか何やかんややって、色々な物を盗んでいたでしょ。その中にね、念の籠った魔道具みたいなものもあつたそうなの。でも、無理くり犯妖《はんじん》たちが強奪した訳だから、その魔道具から呪いみたいなものが噴き上がって、それでキョートから出られなくなつたんですって。何でキョートから出られなくなる呪いになったのかは私にも解らないけれど。

倉持君。この事件がまだ地方紙どまりなのは、そう言う理由だからなのかかもしれないな

「いって思うのよ」

「それにしても盗んだ魔道具に呪われるなんて……犯行グループも間抜け揃いなんですかね」

「何を言っとなるかあ、新人！」

笑い交じりの倉持青年の声はやけによく通った。聴覚の鋭い妖狐の男に聞き取られてしまい、一喝されたのだった。すみません。首を縮めながら謝罪する倉持に対し、賀茂も小声で言い足した。

「そうは言っても厄介な事には変わりないわよ。首謀者は鶴の女性で……変化術も心得ているし私たちの認識をあやふやにする術すらもマスターしているそうなのよ」

そいつは物騒だな。倉持は心の中でそう思っているのだろう。彼の顔をぼんやりと眺めながら賀茂は思っていた。

ドキドキ（意味深）散策開始！

何やかんやしているうちに、学園が指定した集合時刻となった。

実は六花の班は比較的早めに到着したグループである。到着後は他の班のメンバーとどこに向かおうか話したり、コンビニの手前にあるガチャガチャを眺めたりと、弱冠フリーダムに振舞ってはいた。

しかしもちろん、集合時刻の号令が入ると生徒たちは真面目にきっちりとは班ごとに固まって整列した。六花自身も、高等部では真面目に過ごさねばと思っていたのだ。それに何より六花の班で言えば、宮坂京子はその辺は抜かりなく監督していた訳であるし。生真面目で仲間をまとめる力に関しては、やはり妖狐らしい一面が顔を覗かせるのだ。

「——と、言う訳ですので、生徒の皆様には節度を持って校外学習を楽しんでいただきたいのです」

ベテラン教師の注意事項は、まあ何とか想定通りの物だった。夏休み前・夏休み明けの校長先生の長話を三分の一度に短縮したような感じだな。六花はそんな風に思っていた。と言ってもこの教師は校長先生では無さそうだけど。

何かほかにお話はありませんか。教師の言葉が本心からの物では無いのを六花は感じ取ってしまった。話は既に終わっているけれど、形式的に口にしてはいるだけなのだ。と。

六花は表向きには粗暴なスケバン少女だと見做されている。しかしヒトの感情の機微には鋭いのだ。

しかしながら、このおぎなりな問いかけに応じた者がいた。金髪をなびかせて生徒たちの前に進み出たのは、二尾の妖狐の米田先生である。

「生徒の皆さん。注意事項にしましては先程金沢先生が色々仰ってくださいましたかと思えます。

ですがそこに加えて、私の方からも注意事項をお伝えしたく思います」

「米田先生……？」

生徒たちのみならず、教師陣からも若干のざわめきが立ち上る。生徒を前にして、先生ではなく私と言ったのを六花は聞き逃さなかった。

「これからお話する事は、必ずしも起こる事とは限らないし、起こって欲しくないと先生も思っています。ですがどうしても、皆さんにお伝えしたい事なのです」

そのような前置きをして米田先生が伝えたのは、犯罪者や不審者に出くわした時の対処法だった。

特段難しい話ではない。そもそも論として怪しいヒトや場所には近づかない事、無闇に生徒たちだけで対処しようとしなない事、間違つても闘つたりしない事。これらが主だった米田先生の話だった。戦闘云々については、ご丁寧にも正当防衛と過剰防衛の違い、どのように区別されるかについてもぎっくりであるが説明してくれたほどである。

六花は身につまされるような思いで、米田先生の話に耳を傾けていた。彼女自身、不審者が現れたら安直に立ち向かおうと思つていたからである。

米田先生がそんな話をするとは思つていなかったのだろう。教師たちはうろたえていた。我々が担任である鳥塚先生も、困つたように首をかしげているではないか。

そんなカオス極まりない状況下で、生徒たちは解散しても構わないと告げられた。

生徒たちの動きはてんでバラバラだった。解散になつたからという事でそそくさと歩を進めるグループもあれば、戸惑つて動こうとしないグループもある。中には馴染みのある教師の下に近付いて、事情を聞き出そうとするグループさえあつた。

そんな中、六花たちのグループは観光地に向かうという事になつた。判断を下したのは班長の宮坂京子である。他の班員たちは、意外に思いつつも京子に逆らいはしない。

六花はだから、京子に思つていた事をぶつけてみたのだ。宮坂京子は善良な気質ではあると思う。しかし他のクラスメートたちは、京子に遠慮しているのか意見をぶつける事が少ないように思えた。

特段六花は京子に対して気兼ねなどはない。だからこそ気兼ねなく質問を投げかけられたのだ。自分が気になったからであるが、それはまわりまわって他の班員の為にもなるのかもしれないし。

「ふーむ。宮坂さんの事だから、ほとぼりが冷めるまで米田の姐さん、じゃなくて米田先生の傍で待機して、それから事の次第を聞き出すのかと思ったよ。さつさと進むなんて意外だな」

「それが出来れば僕としても嬉しいんだけどね」

深く息を吐きながら、京子は肩をすくめる。伏し目がちのその面は物憂げだった。

「だけど梅園さん。今僕たちが米田先生にくつついて話を聞き出すのは得策じゃあないと思うんだ。他の先生たちもうろたえているし、混乱状態になっている訳だからさ。先生たちも僕らと同じく観光地をぶらつくんだ。その時に米田先生を見つけ出して、その時に込み入った事情を聞き出そうと僕は思っているんだよ」

京子はそこまで言うと、六花や班員たちを見やりながら言い足した。

「もつとも、そこで聞き出せなかつたらその時はその時さ。僕たち子供は知るべきではなかつた事として諦めないといけないかな。」

今、ここで米田先生の許に向かって話を聞かないのもそう言う事なんだよ。皆は知ってるかどうかは解らないけれど、大人って子供に物事を隠すのが得意だからさ」

成程、宮坂さんはそこまで考えていたのか。六花は思わず納得していた。やはり妖狐というだけあって、頭も回るし言葉も巧みに操っている。

そう言えば、宮坂君って末っ子だったよね。それで大人っぽいんだねー。班員の一人が無邪気な声を上げる。これにも六花は妙に納得してもいた。

大人びてませているのに甘えん坊。それでいて洞察力に長けて相手の懐に入るのが巧い。それらが末っ子の気質である事は六花も知っている。初対面がアレだったので不気味な女狐に見えたのだが、年長者に囲まれる間に培ったものだと思えば、成程心当たりはあるではないか。

いずれにせよ、生まれつきの姉気質である六花とは異なる気質や特性という事には変わりはない。

ともあれすつかり納得した六花は、ゆるゆると公園を後にする事にした。

もちろん、周囲を電流でサーチし、悪いやつや妙なやつが近づいていないか探りながら、である。

教師たちの青空会議

さて視点は再びトリニキに戻る。生徒たちは気まま（？）に寺社仏閣を巡り、土産屋で気に入ったお土産を購入するだけで良い（？）のだが、教師たちはそんなに呑気にやっついてはならない。端的に言えば、ブラブラするように見せかけて、無邪気にブラブラしている生徒たちの様子をそれとなく監督せねばならないのだ。

なので、生徒たちを解放した後、教師たちも解散し、各自生徒らの様子を見ながらぶらつくのが筋という物だった。

実際トリニキも、そうした流れになるのだと信じて疑わなかった——米田先生が、不審者にどのように応じるべきか語るまでは。

端的に言えば、あやかし学園の教師人たちの間には、カオス領域が誕生してしまっていたのだ。ちなみにこの中には生徒たちは立ち入れない。状況を察した妖怪教師の一人が、しれつと認識阻害の結果を張り巡らせたからである。

なんだかんだ言いつつも、教師同士がいがみ合うような醜いシーンは、生徒に見せてはならない。トリニキも先輩教師の考えには同意だった。

もちろん子供たちだって世間知らずではないから、何か察しているのかもしれない。

だとしても、そうした物を押し隠すのが大人の役目であろうと思っていた。

カオスを発生させた原因たる米田先生は、他のベテラン教師に詰め寄られている最中であつた。詰め寄っているのは概ね天狗の教師である。もしかしなくても浜野宮理事長の関係者の気配が漂っていた。

「米田先生！ 折角の校外学習だというのに、生徒たちをいたずらに不安がらせるとは一体どういう了見なのですか！」

「どうと言われましても、私はただ事実を伝えようとしただけに過ぎませんか？」

天狗らしく（？）顔を真っ赤にして詰め寄る教師に対し、米田先生は平然とした様子で応じている。のみならず、彼女はシオルダーバッグから何かを取り出した。先程購入し、目を通していた地方紙である。

「このキョートの地には、連続強盗魔の悪妖怪が逃亡している最中なのだそうです。先生方はご存じでしたか？」

「それは……」

詰め寄っていた天狗教師は目をしばたたかせ、他の教師に視線を送る。あからさまにうろたえていたし、他の教師もざわめき始めていた。

もしかしたら知らなかったのか？ トリニキはまず疑問に思い、次に少し呆れてしまった。だが教師が新聞やニュースにろくろく関心を示さずに、防げたであろう事故を

引き起こしてしまったり生徒を熱中症にさせてしまう事はままある事なのだ。誠に残念な話であるが。

あやかし学園でも、そう言う事があるのかよ。そんな風に思ってしまったトリニキであるが、さりとて自分も彼らと同類なのだと思ひ直した。件の事件に関しては、米田先生に教えてもらうまで知らなかったのだから。

しかし、キョートで起きている事件が、ハンシン地区の妖怪たちが把握していないなどと言う事はあるのだろうか。トリニキは最近見たニュースを思い出そうとした。だがその間にも、話し合いは続いていた。

「本来であれば、私ももつと早めにこんな事が起きていると把握できていれば良かったのですが……そうすれば、この校外学習だって……」

「校外学習を中止させるといふのか！ 若い女狐風情が何を抜かすかっ！」
「いえ、私は中止させるとまでは申しておりませんが……」

米田先生……トリニキは小さく呟くほかなかった。心情的には米田先生の味方をしたかったし、彼女を庇うような発言を行うべきだと思つてはいた。しかし相手の教師たちの剣幕に怖気付き、小鳥のように成り行きを見つめるしかなかったのだ。

所詮は野蛮な仕事をしていただけの野狐じゃあないか。教師の誰かがそう言ったの
をトリニキは耳にした。

「教員免許を取得して、それで優しい女教師でございって面で生徒たちと接しちやあいますけどね。米田先生、あなたが元々は野蛮な兵士に過ぎなかつたって事は、この学園で働いていたら多かれ少なかれご存じなのですよ。」

「ははっ。教科書を持つその手が実は血塗られていると知って、それでもあなたを慕う生徒がいるのか。その辺りは興味がありませんなあ……」

「別に私は、生徒に慕われる教師を目指している訳ではありませんので」

件の教師の皮肉げな言葉に対し、米田先生もまた皮肉たつぷりの笑みを浮かべて応酬する。米田先生のそんな表情を見たのは初めてだったから、トリニキはうろたえてしまった。

「しかし鳴門坂先生。私の過去の経歴は、きつと皆様にお役に立つと思われるのです。特に先生方は、教壇に立つ事の方に重きを置いていて、いざという時の実戦をお忘れになつていらっしゃるようですから……」

「浜野宮理事長は、既に万が一のために白狼天狗と狗賓天狗の私服警備員をこのキョウトに放つているんだ。毎年そうやってるって事は、君もご存じだろう」

毒気を抜かれた様子で鳴門坂とかいう教師が言うと、そこで米田先生もにつこりと微笑んだ。毒気も皮肉もない素直な笑みである。

「そうでしたわね。申し訳ありません、私とした事がその事を失念しております……」

ですが念には念を入れて、生徒らに注意喚起したのは良かったのではないでしょうか」
「米田先生も案外心配性なんだな」

結局トリニキは何も言えなかったが、教員同士のやり取り（というよりも米田先生への詰問）は、割と穏便な方向に収束したようだ。

狐娘は用心深い

さて再び六花たちに視点を戻そう。米田先生の不穏な発言やその後の教師陣の動きは確かに気になっていた。だがそれでも、観光地を巡るべく既にカラスマ公園を後にしていた所だったのだ。

実は何処へ向かうかは特に考えていない。そこまでがつつり考えるべし、と先生たちも言っただけではなかった。もしかすると、臨機応変に行き先を考えると、意味校外学習の狙いなのかもしれない。

とはいえ、六花もクドクドとあれこれ考えていた訳ではない。別に何処かに行けだとか、何処かに向かうべきと命じられているようなイベントでは無いのだ。であれば気の向くままに流れに任せるのも乙であろうと六花は思っていた。

特に今は、小規模なグループとはいえ団体行動の真つ最中である。しかも隣にはしつかり者として定評のある宮坂京子もいるではないか。彼女が何かと取りまとめ、行き先などを決めてくれるだろう。

そんな風に考えていたからこそ、六花は気軽な様子で京子の方を振り仰いだのだ。

「なあ宮坂さん。是非ともここに向かいたいとかさ、そんなのつてある？　もう決まっ

たのかな？」

「え……」

六花の問いかけに対し、京子は不明瞭な声で応じるだけだった。瞳を丸く見開いて、京子は六花をまじまじと見つめている。その瞳には驚きの色が濃く滲んでいた。

或いは自分が間の抜けた表情を浮かべていると思ったのだろう（別に、六花はそんな事は思っていないのだが）。京子はふいに顔を赤らめて、一旦六花から視線を外した。こちらに視線を戻した時には、気まずそうな表情の上に取り澄ましたものを貼り付けていたが。

「ああ、ごめんね梅園さん。少し考え事をしていてぼんやりしていたんだ。あはは、僕とした事がうっかりしていたよ」

宮坂さんって本当に真面目な娘だよな。軽い口調ながらも半ば恥じ入るように告げる京子の姿を見やりながら六花は思った。

それに実は、京子がただぼんやりしているだけではない事にも、六花は半ば気付いてもいたのだ。きつと彼女は、米田先生が口にした事についてあれこれ考えており、それをぼんやりしていたと表現したのだろう。米田先生に会って事情を聞き出した位だとか、そもそも何か妙な事が起こらないか。そんな考えや懸念が京子の心の中にあるのかもしれない。

「だーいじょうぶだつて。誰だつて、ぼんやりしたり物思いにふけつたりする事はあるんだからさ。あれだろ、米田先生の事でも考えてたんだらう？」

「梅園さん！」

京子の小さな叫びの後に、他の班員たちも目配せしながら口を開く。子羊のごとき大人しく妖怪的に無力な彼女ら（というか人間も混ざっているのだが）もまた、米田先生が口にした不審者云々の話について若干不安に思っているらしい。

もつとも、話題はそれだけではなく京子が米田先生に想いを寄せている事についても多少は言及していたが。京子の片想いは、外様だったはずの六花でも容易に察せられるほどである。他の生徒らには周知の事実であつてもやはりおかしくは無からう。

「ああごめん。そう言う意味じゃないつてば。そう言えば少し前に、米田先生に会つてあの話の事について詳しく聞きたいつて言つてたもんな。米田先生の事つて、十中八九その事だろ」

「そりやそうさ。米田先生はリスクマネジメントとか護身術の心得がおりだけど、無闇に僕たちを不安がらせるような妖じゃあないから……」

米田先生は護身術どころかバリバリのアタツカーの気配すらするのだが。そんな事をふと思つた六花ではあつたが、ここは空気を讀んで指摘はしなかつた。

「宮坂さん。そんなに不安がらなくても良いじゃないか。米田先生があんな話をしたか

らと言って、必ずアタシらが怪しい連中にぶつかるといふ訳でもないし。

それにまあ、変なものに出くわしたら、その時はその時でアタシがどうにかしてやるよ。その間に、宮坂さんは他の連中を連れて逃げれば良いから、さ」

「そう言う問題じゃあないでしょ、梅園さん」

皆を安心させようと微笑んだ六花であつたが、効果は芳しくなかつた。その証拠に、京子などは湿っぽい声で六花を嗜めているではないか。

京子の口調は概ね中性的な物であるが、時々こうして少女らしい物言いをする事もある。どうやら少女らしい口調の方が素であるらしい。

「梅園さんが強い事は、私も、じゃなくて僕も十二分に知ってるよ。だけど、君ひとりですぐにかするなんて、そんな……」

「ああ、全くもつてご主人様の言うとおりでよ。梅園さん、君の強さなどは、所詮同年代で抜きんでている程度に過ぎないんだからさ」

京子が全て言い切らぬうちに、青年の声が少し離れた所で聞こえてきた。のみならず、声の主も六花たちから数メートルばかり先に佇んでいる。

慇懃で不遜な物言いをした青年は塩原玉緒その妖だった。学園内を巡回する時のように、ワイシャツとズボン姿である。若干洒落た衣裳にも見えなくはないが。

宮坂京子の分身でもあり、彼女をあるじと仰ぐそいつは、しかし京子に対しても呆れ

たような表情を見せていた。

「ご主人様。何かあつたらこの僕が対処するから、それで構わないですよ。そもそも僕はそのために出来たような物なんだ。それに僕の存在も公になつてゐるんだし、僕に頼つても構わないんだよ？」

塩原玉緒の行動原理は京子の身に危険が及ばぬようにする事である。元より彼は京子の「おのれの身を護る忠実な相手が欲しい」という願望によつて生み出されたと米田先生たちは推測してゐた。であれば、京子の身を護ろうとするのはごく自然な事である。

但し、精神年齢（？）は塩原玉緒の方が京子よりもやや上であるらしく、彼がむしろ京子に進言する事も多いようなのだが。もしかすると、それは京子が末っ子で、歳の離れた兄がいるという事とも関連してゐるのかもしれない。

ともあれ塩原玉緒の存在に、生徒らは少しだけざわついた。と言つても、驚いたのは急に姿を現したからにすぎず、彼を警戒する者はいなかつた。若干胡散臭い雰囲気は醸し出してはゐるが、塩原玉緒自身はまあ好青年だからだ。そこは根は善良な京子と共通してゐるともいえるだろう。

さて京子はというと、こちらにも驚いたように目を瞬かせてはいた。だが何か思いついたらしく、晴れやかな笑みをやにわに浮かべた。

「そうだったね。僕はタマを頼りにしても良いし、タマは私が頼ってくれるのが嬉しいんだもんね。それじゃあ一つお願い事をしようかな。とりあえず米田先生が今どこにいらっしやるか探してよ。それならできるでしょ?」

幼子のようにはしやぎながら告げる京子に対し、塩原玉緒はしかし首を振るだけだった。

「頼み事ってそんな事ですか。米田先生の事なら、ご自身でお探すれば良いでしょうに……ご主人様、僕は怪しいやつがないかどうか探しに行きますね」

玉緒はそう言つて背を向けると、その場からふつと姿を消した。分身の妖狐らしい不思議な消え方である。

京子はさも残念そうな表情で、塩原玉緒が消えた方角を眺めていた。しかし六花には、彼もまた米田先生に多少気兼ねしているのではないか。そんな風に思えてならなかったのだ。

トリニキはかく語りき

結局のところ、六花たちの一行は未だに米田先生に合流出来なかった。しかし、六花はその事について深刻に考えてはいなかった。それは実は、米田先生を探すと言い出した京子も同じ事だったりする。

というのも、米田先生の代わりにトリニキ……もとい鳥塚先生を見つけ出す事が出来たからだ。

鳥塚先生オツスオツス！ ネットスラング交じりに六花が声を上げると、鳥塚先生は何処か観念したような笑みを浮かべ、大人しく六花たちの班員に取り囲まれた。

なお、この時には野柴珠彦を含む男子生徒の班もいるにはいたが、六花たちの圧に押しされて鳥塚先生から自主的に距離を取っていた。女子たちというのは強いものである。よく見たら男性に近付くのが苦手な京子は少し離れた所において、珠彦にそつと気遣わしげな視線を送っていた。

「トリニキ先生、女子たちに囲まれて大人気っすねー」

「ここから相沢君。滅多な事を言うもんじゃあないよ。鳥塚先生は分別のあるお方なんだ。僕たちみたいな高校生や、中学生に色めき立つなんて起こり得ないさ。だからこ

そ、僕も安心できるんだけどね」

「宮坂様は今日も麗しいのだー」

鳥塚先生を見つけた所がお土産屋が立ち並ぶ街道という事もあり、生徒たちは六花の班の面々だけではなかった。むしろ六花がやってきた事で生徒らが集まってきた感もある。京子を慕っているらしい、化けアライグマやフェネック妖狐の少女も遠巻きながらいる訳だし。

もつとも、六花はそうした面々を認識してはいた。特に気にしてはいない。米田先生の居場所を聞き出す、或いは彼女が言おうとした事を知っているかどうか。その事を聞いたです事しか六花は考えていなかった。

雷獣は強い個体ほど思考が単純化しやすいという。六花も二尾でまだ少女ではあるが、そうした傾向を持ち合わせていたのである。

「それでさ鳥塚センセ。アタシら米田先生を探しているんだけど、何処に向かっているかとかどの辺で見かけたとか知らないかい？ 知ってたら教えて欲しいんだ」

「米田先生の行方かあ……」

六花の問いかけに、鳥塚先生は困ったように眉を寄せた。それからゆつたりとかぶりを振る。申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「ごめんね梅園さん。先生も米田先生が何処に向かったのか解らないんだ。ああもちろ

ん、キョート市内にいる事は違わないだろうけどね。

梅園さんたちも知ってる通り、米田先生も妖狐でしょ。何がかの術を使って、僕らをまく事くらいできるんじゃないかな。そうでなくても歩くのだって速いし」

「僕たちをまくだなんて、米田先生がそんな事をなさるのかなあ？」

妙にへどもどしていた鳥塚先生の言葉に反応したのは宮坂京子だった。少し離れた所で待機していたはずなのに、いつの間にか六花の隣、鳥塚先生の正面に向き合う形で仁王立ちしているではないか。あからさまに興奮している事は、赤く色づいた耳朵の縁でも明らかだ。

その興奮は、米田先生の事についてあれこれ語っていたがためである事は明白だ。京子が米田先生の事を好いていて、一方的と言えども恋慕の情を育んでいる事は六花も既に知っている。その恋が実るのか否かは別問題であるが。

六花との決闘を経て若干丸くなった（もしかしたら、六花に対する敵意が無くなっただけなのかもしれないが）ように思われる京子であるが、それでも米田先生の事が絡むと冷静さを欠いてしまうらしい。

鳥塚先生。頬をあかあかと火照らせたまま京子は言葉が続けた。

「鳥塚先生も、米田先生がお話した事について何かご存じなのではありませんか。米田先生は、訳もなく僕たちをまいて行方を掴ませないような女狐ではないって、僕は知っ

てるんですから……」

宮坂さんも女狐とか言うんかい。六花は思わず心の中でツツコミを入れていた。とはいえそれを口にしなかつた自分を褒めても良いかもしれないと、密かに自画自賛もしていた。かつて六花は、京子の事を何かにつけて女狐呼ばわりしていたのだから。

余談ではあるが、六花の言う女狐はせいぜい「狡猾でいけ好かない輩」という意味でしかない。女狐には好色だとかドスケベという意味もあるらしいが、京子は好色でもドスケベでもない。むしろ潔癖過ぎるほどに潔癖なきらいがあるくらいだ。

それはさておき、京子の熱っぽくも鋭い指摘に、トリニキはあからさまに目を泳がせた。凶星だったのだろう。

「ああ、うん。確かに宮坂さんの言うとおりでだよ。米田先生は、キョート府内で起きている事件の存在を知って、その事を警戒なさっているんだ」

鳥塚先生は言うや否や、バッグから折たたんだ紙を取り出した。淡い灰色のそれは新聞、それも地方紙である。六花は差し出された地方紙を受け取り、すぐに京子に渡した。何となくそうした方が良さそうな気がしたからだ。

窃盗や強盗を働いている悪妖怪がキョート府内の何処かに潜伏しており、米田先生はそいつと生徒らが鉢合わせしないか心配しているのだ。鳥塚先生が語ったのは、およそそのような事だった。

トリニキ、スケバン雷獣を心配する

さてここで視点をトリニキに戻そう。

六花たちにせがまれて自分の知りうる事を伝えたトリニキは、思わずため息を漏らしていた。行すべき事を行い切ったという達成感によるものではない。若干の疲労と徒労を伴うような種類のため息だったのだ。

——危険な悪妖怪がうろついているから注意せよと伝えなければ、果たしてその意図は生徒たちに、特に梅園さんにきちんと伝わっているだろうか。

暗雲のようにトリニキの脳内に取り憑くのは、そんな一つの疑問だった。

心の暗雲を吹き飛ばすように咳払いしたトリニキは、集まっている生徒らの顔を一人一人眺めながら口を開いた。一番長く凝視したのは六花の顔である。居並ぶ面々の中で、一番トリニキが心配だったのは彼女だったからだ。

「そんな訳で、キョートの何処かには犯罪に手を染めているような悪妖怪のグループが潜伏しているんだ。不審者には近づかないように、ね」

トリニキは一呼吸おいてから更に言い足した。

「間違っても自分で捕まえようだとか、闘おうだなんて思うのはもつてのほかだからね。」

ああ、これは笑い話でも何でもならないよ。先生は君たちがそんな事をしでかさないか、割と本気で心配しているんだからさ。

特に妖怪の皆は、その辺りを心するよに」

悪妖怪が潜伏している。この件で危険にさらされやすいのは、人間ではなくて妖怪の生徒であろうとトリニキは踏んでいた。

基本的に、妖怪の方が身体能力や強さの面では人間をはるかに上回る存在である。そう言った意味では、人間や別の妖怪と闘うには、ある意味妖怪たちの方が有利であると言えるのかもしれない。

しかし、そうした強さや強さに起因する慢心こそが危険の種になるのだ。自分は妖怪で強いから、悪いやつをとつちめる事くらいできるだろう——そんな事を思ってしまうから、判断を誤ってしまうのだ。初めから勝てない相手、そもそも闘う判断を下してはいけない相手に立ち向かい、物理的に痛い目に遭ってしまうという事である。或いは生命の危険にさらされる事として考えられるだろう。

そう言った意味では、人間や人間の血の濃い半妖の方が賢い判断を下すともいえる。彼らは無茶をする事はまず無いからだ。危険な相手に無闇に立ち向かう事はなく、逃げべき時は素直に逃げる事を選択できる。

それが臆病であるなどはトリニキは思わない。むしろそうした判断は大切なのだ。

悪人にしろ、悪妖怪にしろ、闘うとならば本当に手段を選んだりなどしないのだから。梅園さん。トリニキは半ば不意打ちのように六花に視線を合わせた。六花はしかし驚きはしない。あどけなさの残る面に得意げな笑みを浮かべながら、トリニキをしつかりと見つめ返していた。翠の瞳には気の強そうな光が宿っているのは言うまでもない。「くれぐれも、怪しいヒトに出くわしたからと言って喧嘩を売らないように、ね。今ここにいる面子の中では、先生は君が一番心配なんだ」

ある意味トリニキが六花を一番気にかけている。その事をカミングアウトした形になつてしまった。だが幸いな事に、それを茶化すような生徒は一人としていない。無理からぬ話だ。六花は学園に編入してきて一か月足らずであるが、どのような妖怪であるのかは既に学園内に広く知れ渡っていた。

六花は端的に言えば女傑《ヒロイン》なのだ。叔父にして養父である三國の影響なのか、彼女はとかく腕っぷしで物事を解決したがる節があつた。本来ならば良家の令嬢であり、気品ある美貌の持ち主でもあるのだが、彼女の言動はスケバンそのものだった。無論その実力は見掛け倒しではない。トリニキを襲つていた不埒なチンピラ妖怪たちをあつさり撃退し、その後学園公認の決闘で宮坂京子を打ち負かしていたではないか。

つよそう（確信）。トリニキのみならず、生徒も教師も六花についてそのような評価を

下していたのだ。しかもそれは、先の決闘で宮坂京子に勝利してから確固たるものになってしまっていた。

あの決闘の結果については、六花の学園生活や京子との関係性を思えば良かったのかもしれない。しかし、万事良かったのだと言えるようなものではないのだと、トリニキはこの時思い知った。そうでなくとも六花は恐れ知らずで好戦的な気質なのだから。

六花は同年代の妖怪としては確実に強い。そしてそれを彼女も自覚している。だからこそ悪妖怪と出くわした時には危険な目に遭う可能性が高いのだ。トリニキの懸念はそれだった。

「だーいじょうぶだった。鳥塚センス。センスもそんなに心配ばっかしてたら、ストレスを溜め込んで寿命が縮んじゃうよ?」

「先生の心配は良いんだよ……」

思わずため息をつきそうになったのを、トリニキは思わず押しとどめた。心配する側の自分が、こうしてあつげらかんと心配されるとは。

だがトリニキは決然とした表情で視線を上げ、六花を見据えて言い添える。

「とりあえず、だね。怪しいやつを見かけても向かっていたり、あまつさえ悪いやつだから捕まえてとつちめようなんて慾を出したりしないように、ね」

同じ話のループレじゃねえか。そう言わんばかりの六花に対し、トリニキの脳裏にある

考えが浮き上がり、それを即座に口に出した。

「君だって、高校からは品行方正な学園生活を送るって心に決めたんでしょ？ それならきちんと筋を通さなきゃ」

ダメ押しとばかりに言い添えられたトリニキの言葉に、六花は静かに頷いた。苦い表情を浮かべているのはちと可哀想であるが、さりとして致し方のない事だ。トリニキはあのれにそう言い聞かせていた。

幕間：悪妖怪、とんでもない発見をする

※

キョート市内。虎柄のジャケツトをひるがえしながら、女妖怪がせわしない様子で歩を進めていた。その両脇には二人の獣妖怪の男が護衛のように付き従っていた。女妖怪の歩みはやや早いようで、付き従う獣妖怪二人は付いて行くのにやっとなといった風情を見せているが。

「ああ、もう、やってられんわあ！」

女妖怪の歩みが止まったかと思うと、その喉から怒りの声が漏れ出した。獣妖怪の男たちもまた足を止める。彼らは女妖怪の言葉にひどく驚いたらしく、半開きの唇からはヒユウ、ヒユウという謎めいた音が漏れていた。

それから二人は、女妖怪の顔を恐る恐る覗き込む。色白の顔は真っ赤に染まっていた。猿山でふんぞり返る猿みたいな顔。そんなイメージが二人の脳裏に浮かんだが、もちろんそんな事は口にしなない。彼女を敵に回したら……機嫌を損ねたら厄介な事になるのを知っているからだ。

ジャケツトの柄の通り、彼女は虎のような猛々しさを具えている。だがそれだけでは

ない。彼女は蛇のような執念深さと狸のような器用ささえ持ち合わせているのだから。

「芦屋川の姐さん、どないしたんでつか」

「あんまりカリカリしてると血圧が上がらまっせ」

左右から獣妖怪が女妖怪をなだめる。芦屋川葉鳥《あしやがわ・はとり》。これが女妖怪のフルネームだった。葉鳥という名前は何処か可愛らしさを内包しているだろうが、その本性は可愛いとは言い難い物である。

何しろ、彼女こそがキョートを震撼させる悪妖怪・連続強盗魔のリーダーなのだから。しかしその彼女も追い詰められていた。とある資産家妖怪の蔵で強奪《ゲット》した魔道具の呪いによって、キョートから脱出する事が出来なくなっていたためだ。この事は退魔師連中にも知れ渡っており、包囲網はじりじりと狭まってもいる。

見つかれば逮捕される事は明らかだった。逮捕されたのちは不自由な暮らしが数十年、場合によっては百年単位で続くであろう事も。葉鳥は強盗傷害に手を染めた立派な悪妖怪であるのだから。いかな長寿な妖怪と言えども、娑婆から隔離された暮らしを何十年・何百年と送るのは気が滅入る。ましてや葉鳥は百歳を超えたばかりの若者なのだから尚更だ。

「うちが血圧上昇なんぞにビビるようなタマヤと思うんか、あんたは」

葉鳥の言葉に、カマイタチめいた青年がびくつと身を震わせる。その様子を見た葉鳥

はほのかに笑みを浮かべ、言葉を紡ぐ。

「それにしても、あのオツサンからはとんでもないモンを押し付けられたわ。そりゃあ、うちかてキョートの事を毛嫌いしている訳でもあらへん。それでも、忌々しい呪いでキョートから出られへんって言うたら話は別や。抹香臭くなつてまうわ」

そのためにも……と葉鳥は深々と息を吐いた。その息は熱く、火種があれば燃え上がるのではないかという心配すらあつた。

キョートから逃れられぬ呪いを解くには、より強力な魔道具を強奪《ゲット》する事である。葉鳥の脳内ではそのような結論が下つていた。

もちろん強奪は犯罪である。だが葉鳥はそんな事を気にするような妖怪ではないし、取り巻きもその事を指摘する事は出来なかつた。というか指摘できる度胸のある取り巻きであれば、彼女を妖怪警察なり退魔師なりに突き出していただろう。

あくまでも、彼女が攻めの姿勢を取り続けている事には変わりはない。

実のところ、余裕ぶつて振舞っている葉鳥であるが、心の中は焦りで一杯だった。取り巻きをとつかえひつかえしながらの逃亡生活の中で、妖力が少しずつ目減りしていたのだ。既に悪妖怪として知れ渡っているので、うっかり自分がいる事が知られればそこであえなく御用となつてしまう。それを避けるために飲食を控えて逃げているのだが、いかな妖怪でも飲まず食わずでは妖力を消耗してしまふ。

というよりも、なまじ妖力が多いからこそ、飲まず食わずで逃亡するなどと言う暴挙が出来てしまった、とも言えるだろう。

妖怪も生き物であるから、飲まず食わずではいずれ死んでしまう訳であるし。妖力が多ければそこから活動エネルギーに回す事が出来るから、妖力が少ない妖怪よりも食事の回数や量が少なくて済むらしいのだが。

加えて（自業自得とはいえ）逃亡生活のストレスが彼女の心へのしかかってもいた。取り巻き達も何となく情けないわけだし、ともあれこの状況を打開したい。割と真剣にそう思っていたのだ。

取り巻きに認識阻害を頼みつつ歩いてきた葉鳥はここである事に気付いた。キョートの往来がいつになく賑わい、多くのヒトが行きかっているという事に。

これはチャンスが巡ってきたな。葉鳥の口角が知らず知らずのうちに上がっていた。鶴である彼女は、見た者の姿を変える事によって捜査の目をくらます事が出来た。狐狸であれ鬼であれ天狗であれ……それこそ人間などにも変化する事が出来るのだ。

しかしそれも、妖力が十全にある時の話だ。妖力が消耗した今では、誰彼構わず野放図に変化できるわけでは無い。せいぜい同性の同族、要は鶴の女性の姿を借りるのがやっとだった。少し無理をすれば、近縁種である雷獣の女性に変化する事も出来るだろう。

どうやら何処かの中学生や高校生が校外学習にやってきているらしい。葉鳥はようやく大まかな状況を掴みだしていた。そしてそれはチャンスかもしれないと思った。ヒトが多ければ多いほど、お目当ての鶴ないし雷獣の少女を目の当たりにする事が出来るためだ。

そして葉鳥は、雷獣と思しき少女を見つけ出したのである。

お土産話と雀の焼鳥

校外学習が始まってから二時間ばかりが経過していた。米田先生やトリニキの注意によつて若干不穏な空気を醸し出してはいたのだが、梅園六花の心は不安に取り憑かれる事は無かった。

怪しいやつを見かけずに校外学習が終わればそれでよし、関わりとなつたらその時はその時でサクツと闘つちまおう。六花は至極シンプルに、悪妖怪問題を捉えていた。既に二尾である六花は雷獣としても強い。そして強い雷獣は、得てして脳筋になりがちなのだ。

しかも六花たちは既に校外学習を満喫している最中である。トリニキを見つけ出した時には彼から注意を受けたものの、その時に感じた緊張などと言つた感情は、その後見に行つた神社仏閣の荘厳さや美しさへの興奮で塗りつぶされていたのだ。

日頃スケバンっぽく振舞っている六花であるが、実の所信心深く、従つて神社や寺院に足を運ぶのは大好きだったのだ。雷獣が獣でありながら神性を宿すと、六花は素直に信じていたからだ。

さて六花たちの班はというと、神社の傍らに軒を連ねる土産屋の一つにお邪魔してい

た。寺社仏閣の見学を小休止し、ちよつとした土産物を購入して気分転換しようという事である。六花も京子も他のクラスメイト達も、本来は郊外や下町に暮らす人妖ばかりである。きらびやかな神社や寺院ばかり見ていると流石に目が疲れてくるのだ。六花でさえそんな風に思い始めたのだから、他の女子たちなどは尚更だろう。

女子たちが（よく聞けば男子グループもいるらしい）はしやぎながら土産物を選んでる間、六花は黙々と購入する物を選んでいった。他の女子たちとはしやぐでもなく、真剣な様子で。その真剣さたるや鬼気迫るものすら感じさせるものがあつた。

或いはもしかしたら、その雰囲気ゆえに六花の傍には班員たちや他の生徒らが近づいていないのかもしれない。六花は土産物を選ぶ事に集中しきつていたので、そんな事に全く気付いてはいないけれど。

「やあ梅園さん。どうしたんだい、そんなに怖い顔をして」

「誰かと思えば宮坂さんじゃないか」

そんな六花の許に近付いてきたのは宮坂京子だつた。彼女もまた土産物を選んでる最中であるらしく、小さな買い物カゴを提げている。その中には可愛くデフォルメされたキツネやウサギのマスコットや、お洒落な扇子などが入っていた。いかにも京子らしいチョイスだと六花はぼんやりと思つていた。何がどう、と口にできるわけでは無いけれど。

「どうしたも何も、アタシは単にお土産を選んでいたんだよ」

「その割には、かなり真剣な感じだったから、僕も少しびっくりしちゃってさ」

びっくりした、と言いつつも京子は愛想のよい笑みを浮かべながら六花の顔と買い物カゴを交互に眺めている。むしろ興味津々と言った風情でもある。

京子は日頃取り澄ました言動が目立つ少女であるが、親しくなると案外茶目つ気の多い一面も持ち合わせていた。利発であるがゆえに好奇心も旺盛なのだろう。

六花も今一度カゴの中身に視線を落としてから、京子の方を見つめ直す。

「これは弟妹達に贈るためのお土産なんだ。まああいつらはアタシの事を姉として慕っているから、どんな物でもアタシが選んだって事なら喜んでくれるのかもしれない。だけど、それでもプレゼントするならあいつらの好む物をプレゼントしたいからさ」

「梅園さんの弟妹達……ああ、そうだったんだね」

京子は少しだけ考え込んでから、納得したように頷いていた。六花には京子の考えが手に取るように解っていた。きっと彼女は、まず野分と青葉の双子の事を思い浮かべ、そこから六花の家族構成について思い出したのだろう。

野分と青葉の事は弟妹と呼んでいる六花であるが、あの双子たちは叔父の子なので実際にはいとこにあたる存在だった。そして六花が幼少期まで過ごしていた母の生家には、六花の弟妹達が父親や継母と共に暮らしている。

今回六花が口にした弟妹達とは、別居する弟妹達の方の事を指していた。そしてこうした六花の家族の事情についても、京子も多少は知っていたのだ。だからこそ彼女は、穏やかな眼差しで六花を見つめているのだ。

「梅園さんって一番上のお姉さんだもんね。でも、大勢いる弟さんや妹さんのためにプレセントとかも色々と考えてるって、すごい事だと思うよ」

「ははは、それが姉の性ってやつだろうね。アタシの場合、本家にいる弟妹達とは年に何回しか会えないから、こうした所で姉らしくしとかなないといけないだろうしさ」

そう言つて六花は笑つた。六花に相對する京子はというと、恥じ入るような物思いにふけるような表情を見せている。六花が姉氣質である事は京子もよく知つている事柄であろう。何せ彼女は、同級生でありながら六花の前で妹分のように振舞う事すらあるのだから。

「……僕は末っ子だったから、もっぱら可愛がられる側に甘んじちゃうところが多かつたかな」

「そーいや宮坂さんにはお兄さんがいたんだっけ」

六花の問いかけに京子は素直に頷いた。京子に兄が二人いる事については、六花も多少は知つていた。

「兄たちと僕の年齢差は大きいからね。だから兄たちとしても、僕の事は半分娘みたい

な感覚で接してくれていたかもしれないんだ」

京子はその言葉を切ると、少しだけ寂しそうな表情を見せた。

「ただ私、最近は何れに頼って甘えるところかどうにも距離を置いてしまっていて……二人とも優しいから、そんな事をしたらいけないって本当は解っているのに」

物憂げに語る京子を前に、六花もまた渋い表情になった。兄と距離を置いてしまっている事について、京子が存外深刻にとらえている事を悟ったためだ。

過去の事件が植え付けた男性不信と、兄にらに對してよそよそしくなってしまう事への罪悪感。相反する思いの中で京子は悩んでいるのだ。それも仕方がない事だと六花は思っている。誰しも予想だにしない出来事が襲い掛かって来る事、その前と後では後戻りできない程に変わってしまう事は六花も嫌と言うほど知っていたのだから。

京子の顔から視線を外し、彼女が選んだ土産物を見やる。それを見た時に良い考えが浮かんできた。

「お兄さんたちに急にベタバタするのはそりやあ難しいだろうさ。アタシの妹たちだって今まさにそんな感じだつて弟連中から聞いてるし。」

だけど宮坂さん。折角キョートに来てお土産を買ってるんだから、ちよつとした物をお兄さんたちにプレゼントしたら良いんじゃないか、アタシみたいにさ？」

ハツとしたような表情で目を見開く京子に對し、六花は笑いながら続けた。

「宮坂さん。兄という生き物はな、特に妹の事を気に掛ける性質があるから、その妹から何かされたらめっちゃくちや喜んじまうんだ。アタシは女だけど、本家にいる弟妹達の話聞いていたら、兄の生態も解るって寸法さ」

「そっか。ありがとう梅園さん！」

六花の説明に、京子の顔にも明るい笑みが舞い戻ってきたのだった。

※

さてそんな風に和気あいあいとお土産の購入を一旦終わらせた（後で別の店で買い物を行う可能性もあるからだ）一行は、焼鳥の屋台がある事に気が付いた。屋台の土台には車輪、前方には大八車よろしく長い棒が飛び出している。古式ゆかしい移動式の屋台らしかった。

「あ、雀の焼鳥だ」

「ウズラもあるじゃん」

猫又と人間の女子生徒がそれぞれ屋台のメニューを見て声を上げた。六花もここで、キョートは雀やウズラの焼鳥を売っている事があるのを思い出した。

昼前であったが互いに顔を合わせ、焼鳥を買うかどうかしぼし確認しあった。全員ではないが、班員の過半数がそれぞれ焼鳥を買う事と相成った。もちろん六花は雀の焼鳥を買う方である。雷獣は代謝が高いので空腹に弱いのだ。

ちなみに京子は昼食の前にものを食べるのはどうかと渋っていたのだが、結局雀の焼鳥を一本買う事にした。やはり妖狐であるから鳥料理は気になるのだろう。

さてそんな訳で焼鳥を購入しようとした六花であるが、屋台の店主は六花の顔を見るや否や、怪訝そうに首をひねり、やおら口を開いたのだった。

「お嬢さん、あんたさっきも来ていたみたいだけど、また買いに来たのかい？」

雷獣よろこび狐は悩む

六花がまたこの屋台に訪れたのではないか。不可解な屋台の店主の言葉に、思わず六花は首を傾げた。

不思議に思っているのは何も六花だけではない。京子をはじめとした、他の女子生徒たちも首を傾げたり、六花を見やったり互いに顔を見合わせたりしている。

「アタシがさつきもこの屋台で焼鳥を買っただって？ それって人違いじゃあないのかい？」

店主を見据えた六花は、思っていた事を素直に口にした。屋台に並ぼうとしていた班員たちも、六花の言うとおりだと言わんばかりに頷いてくれている。六花は先程まで皆と一緒に神社や寺院を参拝し、土産屋で買い物がてら小休止していたのだ。この屋台に出向くのが一度目である事は皆も知っている事である。何なら彼女らがアリバイを証明してくれる事すら可能であろう……六花は別に悪事など働いていないけれど。

ところが、店主は六花の言葉に「はいそうですか」と応じた訳では無かった。店主はそれこそ狐につままれた（六花は雷獣だけど）表情で首を振ったのだ。人違いなんてあり得ねえ。妙に力強い言葉で断言しながら、である。

「お嬢さん。俺だつてこのフシミ稲荷の膝元で何十年も屋台をやつて、色んなお客さんの顔を見てきたんだ。人違いなんかじゃねえ。俺の勘ははつきりとそう言つてるよ」

「だけど……」

まあ、良いじゃないか。反論しようとする六花の言葉を遮るように、店主がここで声を上げた。大声を上げて六花を牽制するという気配ではない。むしろ赤らんだ顔には笑みが浮かんでおり、楽しそうな声音だった。

「はははっ。お嬢さん、氣付いていないみたいだから教えてやるよ。お嬢さんが妖怪なのはともかくとして、お嬢さんみたいな華やかな美少女なんて、そうそういるもんじゃあないぜ」

笑い交じりの店主の言葉に、六花の片眉がピクリと動いた。生唾を呑み込みつつ、六花は店主をしつかと見据えて問いかける。

「おやつさん。さっきの言葉をもう一度繰り返してくれないかい？」

「だからな、お嬢さんはオンリーワンで、もしかしたらナンバーワンの美少女かもしれないって事だよ！ お嬢さんは今学生さんみたいだけど、アイドルでもモデルでも女優さんでも何でもやつていけるんじゃないかい？」

「おやつさんは、アタシの事をナンバーワンの美少女だと言つてくれたんだな？」

店主の言葉を再確認するように六花が復唱した。真面目な表情になっていたのかも

しれない。店主の表情が僅かにひきつる。それに伴い、他の女子生徒たちも六花を凝視しているであろう事が感じ取れた。

店主の視線が一瞬六花から外れ、それから聞こえよがしに咳払いを始めていた。

「あ、すまんなお嬢さん。も、もしかして気を悪くしちまったかい？ うん、うん。俺もついつい迂闊な事を言っちゃまったかな。妖怪と言えどもお年頃のお嬢さんだし……」

何故かおろおろし始める店主をしつかと見据えながら、六花は満面の笑みを浮かべながら言い放つ。

「あははつ。気を悪くしたなんてとんでもない話さ。むしろおやつさんの言葉は嬉しい位だよ。アタシだって、自分とはどびきりの美少女だって事くらいはちゃんとして把握しているさ。でもやっぱり褒められると嬉しいなあ」

喜び勇む六花の言葉に、何故か周囲のヒトたちは盛大にずっこけていた。

（ボケに対して皆がずっこけるのはカンサイのお笑い番組での様式美だゾ：b y トリニキ）

「梅園さん……君の自信に満ち満ちた姿は本当に凄いよ。僕も少し見習わないと」

起き上がった京子は、呆れとも憧れが絶妙に入り混じった眼差しで六花を見つめていたのだった。

※

そんな感じでちよつとしたひと騒動があつたものの、焼鳥の購入自体はつつがなく終わった。六花たちは屋台を離れ、近場のベンチに腰を下ろして各々焼鳥を味わう事と相成つた。観光地なので、買い食いしたお客が小休止できるようにベンチなどが所々に設置されているのである。ついでに言えば焼鳥のおこぼれにあずかろうと、それこそ雀や鳩なども目を光らせている。

雀が雀の焼鳥を喰おうとするなんてたまげたなあ。そんな事を思いつつ、六花は購入した雀の焼鳥をかじつた。濃厚な甘辛いタレの味と、小骨が多いためにぱりぱりとした触感は、やはり鶏を使った焼鳥とは一味も二味も違つていた。

お昼前だけれど、これでも結構腹が膨れそうだ。まあ、その時はその時でお昼の時間をずらせれば良いか。雀の焼鳥を咀嚼し飲み下しながら、六花は呑気にそんな事を思つていた。

「梅園さん」

隣に座つていた京子が声をかけたのは丁度その時だった。先程まで黙々と食べていたのだから、手にしている雀の焼鳥は半分になつていた。何のかんの言いつつも京子も妖狐の血を引く半妖である。鳥料理や肉料理は結構好みであるらしい。

「お昼前におやつを食べる事になつちやつたけれど、梅園さんは大丈夫？」

「アタシは大丈夫だよ。確かにこの焼鳥でも腹は膨れるけれど、それならそれでお昼の

時間をずらせば良いだけの事だし。他の皆だつて、雀にしろウズラにしろ焼鳥を平らげてるんだから、その後にはすぐお昼とはいかないと思うけど」

六花はおのれの意見を一通り口にしたが、京子は未だに氣遣うような眼差しを向けていた。六花はそこで、京子が最も気にしているであろう事に思い至り、言い足した。

「安心しな宮坂さん。アタシは一度に食べる量は少ないけれど、代謝が高いからすぐにお腹が空くんだよ。だからさ、この焼鳥を食べた後に腹ごなしがてらに神社とかお寺とかウロウロしていたらまたお腹もすいてお昼も食べたくなると思うんだ」

そつか。そうだったよね。六花が制服越しに腹部を撫でてみせると、ここで京子は納得したような表情を見せた。

「それなら良かったよ。梅園さんつて、僕たちよりも食べる量が少ないから、そこだけちよつと心配だね」

真剣な様子でそう言う京子の姿が何とも可笑しくて、六花は思わず吹き出してしまった。

「まあ、別にアタシは少食でも無いんだけどな。まあ、アタシと宮坂さんじゃあ種族も本来の姿の大きさも違うから、その辺の差はあるだろうけれど」

今はこうして人間の少女に近い姿を取っている六花であるが、本来の姿は十キ口足らずの猫に似た獣の姿である。ついでに言えば雷獣は代謝が高いわりに胃が小さいので、

一度に多くの食べ物を摂取する事が難しいのだ。六花は雷獣としても食が細いわけでは無いのだが、人間の姿での食事シーンを見られると、身体のわりに少食であるように思われるのかもしれない。

そしてそれは、京子が妖狐の血を引く半妖であるから尚更そう思われるのかもしれない。妖狐は肉食獣らしく食い溜めが出来る訳であり、したがって一度に多くの食事を摂る事を好む気質にあるのだから。しかも京子は純血の妖狐と違い、本来の姿は人型である。妖狐の気質と人間の体格を併せ持つ京子は、華奢な少女の風貌ながらも健啖家なのだ。

京子も勉強熱心な性質であるから、雷獣の食性や代謝の高さについては知っているはずではないか。そんな風に六花は思っていたが、当の京子は思案顔のままだった。

狐は推理し雷獣が聞く——焼鳥編

「屋台のおじさんが見たつて言う梅園さんらしい女のヒトは、やっぱり梅園さんとは別人だろうね」

真面目な表情で京子が口にしたのは、屋台での六花のそっくりさんを目撃したという話に関する事だった。六花は面食らい、京子の顔をまじまじと見つめた。あの話は既に終わっていると思っていたからだ。

六花はしかし、何故この話を蒸し返すのだとは言わなかった。京子が真面目な表情を浮かべていたからだ。

「そんなのは決まりきった事だけど、何で急にそんな事を口にしたのさ」
「そっくりさんと梅園さんじゃあ、その焼鳥を一度に食べる量も明らかに違う。その事がはつきりしたからね」

京子はそう言うのと、半分になった雀の焼鳥にかぶりついた。上品かつ優美に取り澄ましている普段の彼女らしからぬ、何とも豪快な振る舞いである。六花はしかし、それを不愉快に思った訳では無い。お狐様だから雀の焼鳥にはかぶりつきたくなるだろうなと思った位である。というか六花もつられて自分の焼鳥をかじっていた。

二人は今再び雀の焼鳥を味わっていた。京子が口を開いたのは、自分の焼鳥をすつかり平らげてからの事だ。

「屋台のおじさんの話だと、梅園さんに似た女性は、ウズラの焼鳥を六、七本購入したという話だったでしょ。しかも彼女は、その場で五本ばかり平らげてしまったそうなんだ」

「そう言えば、そんな話もしていたなあ」

生真面目な様子で語る京子を見やりながら六花は頷いた。実を言えば、六花のそっくりさんについて掘り下げて質問をしていたのは、六花本人よりもむしろ京子の方だったのだ。屋台の店主との問答の折に、そっくりさんが大食漢であった事もまた、確かに話題に出ていた気もする。

「雀の焼鳥ならいざ知らず、カットされているとはいえウズラの焼鳥だよ。人間でも一度に二、三本も食べたらお腹が一杯になると思うんだ。それを一度に五本も平らげるというのは中々大変な事だよ」

「ああ、それこそオークや人狼みたいな食べっぷりだったってあのおやつさんも言うてたなあ」

「彼らならそんな食べっぷりが出来るだろうね。どちらの種族も肉料理は大好きで活動的だし、何より身体が大きいからさ」

確かにそうだよな。相も変わらず真面目な調子で考察を続ける京子に対し、六花は同意するように頷いた。人狼やオークの事は六花ももちろん知っているし、何となれば実際に出会った事も度々ある。京子の言う通り、どちらもたくさん食べる事が好きそうなる魔族たちである事には変わりない。また、獣由来の妖怪たちとは異なり人型がベースである彼らは体重的にも大型の魔族と言える。文字通り人並み以上の食事を平らげる事は物理的に可能なのだ。

加えて彼らは肉体労働に従事する事が多い。そうなれば、それこそウズラの焼鳥五本を一度に平らげる事も出来るだろう。何となれば、丸鶏の唐揚げなども一人前のランチにしてしまえるかもしれない。

「種族と言えば、まああのおやつさんも人間だったもんな。だからさ、人型になったアタシらの種族の違いには疎かったし。それなら尚更ヒトを見間違えるって事はありうるよな」

「ううん、何とも身につまされる思いだなあ。僕は妖狐だって名乗っているけれど、実際には半妖だから……」

ああごめん。複雑な表情で尻尾を撫でる京子の姿に、六花は軽く謝罪の言葉を口にした。屋台の店主が人間であるから、妖怪の種族を見分けるのが苦手だ。純血の雷獣である六花は軽い気持ちで言い放ったのだが、その言葉を京子がどのように受け取るのかを

考えていなかった。そこは迂闊だったと六花も思う。

そもそも六花は京子が半妖であると、人間の血が混ざっているという事を意識する事自体が薄かった。京子の事は妖狐だと思つて普段から接していたのだ。前の決闘の時でも、大きな狐の姿に変化していたし。もつとも、獣の姿から人型に変化している六花と異なり、京子の本来の姿は人に近いのだが。

「屋台のおやつさんはさ、アタシの事を猫又だと思つてたみたいだからさ。尻尾を見てそんな風に判断したみたいなんだけど、人型だと種族の判別が難しくなるのかね？」

「妖怪だったら妖気とか匂いも相手の種族を判別する時の判断材料になるみたいだけど、人間だったらやっぱり見た目で判断する人のほうが多いと僕も思うよ。まあそれに、人間たちは妖怪たちに較べてどの種族の妖怪かって気にしないし」

京子はそのままで言うのと、視線を六花の尻尾にスライドさせた。六花の細長い二尾は力が入り、円弧を描くように曲がっている。クエスチョンマークに見えるかもしれないと六花も思っていた。

「確かに、梅園さんの尻尾は猫の尻尾にそっくりだよ。というよりも、梅園さんの本当の姿も何となく猫っぽかったかも」

「ま、アタシは猫又じゃなくて雷獣だけだな。それにアタシが猫っぽい姿なのは偶然だし、本当の猫とは違う所もあるけれど」

六花はそう言いながら、左手を顔の前にかざした。猫に似た姿の雷獣はあくまでも雷獣に過ぎず、猫や猫又とはやはり違うのだ。例えば爪回りでも違いは明らかにある。猫は爪を自在に引っ込める事が出来るそうだが、雷獣にはそんな真似は出来ない。ついでに言えば血管の隣にもう一つ管が走っており、そこから電流が流れる仕組みにもなっている。

もちろん、それ以外の部分でも雷獣と猫又には違いがあるのだが。

「ま、私ら猫又も一度にたくさん食べるのは苦手だから、ウズラの焼鳥を五本も食べるなんて出来にゃいけどね」

京子の話を聞いていた猫又の女子生徒が、おどけたように言った。牧村という名の彼女は、確かに雀の焼鳥を味わうように食べている最中だった。

狐が推理し雷獣が聞く——釣札編

あともう一つ気になる事があるんだ。観光客の食べこぼしを狙うべく歩き回る鳩を眺めながら、京子ははつきりとそう言った。鳩を見る目が食材を見る目のように思えたのは、きっと六花の目の錯覚だろう。

「屋台のおじさんの話によると、梅園さんのそっくりさんは、お札を二枚出してウズラの焼鳥を購入したそうなんだ。僕としてはそこが引つかかるんだ」

「それが引つかかるって、どういう事さ」

真面目な様子で語る京子に対し、六花は小鳥のように首を傾げた。買い物をしたのだから紙幣を使うのは何らおかしな話ではない。妖怪たちだつて貨幣価値はきちんとして握しているのだから。

ウズラの焼鳥は千円近かつたし、たくさん購入したのならばお札を二、三枚使うのもおかしくは無かろう。

そんな風に思っていると、京子は思案顔のまま口を何度か動かし、それから探るよう言葉をついでいった。

「良いかな梅園さん。君は僕よりも数学の成績が良いから、これから僕のいう事はきつ

と理解してくれると信じているんだ。

屋台を見たから解ると思うけれど、ウズラの焼鳥は一本だけでも千円近くする代物なんだ」

「そうだったなあ。確か普通のやつが八百八十円で、骨を抜いたやつが九百六十円だったっけ」

屋台の看板を思い出しながら言うと、京子はその通りだと頷いていた。その顔には控えめな笑みが広がっていた。

「ああ、梅園さんはそこまで見ていたんだね。それでさ、そっくりさんはそんなウズラの焼鳥を七、八本は購入したって話なんだ。普通の……安いやつばかり購入したとしても、六、七千円はかかったんじゃないかな」

一番安く見積もっても六一六〇円、高く見積もったら七六八〇円だな。六花の脳内では既に計算が終わっていたが、それは敢えて口にしなかった。京子の話ぶりを聞く限り、数十円単位の細かい所まで彼女は気にしていないように思えたためだ。

ねえ梅園さん。六花の計算が終わった事を感じ取ったのか、京子が少し顔を近づけた。

「例えば購入したウズラの焼鳥が五、六本くらいだったら、お札を二枚出したとしても話は解るんだ。五千円から六千円の間だから、五千円札と千円札を出して支払ったって考

えられるでしょ。

「だけど、七千円もするんだつたらさ、一万円札を出すにしても一枚で事足りるはずなんだ。だけど屋台のおじさんによると、一万円札を二枚出したつて言つてたみたいだから……」

「ま、アタシも万札なら財布に三枚くらいあるけどな」

「何なら見て見るかい？ 財布を取り出して中身を見せようとする、京子は何故か顔を赤くして六花の動きを制した。」

「梅園さん！ そんな、お金をいっぱい持つてるだなんて、そんな事は正直に言わなくて良いんだよ。はしたないじゃないか」

「はっはっは。宮坂さんもそんなに慌てなくて良いだろうに。ああだけど、宮坂さんが風紀委員らしい事をアタシの前でやってるのを見たのは、なんかしばらくぶりだなあ」
京子の赤らんだ顔は、羞恥と義憤によるものであったらしい。その事に気付いた六花は鷹揚に笑い、しかし財布の中身を彼女に見せる事は無かった。確かに六花は同年代の少年少女よりも羽振りは良いし、お金を所持している事を見せる事には抵抗はない。しかし京子は生真面目な性質のようだから、そうは思わないのだろう。

その辺を無理に通せばもめる事になるのは六花にも解つていた。流石にまた二人してケダモノに変じて乱闘する事は無いだろうが……あらぬ争いを持ち込まぬ方が賢明

だと六花も思っていたのだ。

「梅園さんのお財布事情はさておいて、僕はやつぱり不自然だなんて思ったんだ。七千円台の買い物だったら、それこそ一万円札を一枚出せば事足りるんだからさ……梅園さんはどう思う？」

京子は、黒々とした瞳を睜って六花を見つめていた。先程は生真面目な表情を見せていた彼女だが、こうして相対していると中々に可愛らしい雰囲気漂っている気もする。

「そうだなあ……五千円札だと思つて二枚出したけど、どつちも一万円だったとかつてのものもあるかもしれないかな。後はまあ、両替感覚で万札を二枚出したとかじゃね。ほらさ、自販機とか券売機とかは、万札とか五千円札とかが使えない所がほとんどだろう？ しかもここは観光地として色んなヒトも行き来してるからさ」

「両替目的ねえ……うん、成程なあ……」

六花の意見を聞くや否や、京子は顎の下を細い指で撫でつつ思案に耽つていた。童女のような無邪気な瞳も、今は狡猾で知性溢れる狐の目、獣の瞳に変貌している。そういう意味でも宮坂京子は妖狐だったのだ。

「ありがとう梅園さん。僕一人じゃあ解らなかつた事が、何となく解つた気がするんだ」「おう。それは良かったよ」

ややあつてから、京子は笑みを浮かべながら六花に礼を述べた。六花はもちろん京子の姿を見つめていたのだが、その周囲で動く影や気配にも感じていたのだった。

雷獸娘、ついに動く

※

雀の焼鳥を販売する屋台から数百メートルほど離れた地点にて、その女妖怪は悠々と歩を進めていた。短い銀髪が初夏の風にそよぎ、明るい翠の瞳が細められる。目鼻立ちのくつきりした美女ないし美少女と言った風貌である。もつとも、唇のみならず、頬や顎には焼鳥の脂がべつとりとこびりつき、奇妙な光沢を放つ風体を保っていたが。

短く切りそろえた銀髪に翠の瞳。そしてセーラー服に包まれた大人らしい体躯の少女。彼女の姿は梅園六花そのものだった。もちろん、そのものと後ろに付く事から解るように、彼女は梅園六花ではない。芦屋川葉鳥が、梅園六花の姿を借りたものだった。

普段の姿だと足がつくと判断した彼女は、目に付いた雷獸の少女の姿を借りて腹ごなしをしていたのだ。つい先程雀の焼鳥を売る屋台にてウズラの焼鳥を大量に買い込んだのも、他ならぬ彼女の仕業である。

もつとも、その買い物自体にもちよつとしたカラクリがあるのだが……ともあれ葉鳥扮する偽六花は満ち足りた気分だった。久方ぶりに食欲を満たし、ついでにスツカラカシだったはずの所持金を増やす事まで出来たのだから。

「あーっ、本当にいい気分だなあ。思う存分食う事も出来たし、しかもそれで懐も暖まったんだからさ」

上機嫌そのものといった様子で葉鳥が言うのと、左右に控えていた妖怪たちがぎよつとしたように身をすくませた。葉鳥に追従し、連続強盗の片棒を担ぐ彼らであるが、元々はテンやハクビシンなどの獣が妖怪化しただけに過ぎない。妖怪としてのバツクポーンも妖力そのものも無い、取るに足らぬ存在だったのだ。

だからこそ、葉鳥の所業に逆らえず、唯々諾々と従う他ないとも言うべきであろうか。それがたとえ、葉鳥が上機嫌だった時であつてもだ。

ところが葉鳥はというと、そんな部下たちの心の動きなどには恐ろしいほどに無頓着だった。今は没落したとはいえ、彼女もかつては貴族の子女だった。幼少の頃はまだ彼女の生家も権勢と栄華の残滓を誇っており、それ故に他者がおのれに傳くのは当然の事だと思つていた。

ついでに言えば、今は自分が梅園六花になりきれているかどうか、その事ばかり考えていたので。だから彼女の目には、部下の感情の機微など見えていなかった。「なりきつているけれど、これはこれで普段と大差ないっすねえ」というぼやきも聞こえないも同然だった事は言うまでもない。

「……………」

その葉鳥が、歩を止めて尻尾を軽く持ち上げた。

どうしたんです？　ハクビシンと思しき部下の一人が、丸い瞳を揺らしながら不安げな様子で問いかける。葉鳥は周囲をざっと見渡してからゆっくりとかぶりを振った。

「いや、何でも無いよ。ただ、どこぞの下賤な狐が、アタシの事をじろじろと見ていたよ
うで、な」

立ち止まつて尻尾を上げた丁度その時、葉鳥は自分に向けられた視線をひたと感じていたのだ。妖狐、いや管狐と思しき少女が視線の主だったようだ。金髪なのはまだ良いとして、初夏なのに真っ黒の手袋で腕まで覆っていたのが何とも辛気臭さを醸し出していた。

と言つても、葉鳥も取り巻きたちもその事で特に何も思わなかった。管狐などが因縁を付けてきたところで、怖くも何ともないからだ。元より葉鳥は血筋の正しい鶴女であり、妖力の保有量や強さ自体は申し分ない。先程までは少し弱つてはいたが、それは単に数日ばかり食事にありつけていなかったストレスによるものに過ぎない。

偽札を使って買物をするたびに釣札としてお金を得る——悪魔的発想にて収入を得る事を思いついた葉鳥は、今や怖いものなしだった。

だからこそ、葉鳥は管狐の少女が何処に向かったかなどは一切気にしなかったのである。

※

一方こちらは六花たち一行である。彼女らもまた、初夏の日差しを浴びながらキョートの洛内をゆつたりと散策していた。但し、それまでの寺社巡りとは異なり、昼食を摂る店を探す事が目的となつてはいたが。

そして例によつて、六花と京子は何を食べるのかで談笑しあつていた。もちろん、その中に班員の女子生徒や通りかかった別の班の生徒たちも入り込む事もあつた。

「アタシは今日はどうどん……特にきつねの気分だけど、宮坂さんはどうなんだい？」

「どうしようかな。僕はどちらかというとうどんとか天ぷらうどんの気分かな」

「え、マジで！　今さつき雀の焼鳥を食べた所なのに、そこから更に肉うどんとか食べちゃうのかー」

すごいなー。驚きとも呆れともつかぬ六花の声を受けつつも、京子はジト目で見つめ返していた。

「半分と言えども僕は妖狐なんだ。狐は油揚げが好きってよく言われるけれど、でもやっぱりお肉とかの方が好きなんだよね」

「そう言う物なのか、お狐様つて。ああ、でも確かにそうかもな」

雷獣である六花は、割と無邪気に妖狐は油揚げが好物であり、うどんであればきつねを好むと何となく思い込んでいた。しかし妖狐というのは元々はキツネであり、雑食と

言いつつも肉食性が強い。油揚げが嫌いで食べない妖狐は少ないが、さりとして油揚げが大好物という妖狐もそう多いわけでは無い。

本来の食性を考えれば、妖狐の血を引く京子が、きつねやたぬきよりも肉うどんや天ぷらうどんを食べたいと思うのも、それほどおかしい事では無いのかもしれない。

(カンサイ、特にハンシン地区では、きつねは油揚げの乗ったうどんの事を指すから、きつねうどんとは言わないんだ。ちなみに油揚げの乗ったそばはたぬきと呼ぶんだよ。

By:京子)

むしろ油揚げは六花の好物の一つでもあった。ついでに言えば六花は生モノや海産物が苦手でもあるから、うどんやそばできつねやたぬきを選びがちなのはそれほど奇妙な事でも無い。

他の班員も天ぷらだとか丼物が良いと言っているから、和食メインの定食屋が良いだろうか。行先は少しずつ、しかし着実に決まっていた。

ところが六花は、途中からそうした京子たちの会話を半ば聞き流していた。誰かが自分たちを監視していて、静かに尾行している事に気付いたためだ。視線には若干の敵意が混じり合っている事も、勘の鋭い雷獣たる六花は見抜いていた。そして狙いが六花である事も。

六花はだから、笑みを作って右手を上げ、京子たちに言った。

「ああ、悪いなみんな。ちよつと手洗い場に行きたくなつたからさ。ちよつと抜けるわ。何、後で合流できるから皆は先に進んでおいてくれないかい。アタシが雷獣で、空も飛べるし電流探知が出来る事も知つてるだろう」

念押しするように言い捨てると、そのまま六花は班の集まりから離脱した。宮坂京子は何か言いたげであつたが、結局六花を追わずに班の中に留まつている。京子が追いかけてくる事を懸念していたので、六花としては有難い結果だつた。

激突! スケバン雷獣と退魔師たち

京子たちから離れた六花は、大股気味に歩を進めた。向かう先は広々とした公園である。ある程度広く、一般人が少なそうなところを選択したつもりである。とはいえ観光地ゆえに人が少ない所などほとんど無いのだが、そこはもう割り切るしかなかった。

歩きながらも六花は気配をサーチしていた。こちらを補足し接近する気配は二つ。どちらも若い人間のそれだった。そして一方からは強い気が立ち上っている。敵意だった。悪意に濁らず殺意ほどの鋭さはないが、それでも普通のか弱い妖怪の少年少女ならば怖気付くであろう。

そんな敵意を全身に感じながら、六花は頬を震わせて——満面の笑みを浮かべていた。六花はか弱い妖怪少女などではない。暴れん坊雷獣と名高い三國の許で十歳（人間換算五歳だ）の頃より育てられ、彼の闘志を受け継いでいた。世間ではバトルジャンキーだのヤンチャなスケバン少女だのと言われているが、まあ要するに闘う心構えは出来ていた。

宮坂さんたちがこいつらに鉢合わせしなくて本当に良かったぜ……そう思いながら、六花はふいに足を止めた。背後で二尾がピンと逆立つ。尻尾の毛が、いや全身の毛の一

本一本が、敵意を伴う空気の流れを読み取っていた。

短い叫びと共に右腕を振り抜く。右手の先に生じた雷撃が矢のように走り、六花めがけて放たれていた物にぶつかった。鋭い音と煙のような匂いを上げながら、それは失速し六花の足許に力尽きたように落下する。

黒焦げになったそれは、一見すると焼け死んだ蛇にそっくりだった。だが六花には解っていた。それが魔道具の一種である事を。それも相手を拘束するためのものである。六花を捉えるためだけにそれは放られたのだ。

「おいおい、人間風情がこのアタシのケツを追いかけようって腹積もりかい？　こそこそしてねえで出てこいや！」

右腕を突き出した仁王立ちの状態で六花が吠える。何も知らぬヒトたちが、六花の吠え声にぎよつとしたように立ち止まり、じろじろと彼女を見つめたり足早に立ち去ったりしているのが視界の端で見えた。

そうこうしているうちに、正面の空気や風景がぐにやりと歪むのを六花は感じた。

その歪みが収まると、手品のように二人の人間が姿を現した。というよりも、何がしかの術で姿を隠し、その上で六花を追跡していたと言った方が正しいであろうか。とはいえ六花も雷獣であるから、姿なき追跡者の存在には気付いていたのだが。

電流感知という第六感を具える雷獣と、認識阻害術や幻術は基本的には相性が悪い。

雷獣がそれらの術を完全に見抜くか、術が完全に騙しとおせるかのどちらかしかないのだ。そして今回は前者だった。

追跡者は人間で、それともかなり若かった。二十代前半かそれくらいだろうか。それくらい歳の男女の二人組だった。服装からして妖怪警察の関係者、人間であるから退魔師であろう事はすぐに判った。

六花と向き合う二人の態度はそれぞれ対照的だった。男は敵意と嗜虐心の入り混じった表情と気配を漂わせており、女はただただ冷静に六花を見つめているだけだった。時折相棒であろう男に見せる眼差しには、呆れとも憐みともつかぬ色が混ざっている。しかしそれを、六花にも見せるのはいただけない。

「ここそしているのはそつちの方だろうが、連続強盗犯の芦屋川葉鳥さんよお! 散々キョートで悪事を働いたみたいだが、それももう終わりだからな」

「ちよつと倉持君、そこまで正直に言わなくて良いでしょ」

倉持と呼ばれた男は顔を赤くしながら言い放ち、女はそんな倉持の事を嗜めていた。そして六花は静かに首を傾げた。六花はあくまでも梅園六花であり、他の誰でもない。芦屋川葉鳥というのがあの連続強盗魔だったのか。六花は呑気にそんな事を思っただけだ。六花は意外と呑気な一面も持ち合わせているのだ。

もつとも、自分を連続強盗魔と見做されて受け流せるような呑気さではないが。

「何言つてんだよオッサン。アタシは梅園六花だ。その、葉鳥だかひとりだか知らんが、ちんけな強盗団のお頭とこのアタシを見間違えるたあどういう了見なんだい？」

「おいおい、そんな風にとぼけて切り抜けようたつてそうは問屋は卸さないぜ」

「そこは倉持君の言うとおりだと私も思うわ」

ニタニタと笑いながら告げる倉持に対し、ツレの女も頷いていた。何処か物憂げな眼差しを六花に向けながら。

「芹屋川さん。あなたが他の誰かの姿を転写できる能力を保有している事は私たちも知っているのよ。梅園六花という娘の姿に化けているようだけど……大人しく投降してくれたら嬉しいわ。私たちも仕事に楽しめるしね」

女の言葉に、六花は事もあるうにたじろいでしまった。それを見ていた倉持は、さも愉快そうに笑い始めた。

「こちとらあんたが化けた姿だつて事は解つてるんだよ。ああ、それにしてもあんたも間抜けな事をしでかしたな。強盗だけには飽き足らず、偽札でもつてその辺の屋台で買い食いをするなんてなあ！ ああでも、それで俺たちはあんたの事を突き止める事が出来たんだ。その辺りは感謝するぜ」

偽札だと……！ 倉持の言葉に六花は戸惑つて目を丸くした。もちろん六花は偽札の事など何も知らない。むしろ何の話をしているのか、二人に尋ねたいと思ひさえし

た。

しかしそんな雰囲気ではない事は六花にもきちんと解っていた。何せ二人はそれぞれ構え始めたのだから。六花を捕らえ、場合によって闘うために。

助つ人は九尾の末裔（？）

「年貢の納め時だこの悪妖怪が、大人しく捕まりやがれこの野郎——」

もはやヒヤツハーと叫ばなかったのが奇跡だと思えるような声を上げ、倉持は早くも臨戦態勢に入った。いつの間にか用意した木刀を掲げる彼の顔は、満面の笑みで歪んでいた。

倉持はそこそこイケメンではあった。しかし超絶美少女（要出典）な梅園六花を合法的にぶちのめせるという愉悦に歪み、控えめに言つてその笑顔は醜悪な物だった。

独りよがりな正義感と、いたいけな少女に見えるモノをぶちのめす事への快感。悪意と欲望を煮詰めたような笑顔の前に、六花は僅かに眉をひそめただけだった。若き退魔師の青年に対し、恐怖や嫌悪の念は無かった。むしろ闘いが始まる予感ゆえにワクワクしているくらいだった。相手がゲスであればこちらもこちらで立ち向かう理由が出来るからだ。

しかしそれでも、退魔師と呼ばれる相手に闘いを挑むのはあまり褒められた事ではない。六花の力量であればこの二人を難なくのすことはできるはずだ。だがそうすれば、過剰防衛という事で本当に警察の世話になってしまう恐れがあった。

さりとしてこのままぼんやりしていれば、嫌疑を晴らす間もなく捕まってしまふ。一体どうすれば良いのか。その事を思案していたからこそ、六花は物憂げな表情を見せていたのだ。

「捕まるかよ、このアホなエテ公どもが！」

せいぜい地べたを這いつくばっていな——捨て台詞と共に、六花の身体が浮き上がった。六花は逃亡する事を選んだのだ。それも、宙を浮いて空を飛ぶという方法で。

普通の人間や獣妖怪の多くは、空を飛ぶどころか宙に浮く事もままならないという。鳥のように初めから空を飛ぶ身体構造を具えているか、妖力で重力に逆らう術を得ているか。そのどちらかでないとい妖怪と言えども空を飛ぶのは難しい事だ。

そして雷獣は、獣妖怪でありながら両方の条件を満たしていた。

六花ももちろん空を飛ぶ能力は具えている。それこそ、人間が全力でダッシュするよりも気軽に空を飛べるほどだ。

呆然とこちらを見上げる退魔師たちに皮肉っぽい笑みを浮かべながら、六花は高度を上げ、そのまま飛び去ろうとした。建物の高さ制限があるとされるキョートであるが、流石に空飛ぶ妖怪に対する飛行時の高度制限は見当たらない。

そうこうしているうちに、六花は高度二十メートルほどまで飛び上がっていた。ある程度育った雷獣であれば、雷雲の生じる高度数千メートルまで一気に上昇する事すら可

能である。とはいえ、飛ぶ事もままならぬ人間を撒くだけであれば、この程度の上昇であつても十分である。

そのまま京子たちがいる所に向かうか。いや、一旦彼女らから離れた所に着地し、そこから合流しようか。六花は上空に浮かんだまま、少しの間進路について考えていたのだ。それから進む先を考えたのだが――

「ミギャツ」

額に硬い物がぶつかる感覚に、六花は思わず声を上げていた。蹴つ飛ばされた猫の悲鳴に似ているが、実の所痛みはそれほど感じていなかった。驚きの為に上がった声だったのだ。

六花は目を細めてぶつかつた先を凝視した。何がしかの結界が貼られており、それ故に六花の逃亡を阻んでいたようだ。

――う、これはマズいやつだな……

結界を感じた六花は、右のこめかみを撫でながらUターンする。結界の存在に気付くや否や、めまいや立ち眩みに似た感覚が六花に牙を剥いたのだ。結界は物理的に妖怪の動きを遮断するだけではなく、認識阻害の術も施されているらしい。その術こそがめまいの原因だった。

雷撃を操る雷獣は、電流の動きにて周囲の様子を探知する第六感の持ち主でもある。

その能力に干渉し、阻害するような術とは相性が悪いのだ。しかもその効果は、電流探知能力が鋭ければ鋭いほど牙を剥く仕組みにもなっている。

先程までの威勢の良さは何処へやら、六花はフラフラとした軌道を描きながら飛行するほかなかった。六花の動きを制限する結界の範囲は、そうしている間にも徐々に広がっている。それを避けて飛ぶほかなかった。その上何故かは解らないが、身体が妙に重たく感じられたのだ。というよりも——地面に引き寄せられているような感覚とでも言うべきだろうか。

結局のところ、六花は再び退魔師たちの傍に舞い降りる他なかった。

「空を飛んで逃げようと思っただけ、結界に阻まれたからどうにもならなかったでしょう?」

退魔師の一人、若い女の方が口を開いた。興奮していた倉持とは対照的に、彼女はあくまでも冷静な態度を崩さない。

「あの結界術は、あんたがやった物なんだな? 中々の出来じゃあないか、姐さん」
「姐さんだなんて。実年齢ではあなたの方が明らかに年長でしょう?」

六花の軽口に対し、女退魔師は僅かに微笑んで言い返した。彼女はそれから、胸元に片手を添えつつ口を開いた。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね。私は賀茂朱里と申します。しがない退魔師の

一人です。表向きは賀茂忠行の子孫という事なんだけど、大昔の事だから解らないのよ
ね」

「賀茂……だと！」

賀茂朱里と名乗った退魔師を前に、六花の目が丸く見開かれる。

とはいえ、相対する退魔師が陰陽師の子孫である事に驚いた訳では無い。賀茂と聞いて六花がまず思い浮かべたのは、賀茂神社の雷神の方だった。

自身が雷神の遣いであると公言するほどに、雷獣たちは信心深い者たちが多い。それは雷獣たちにとっては誉れであり強みでもあるのだが、弱みになる事もまた事実だった。特に今回のように、立ち向かう相手が雷神の加護を受けているとなると。

六花の戸惑いを感じ取ったのだろう。賀茂は薄く微笑んだまま言葉が続ける。

「ええ、先程の術は上賀茂神社の祭神の加護によるものですわ。鶴である芦屋川さんに対して、随分と相性の良いものだったようですね」

「アタシが寄る辺にしているのは道真公だが……ああクソツ、本当に賀茂神社の雷神の力を借りているとはな！」

「大人しく投降なさい」

毒づく六花に対し、賀茂は冷徹な口調で言い放つ。彼女はいつの間にか印を組んでいる。何がしかの術を更に六花に向けて掛けようとしているのだ。

光の帯らしきものが六本、賀茂の背後から六花の方へと伸びていく。これに捕まったらマズい。本能的にそう感じ取った六花は、二人の退魔師の様子をうかがいながら逃れようとした。

謎めいた高笑いと共に一陣の突風が吹き荒れたのは、まさにその時だった。

六花も飛ばされそうになって身をかがめたが、それは退魔師たちも同じだったらしい。気が付けば賀茂が行使し拘束しようとしていた光の帯も掻き消えている。

「——やれやれ。天下の退魔師とあろう君たちが、罪もない妖怪を寄つてたかつて追い詰めるとは。一体どういう見なんだね」

「あ、あんたは——！」

六花と退魔師の間に割つて入るように、その男は仁王立ちしていた。息を弾ませチャイナ服をはためかせているのは、塩原玉緒だった。銀黒色の四尾は今も隠されているが、九尾の末裔を名乗るほどの得体の知れなさどふてぶてしきは健在だった。もつとも、今回は六花の窮地を救うためにやってきてくれたのだろうか。